FL. 6-6-67

PL
777
.5
T3
v.1

Takagi, Kōji
Sharehon taikei

East
Asia
Stu

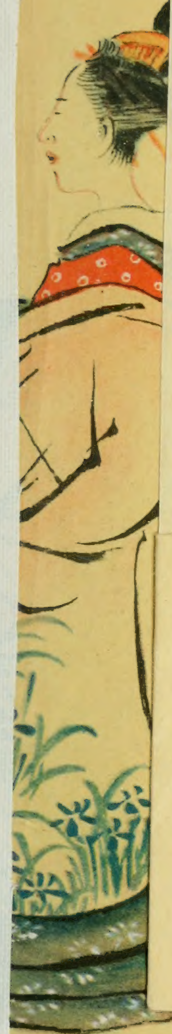
CALL NO:
PL
777
.5
T3
v.1

AUTHOR:
Takagi, Kōji

TITLE: Sharehon taikei

also v.3-5.

VOL:



[illegible]

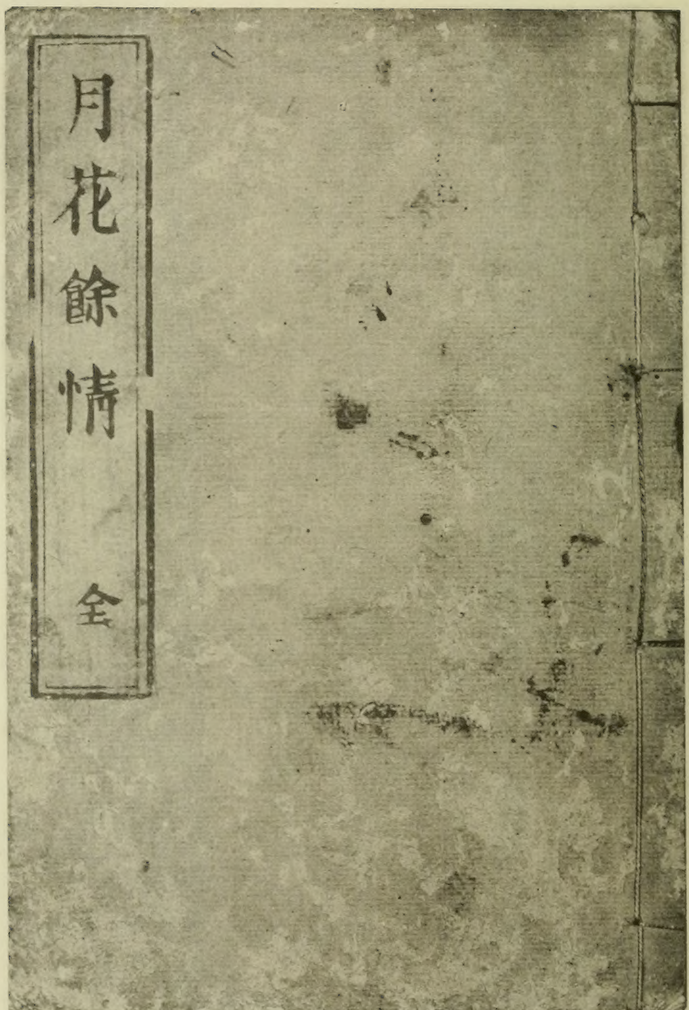
Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

http://www.archive.org/details/sharehontaikei01taka

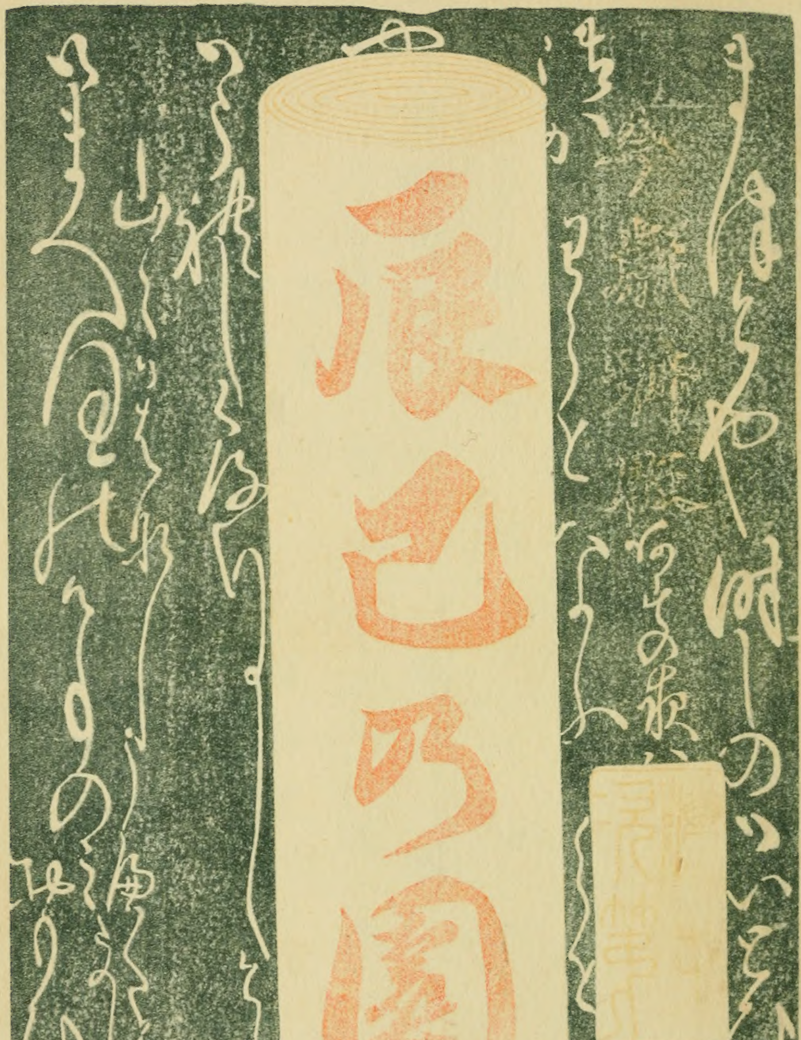
洒落本大系

第一巻

PL
777
.5
T3
V. 1
LIBRARY
SEP 2 1966
UNIVERSITY OF TORONTO
1128119



月花餘情の表紙



袋の園乃已辰

編輯顧問

文學博士 上田萬年

文學博士 關根正直

文學博士 藤村作

法學博士 尾佐竹猛

編輯贊助

飯島花月

大槻正二

加賀豐三郎

重松養二

菅竹浦

千葉鑛藏

南木芳太郎

忍頂寺務

三村清三郎

安田善次郎

山口剛

解題

山崎麓

編輯校訂

高木好次

山本鍊藏

渡邊幸

序

江戸時代にあらはれた種々の軟文學のうちで、特殊の位地を占めてゐるものは、黄表紙と洒落本である。洒落本は享保時代に始まつて天保時代に至る約百二十年間の產物で、法令の取締の寛嚴によつて其間に多少の消長はあつたが、安永、天明以後最も隆盛を極め、京傳、三馬の諸大家も皆これに筆を染めてゐる。

洒落本は一名こんにやく本とも云ひ、僅々數葉に過ぎない小冊子もあれば、編をかさねて稍や小說の體をなしたのもある。主として公娼私娼の遊里の光景を描寫したもので、彼の爲永春水一派の人情本と稱するものも、所詮はこの洒落本から出發したのである。

洒落本は遊女と遊客の情痴を描く以外に、その時代の言語、風俗等の寫實に專ら力を致してゐるので、一面から觀れば一部の世相史である。筆者は隱をあばき、

微を寫して、一種の通を誇るの意に出でたものであらうが、後人を稗益するといふ點に於ては、いたづらに結構の奇や文章の妙を以て第一義とする彼の讀み本や合卷物の上にあると云つてよい。その世界が遊里を主とすると云ふを以て、みだりに排斥し去るべきではない。

前にもいふ通り、洒落本は何分にも小冊子が多いので、江戸末期より明治の初期にわたつて散逸滅亡したものが多い。明治廿三四年の頃、西鶴近松の諸作が飜刻されると共に、その幾種かは活字となつて復活したが、それも久しからずして止んでしまつた。近年に至つて、更に國書刊行會によつて飜刻されたが、これにもまだ洩れたるが多い。今度、江戸時代文化研究會で蒐集したものは四百種の多きに上ると云ふ。勿論これを以て全部を網羅したとは云へまいが、現在のところ、これが最善の努力で、恐らく何人の手によるもこれ以上の蒐集は望まれまいと思はれる。即ちこれが洒落本の集大成といふべきもので、江戸研究者に取つては唯

一無二の寶典が出現するわけである。

近來は川柳研究が盛になつた。それと關聯して研究さるべきものは洒落本の世界でなければならない。江戸研究者、殊に洒落本にはまだ多く親まない青年諸子に取つては、その眼前に未知の世界がそれからそれへと展開されることに因て、一種の驚異を感ずるかも知れない。かゝる大著を發行して彼等にあたへるのは、江戸時代文化研究會として正に當然の事業であらう。

昭和五年七月

岡本綺堂

洒落本は、浮世草子、三味線本と同じ系統に屬する遊里文學の一種である。江戸市民生活の一側面がよく描かれ、今日の語で言へば、文化の尖端を行くと云ふやうな、江戸時代の意氣、通の心持が一番よく表現されて居り、遊里文學と云へば何となく誨淫の書の如く誤解され易いが、實はそんな露骨な言動を忌憚する、今日の洗鍊された紳士道を踏む指針を說いた書なのである。露骨な言動を顯はす都會人は、半可通、似た山の言で罵倒され、同樣な田舍武士は淺黃裏新五左の語で嘲笑されて居るのである。

人に惡感を起させない洗鍊された教養ある江戸つ子、穴を言はず、氣障けの微塵もない人情の機微に通じた江戸つ子、夫が洒落本に現はれる理想的の人物である、人情には古今東西の區別はない筈、かゝる人物は、今日に於ても文明の代表

的紳士と見られよう、洒落本はかゝる通人と、半可通、淺黄裏とを對照せしめ、其優劣是非をはつきりと見せて居るのである。

然るに洒落本は誨淫の書であると云ふ先入主となつた誤解から、一部の人々に排斥せられ、其體裁の小本である事口繪挿繪に色彩もなく兒女の眼を樂ましめる點に乏しい事などから、當時に於ても一部の智識階級にのみ愛翫せられて發行部數も少かつた關係から、今日にては、漸く湮滅し骨董化しつゝあるは惜む可きである。

なつかしき大江戶の情調の一部は、此洒落本に殘されて居る、江戶の後身、現今の帝都に誇りと愛着とを感ずるものは、江戶の情調を回顧し味得するのも、徒爾の事ではあるまい、國文學の硏究者、日本文化の硏究者にとつて無駄な事ではあるまい。

今回其湮滅しかゝつた洒落本を集大成して發刊されると云ふ、江戶語硏究、江

戸風俗研究の上から言つても、又上述の理由から申しても、誠に結構な事であると考へる、私も江戸に生れた者として喜んで玆に推薦する次第である。

昭和五年八月

關根正直

序

洒落本の舞臺となつた當時の花柳界は、現代とは餘程趣を異にし、公衆の宴遊、文人の會合などは多くここに開催されて、實に交際場の觀を呈し、從つて遊里の風俗などは社會に影響せるものが尠くない。その情調を描寫した洒落本は或意味に於ける時代流行の尖端を叙述したものと申してもよからう。この洒落本の文學上の價値に就いては、世既に定評あれば敢て贅しない。この本が主として對話より成り、俗語地方語を交へ、人間煩惱の弱點、稀にはこの里特種の疾病などの類までも忌憚なく述べたるは、見方によつては各人の種々な研究と趣味の材料とを與へて呉れる。

先人が吾人に傳へたこの娯樂文藝の遺物も、時勢の變遷に連れて稀覯書となり、容易に見られざるもの益々多きを加へ、果は湮滅するであらうかと思へば轉

た愛惜の情に堪へない。

江戸時代文化研究會の諸氏は、夙に江戸情調の日日に薄れて行くを惜んで、雜誌「江戸文化」を月刊し、今また洒落本の現存せるものを八方探索し、珍書を掘出しては黄金も何かせんと喜びつつ、約四百種を蒐集してかつは世に傳へ、かつは現世のスピード狂時代にあつて、洒落本に現はれた既往の寛濶な江戸趣味を回想して、世人の精神激勞に文化的慰安を與へるべく、洒落本大系の刊行を企てらる。殊に研究會の高木好次君は、多年黄表紙洒落本類に精進されて造詣深く、余は屢々其の研究に就いて卓見高說を承れる友人である。これ等篤志の人達の努力によつて、廢れ行かうとする洒落本全部が永くその眞を傳へるべく、嚴密なる校正の下に一括されるを喜ぶと同時に、これ等の方面にも趣味を持たれる世の人々の益々多からんことを切に望むのである。

昭和五年七月

樋口慶千代

序

酒落本でその名の聞えてゐるものは手に入れるに易くしかも活字化されて讀むに易い。その名の聞えぬものは珍本扱ひにされて得るに難くまた活字に移されずして讀むに難い。その聞えると聞えぬと、活字化されぬとの別は何によつて然るか、つひに作の價値の與り知らざるものによるやうである。その當時にも默殺され、その後も活字飜刻の惠にあはない傑作も少なくなからう。さういふ作は時の經過と共に散佚されるであらう。偶〻殘存するとすれば徒に骨董としての扱ひを受けるに過ぎなからう。今度の洒落本大系の計畫はさういふ事を未然に防ぐものである。その計畫を喜ばねばならない。またおもふ、洒落本の如きは個々の作の價値をどの程度に考ふべきであらうか、むしろ個々を繋ぎ貫いて一集團として見ることに眞の意義が見出されるであらう。聞えると聞えざると、傑れたると傑れ

ざるとをおしなべて見通すところに研究の對象たる資格が存するであらう。すでに飜刻されたると未だ飜刻されざるとを問はず、一大系の中に網羅する企圖は甚だ喜ぶべきであらう。

昭和五年八月

山口剛

序

江戸時代の研究に熱心な努力を續けてゐる「江戸文化」編輯の諸君が、私の所へ見えて「洒落本大系」の刊行に就いて相談をかけられた。

私もかねてより、少なからざる興味を持つてゐる事ではあるし、又、江戸時代文化研究會は、創立以來、其の研究には、あらゆる方面から理解と同情を得てゐるのであるから甚だ適當な仕事である、と大いに贊成した次第である。

更にすゝめて、其の内容を一見したところ、これは又、あらゆる便宜によつて集めた丈あつて、其の編纂の周密さは、原本の蒐集を見ても他に求める事の出來ない迄に完全さを持つて居るのを知つて、私の期待を外れさせなかつた。

散佚しやすい洒落本を、完璧に近いまで蒐集した大系は、此の機會を失つては、後世には再び求める事は不可能である、玆に貴重な文献が、適當なる人々によつ

て刊行される事を欣ばねばならない。

日本の公娼史といふものを考へて見ても、其全盛期たる江戸時代に、この花柳界の描寫を克明に爲した洒落本は、最大切な資料であつて、外國のそれを鵜呑みにした廢娼運動の盛なる今日、當面の人々は申すまでもなく、これに關心を少しでも持つ人々は、我が花柳界の獨特の雰圍氣を窺つて、其の依つて來る所以を、深く理解する必要に迫られてゐると考へるのである。

洒落本を單なる遊里文學と解して、深く知られてゐない幾多の研究資料を忘却して、ともすれば排斥勝なのは、全く誤つた考へ方である。

それが、今かく完備した裝ひの下に、本大系が刊行されるに當つて、ただ貴重な文献を廣く世の中にとゞめるといふ事に終らないで、今までの世人の洒落本に對する先入觀念を矯めて、學問的研究の自由を教へる所がありたいと發刊に際して感じる次第である。

昭和五年八月

尾佐竹猛

例　言

一、洒落本は、單に花街岡場所の描寫許りでなく、時事問題、流行物、流行語、演劇と其批評、時代名士消息等の際物を巧に點出して居りますから、時代風俗の研究家には最有力な參考資料である許りでなく、時代語、方言など調査せんとする國語學者にも必須な參考書なのであります。

一、洒落本中の口繪、挿繪は有名な浮世繪畫家が描いて居ます。しかも小冊子であるため無造作に筆を把つて居る。そのため却つて不用意の裡に其筆癖が現れ、浮世繪研究家の比較考證に緊要な資料を提供して居るのであります。

一、本大系は原本のまゝに飜刻する事を主眼として居ます。(例へ既に飜刻されたものでも、原本のないものは一部も入れません)假名遣ひ、文法の誤り、當字等皆原本通りにするは勿論、口繪、挿繪、序、跋、題詠、題吟等悉く收錄し、校正は最嚴格に辭書同樣に致します。勝手に文章を書き改めたり、江戸文學の素養なき徒が、詞癖を變更したりなど

して、古文學複刻の價値を失はしめたやうな失態を繰り返し度くないと考へて居ます。

一、本大系に採錄しました原本は、上田、飯島、加賀、重松、千葉、南木、忍頂寺、安田、山口文庫本等の外岩崎文庫、上野帝國圖書館本等によりました。特に本大系の爲めに門外不出の稀覯書をも公開を許されたのであります。玆に謹しんで謝意を表します。

一、本大系表紙裏、仲の町遊女の繪及讃は加賀豐三郎先生の御愛藏幅を拜借しました。

一、本大系外題、扉、本文中の各個の外題は一二を除く外何れも三村清三郎先生の筆になりました。御静養にて伊勢へ御轉地中にも拘らず御執筆して下さいました事を。厚く感謝いたします。

一、本大系採錄の原本よりの筆寫は原稿紙四萬枚の多きに上りますがそれは主として大槻正二先生が擔當して下さいました。謹んで謝意を表します。

一、本大系の表紙は、洒落本と並行して流行した上田縞及唐棧織を使用します。上田縞は、裏地を三回取かへるといふ程丈夫で、强いといふ代名詞に用ゐられた、質朴剛壯な趣のある絹織物なのであります。これは上田市長成澤伍一郎氏の援助によりました。唐棧織

は、堀江傳三郎氏の援助により、古渡唐棧に擬した武州前川産の武州唐棧を、同地の織元熊木卯之吉翁が八十才の高齢にも係らず、特に本大系の爲めに自ら手を下して織出されたものです。尙その糸のかけ方は今日では翁が唯一の保存者であります。今回、その江戸時代の感觸を如實に與へるところの工藝品を紹介旁々、長く後世に傳へんとするものであります。

一、本大系は固より完璧なものとは言へないかも知れません。誤謬は機を見て訂正增補を行ひ度いと思つて居ります。

洒落本大系第一卷目次

	解題	本文
解題	一―六八	
兩巴巵言	一	一
史林殘花	五	九
瓢金窟	七	二五
百花評林	一〇	五九
跖婦人傳	一二	七七
魂膽惣勘定 附 華里通商考	一五	一一一
浪花色八卦	一八	一五九
月花餘情	二三	一九一

陽臺遺編 附 妣閣秘言……二四……二〇五
異素六帖……二七……二三五
遊客年々考……三一……三〇九
聖遊廓……三三……三二五
穿當珍話……三六……三四九
彌味草紙……三八……三七一
くだまき綱目……四一……三八三
列仙傳……四四……四一三
煙華漫筆……四六……四四一
男倡新宗玄々經……四八……四六三
花路色里袂案內……五一……四八一

閑居放言……五三……四九一
廓中奇譚……五五……五〇七
間似合早粋……五八……五三一
遊子方言……六〇……五五七
辰巳之園……六三……五八五
蕩子筌枉解……六六……六一五

目次終

解題

山口剛閲
高木好次記

▲雨巴屁言　原本　縦四寸六分 横三寸七分

蟹鉦先生作　享保十三年刊

書名「雨巴屁言」については本書の巻頭に「此篇叙色邑之事、色字、邑字、皆从巴故ニ以雨巴命題屁言之字出南華經蓋取諸其一盃可味之義云」と記るされて居るので容易に知ることが出來よう。

作者蟹鉦先生は又身毒牢人金天魔蟹鉦と本文の中にも云ふて居る、遊戯堂主人の號もあるがその傳は詳かでない。

刊年は卷末に享保戊申とあるので享保十三年と知られる。

本書の内容は大人先生と云ふ者が吉原の遊廓へ遊んだ、そして見聞する吉原の光景、風俗を

描寫したものである。

本書は現今洒落本の嚆矢とされて居る、しかし當時洒落本と稱せられたものでは勿論ないのである、元來本書は吉原細見の一形式として發表されて居るものである、細見の最初とも云ふべき「吾妻物語」が寛永十九年に京烏丸
板屋清兵衛から出版されて以來、中本の形で遊女の名寄、月旦が行はれて居たが、茲に變化を起して一枚摺の細見が現はれた、延寶八年版の「吉原山茶本草」と云ふのはその最初であると云はれる、評判記型と一枚摺との二種類が並行して行はれたが、享保六年に折本型のが蔦屋重三郎の店で發行されたと云ふ、これが又享保十三年三月湯島の相模屋與兵衛から「新吉原細見之圖」とて横綴小本型が出た、これが流行する一方、「兩巴巵言」「史林殘花」の小型の竪本が流行しだしたと云ふ意味のことを大久保葩雪氏は「花街風俗志」に述べられて居る、本書は漢文體で描かれて居る部分と吉原の圖と、五丁町總女郎名寄、局女郎名寄、揔揚屋名寄、惣茶屋名寄、舟宿並會所名寄とから成立して居る、漢文體で描寫されて居る部分が、やがて獨立した場合に洒落本としての存在を認めるのである、享保十八年に「兩都妓品」の名に於て「史林殘花」と合刻された、その時は漢文體のみである、つまり獨立したのであつて、洒落本としての形態を整へたものと云へるのである。

本書の形式は一面唐本仕立とも考へられる、それが細見に應用された、漢文體の廓の描寫が載せられた、漢學者の餘技として受け入れられる。

本書には異本がある、前にも一寸觸れたが、一は細見としてのもの、(二)は「雨都妓品」として本書と「史林殘花」と一緒に合刻したものの二つである、合刻とて本書の板を改めたものではない、漢文體のみを採つて「史林殘花」と合したに過ぎない、しかし多少相違はある、即ち前者には扉裏もあり、著作の年號も記入されて居る、合刻に際して「享保戊申孟春穀旦」の八字は抹消されて居る、この合刻は享保十八年であるが、これは矢張り「史林殘花」も細見の一部分として出來たのか、或は「雨巴巵言」の漢文體を再用するに當つて書かれたものか、今のところは斷言出來ない。

「合刻雨都妓品」の序文と跋文とを擧げて置く。

合刻雨都妓品序

是歳九月之望遊戲主人新擇二雨都妓品一爲二之圖一以贈且屬レ予爲レ序予曰大人先生之徒以レ老二於漂遊一名二當時一其所レ請不レ於レ彼而於レ此無乃好レ奇之過乎因辭游戲主人屢請不レ已於レ是篝燈信レ筆記二其歳月一以塞二其責一而已

癸丑之秋烟蘿館主人題

新刻西都妓品　附方言

妓年高者曰蒼　妓年少者曰駒　從妓卑女曰香兒　老婆曰鴇子　妓始薦寢席曰上頭　妓始相遭曰梳櫳　妓欺客曰騙　買妓者曰漂客　客耐久者曰慣熟　人馴染客曰有情人　客捨此而適彼曰跳槽　稱富客曰孤老　長子稱愚客曰夜人　稱貧客曰秋風客　倉客從老官者曰牽頭　又曰帮閑

此跋文の題は「西都妓品」とある、これは「兩都妓品」の間違ひではあるまいか。

今日では本書を以て洒落本の始めと稱して居る、未發見のもので尙他に存するかも知れぬが今の所ではそれに外ならない、本書の後編とも見られる「史林殘花」（本卷所載）も享保十五年に刊行されたと云はれる、本書とは內容に於て多少の變化はあるが、未だ展開の跡は少い、兩者何れも完成した洒落本の範疇には入り難いがそれも發生期の作品として止むを得ない、從來は兎角避けられ勝ちであつた遊里を漢文體に描寫したと云ふ點に大きな努力が拂はれて居る、そして一面如何に當時の漢學者輩が彼等の生活に倦怠を覺え、それを或は打破し、或は逃避せ

んと如何に心慮をくだいたかゞ窺はれるのである。

▲史林殘花　原本　縦四寸六分 横三寸一分

遊戯堂主人作歟　享保十五年刊

書名「史林殘花」は序に「原本曰妓史。(中略)凡可千卷。皆亡滅而不存。僅有閑井世家一卷。地理。藝文。律曆。三志之存。」とあるので、多くの中でたつた一部殘つたものと云ふ意であらうと想はれる、又本書が世の常の史籍にもれた遊里吉原の事ども記したものであると云ふ意味も加味されて居ようかとも考へられる。

作者については明記されて居らぬが、本書の用紙の柱書の下に遊戯堂の署名があるから恐らく遊戯堂の主人であらうと推測される、從來もさう云はれて居るので只今はそれに假定して置く、同人の傳記は詳かでない、本卷所載「兩巴巵言」の撃鉦先生の項を參照ありたい。

刊年の明記もない、本大系採錄原本は二種あるが何れも記錄されて居らぬ、しかし「兩巴巵言」の後編として發表されたものであり、組織上からも發生期の型が破られて居らぬのであまり離れての刊行でないことは推測に難くない、そこで矢張り從來の享保十五年說に追從して置

くものである。

本書は前述した通り「兩巴巵言」の後編として發表されたものだけに矢張り前書と同じく漢文流に描かれて居る、前書が概觀的描寫であるに反して、本書は稍緻密に局部的に記されて居る、內容は地理志、藝文志、律曆志に三分され、地理志には日本堤、衣紋坂、大門、中町、伏見町、境町、河岸、江戶町、二丁目、新町、京町等に別れ、藝文志は細見圖、評判書、祭文、俗方言三卷等に別れ、律曆志は投節曲、三弦曲、蹈鞴曲、起行分曲、童歌五關等に別られて居る、これ等の描寫が漢文體で行はれて居るが洒落と云ふ點では未だ努力されて居ない、比較的眞面目な表現である、しかし取材が從來の漢學者流の思ひも付かざる對照であるだけに舊殼を破る努力は尠からざるものである、「兩巴巵言」にしても、本書にしても殊更努めた諧謔が見出せない、當時としては遊里の情景を漢文體で表現することそれ自體が大きな意味を持つのである、延享四年に刊行された「瓢金窟」(本卷所載)は大阪新町の細見であり、右二書の系統を正直に受けて居る、又同年刊、「百花評林」(本卷所載)はこの機運に乘じて一層趣向を凝らしめたものである。

本書の中地理志の形式は寶曆四年の「華里通商考」(本卷所載)によつて獨立化された、律曆

志の中にまぎれ込んだと作者も云ふて居る品川、千住、板橋、護國寺、新宿等の遊里は同書によつて具體的描寫が行はれて居る、それも決して本書に見る描寫法ではない、如何に可笑味を出さうか、如何に滑稽ならしめようかと一に諧謔にのみその中心がある、これ時代の流れが旣に廿四年と云ふ二昔半も先へ進んで居る、そして、續々と數種の作品が發表される樣になり、何れもが洒落に重きを置くと云ふ雰圍氣を醸して來たがためである。

▲瓢金窟　原本　縱四寸八分　横三寸五分

烏有主人假托作歟　延享四年刊

書名「瓢金窟」は卷頭に「此篇擬張文成遊仙窟叙女肆之艶態瓢取一郭之名金窟借諸妓之胯畔云」とあるので知られよう、郭之名と云へのは大阪瓢箪町（俗稱新地）に因めるものである。

作者の明記はないが、序の烏有主人假托その人ではないかと想ふ、然しその傳を詳にしない、卷末に獻笑閣藏の記錄があるので或は獻笑閣主人と同一人ではあるまいかとも想ふ。

刊年は本大系採錄本には明記を缺くが、別本には延享四年版の記入があると云はれ、又本大

系採錄本の表紙三頁に「延享四年版、新町細見全一冊」の朱書もあるので眞實に近いものとしてこゝに假定して置く。

本書の內容は、漢文體の大阪新地の情景描寫と、瓢箪町女郞屋之分、佐渡嶋町拘欄之分、新京橋町女郞之分、新堀町女郞之分、九軒揚屋之分、新堀町揚屋之分、佐渡嶋町揚屋、新揚屋之分、佐渡嶋町茶屋之分、新京橋町茶屋、新堀町茶屋之分、瓢箪町茶屋之分、幇間、藝者、籠數、紋日、直段付、はなあそび、和文體の名寄から成立して居る、本書の主體をなすのは細見にある、即ち漢文體和文體のそれは當時の細見の一要素に外ならない、本書全體が細見である、が故に酒落本としての採用はやがてこの漢文體、和文體がそれ〳〵分離して獨立して行く點に搖籃期の酒落本としての要素を見出すためである、試みに漢文體のみをとつて見ても新町を遊仙窟に見立てゝの描寫は後世薄倖先生作「遊遷窟烟之花」(寛政七年刊與、本大系第九卷所載)の名のある酒落本と相通ずるものである、只表面的に描いたのと、纖細た穿ちを寫したのとの差こそあれ、それは內容の展開に過ぎない、酒落本としての本質に於て歸一して居るのである、由來眞面目なものとされ勝ちであつた漢文體によつて、斯うした對象を描寫したことそれ自體が既に諧謔である、こゝに初期の傾向を見せて居る。藏版者獻笑閣の名に於てもその所信を明

確に表示して居るのである。

本書は大阪で發表された現存するものゝ中恐らくその最初のものであらうと今日では想像されて居る、しかしこれも大阪にのみ發生したものではない、これより前江戸に於て享保十三年に「兩巴巵言」(本卷所載)同十五年にその後編「史林殘花」(本卷所載)が發表されて居る、その成立が何れも細見的使命を負びて居る、「史林殘花」は未だ所謂細見的完備した原本を見て居ないが「兩巴巵言」は本書とその形式を同じうして居る、これにて本書が前書等の影響を受けたものである事を窺ひ得られる。

本書の如き作品は可成り發行されたものであらうと想はれるが、今日ではその多くを見ることが不可能になつて居る、その展開の跡も甚だ漫然としか窺はれないが、新に付く時勢は何の時代とて變りはなく、世は既に獨立した作品を生産しつゝあつたのである、「百花評林」(本卷所載)が本書と同年に出たのもその機運を如實に物語るものであらねばならぬ、斯る傾向が急速度で展開して行く光景を判り見る事が出來る、本書が發生期の作品として高く評價されるのも亦故なしとしないのである。

▲百花評林　原本　縦五寸 横三寸五分

探花亭主人作　延享四年刊

書名「百花評林」については本書巻頭に、「此篇擧平康里之諸花以評其風度意氣古人以美女比花者多故以百花命題云」とあるにて知られる。

作者探花亭主人は何人の匿名か未詳。

刊年は明記されて居らぬが序末に「丁卯春正月之吉」に作られた事が記されて居るので先づ其の年に刊行されたものと假定して置く。

本書の内容は前記書名の條下に引用した本書巻頭の言によつて明かであるが、なほ詳細に擧げれば、太夫、天職、鹿戀、月、影、汐、分、婐娼、鴨母、香兒、素人、厨娘、歌兒、坂町、堀江、難波新地高津新地、街子、私科子、比丘尼、辻君、等に分類されて居る。

花に見立た品評が先づ漢文體で記され、次いで和歌を添へて大意を述べ、次に批評を附してある、品評に於ては太夫を松、天職を梅、鹿戀を櫻、月を淺茅生の菫、影を澤邊の杜若、汐は井手の棣棠、分は桓根横花、婐娼は村濃の藤花・鴨母は殘菊、香兒は倭瞿麥、素人は桐壺の牡

丹、厨娘は八染の紅葉、歌兒は百花の生茅、坂町は芙蓉、堀江は男山の女郎花、難波新地高津新地は宮城野の萩、街子は谷陰の躑躅・私料子は浮萍、比丘尼は枯野の小花、辻君は暗夜の落花等になぞらへてある、批評は、作者探花亭主人ばかりでなく種々な人物が評を行つて居るがこれは何れも作者の假托で評林と云ふ形式上から採られた手法である。

本書より先に成つた「兩巴巵言」「史林殘花」(本卷所載)は何れも漢文體にて描寫されて居た、それがまた滑稽味を出すことにもなつたのであるが、本書は和文體をも加へてその形式に一例を作つた、諧謔を弄すると云ふ點でこれも亦一助となり得たのである、同年刊の「瓢金窩」(本卷所載)も少しは和漢兩法によつて居るが、本書には及ばないのである、未だ「兩巴巵言」の域を脱し得ないのである。

本書は評判記風の細見の變形したものである、然し評判記類は原則として半紙横二ッの横綴小本であるが本書は半紙縱二ッ切の形式である、これは「兩巴巵言」の系統を引いたものである、「兩巴巵言」には細見が附されて居るのもある、つまり本書、横綴と縱綴との二種類の細見の形式を折衷したものである、本書が各階級に分類して品評をしたのは全く本書の新案である從來のは各一個人々々に附いての評であつたから。

本書の持色とする所は、既刊の種々の書式を採用してよく綜合し折衷して、新しい形式を組織した點にある、分類の項目中鹿戀、月、影、汐等のあるのも古典を粧ふて諧謔の度を高めたものなのである、如何にして滑稽味を出さうかと努力した跡が際だつて目立つのである。

從來問題になる寳暦七年刊「異素六帖」（本卷所載）の如きは本書の系統を引いた作品である、詳細は同項の參照を乞ふとして、本書が搖籃期における洒落本の一偉彩である事は爭へないのである。

▲跖婦人傳　原本　縱七寸 横五寸二分

泥朗子作　寳暦三年刊

書名「跖婦人傳」は本書が主として私娼お跖の傳を記したものであるからの命名である。

作者泥朗子は山岡明阿彌の匿名と云ふ、本名を俊明、俗稱を佐治右衛門、山岡道阿彌の末孫である、明阿彌陀佛とも號し、狂名を大藏千文とも云ふ、祿四百石を受けた幕臣である、林家にて儒學を、賀茂眞洲に國學を學んだ、安永九年十月十五日歿、享年六十九。序の風鈴丈人は傳を詳にしない、大田蜀山が風鈴山人と云ふ別號を持つて居ると云はれるが、蜀山は寛延二

年生れであるから、到底關係は見出し得ない。又抔物郎の傳も未詳である、跋の葛飾守株も傳未詳。

刊年は序及跋の末に各々寛延二年の明記があるが、これは刊年と看做す理には行くまい、卷末にある「寶暦三癸酉正月吉日」がそれで、寛延二年から四年目に刊行を見たものである。

本書の内容は跖婦人傳と色説の二つから成立して居る、跖婦人傳はその卷末に「泥朗が曰。我はじめ此章を得て、其言を信ず。後三浦の。遣手が嘲しを聞て。其行を見る」と云ふて居る、この言を正面から解すれば、既に「跖婦人傳」は何人かの手によつて作られて居たやうであるが、しかし抔物郎の「跖婦人傳」の序によれば「予が友泥朗子や（中略）せし婦が六章を一覽せしより匆龍の雲に乘じ大晦日に金を拾し如く臂をはり鼻を微駈つかせて一旦豁然として色道の團底をうちぬきたり終に跖婦を推し貴んで風情を江口の下にあらずとし是が爲に傳をあらはし來つて予に見せしむ」と記して居る、茲に云ふ跖婦が六章とは何か、「跖婦人傳」の後に附した色説がそれである、泥郎子の序に從へば或夜辻番小屋にとゞめられたお跖が無理所望のために書いた十六章の色言があつたが、惜哉十章は既に失せて殘り六章が泥郎子の手に入つた、それを指すのである、これを要言すれば、お跖の色説六章を見た泥郎子がその言に感じてお跖の傳

を作り、色說とを一緒に纏めたものが本書である。

「跖婦人傳」の構想は、入江町に私娼お跖が居た、吉原の高尾の妹女郎であるお跖の實妹の青柳の計ひで、お跖を郭中へ呼び寄せようとて、その事を高尾に依賴した、高尾はお易い御用と簡單に承知して、深川の開帳に行く折に山崎と云ふ遊女と青柳との三人でお跖を訪れて、吉原を禮讃し、それと無く異見した、然るにお跖は格式にとらはれた吉原の生活を罵倒し、自己の現在の簡易な生活を誇つて反駁した、その意氣を描寫したものである、色說は第一粋の章、第二色の章、第三手巧多の章、第四章から第六章まで缺け、第七遊の章第八章から第十章まで欠け、第十一太盡の章、第十二間夫の章、第十三女郎身の上の章、第十四意氣張の章以上三章は條目ありて本文欠、第十五大鼓の章、第十六章は欠、となつて居る。

「跖婦人傳」に於ては簡易な私娼の生活を最も强調し、職業に何等上下の區別のあるべからざることを道破して居る、この事はやがて天竺老人によつて安永年間に「太平樂卷物」を發表せしめる動機となつた、同書は船饅頭お千代と橘町の藝者との論爭に、お千代が船饅頭の氣焔を擧げて居るが、序にも「彼泥郎が得難にしたる跖婦傳の趣にもをさ／＼劣るまじ」と稱して居る、色說については葛飾守株の跋かよく言ひ盡くして居る、即ち「今猶のこれる所を察觀

するに。至玄神妙。皇々としてその奥を得す。默々然として。翫味し。しばらくして悱々焉たり。やゝあつて夭々乎たり。反復するに。嬉々艶々として。仰で嘆じ。俯しておもふ。眞に。其辭簡にして。無聲無臭の妙所にいたり。卷ときハ。懐にかくすべく。のぶる時ハ四海にあふれつべし。其化のおよぶ所。野夫飛で粹にいたり。眞御待たちまち戀の淵にはまる。彌高く彌堅し。惘として座をわすれ己をわする。眞に後世のたま物也」と。

要するに本書は全部泥郎子の筆になるものであらう、色説を得てお姤の傳を書いたといふ事も方法論に過ぎないのであらう。

▲魂膽惣勘定　原本 縦七寸四分 横五寸二分

石鳴政植作　寶暦四年刊

書名「魂膽惣勘定」は序に「こんたん惣勘定と名付侍るも。陽氣に向ひ花〳〵しき金をふらセ給ふとも。跡さきのしめくゝり勘定をあそばせといふ」にて知られよう。

作者石鳴政植の傳は未詳である、跋の平安玉泉女も亦同じい。

本書は「魂膽惣勘定」と「華里通商考」との附錄より成つて居る、前者は、作者の遊び友達

が書いて寄したもので、暮の帳箱の整理に際して集めたのを本屋の所望で按合して出したと序に云ふて居るが、大意、初會心得の事、遊里言葉遣ひの事、金銀多く遣いずして能もてる事、遊里に三のいましめある事、女郎の好不好を知る傳受、座敷に忌み嫌らひある事、女郎の實のある無しを居なから知る法の叓、女郎買極意の事、後朝の客に四ッの見様ある事の十項目に分れて居る。「華里通商考」は西川忠英の「華夷通商考」（二卷、元祿八年刊）の洒落である、闇中齋の作とあるが何人か傳を詳かにしない、或は「魂膽惣勘定」の作者と同一人ではあるまいか、吉原國、品川國、ヒカワ國、ヲドリコ國、ビクニ國、ヨビダ國、ケロロ國、ヤホツ國の八國に付いて、位置、氣候、交通、風俗、產物を擧げて居る。

「魂膽惣勘定」は、遊客に對する注意書である、案内書とも敎科書とも云へよう、遊び樣の魂膽を記したのは洒落本として本書を以て嚆矢となすか「初會の祕事と云は。とかく女郎を遊いすると思ふがよきなり。是易に日若に損し後にますの理なり」、或は「おなし金をつかへいとて、用にたつとたゝぬと。二色あり十兩遣ふて十兩にはたらかすれ三尾の童子もすへし」とて金の遣ひ樣を傳受して居る、斯うした例の如く終始この魂膽の敎授に費して居る、玆に本書の中心がある、世の遊客を如何に指導しようかと云ふ點に本書の目的があり、作者の此の上もな

き優越感が現はれて居る、序の末に「教訓の一ッぞかし」と云へる言葉が、それをよく裏書きして居よう、然しこれは、相當遊んだ體驗のある者でなければなし得られないことである、「火炬もたぬ寒き日に。紙子一重着て。過去りし昔を思ひ出せば。無益の金を捨し事よと無明のねむり初て覺んとする枕にすがりて。若者數百人色里諸分の指南をせよとせめられ。しかつべらしく上座になをり」しと大意の發端に述べられて居る、作者が遊びの諸譯を心得た苦勞人であることは、本文の中にも髣髴として居る。

「華里通商考」は「魂膽惣勘定」と同じく案内書としての內容ではあるが、大ぶ趣を異にして居る、取材された國々は當時江戸に於ける代表的な遊里であり娼婦である、但し格式は論外として。其の各遊里に於ける地誌である、故に地誌の生命としての其の持色がよく穿たれて居る、又地誌として眞面目なものではない、何う洒落ようかと云ふ點に作意がある、如何に滑稽味を出さうかと努力したのが本篇の價値のあるところである、土産にて、例へば、ヲドリコ國のは、三味線、扇子、長手拭、塗下駄を擧げて居る、何れも藝者の持物である、これを土產としらばくれるところに諧謔があり、可笑味が生ずる、本文の中でも、ヒカワ國の條下に「此國昔しはオトワに續ける處なりしを。元文の比。けいどうと云風大に吹いて。家居悉く倒れ終に

夜國となり。人倫なし」と云ふて居る、けいどうと云事は驚動と書く、今ならば臨檢とでも云ふのであらう、檢擧の嵐が吹きすさんで廢墟となつたと云ふたのである。

「華里通商考」には後編がある、それは「六丁一里」とて「華夷通商考拾遺」と冠してあり尙、序文にも「曩者。有華夷通商考。閲之從南京十五省。竪天竺横町。雖委記。今人井ノ中蛭不知大海。中華外夷之說。以爲寓言也。」云々とある、これは西川忠英の「華夷通商考」を指して居ようが、これに名を借りた「華里通商考」をも遇意して居るものであらう、「六丁一里」が「拾遺」と稱する傍ら、「華里通商考」と對象の同じからん事を避けて居る點等から判斷しても想像されるのである、寶曆六年刊行された「浪花色八卦」は本書の地誌的表現を八卦の形式にかへたゞけであつて、各遊里を一樣に配列して描寫することは、本書の影響下になつたものだらうと推測されるのである。尙又道蛇樓麻阿「娼妃地理記」(安永六年刊、本大系第五卷所載)も本書の影響を受ける事尠くないのである。

廣告にある「分里年中行叓」は未見の書である。

▲浪花色八卦　原本　縦六寸二分　横四寸二分

外山翁作　寶暦六年刊

書名「浪花色八卦」は本書が浪花の花柳界を八卦の形式に於て分類し描寫したものであるから斯く命名したのである。

作者は明記されて居らぬが、本書の後編である「浪花今八卦」（本大系第二卷所載）に「亡父外山翁在世の昔浪花遊里の情を盡さんと江南大才亭の庭なる厠隱しの萩垣を箸に打考終つて八卦の一書成る」とあるので外山翁の著作にかゝる事が知られる。然し外山翁の傳は詳かでない。

刊年は從來寶暦年間とのみ云はれて來たが、「浪花今八卦」の扉裏に「十八年以前外山翁浪花色八卦の一卷を弘む」と記されて居るので「浪花今八卦」の安永二年より十八年前、即ち寶暦六年の刊行である事が知られる。

本書は當時浪花に於いて各所に散在して居た遊里の情景を八卦に分類して描寫したものである、別に附錄として色道五ヶ條占秘傳がある。その八卦と云ふのは桔梗卦（嶋の內、坂町）、龍膽卦（北新地、中町、ころほり町）、龜菱卦（高津新地、尼寺、六万たい、勝まん）、花菱卦（安治川、八軒茶屋、編笠茶屋、吉田山、北野梅畑）、蔦菱卦（上塩町、野堂町、馬場先）、檜扇卦（難波新地、新屋敷）、寶結卦（堀江）、桐臺卦（新町）に分れて居る。

本書の内容は眞面目に描寫されて居る、各遊里を個々に亘つて取材したのは、寶暦四年の「華里通商考」（本卷所載）に江戸の遊里が地誌的に描寫されたが始りである、本書もその組織に屬するものであるが、趣向の點に於て新機軸を出したものである、それは各遊里を分類するに當つて八卦の形式によつた事である、それも簪を利用して乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤に當てはめた點である、簪にて占ふ事は疊算として既に行はれて居る事であるが、それは極く簡單な方法である、簪を疊の上に投げて落ちた點から端までの編目を數へて丁半によつて占ふのである、それから思ひ付いて眞正直に八卦に採用したところに可笑味が生ずる、しかして本文が眞面目である、その眞迫な態度こそ一層諧謔の度を高めしめる、桔梗、龍膽、扇菱、花菱、蔦菱、檜扇、寶結、桐臺といふ名が卦に用ゐられて居るがそれが本文と如何なる關係にあるかは、判斷に苦しむところである、附錄にある扇の占法も諧謔の資に供せられたものである、しかしての各遊里を一樣に配列して描寫する方法は、既に「華里通商考」によりて試みられた點である、本書の優れたところはそれをより變つた趣向によつて表現することに存するのである。

本書は洒落本の中に占法を採用した最初のものである、洒落本が新しい表現へと苦心する傾向の最も目覺しいものである、「華里通商考」の地誌的組織もその一つではあるが、次いで本書

の發表を見るにつけてなほ其の感を深めるのである、本書の後編としては外山翁の嫡子備四軒の作品で「浪花今八卦」があることは前にも述べたが、父の「浪花色八卦」が發行されてから十八年の歳月の流れは全く當時の風俗を變化させてしまつて居るが故に「一子として此變を正さすれ孝心空しく」と考へてこの作を著述したのである、しかし星霜の流轉はその「浪花今八卦」さへ正さずんばあるべからざるに至らしめた、天明四年刊の「浪花今いま八卦」(放蕩軒)なるものが卽ちそれである、「浪花今八卦」の發行から十一年目に相當するのである、八卦に依つた事は勿論であるが、卷末に「浪花花街之異名」が附されて居て、前二部に於ける古法の附錄は見られないのである。

「浪花色八卦」「浪花今八卦」「浪花今いま八卦」の三部作は、同じく八卦によるものであることは前述の通りであるが、「浪花色八卦」は江南大才亭の庭なる厠隱しの荻垣をめどに折り、「浪花今八卦」は二軒茶屋の串を筮竹となし、「浪花今いま八卦」は笹瀨の擊柝を卦木とし鰻鱺の串を筮竹にとりて卦を置いたと斷つて居る、後者二部は何れも算木には言及して居ない、到底「浪花色八卦」の趣向には及びもつかぬのである。

然るに玆に「擲錢青樓占」(本大系第二卷所載)なる書が安永三年に讃岐の金比羅山人によ

つて發表された、これは擲錢によつて靑樓を占ふもので「浪花色八卦」以下三部作の如く諸所に散在する遊里の描寫ではなく、客、若者、遊女、踊子、太鼓持の種々な場合を占法によつて表現したものである、こゝに至つて全く嶄新な組織に變化させられて居る、その脫出振りの鮮かさが一際目立つのである。

何れにしても「浪花色八卦」は劃期的存在の作品として高く評價さるべきである。

▲月花餘情　原本　縱五寸三分　橫三寸五分

獻笑閣主人作　寶曆六年刊歟

書名「月花餘情」は雪月花の遊興の外に遊里劇場の娛樂がある、本書がその描寫にかゝるものなるが故に斯く名付けたのであらう。

作者獻笑閣主人は何人か詳かでない。

本書の刊年は從來寶曆七年と云はれて居る、然るに玆に疑問とするところは、寶曆丁丑卽ち七年正月吉日付の序文のある「新月花餘情」なる作品の存することゝ、「月花餘情」に關係ある記錄を載せた寶曆七年丁丑正月の奧附のある「穿當珍話」と云ふ作品が發表されて居る

ことによつて、恐らく寶暦七年前の刊行にかゝるものと推則されるのである、「新月花餘情」は斗樽堂主人羽張天の作で、内容は「昔天竺徳之渡海也。遭暴風漂泊外國數年矣留守新婦。困窮屈托突出浪華新造白人。其名知若。風流大行焉。此書載其行狀。」と其の序にあるので知られる、その「新月花餘情」なるものゝ書名であるが當然「月花餘情」からの思ひ付きであらう、同序に「色欲之誠者無如夫婦而人厭正妻之眞實好娼婦之浮虚亦唯月花之餘情也」とある、何うも「月花余情」の影響下の作品であらうと想はれる、尚本文中の會話に出る人名の横に――が引いてあるのも「月花餘情」の眞似と思考される、「穿當珍話」中の記事とは「【知曉】へ花情丈の事ニ付て彼是致し御無沙汰申ました扱花情丈氣之毒で御ざります【先生】何と致したな【知曉】また餘程盡されまして此度の松風ではないが塩ふみに上塩町へ閑居の身分となられました」と云ふ點である、花情とは「月花餘情」に出て來る人物である、故に右の事情から推測して寶暦七年前の刊行にかゝる作品であると云ふのが眞實に近いものであらう、假に寶暦六年刊歟として置いた。

　本書の内容は「江南妓邑記」と「燕喜篇」とより成つて居る、卷末に「秘戯篇」のあつた事を述べ、今は亡失してしまつたと惜しんで居る、江南妓邑記は漢文體で大坂島の内の繁華を描

き、「燕喜篇」は花情といふ客を中心に、遊女、藝子、中居、花車、揚屋の亭主等の活動を寫して居る、江南妓邑記は總括的な島の内の姿であり、「燕喜篇」は内面的の斷片である、亡失といふ、「秘戲篇」は床の内の描寫である、この三篇の組立は其後の洒落本の一つの典型となつて行くのである。

漢文體と和文體との對立的な立て方は「百花評林」に於ける組織の影響を受けたものであらう、その和文體に於ける會話の描寫は、未だ「百花評林」の考へ及ばざるところであり、然も洒落本に於ては先づ最初の試みであつたと想はれる、これより先に斯る作品の發表がないとは保證し難いが、今日迄に私の見た中では嚆矢となすのである、其の點今のところ洒落本史上に劃期的作品としての置位にあると云ひ得る。

本書には同じ作者の手で「陽臺遺編」(本卷所載)の後編が發表された、しかし刊年月は詳かでない、が同書の卷末に「月花餘情　出來」の廣告がある位だから前編とはあまり離れて居るまいと想ふのである。

▲陽臺遺編　原本　縱五寸二分 横三寸六分

獻笑閣主人作　寶暦六年歟

書名「陽臺遺編」は本書が「月花餘情」(本卷所載)の後編である故に斯く名付けたのである、大阪島の内の遊里を陽臺と稱す、それが「月花餘情」の對象となつたが、今その後編が作られたので遺編と名附けられたのである。

作者獻笑閣主人の傳記は詳かでない。

刊年については何等の明記がない、「月花餘情」の後編であること、「旹九月十三夜醉題(ヨウテダイス)ニ于江南酒樓ニ」と題言の末にあること、卷末に「月花餘情　出來」の廣告のあること等を綜合して、「月花餘情」の刊行されたゞらうところの寶暦六年刊歟と想ふのである、「月花餘情」が發表された、既に後編を出すことも豫定されて居た、好評を得たゞらうことが後編を促してその年の秋刊行せしめたものと察せられるのである。

「月花餘情」の卷末には秘戲篇があつたが今は亡失した事を述べて居るが、その秘戲篇こそ本書の骨子をなすものである、本書の内容は艷詞と題言と秘戲篇と姚閣秘言とより成つて居る、艷詞は「江南花樹歌二首」「江南早春」「秋夜游ニ酒樓一賦ニ得春花色新一」「觀レ妓」「戲贈ニ妓女某氏一」「贈ニ歌妓某氏一」の漢詩が載せてある、題言は漢文體にて江南遊里の情景を寫して居

る、艶詞題言何れも序としての役割である、秘戯編は客花情と遊女歌夕との閨中の睦言及び客が戻つてからの遊女等の行動を描寫したものである、「妣閣秘言」は遊女等の私生活を描寫したもので、置屋の段、身仕廻部屋の段、濱の京屋身上り之段とより成つて居る、歌夕と云ふ遊女、朋輩遊女花咲とが主人公となり、置屋での遊女の生活が寫されて居る、八ッ頃に起きた二人は身仕廻部屋で商賣に出る仕度を整へて口のかゝるのを待つて居るが未だ何處からも呼びに來ない、そこで花咲の發起で向ふの京屋へ行つて二切か三切り買つて一盃飲まふと云ふ、先づ花咲が先發し後から口がかゝつた振りをして歌夕を呼び寄せる、京屋の花車つやをも入れて酒を飲んで居る中にいつそ身上りにして馴染を呼ぼふとそれ〴〵別れて揚屋へ行くと云ふ構想である。

「陽臺遺編」と、「妣閣秘言」とは兩者對立したものである、外題にはちやんと同格に扱はれて並記されて居る、相關聯するところは「陽臺遺編」の遊女歌夕が「妣閣秘言」に於ても主人公の一人を受持つて居る點である、「陽臺遺編」が表向きの生活描寫であれば「妣閣秘言」は裏面生活を對象として居る、玆に深い關係を見、姉妹編として離れられない點がある。

「陽臺遺編」の漢文體は當時の流行としての形式である、これより前漢文體ばかりの描寫が

打破されて和漢並立する樣になつたが、既に本書には和文體が漢文體の地位を占據して行く傾向を判りと見る事が出來る、會話體の描寫の如在なさも、前編と共に洒落本史上特筆されてよいと考へられる。

構想のまとまり方も當時の作品としては、秀いでたものである、前編に於ては未だ構想らしさが薄かつた、然し本書に至つては斷然その程度が進んだ後に見る作品と比較して何等遜色がないとまで考へられる程である、尊重に價する作品たるに耻じないであらう。

▲北州異素六帖　原本　縱五寸三分 横三寸七分

澤田東江作　寶暦七年刊

書名「異素六帖」は「義楚六帖」の洒落である、割書の北州は本書に描かれた對象が新吉原である事を意味する、序文にも「當今謂之北州者方語之畧也」とある。

作者の名は記されて居ない、が大田蜀山人は交友であつた澤田東江の作なる事を自己の隨筆の中に記錄して居るので先づ澤田東江に間違ひはあるまい、東江は名は麟、字は景瑞、東郊と號した、東江は東郊を改めたのである、又後字を文龍と改名した、來禽堂、萱舍、青蘿館、五

島、等の別號もある、林鳳岡に朱子學を學び、又高頤齋に書道を學び、草隷が得意であつた、遂に東江流の名が世に行はれて、文才の方は目立ぬ樣になつた、寛政八年六月十五日歿、享年六十五。序の無ゝ道人が澤田東江の別號と稱せられて居るが、文意から推測して決定し兼ねる、さりとて何人の匿名とも判斷は出來ない、序の和亭主人も傳未詳であり、跋の何遊堂爰歌の傳も詳かでない。

本書は上下二冊より成立して居る、上は佛者、儒者、歌學者が一所に相會して色道論を闘はす中、題を定めて詩と歌とを引合せて見ようとなる、それが下卷となる、が引合せが濟むと三人打連れ立つて吉原へ向ふと云ふのである、上卷は下卷の發端に過ぎない、扨下卷は、遊女、遊客、廓の風景に關する題に對して、唐詩選の詩句と、百人一首の下の句とを引合せてある、下卷の內容は、卷頭にも出してあるが都合六十五段から成つて居る、然もそれが、大別して、初三至盛の威をいふより以下の廿二段女郎のうへをいふ、一廿三より十二段客の事をいふ、一卅五より十一段雜事をいふ、四十六より五段又女郎をいふて秘事をあかす、五十一五十二又客の談笑をいふ、五十三より五十五まで總論と分類されて居る、唐詩選と百人一首との引合せ以外に註釋が加へられて居る。

本書の生命とするところは諧謔にある、如何に可笑味を出すべきかに努力の中心がある、神儒佛の三者をして色道論を行はしめたのも、それが効果の高きを狙つたに外ならない、道德の準繩、戒律の下に、避くべき行動を、實生活では盛んに實行されて居た、作者はその暴露によつて滑稽を醸さうとしたのである、唐詩選、百人一首の詩歌を對立させて引合せたのも目的は同じく諧謔に存するのである、唐詩選にしても百人一首にしても、當時の知識階級には可成緣の深いものであつた、當時の遊女と今日のそれとは教養の相違が甚しい、廓の內容のしからしめる所であるが、その頃の遊女は概して教養が高かつた、この普遍的な兩者の對立に鮮かな手腕を見せて居る、何人が讀んでも直ぐに笑ひを起さしめ得る、そこに非凡な作者の存在を見出すのである、加へられた註釋も牽強附會の趣向にて充分所期の達成に効果がある。

本書は遊女遊客の種々なる場面の描寫である、「百花評林」(本卷所載)の階級的分類に於ける描寫とは趣を異にする、本文中「親のためにつとめする女郎」に出て來る「花里通商考」「物事隱」の條下に引用された「漢書地理志」は、前者は西川忠英著「華夷通商考」を洒落て作つた「華里通商考」(本卷所載)であり、後者は固有名詞ではなく、漢書の地理誌を意味するものであらう、「華里通商考」を漢書の地理誌と同一視したのも滑稽なところである、「華里通商考」は

江戸の各遊里を地誌の形式で描写したのであるが、本書はその一つ新吉原の條下を採りあげて演繹したものとも考へられるのである。

本書の刊行は卷末の奥附にて「寶暦七丁丑歳正月吉日」とあるので大體は知られる、然して從來本書と同年刊「聖遊廓」(本卷所載)との間に暗示問題が云々されるが、私は右の刊年月日と「聖遊廓」の刊年月日即ち同書卷末の「寶暦七年丑六月吉日」とによつて、當然、「異素六帖」が發表されたのが大阪へ運ばれて「聖遊廓」の刊行を刺戟したものと想ふ。「異素六帖」の上卷の主人公等と「聖遊廓」に現はれる主人公が孔老釋者であるを思ひ合すれば、倚々兩者の關係が右に述べた通りであらう事を裏書きするものと思ふのである。

又本書について特筆すべき事は洒落本に會話體を採用したものゝ中刊年の明かな最初のものであらうことである、會話體にて書かれた小說は既に「好色罌粟鹿子」(元祿七年刊)「五ヶ濃津餘情男」元祿十五年刊)等が存するが、洒落本には寶暦六年歟と推測される「月花余情」(本卷所載)以外未だ試みられないことであつた、洒落本が一は滑稽本へ、一は人情本へと展開してやがて明治小說へと流れて行く、その本源をこゝらに見るのである。

▲遊客年々考　原本　縦六寸 横四寸

鮮仁軒作　寶暦七年刊

書名「遊客年々考」は遊客がその年によつて遊び樣のあることを描寫したものと云ふ意味である。

作者鮮仁軒は傳を詳かにしない。序の易色齋、跋の學齋時中の傳も未詳。

刊年は序に丁丑とあるので寶暦七年のそれであることは明かである。

本書の內容は、易色齋の序に「聖語にもとづき遊客內々の好惡事を筆に任す」とあり、作者の自序に「萬客時々遊ぶに序ある事を記す」とあるので大體は知られよう、さて其の內容は、〇十有五にして色に志す、〇三十にして大臣の名立、〇四十にして身請に惑す、〇五十にして遊びを知、〇六十にして耳を借す、〇七十にして心の欲する所に從へども茶屋へ行すの六項目より成立して居る、これは云ふまでもなく序に云ふ聖語、即ち孔子の十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑す、五十にして命を知り、六十にして耳從ふ、七十にして心の欲するところに從つて矩をこへずによつたものである。

この組織を立てるに當つては、作者の思ひ付きには相違なきも、この作者に本書を物させる動機を與へたものは同年刊の「聖遊廓」である、漢學者等の餘技として創作されつゝある洒落本ではあるが、孔子の論語爲政篇からの巧案は、孔子、老子、釋迦の三聖を取材した「聖遊廓」の刺戟にまつとする方が妥當と思惟されるのである。「聖遊廓」の刊行されたのは同年六月であつた、それが同じ地で「秋月中浣」―仲秋望―の記錄をつけて本書の發表を見て居る、そこで本書と「聖遊廓」との間に於ける關係を想像する場合、本書の組織上の趣向は「聖遊廓」の影響下にあるものと考へられるのである。

本書は序にも云はれる通り遊びに對する工夫を凝すべき案内書、指導書、敎科書としての價値を期待して作られた點ゝ見られるが遊客の年ゝによつて考慮されて居るところに本書の特色がある、描寫されて居るところは當時の穿ちである、風俗硏究上には好き資料となり得よう。

本文中に外山翁の「浪花色八卦」（本卷所載）の記事が引用されて居る、勿論同書を讀んで居た結果に外ならないが、同書が本書に影響したところは同書が各所に散在する遊里を分類し批評したのを遊客の年ゝに於ける遊びの上に當てはめた點である、延享四年の「百花評林」（本卷所載）の遊女等に對する描寫法が遊客に獨立されたものと云へる、相互に關係を受けて本書が發

表されたものである、安永九年に桃栗山人柿發齋によつて著作された「客者評判記」(本大系第三卷所載)は矢張り遊客を對象とした作品であるが、分類に當つて年齢によらず、通、不通、半可通、買習、色客等の階級によつて居る、本書の影響下の作品と考へ得られないこともあるまい。

▲聖遊廓（ひじりのいうくわく）　原本　縦四寸八分 横三寸七分

寶暦七年刊

書名「聖遊廓」は本書の登場主要人物が孔老釋の三聖に假托してあるのからの命名である、又内題は雪月花と稱する、三聖に因めるか。

本書には作者名がない、全然何人の作か詳かでない。

刊年は本書序末に「寶暦丑水無月」とあるのと卷末奥附に「寶暦七丑六月吉日」とあるので明瞭である、從來「異素六帖」(本卷所載)と刊行の前後を云々されるが、「異素六帖」の奥附に「寶暦七丁丑歳正月吉日」とあるからこれで問題は消滅するのである。

本書は大坂道頓堀遊里を背景にした作品である、然して江戸で同年正月に刊行された「異素

六帖」に刺戟されて著作されたものである、兩者刊行の時差、正月より六月迄での約半歳は、いくら交通の不便な時代であつても江戸より大坂へと運ばれるには充分なる時間であつた、そしてその時代それ自體が、單調な生活を如何に打破して行かうかと焦りつゝあつた、次から次へと變つた[illegible]い刺戟を求めて居たのだから、江戸から大坂への展開は當然考へられることである、本書は、「異素六帖」に於ける神儒佛の三者を最も露骨に脱出の跡を見せて孔老釋の三聖とした、同じく神儒佛の三者にしなかつたところが、作者の如在なさである、が然し本書の奇抜の案も「異素六帖」の存在の前には一歩を讓らねばならない、とは云へ脱出振り、構想の展開は實に鮮かな手腕である。

本書の構想は孔子、老子、釋迦を大盡に見立て、合方が、孔子は大道太夫、老子は大空太夫、釋迦は假世太夫で李白の經營して居る揚屋で遊ぶ、釋迦は假世と書置を殘して心中の道行きと洒落る孔子外一同驚き周章てゝ探し廻るが、兩者は即身成佛して彼岸に到着すると云ふのである、なほ附錄として拳の數と、廓中で遣はれる單語を唐音で示したものがある、三聖の相方が各ゝ思想的名稱の洒落から成つて居るばかりでなく、李白の女房を灑、中居をなつ、もん、客五柳先生陶淵明、その相方菊、費長房、その相方鶴、周茂叔、その相方蓮、客波東、その相

方舞臺子答節推、客韓退子、その相方影子孟東野、騷ぎ客文殊、日蓮、賓頭盧、阿難、幇閑白樂天、鉄拐仙人等が見立られて居る。

本書が三聖其他を遊客其他に見立た事は「異素六帖」の影響があつたとは云へ尙一段と優れて居る、世の尊敬の的であつた三聖をして斯く遊興に耽らしめるところに諧謔がある、釋迦と假世太夫の書置を梵字で綴り、道行の文を付けたのも滑稽味を出す手法である、尙外に、會話中に孔老釋に關する語の洒落がある、その牽强附會に可笑味が高率に醸し出されて居る、これは「異素六帖」にも見られる現象であるが、これより後天明三年刊、唐來參和作「三教色」（本大系第五卷所載）が最もよくこの系統を繼いで居る、主人公は矢張り、神儒佛の三者であり、その洒落が本書より一層徹底して居るのである、本書の附錄の唐音は同じく三和によつて「和唐珍解」（天明五年刊、本大系第六卷所載）にて應用せられて居る、「異素六帖」や本書の傾向を見ても初期の洒落本が漢學者等の餘技的生產である事はいなめない、しかしそれも旣に相當の修練を經て來るべき洒落本の方向を明示してるかに思はれる。

「異素六帖」に盛られた社會相の穿ちは本書にも亦見られる、三聖は斯道の三代表者である作者はその三聖を借りて斯道の人々の生活の一端を曝露したに過ぎない、一面考へられない事

乍ら、實際は反對である、その裏面の揶揄によつて作者の憤懣は慰められて來る、只々笑はせようとする事のみがその動機の全部ではない、自己の本心を欺きつゝ表面を謹嚴化して居る、否よぎなくそうさせられて居る作者の境遇に對する眞劍な闘爭の現はれとも見られる、僞はらざる告白を敢てした作者の努力は尊敬に價する「異素六帖」と共に洒落本ではこの裸の人間を描寫した點で先驅者としての高き評價を得るであらう、大田蜀山人の識語ある原本に「雪月花きつと請合奉るよつて九段の上の御拜見　蜀山人錄」と記して居る、その同じ原本に節分堂鬼外なる人は表紙二頁に於て「評曰此本者一向面白ろくなく只作者三教の道を少しなまかじりて高慢に書し本ゆへ作者己のみよしと綴し本ゆへ己ばかりに叨りて見物人に一つも叨らず」と述べて居る、參考のために引用した。

▲穿當珍話　原本　縱五寸三分　横三寸六分

八幡大名作　寶曆七年刊

書名「穿當珍話」は伊藤單朴の著「錢湯新話」(寶曆四年刊)あたりからの思付きであらう、何れも「煎燈新話」のもぢりである、一名「比言指南」と云ふと傳へられて居る。

作者八幡大名は獻笑閣主人の匿名と云はれて居る。序の黒白主人の傳は詳かでない。

本書は特殊な洒落本の一つである、非本格的存在である、が此種の作品は後世度々發表されて一つの典型を形成するに至つた、卽ちその內容は比言指南である、先づ序の次に口取文句を綴りて比言の何たるかを示し、次に比言指南を以て生活して居る先生のところへ教授を受けたい客が集つて來た光景を描き、終りに每月の例會での卷を見せて比言の教材たらしめてある。

扨比言は地口、語路の如きものである、斯うした言葉の遊戲が流行しだした、矢張り單調な生活の倦怠から逃避しようと云ふ雰圍氣の中に醸し出されたものであらう、洒落、地口で慰安を求めやうと云ふ氣持が斯種の流行となつて、指南と云ふ形式化の時代にまで到達して來たのであるが一方花柳界の描寫に應用されたのが洒落本である、これまでに花柳界を描寫した書は決して尠くはない、しかしこの表現法をとつたのが洒落本としての存在を明確にしたものである、洒落と云ふ事にのみ重點を置いて洒落本を論ずるならば本書の如きは先づ本格的に近いものかも知れないが、花柳界と云ふ條件を附する場合には、勢ひ變格的の方に片寄らざるを得ないけれ共、洒落本としての一要素の取材であり描寫であるが故に廣い意味で本大系には採用されて居るのである。

本書が指南所の描寫である點が後世田水金魚の「傾城買指南所」（安永七年刊、本大系第三卷所載）や吉田錦江の「色事指南所」（安永九年刊）に見られる通りの影響をして居るのである、何れも花柳界そのものが中心ではない、花柳界へ出入するのに先づ必要と考へられる身構の指南を受けると云ふのである、本書が後世のそれと異なるところは、比言に重きが置かれて居るの點である、本書の前に案內書、敎科書式の本格的洒落本も出て居るが斯種の獨立的なものは恐らく本書を最初となすであらう、此の意味に於ても特殊な位置を占め得る作品である。

「先生」是は珍しいすきと見へませぬが何と被成た「知曉」へヱ花情丈の事ニ付て彼是致し御無沙汰申ました扨花情丈氣之毒で御ざります「先生」何と致したな「知曉」また餘程盡されまして此度ハ松風ではないが塩ふみに上塩町邊へ閑居の身分となられました

と云ふのは「月花餘情」（本卷所載）に於て花情と云ふ人物が遊興に耽けることが描寫されて居る、その花情が失敗して閑居の身となつた話である、こゝらからして本書の作者八幡大名が獻笑閣主人の匿名であると云ふ說が發生するのであらう。

▲十二 彌味草紙　原本 縱五寸 横三寸四分

鎭西翁作　寶暦九年刊

書名の割書「十二段」は本文が十二段に分類されて書かれて居るので斯く冠したのである、「彌味草紙」は嫌味な事を書いた草紙と云ふ意味であらう。

作者は明記がないが、序を書いて居る鎭西翁その人であらうと想ふ、小野のおつうの後のお月と云ふ者が十年前に書を綴つて置いたのを小冊に纒め上げたものと云ふて居るが、實は鎭西翁が著作を假空な人物に託して居るに過ぎない。

本書の內容は遊びに於ける嫌味な事どもを十二段に分けて描寫したものである、作者の主觀でそう思はれた事どもに對してゞある、嫌味に思ふ事をあげて注意したものである、この注意敎訓的態度が本書の中心をなすものである、その十二段に取材された事どもは、初段では、辯、步き振り、脇差の差し樣、掛け香の龍麝の香强きもの、眉の蠅のとまつたようなの、二段では茶道に入つたばかりの男の扇の持方、立派なものと思ふ男が行き違つた女をいく度も振りかへつて見ること、三段では些細な事に驚く女、四段では遊女が學識を無知なものにひけらかすこと、五段では、船遊びに皷み入れたの、尺八を少しやつたものが立派な身姿で遊里をさまよひ步くこと、藝者の三味線を膝にのせて天手の上へ顏をそむけて唄ふ樣、六段では遊女が初會の

時客を外に中居と懐古談をすること、床急ぎする男の痩我慢、七段では流行をはやく知つた男が、芝居狂言の仕組を初日前に觸れ歩く、又役者の本名を云はずに替名を云ふ、遊女がけたゝましくさん付けして呼ぶこと、又藝子遊女が互に坊づけして名を呼ぶこと、夏の夕に紅の手拭を首にまとつたもの、二八頃の藝子が男の履くあわ草履を履いたもの、八段では近頃流行のふき鬢と云ふもの、九段では賤しい遊女のしつこい髪が染つて此頃は町家の若後家娘の容が劣つて居る、十段では脇差の中でも模様や柄廻りに飾られて居るもの、紋や笠の過小、或は過大、汗手拭の長過ぎたるもの、褌をなまかぢりするもの、ごで／＼と唐詩を作るもの、ひよ／＼と竹を畫がくもの、武士でないものが馬に乗り廻ること、十一段では、男の帶の幅廣きもの、小指の爪の長いの、男の懐中に鼻紙を澤山入れたもの、なまめいた男が馴染の遊女に食事を進めた場合遊女はいや／＼ながくも食したるを我に心ありて食べたと友人等に物語ること、十二段、遊女の生えさかりの長いもの、京都から浪花の遊里へ來た遊女の彌味の數々、遊女と廻しとの中居が花のせりふす聲が座敷へ聞へたもの、三味線のあだ弾きの撥の音、枕とるやすぐ高息きの女、閨中の謡聲、曳り下駄のせはしい音、革草履はいてびた／＼鳴る音等を擧げて居る、何れも作者に氣障と映じた事どもであらうが、單にそれだけでなく、一般に斯う考へられて居

た事をこの作者によつて初めて表現されたものなのであらう。

本書は嫌味な事の列擧により注意すべき事として敎訓されたものであることに外ならないがこの事について感受するのは氣障と思ふ事の描寫であるだけに抽象的とならざるを得ない、それが穿ちによつて初めてなされる、つまり細い穿ちの見えるのが本書の特色の一つであらう。

▲くたまき綱目　原本 縱五寸二分 横三寸六分

不成山人作　寶曆十一年刊

書名「くたまき綱目」は叙の中に元祿の頃「くたまき」と云ふ俳諧の書が出たがそれを寶曆巳の年卽十一年に校正して出したものと稱して居るので其の由て來る所以が知られるが、こゝに云ふ「くたまき」は「をだまき」の誤りであらうと想ふ、其故は、元祿年間に溝口竹亭の著として、「をだまき」と云ふ本が發行されて居る、俳諧作法の書にて、仕樣てにをは、假字遣等を記述したものである、本書は同書を模して俳諧を一徘徊者道樂也。居續夜泊りして。遊所に徘徊するをいふ」と云ふ見解のもとに遊里に關する記錄である。

作者不成山人の傳は詳かでない、本書が京都の作品であるところから同地の人であらうこと

は想像される跋の河洛道人も何人か傳未詳。

本書は前にも言及した通り溝口竹亭の「をだまき」から思ひついてその形式を假りに遊里に關する記述を試みたものである、先づ徘徊之事とて遊興の定義を述べ、その徘徊六體とて心の辯說、詞の辯說、心の和口、詞の和口、心の狂、詞の狂に別れ、諸部は、神祇、釋教、戀、無常哀傷、追善、懷舊、述懷、徒移、名所、名物、餞別、賀、對、哥、謠、仁心、眺望、秀句、言かけ、見たて、云たて、重詞、左禮、大意に及んで說かれて居る、又發句切字には下知、をまハし、上に切字有て下に哉留之事、はり留、三名切、大まわし、切字なくして分別あるべき句現在之哉、うき哉、三つのし、おわんぬふのぬ、七ツのやの次第、にて留之事、上に疑の文字ありててと留る仕樣、下の句のて留見つゝ留見、見ゆ留見、こそといひてれへけせてねえめれと留る也、言殊す手爾於葉、治定してはね字、かさねらん、八字の付所、一句二ツに成句、下ノ句二五四三の事、さし合の沙汰、同字別吟、座敷並去嫌(附合、寢間、居續、步行、神祇之詞非神祇詞、釋教之詞、非釋教詞、戀之詞、非戀詞、無常詞、非無常詞、述懷之詞、非述懷詞、人倫之詞、非人倫詞、居所詞、非居所詞、夜分之詞、非夜分詞、山類の詞、非山類詞、水邊之詞、非水邊詞、四季之詞、面八句、等に別れて述べられて居る。

俳諧を學ぶ程のものはすべて「をだまき」によつたほどの當時であるからその普遍化も夥しいものがあつたに違ひない、その普遍化を利用して組織はそれに類し乍ら對象を全然變化させた點に大いなる諧謔が見られる、諧謔、可笑味の發生に努力したのは當時の洒落本の主潮である、それを變つた新しい趣向にて表現することが競爭されて居る、本書もその傾向を露はす大きな波の一つである。

本書に記述されたところの內容は作者の遊興に關して有する知識の表現である、或は女中の咄と云ひし條下もあるが、遊びに對する作者の見解は本書中隨所に見られるところである、大意の中に「心の儘に樂は皆遊び也」と道破する點無量の妙味がある、或は又「只たらわぬ顏にて遊こそよけれ。里の噂ども知り顏にいふ人。にくまるゝたね成ルへし。だまされまいとおもふのがすぐにだまされたるのと知るべし。鬱氣をはらす所とばかり心得たまへかし。粹といわれんと工夫する、これ不粹の只中也」と、譯知りの作者の思想を窺ふに足りるであらう。

俳諧の手引になつた「をだまき」が生命と同じく本書を遊里徘徊の案內、教導、とならしめた指導的精神こそ形式と共に兩書一貫した同一點である、つく〴〵そこに着眼した作者の如在なさを思はしめられる。

▲列仙傳　原本　縦六寸二分　横四寸二分

先賢卜子畏作　寶暦十三刊年

書名「列仙傳」は扉裏には「聖遊廓二編列仙傳」とある、六歌仙等を描寫したものであるので列傳と云ふ意味をとつたものである。

作者先賢卜子畏の傳は詳かでない、序の可亭董薫、南京沈無有、跋の忘草野姥の傳も未詳。

刊年は扉裏に寶暦癸未とあるので寶暦十三年であることが知られる。

本書は前述の通り「聖遊廓」の後編である、前編に於て孔老釋三聖の遊興が描寫されて居るが、本書には唐土に於ける孔子は既に國内の凡ての遊里も遊び盡して今は日本の遊びを慕れる樣になつた、十哲の一人子路が使者となつて粹宿を經營して居る能因のところへ内檢分に來た、そこで揚屋をやつて居る吉田屋傘好の家た旅宿と定め、廻狀を出して在原業平、大伴黒主、喜撰法師、僧正遍昭、文屋康秀、小野小町の六歌仙を呼び集めた、歡迎の酒宴の中に子路が日本の哥、連俳、茶香等について質問した、喜撰が歌道のこと、康秀が連俳茶香のこと、僧正遍昭が遊里の事を說き聞かせる、それから中ゥ芝居の淨瑠璃を御覽に入れる事となり、諸方の粹

達へ廻狀を出し、役者と見物とを別けて芝居を始める、が時間がたつても幕が開かないので役者座中殘らず飛出て引合を云ふ、扨いよ〳〵開幕となる棧橋に居る子路から、韋駄屋天兵衞から顔淵が飲み過ぎて吐血したから急ぎ歸國する樣にとの通知に接したから折角だが芝居は他日にしてくれと云ふので止むなく中止になつたと云ふ構想である。

六歌仙を中心にして構想をねつたところに作者の思ひ付きを見るが、作全體から云へば充分なる活動は附與されて居らぬ恨みがある、作者の動機は、和歌連俳茶香遊里演劇に付いての當時の社會相の穿ちにあつたのである、その穿たれたところは和歌連俳茶香に對してはそのあまりに俗つぽくなつた事を揶揄し罵倒して描寫したものであり、遊里の凡べてが下品になつたを歎じ、又座敷芝居の描寫は、所謂茶番狂言の流行を物語るものであらう、遊里に於て遊びの趣向に採り入れられた情景を細々と述べて居る、端的に作者の反情を披攊したものではないが、その仰々しさに憤懣の情を全般的に感受することはいなめないのである、而して又如何なる作品に於ても見る點ではあるが、作者が自身の有する知識をひけらかしたい念願が頻りに動いて居た事は想像に難くないのである、中ゥ芝居の段に於ても演劇そのものに作者の興味はないのである、登場する粹達を實在の役者に見立て、紹介する點に明かであらう、冗々と長く述べて

居る中に紙數を重ねて遂に子路をして歸國せしむるに至つた構想をとらざるを得ないのであらうと思考される、卷末廣告にある、「寶元氣曾我上中下右之狂言近日後編に御目にかけ申候」と云ふのでこの中止した芝居を御覽に入れようと云ふ意志であることを知るがこれは責任逃避の一策であらう。

唐土から日本の遊びを慕つてそれを求めに渡來する構想や、六歌仙の道戯的見立は、種々な作品に取材されて、洒落本のみでなく、黄表紙等には可成澤山に見受ける何れも膾炙された者を對象にして諧謔の稱にしたのである、諧謔それは可笑味を主眼とした當時の作品には、欠くべからざる要素であつたのである。

本書は前編ほどの高評は得なかれたにしても六歌仙の見立、茶番芝居の取材等後世の作品に影響を與へた事は尠くないのである。

▲煙華漫筆　原本 縦五寸一分 横三寸七分

張葛居辰作　寶暦年間刊

書名「煙華漫筆」は又「烟花漫筆」とも書く、「煙華」は本書が難波の遊里に關する記録であ

るところから仁德天皇御製「高きやにのぼりて見れば烟立つ民のかまどはにぎはひにけり」と王仁の「難波津にさくや木の花ふゆごもり、今をはるべとさくやこの花」とによつたのであらう。

作者張葛居辰は或は葛烏石の匿名かと疑はれる、葛烏石は名は辰、金栗又東海陳人と號した江戸の書家である、安永元年歿、享年八十。

刊年は不明である、本文中に「崎陽英華」の記事があるので其れ以後兩者の間があまり離れない時の發表にかゝる事だけは知られる。

本書は書名にても知られるが、難波に於ける遊里の漫筆である、先づ叙說、術院、浴室、妓名、白双、歌妓、絃瞽、琴女、仲居、女童、幇間、提拾奴、擔子、治郞、優人、供唱、戲場、機手妻等に分れて居る、叙說には、粂の仙人が道頓堀にて物洗ふ女の白肌を見て通力を失つて下界へ下ちて來た、其の女は中居であつた、上らうとすれど天上する術もないのでその中居に賴んで彼女の家へ連れて行つて貰つた、亭主の巧案で天竺橫町出の仙人の新造として店へ出した、それが評判になつて繁昌したが、全盛の中に身を引いて秋田屋久米右衞門と名を改め彼女をおせんと改めて娶つた、後に貝塚屋と改めた、今は何れもこの餘風である、其の後諸所に遊里が出來たが中央の南郭が最たるものであると云ふ、術院以下は凡て南郭に於ける事どもに

關してである。

本書の區別は「百花評林」の影響を受けたものであらう．しかし「百花評林」に見る諧謔は見られない、滑稽味を出すべく努力されて居らぬ、案内書としての解説に作意があるのである、その結果描寫が至極眞面目である、洒落を主とする當時の洒落本にあつては變つた系統に屬するものである、「浪花色八卦」(本卷所載)に見る類である。

本書に取材された仙人の通力を失ふ件は、當時の戲作には往々採用されたことである、洒落本の中で年代は少し離れるが、江戶四谷新宿の作者「驛舍三友」(本大系第四卷所載)の發端に同所の遊女を天女の落胤とし，羽衣のないため昇天不可能を描いて居る．直接的影響はあるまいが、構想を練る上に於て「雲井草紙」(本大系第五卷所載)の星の天降りと同じく思ひ付きそうな點である。

案内書としての描寫態度は勢ひ風俗描寫にならざるを得ない、本書がよき風俗研究の資料となり得るのもこのためである。

▲男倡新宗玄々經　原本　縱六寸三分 橫三寸六分

鐘西翁作　寶暦年間刊歟

書名「男倡新宗玄々經」は男倡好みを宗門に譬へたので僧能因の「玄々集」あたりをもぢつたものであらうと想はれる。

作者鐘西翁の傳記は詳かでない。序を書いた男倡宗門の行者と云ふのも或は鐘西翁なる人と同一人ではあるまいかと想ふ。

刊年は明記されて居らぬ、卷末の色子名寄によつて傍證がしつかりして居たら判斷出來ようが、今は詮術べがない、寶暦九年刊「十二段彌味草紙」（本卷所載）の作者と本書の作者とが同一人であらうと云ふ點によつて寶暦年間刊歟と假定して置いた、本文中に「月花餘情」「浪花色八卦」（以上本卷所載）の記事があるからそれ等の書より後の刊行である事は明かである。

本書は大阪の洒落本である、野郎と傾城の優劣論が描寫されて居る、卽ち編笠居士は野郎の大體を述べて賞めたてる、紙衣和尚は遊女の妙味を說いて編笠居士をやりこめるといふ構想であるが、野郎の生活、遊女の裏をよく穿つて居るのを見ることが出來る、しかし本書はこの男倡と遊女との優劣にのみ重點があるわけではない、男倡なるものを紹介するに當つて遊女との比較を述べたのである、卽ち兩者の論爭が終つて後、男倡道の事を記し、男倡の別名、色子名

寄等が載つて居るのでも知る事が出來るのである。

男倡を取材した作品は至つて尠い、「芳深交話」（本大系第四卷所載）に芳町の陰間を連れて深川の遊里へ遊びに行く記事がある外、刊行年代不明の「南花餘芳」が堺町の陰間を對象にしたのと僅か三部しか發見されて居るに過ぎない、これ以外に絶無とは保し難いが尠い事は確實である「南花餘芳」は「雨巴巵言」の發表によつて刺戟された結果著作されたものであること は同書の卷頭にも述べてある、同書と本書とが何れが最初に刊行されたものであるかの問題については同書の方が最初であらうと想ふのである、何故なれば内容の組方が「月花餘情」や其の後編「陽台遺編」（本卷所載）に見る方法と同じく最初に漢文體を出し次いで和文體にて描寫してある、本文中にも「月花餘情」を引用して居る點など想ひ合すれば一層そう考へさせられるのである、縞笠居士と云ひ紙衣和尙と云ひ何れも假空の名稱たることは云ふまでもないが、これなども「異素六帖」や「聖遊廓」（以上本卷所載）の佛者或は釋迦の影響下にあらうことは想像に難くない、作者はこの佛教關係の人物に假托して互に論爭せしむるところに諧謔を期待して居るのである、佛道に類して野郎宗、女郎宗の宗門をたて、敎義をもぢつた點が可笑味の源泉をなすのである、しかし本書の目的はこの滑稽味にある、一面指導的、案内的態度を忘れ

ては居らぬのである、色子の名寄にはその意圖が判りと現はれて居るのである。

本書は特殊な對象を描寫する作品と云ふ意味ばかりでなく、その描寫の內容が至つて風俗史上に適切な資料たり得ることも本書の價値を高める所以である。

▲花路色里袂案內　原本　縱五寸二分　横三寸六分

寶暦年間刊歟

書名は又「花路色里袂案內」と云ふようであるが本大系採錄本は元の題簽を失して居るので止を得ず內題の「花路色里袂案內」と云ふのと、卷頭言の中にも「此度色里袂案內と題号して」と記してあるので先づ「花路色里袂案內」と假定した、花路色里は京都の色里をほめて云ふたのであらう、袂案內は小さい案內書と云ふ程の意味である、袂は今日の袖珍型なぞと云ふのと同じい意味を表はしたものである。

作者は名を記して居ない、何人の作か推測に困難である。

刊年は明記を欠く、從來寶暦年間の刊とされて居るので今はその說に從つて置く。

本書の內容は作者も「此度色里袂案內と題号して所々の女郎の氣持客かたの遊び土地に順じ

たる事くわしく書あらハしてあまねくすい大臣のひぢにせんとつゞるものならし」と云ふて居るので大體を知り得よう、云ふところの所々の遊里は、京都の島原を初めとして、祇園町の狂ひ、宮川町の品、七条新地米市のけいき、長命寺新地今出川新地、北ノ新地、等各色里に及んで居る、その外行合色事なるならぬといふ見分樣ノ法と云ふ附錄とより成立して居る。

玆に注意させられるのはこの內容の組織の立て方である、本書を讀んで見て先づ感ずることは「浪花色八卦」(本卷所載)の存在に對する想起である、同書は寶曆六年の刊行にかゝり、浪花の遊里を八卦の形式に於て分類し、描寫したものである、大阪と京都との地理的相違こそあれ、又八卦と云ふ形式は採らないにしても、各遊里の情景を描き、人情風俗を寫して遊女遊客のそこに於ける生活を表現したものである、この事は、附錄にある、行合色事なるならぬといふ見分樣ノ法によつても明かにされるのである、卽ち「浪花色八卦」に於ける、來るか來ぬか家に居るか居ぬか、噓か眞か、末とげる緣かとげぬ緣か、叶ふか叶はぬか、この五ッの事を占ふ法を摸倣したものと思考されるのである、しかし「浪花色八卦」が本書よりも前に刊行されたものであると云ふ考察を根底にしての推測である。

本書は當時洒落本の主潮であつたところの遊里案內書、敎科書としての指導的精神の盛られ

た作品であることはその題名に案内と明記し卷頭言の末に「あまねくすい大臣のひぢにせんとつゞるものならし」と記したのを見てもその動機の奈邊にあつたかゞ容易に窺はれよう。

本書の趣向は「浪花色八卦」のそれには到底及びもつかぬが、京都の洒落本の數尠い作品の中にあつては存在意義の高いものであると思ふ、京都の遊里研究には看做すべからざる資料の一つであらねばならぬであらう。

▲閑居放言　原本　縦六寸二分 横四寸

玩世道人作　明和五年刊

書名は作者が閑居しながら放言したものでおると云ふ意であるが、放言は「楊子方言」等の模放であらう、又一名「北里歌」と云ふと云はれて居るがこれは內題である、內容から出た題目に外ならない。

作者玩世道人は何人の匿名か詳かでない、序文の中に大東名勝詩集を前に刊行した事がある由を記して居るが、同書も未見であるから何とも云はれないのである。

注を入れた竺天拙も亦知る由もないのである、本書は序にも云ふて居る通り玩世道人自ら北

里歌を作り、それを門人天拙をして註釋せしめたものである、扨その北里歌なるものは、一首夏十四日行次吉原。覩其燒亡無餘殘有。感因詳尋聽前日繁華之狀。戯作」と斷り書きがあるので知られよう、つまり、明和五年四月六日曉八ッ時吉原江戸町二丁目から出火して大風のため廓中殘らず燒亡し五十軒道まで類燒した、明暦三年新吉原へ移轉後全燒としては今同が最初である、初夏十四日卽ち五月十四日に序があつて新吉原の燒跡を見に立寄つた、昨日の繁華に引きかへて今日の姿を見て感慨無量、その全盛の情景を歌につくつたものであると云ふ。

本書の創作動機は右に述べた事も其の一に相違ないが別な方面卽ち序文に「公之於世。冀爲童蒙知文字之梯漸歟」とあるのと、又、跋に「道人著詩海錦帆（初編八卷）行于世。今詩中所用。熟字故事。錦帆中所載者。毎字右肩加黑圏。使人知用字。有來歷本據」とあるのによつてもその意圖した一面を窺ふ事が出來るのである、「詩海錦帆」なる書も未見であるから何の程度の本であるか知らないが斯の方面を餘程得意にして居たものであらう、或はこの弟になるものも作者と同一人ではあるまいかとも思はれる、「詩海錦帆」なる書の宣傳を努めて居るのも自らの爲せるところではなからうか。

本書と從來の作品とは同じ漢文體であつても創作の根本に於て大きな開きがある、しかしそ

れは玩世道人と天拙とが同一人だらうと考へる場合と、然らざる場合とに於て異なるものであるが、同一人であらうと云ふ考察の下にては、從來の作者はその描寫するところのものを以て可笑味を發生せしむる、諧謔の資たらしめる以外に目的を有しなかつたのであるが、本書は文字の勉强に供するのだと云ふ意志が强調されて居るのであるからこゝが嘗て見られない點である、內容を檢討すると成程六ヶしい文字を使用して一々その出典を明記して居るのである、作者には最も得意とするところであつたらうがあまり好ましからざる態度と云ふべきである、或は、斯うしたもつたいらしい態度を北里の歌によつて表現するところに諧謔を感じると云ふ人もあらうかも知れないが。

原本には卷末に無此印者爲僞刻として朱で捺印してある、元來朱肉を以て捺すべきであるが便宜上同じ墨にて印刷した。

▲郭中奇譚　原本　縱四寸一分 橫三寸六分

臼岡先生作　明和六年刊

書名「郭中奇譚」は唐本の書名に擬したものでさしたる意味は有るまい。

作者臼岡先生の記はないが、完全な扉裏のある原本に斯くあると稱せられるのでそれに從つた、しかし傳は詳でない。序の淡海先生もその傳を詳にしない。

刊年は淡海先生の序に明和己丑冬十月の題記があるから明和六年と思ふ。

本書の內容は船窓弄語、船花屁言、掃臭夜話の三項より成つて居る、船窓笑語では藝者を連れた客が隅田川での船遊びを描き、弄花屁言では吉原の遊興を寫し、掃臭夜話は夜鷹の情景を書いて居る、一貫した構想はない、作者は斷片的な或瞬間の描寫に興味を持つたと見える、右三項に分けた各々の雰圍氣の描寫には當時としては先づ成功した方である、然し佳作と云ふわけではない。

本書の刊行の翌明和七年には「遊子方言」（本卷所載）「辰巳之園」の二つの作品が發表された、何れも本書の影響下にあることは論を要しない、本書の船遊山は「遊子方言」「辰巳之園」に吉原通ひ或は深川通ひの猪牙船となり、吉原遊興は矢張り「遊子方言」に採用され、夜鷹の情景は「辰巳之園」の仲町描寫に暗示を與へて居る、然るに本書と右二作との相違は、語弊があるかも知れぬが本書の平面的であるに對してその二作は立體的と云ひ得るであらう、本書の作者は斷的な表面の描寫しかして居ないが、その二作は、表面的描寫に作つて裏面をも活寫して

居るのである、本書の人物には性格が稀薄だ、感情が現はれて居らぬもその一つである「遊子方言」「辰巳之園」の如雷の如き半可通、「遊子方言」の息子株や「辰巳之園」の田舎侍の純心さは本書からは感受出來ない、叉本書の會話中にも右二作に見る如き細緻な穿ちは行はれて居らぬ、右二作が半可通等の罵倒ばかりでなく、多少なりと遊客の指導的態度を見せようとした動機と、本書が漫然と紹介しよう位の動機との開きが、評價の決定を齎す點であらう、と云つて本書を凡作なりと云ひ捨てるのではない、本書刊行の共の翌年に二部の傑作が相續いで出たと云ふことは本書によつて刺戟されたのであるから共の存在は無視され得べきものではない。

酒落本に會話體の採用されたのは、寳曆六年刊かと想はれる「月花餘情」であり、共の後數種の作品が發表されては居るが、本書刊行の間近にはそれらしいものが見當らない、久しぶりに突然本書の發表を迎へただけにその會話體が注意を引くのである、極く初期のそれに見るよりも流暢さは窺はれるが「遊子方言」や「辰巳之園」の圓滑さは未だ發輝されて居らぬのである。

兎に角內容の組織と云ひ、描寫と云ひ歷史的に問題になり得る作品に相違ない。

▲間似合早粋　原本　縦五寸一分 横三寸六分

史魯德齋作　明和六年刊

書名「間似合早粋」は、手早く粋になるのに間合ふ書と云ふ意味からの命名であらう。

作者史魯德齋は、山橘山人とも稱して大阪の人である事は知られるが他は詳かでない。

刊年は己丑とあるので明和六年である事が分る。

本書の內容は書名の示す如く早く粋にならんとする者の爲めの教科書、案內書としての作品である、先づ粋の定義(作者の考へる)を述べ、粋に成らうとする手段を說き、粋のせまじき事ども、遊女にはまらぬ心得等を注意して居るのである、所謂粋なるいかゞはしいものが流行した、それに對して作者が反感を感じ、粋に對する自己の意志表示をなしたものである、卽ち「遊里にのミかぎるべからず貴賤尊卑にかゝれはらず萬端の事やありて其所に臨ミそれ〳〵の粋をつかふ事」と云ひ又「聖人の世とよく推うつるといはセ給ふか推の胴骨只人に廣くつきあひて人情をしりてなれたる人を以て粋と云ふ」定義を下して居る、それ故に「色里へ入こんでかけあん灯の家名覺へて女郎にも四五人祝義み書てやるほどの近附か出來亡八の息子送迎の男とも

念比になるとはや粋に成た胸算用あらゆる人とちかつきになり付合の顏で芝居へ錢なしにはいり初日の棧敷にちかづき自慢是ハお丁しりとてしろとだましの粋なり」と罵倒するのである、しかし次に「是より段々磨上て極上の粋にも成事なれハ一旦ハ此惡穴におつるともゆるすべき歟」と鋒を緩めては居るが。

「遊所の風俗人の氣風を考ふべし」とて髮の結ひ樣、衣裳の拵へ方等と細い事に注意を與へて居る、しかし何處の遊里に何うと云ふ點に對しては言葉を避けて「所々のいろさといつかたへ行ても少しづゝの違ひあれ共大概おし渡り間に合ふ也」と辯解して居る、作者の意圖した所が、粋の根本義にあつたのだから無理もない。

本書は比較的眞面目な態度で描寫されて居る、何處までも世の粋たらんとする人々に對して指導的態度を持して居る、これが洒落、滑稽、諧謔の當時の洒落本界の主潮を離れて居る點が注意される、世俗の粋に對して反駁し、自己の存する粋の定義を强調したいと云ふ點に目的があつたので斯うした態度をとつたのであらう、法師の名、役者の替名を擧げたのなぞその教科書としての細い心遣ひが見られる、しかしこれは、替名なぞを呼んで粋がらんとする輩に對しての老婆心であらうから作者が先に云へる論旨と齟齬するのである、だが作者は云ふであら

う、「段々磨上て極上の粋にも成事なれハ一旦は此悪穴におつるともゆるすべき」ものと。

▲遊子方言 原本 縦五寸 横三寸六分

田舎老人多田爺作 明和七年刊

書名「遊子方言」は漢の揚雄の著「揚子方言」の洒落である、「揚子方言」は揚雄が當時各地から朝廷に參勤する使者の方言を集錄したもので、本書の方言と付けたのも吉原の方言集の意味があるのである。

作者は明記を缺くが序を書いた田舎老人多田爺その人であらう、從來も斯く云はれて來て居る、扨この作者は多田屋利兵衞の匿名と云はれる、多田屋を多田爺と洒落たものとされて居る、平秩東作の「茅野茗談」には丹波屋利兵衞とある、同書によれば版元を須原屋市兵衞として居る、一說に本書再板本の卷末には書林の二字があり書林名は削られてゐるが須の字の墨跡が窺はれるので初版に於ては須原屋で再板が多田屋と云ふことになると云はれて居る、この多田屋が何時頃から書肆であつたかは疑問である、自分が本屋であるならば須原屋にて出版する必要はあるまい、著述した當時は未だ本屋ではなかつたのが、何か須原屋との間に於て問題を

起して版權をとつて自費出版をしたのが再板ではあるまいか、出版屋が自分の著述を他の出版屋に託して發行する事は考へ得られない事柄である、多田屋利兵衛は日本橋堀江町四丁目に居住したと云はれる。

刊年についても本書からは知る由もないが「中古風俗志附錄」に於て「明和七寅年、辰巳之園といへる深川の女郎買の事を記したる小冊、遊子方言といへる吉原の事を記したる小冊版行になる、右二部の洒落本大きに流行したり」とある、「辰巳之園」(本卷所載)は明和七年の刊行にかゝり、明和八年刊「虛實馬鹿語」にも書名の記されて居るところから考察すれば、明和七年刊行說も眞實性多きものと思はれる。

本書の內容は發端(友の出會、舟の中、堀の樣子、土手、大門口)中の町、夜の景色、香の程、更ての體、東雲の頃の六項目から成つて居る、構想は三十四五の通り者が二十歲位の息子を正燈寺の紅葉狩を口實に柳橋から舟で堀へ行き、中の町の茶屋から青樓へ上る、通り者は振られ、息子は持てると云ふのが骨子をなして居る、纏つた構想である。

背景もよく出て居る、柳橋から猪牙船で山谷堀へと上る舟中や、船宿から茶屋を經て青樓へ行く時の會話の中によく描寫されて居る、文章も會話體をそのまゝよく活かして極めて流暢で

ある、「月花余情」や「異素六帖」（本卷所載）によつて試みられた會話體がその後十四年の歳月の中に本書に見る如く修錬されるに至つたのである、又小說的要素で最も注意すべきは性格の活寫されて居る點である、半可通の通り者が知つた振りをして柔和な息子に話すが、息子も諸事それを眞面目に受け入れる、この兩者の性格の相違が判然と描寫されて居る、これより前に斯る描寫のないわけではないが、その鮮かさは嘗て見ないところである。

氣障な半可通と柔和な息子株との對立は、これ亦本書が嚆矢をなす、今後出る作品はこの兩者の對立を描寫することが夥しくその典型をこゝに見るのである、これも酒落、滑稽の材料に供せられたものに外ならない、何も知らない息子株をとらへて半可通をひけらかすが、それも茶屋の女房や若い者に素つ破ぬかれて野暮の裸にされ、結局は遊女にも振られると云ふ點に限りなき可笑味を感受せしめられる、斯うした社會相は隨所に見られた、それを抽出して酒落本の對象としたところに作者の鋭眼がある、單なる酒落でなく寸鐵的諷刺が含まれて居るのに既に搖籃期を脱する酒落本の主潮を窺ふに足るのである。

本書は種々な意味に於て劃期的作品である、本書を以て所謂本格的酒落本の祖とまで極言される程である、酒落本の評判記として共の昔唯一の存在である「戲作評判花折紙」（本大系第

十一卷所載）にも惣卷軸に据えて、なほ「とうせいの小さつしもミなこのしうちをミならひきしたとミへます」と賞揚して置かないのである、盍し適言であらう。

▲辰巳之園（たつみのその）　原本　縦五寸二分　横三寸七分

夢中散人寢言先生作　明和七年刊

書名「辰巳之園」は本書が深川の遊里卽ち江戸の辰巳にある色里の描寫であるから斯く命名したのであらう。

作者夢中散人寐言先生は其の傳を詳にしない、他に「南閨雜話」（安永二年刊、本大系第二卷所載）の洒落本の作品もある。序の櫓閑街紫樓の傳も未詳である、只叙の中に自ら「深川參人述之」とあるのでさうも號したらう事は知られる、落款からも判斷し難いのである。

本書は前にも云ふ通り深川描寫の作品であるが、今日迄に發見された所のものゝ中では深川描寫の最初の洒落本であらう、その昔式亭三馬も「船頭深話」（文化三年刊、本大系第十二卷所載）の中に「辰巳のしやれ本は美地のかきがら辰巳の園にはじまり」しことを述べて居る、因に「美地蛎売」（本大系第二卷所載）は安永八年刊であるから、本書の方が九年前の發表にかゝ

り、先づ嶹矢たるの置位を保持して居るのである、深川には、仲町、土橋、表櫓、裏櫓、裾繼、佃、大新地、小新地、古石場、等の各場所があるが、本書はその中でも代表的な仲町を對象にしたのである。

本書の内容は、半可通の如雷が、田舍侍を案内して深川へ伴ふ船中での流行の話、頻りとひけらかす通も、一度妓樓尾花屋へ上つてからは、半可通であることをすつかり曝露してしまふと云ふのが構想の骨子をなし、別に通人の遊びを描いて半可通のそれと對立させて居る、外に卷末に通言なるものを附錄にして居る。

本書の構想は至極「遊子方言」(本卷所載)に類似して居る、同書に描かれた通り者も本書の如雷も同じい半可通である、同書の息子株が本書では純粹の田舍武士となつて居る、その田舍武士所謂武左なるものゝ氣障な半可通よりも、厚遇されることは柔和な息子株と同じことである、同書に現はれた作者の氣持と同じく、半可通に對する反感と田舍侍に對する好意が判りと表現されて居る、序に於て吉原と深川との比較論の載つて居ること、又本書が明和七年林鐘(五月)以降の刊行にかゝること、構想の類似とを綜合すると本書は同書の影響下の作品と云ふことが考へられるのである。

本書は「遊子方言と同じく構想は先づ纒つた作品と云ひ得るのであるが、本書の創作動機は、半可通に對する反感もさることながら、遊女と遊客との機微な交渉を穿つよりも深川そのものゝ姿を描寫せんとしたのである、附錄の通言其他が本文用語の註釋であるのも斯の作者の興味の方向を察知し得よう、そこで深川案內記としての目的も尠からず達成されて居るのである。

本書の刊行後深川を對象にした作品は頓に增加した、今茲に擧げるの煩を避けるを可とするが、本文中にある輕井澤飯盛の描寫は後安永年間に山手馬鹿人によつて「變通輕井茶話」が發表されてその中に演繹されて居るのである、この作者は又本文中に出て來る深川親和を書名にとつて「深川新話」(安永年間、本大系第三卷所載)を著作した、何れも本書によつて刺戟されたものであらう、黃表紙の劃期的代表作と稱せられる「金々先生榮花夢」(戀川春町作畫、安永四年刊)の深川遊里の描寫も本書に負ふ所が尠くない、黃表紙に邯鄲の趣向を採用したのは、本書より以前「浮世榮花一盃夢」(富川房信筆、寶曆十二年版)「風流邯鄲浮世榮花枕」(富川吟雪筆、安永元年版)、「風流仙人花聟」(富川吟雪筆、安永三年版)等の流れを汲んだのであらうが、本書にも影響はされて居たと想はれるのである、本書に引用された挾詞なるものは、同書にも

採用されたのである、挾詞は當時特に深川遊里に於て盛んに流行したものである、安永九年刊黄表紙「今様喜還城」にも記錄されて居るのを見る。

本書には再板本がある、再板と云ふよりも改板と稱する方が當て嵌ると思惟される程改變されて居る、好評を博した作品だけに澤山摺られた事は考へられるが、何故斯く改められたかは判斷に苦しむ、或は、初版の時あまりに急ぎすぎた爲めに作者の良心がより忠實ならしめようと試みた結果によるのかも知れない、その改訂の程度を列擧すべきであるが、嚴密にすれば殆んど全部をあげた方が然るべきと思はれるほどであるからこゝではその煩を避けたい、その多くは本文の全體的には關係尠く、個々の場合原刻で假名である所が漢字であり、振り假名があるのが除かれて居たりして居るところが多い、或は、少しづゝ文句の挿入が行はれて居るところもある、要するに全然獨立して採錄すべきが至當であると思はれる。

▲蕩子筌枉解　原本　縦三寸二分 横三寸八分

茶釜散人作　明和七年刊

書名「蕩子筌枉解」の蕩子筌は唐詩選の洒落である、枉解は枉げて解釋する意味である。

作者茶釜散人は傳を詳にしない、門人藥罐子と云ふのも知られない、何れ同一人の仕事であらう、茶釜が藥罐に化けたと云ふ當時の俗言を採つたものである。序を書いた陶鐵房の傳も亦未詳。

本書は唐詩選の五言絶句を枉解したものである、枉解するに當つて遊里の事どもを對象に描寫してあるところに洒落本としての要素を含むのである、人口に噲炙した唐詩選をとつた上に遊里描寫にて解釋したところに諧謔がある、可笑味の生ずるを見る、遊里描寫も構想のもられて居るものではない、が斷片的に種々なる場合を取材して居る、如何に枉げて解釋するかに、作者の全力が注がれて居るのである、作者自身の跋の中にも、「水月集の上中の粹を取て注せられしはァ、どうだ答て曰水月ニ所謂上粹は果報もので粹とはいはれぬ又中粹はいやみの飛切身を身でつめるべく坊獨下粹のミ粹中の趣を得妓茶屋の穴を知る本文の差を以て百が錢を貫くが如し」と云ふにある、尙陶鐵房の中にも「其解也不齊解人顚耳。吉原之善惡。無一不施其解也。嗚呼非是先生之好詩及色則何以有如此之詳且盡者哉」と稱揚して居るのを見てもその內容を窺ふに足るであらう。

洒落本に唐詩選の取材されたのは「異素六帖」(寶暦七年刊、本卷所載)の後卷に於けるが最

初であらう、同書は唐詩選の一句と百人一首の下句とを結合して遊里描寫の手段に供して居る本書はその唐詩選によつて醸し出された笑を、注解の形式によつて演繹したやうなものである百人一首及同書に試みられた注釋が本書のそれになつたのである、只同書があまりに抽象的に傾いて居たのが本書では稍具的體に表現されたところに時の流れがある。

本書が「異素六帖」の影響になつたものであらうことは右の如く疑ひを入れないのであるがこゝに又同書よりも後寶暦十三年の刊本で、風物作繪入四卷の「俗談唐詩選」と云ふのがある唐詩選を中心に行はれた戲作に外ならないが同年刊の「風流戲話百人一首虚講釋」と云ふ作品もあるので、斯る作品の刺戟も受けたゞらうことは想像に難くない。

漢學者の餘戲的發生による洒落本も、享保、元文、寛保、延享、寛延、寶暦、明和と四十餘年の歳月は本書あたりを名殘に其の主潮を一變して行くのである、本書と同年に「遊子方言」「辰巳之園」等の所謂後世洒落本の祖と云はれる新傾向の作品が發表されて居るのを見ても、其の趨勢をはつきり認識することが出來るのである。

南巳危言

兩巴巵言

此篇叙色邑之事、色字邑字皆从巴、故以兩巴命題、巵言之字出南華經、蓋取諸其一盃可味之義云、

有大人先生者、不詳其氏族、以其無不通、世呼爲水天成八十八、（八十八訓與彌一）此年卯月辰日、稟氣於有頂天、而降誕於勢州伊達郡和氣邑、同樂之初、不圖圖東將遊於吾妻之色、邑邑蓋女護島之流也、以其多女子、故名曰好原、此地也、土手之途長、人目之關多、故往來之客、或乘駕籠、或傾編笠、或被羽織於頭、或臂手拭於顏、有以丸頭引耳者、有以便面當鼻者、風流異體、氣象不齊、雖公子王孫之貴、陶朱猗頓之富、皆徒步獨行、間有從者、亦不過一兩奴、雖耳大人、亦從一奴、八端掛兩面袷、七所製一本指、紫下緒之露重、白無垢之雪淨、白袴羽織、至帶鼻紙、莫不用意、莫不具體、加之金貝之印籠、錦織之巾著、對珊瑚於緒留、飾琥珀於帶挾、深深著八所綴編笠、輕

々乘三丁立早艇、兩横膝、少倚左、御沓太鼓、又駕別舸、或左或右、或先或後、時歌時笑、時呼時語、不妄動、不內顧、有先乎吾而泛者、有後乎吾而乘者二丁者、非敢後也、三丁者、或之先也、艫飄鷁以輕騰、臍堅牢而不窕、如鳥之飛、如馬之馳、三股背馳、兩國目擊、指椎木於右、見駒形於左、淺草之塔突兀而聳、角田之流渺漫無涘、西折左轉、入今戸橋下、櫓聲益急、船脚乃止歷々、舟宿箇々、亭主欹耳、擧目、引徘執纜、一奴先下、大人乃從、御沓引手太鼓、推腰徑斜逕、就熟路、爲實而步、爲虛而行、徐上日本堤、過道凸灌燒場煙、燻鼻泥町露、染身往來、摩肩白他、掉顔編笠、益傾細杖、屢裊降衣紋坂而入大門口、則日向斜照時、入佳境浮氣、無邊中町、如險伏見町左界町之臭也、江戸町二町目之躁也、山茶梅茶之花盛五寸三寸之格子、有青襖簾、有柿襖簾、三味辛湧、百藏息惡、實紙於鼻、壓指於耳、京町亦如之、新町亦如是、乃背角町、西入揚屋町、辻立繁道中盛、禿手玉章而東西、僕肩葛籠而後先、茶屋之婆下箱揚屋之者捲管、腰之高杯臺也、尻之旱間鍋也、醋漬之生姜蘘荷也、生燒之章魚蛤蜊也、坐禪豆也、梅法師也、

于鉢、干鍾、以盛以進、切薄之椀、薄端之盞、吸而飲、縮乎飲、一盃一盃又一盃、與姿對酌、紙花開簾影閃々、紅靴窄々、振袖之長也、小褄之高也、甘哉々々、哿哉々々、頃之新造、今之全盛、連袂反裳、隨遣並禿、一段勝百媚生、彌奇哉之音、南北同響、御坐乎之詞、左右注目、嗚呼夫薄雲之情不薄、濃紫之色最濃、迷初霧於明石間、咲花於難波、常盤山之深綠、春日野之若紫、氣色彌增、面影不忘、志賀唐崎之松、今猶昔矣、高雄立田之楓、青既紅矣、秋篠之風、翠粲於袂、道芝之露、厭浥於裳、木幡之邑、感少將之古井筒之名、懷在五於今二月、三月之花盛、八入九重之色深、聽松風於村雨、恨待宵於東雲、三夕之約、既納千壽之契、不空若擧其名、以聚其類、則千歲、千里、千代野、千代花、八重霧、八重菊、左京、右京、左近、右近、白絲、白玉、白雪、白滝、白菊、白花、玉川、玉島、玉野、玉井、玉村、玉葛、初菊、初芲、初瀨、初雪、初音、初絲、清絲、清洲、清澄、清高、清花、清玉、曰山則初山、夏山、松山、森山、小山、勝山、外山、茂山、津山、吉山、染山、加世山、和哥山、香久山、曰川則山川、瀧川、野川、瀨川、江川、宮川、染川、清川、皆川、吉川、森川、市川、竹川、津川、妻川、今

川、初川、長谷川、久米川、以野則芳野、勝野、島野、瀧野、生野、平野、高野、市野、清野、松野、志賀野、和哥野、宮城野、富士野、以島則初島、袖島、長島、浮島、八島、幾島、若島、高島、野島、清島、松島、霧島、倉有大倉、小倉、永倉、高倉、坂倉、若倉、橋有浮橋、清橋、雪橋、玉橋、唐橋、岩橋、大橋、高橋、一橋、八橋有柏木則有櫻木、有梅枝則有松枝、若松、有若竹、深雪有深花小櫻、小柳、小藤、小篠、小吉、小西、小太夫、小主水、小式部、小宰相、小源氏、小源太之小不同乎小衣之訓花紫、花霧、花崎、花垣、花野、苓村、花世、花里、花雪、花妻之花、不取乎花鳥、花月、花夕之音若夫丹珠與赤珠物同而人殊、奥州與陸奥國同而人殊、以一字之名、則都也、唐也、桂也、薫也、巴也、湊也、靜也、忍也、以國則若狹、丹後、和泉、河內、加州、越後、淡路、讃岐、因幡、長門、但馬、對馬、大隅、薩摩、有和國異國之別、有千代万代之遠、以境之名、而擧其一二、則西尾、葛城、尾上、住江、三笠、鳴戶、山科、更科、小鹽、江口也、逢坂之關、不停戀路音羽之瀧、欲流浮名目迷心蕩杳不知其所定遂欲起漣漪於琴浦、而開通路於几帳少焉、待合之辻、散居續之客、留有約而來者、禿迎而導之、不意而至者

遺就而計之於是大人亦囃立太鼓引連御脊起而向揚屋進而入奥間 〔七〕
上﨟來格下嫁近侍拍手則全家稱諸回頭則一座請命抔盤頻進燈
燭高張何宿無色此君可愛何夜無客唯我獨尊打花則春風好笑顔
打露則秋菊有佳色抑兮凝兮構兮間兮一場之酒未央半夜之鐘告罷
長枕文枕請何嚮一二蒲團三蒲團請何趾挑心于連鼓之三味線通氣于
吸付之多葉粉鴛衾之情于以合鱸膾之味不可忘月落烏啼楓橋之別
可知泉聲鶴飛揚州之夢難續御脊走太鼓噪上﨟送大人出人間之樂
極世上之眼窮蹤闔則心換上堤則氣定歸去來兮悟今是而昨非
昔

寛活八百年十有三月三十又一日

三十三年開帳之日

身毒牢人金天魔撃鉦樂書

身毒謂身之害也所謂宴安鴆毒也牢人牢落之人也金天魔謂所財之金天魔散之也撃鉦謂錢止也童謠云撃鉦金天魔是也樂書其所書樂也樂書與落書通音同故借而用之

烏許

烏許猶言虚之一字也諺曰虚八百故借其響以文之十三月三十一日皆謂其虚也

無有也

田和計曰一篇之文凡千六百五十一字句々極口舌之妙字々費手練之巧不覺使人生熟宜就銷金帳中酒後盛膾和三絃而諷詠也

又云氣鋒有餘遣繰無迹眞所謂回萬牛之手也

享保戊申孟春穀旦

史林殘卷

序

史林殘花出矣。不知何人之作也。顧其爲書。原本曰妓史。蓋有本紀。有世家。有傳。有志。凡可千卷。皆亡滅而不存。僅有關井世家一卷。地理。藝文。律曆。三志之存。惜哉因其所存者。以推其所不存者。則實良史之才。而見班馬於伯仲之間者也。世諺。俗字。方言。里謠。新々奇々。不胡不亂。極人物之評。盡風土之變。天下不可以無此書。而不可以無此筆。不倚太鼓。而上氣天下之心。不使一歩。而正月世界之日。其叙地理也。賣微字。先著眼。擧藝文也。俗方言最捧腹。律曆志。月令之日。其採歌也。非無心焉。其揚事也。皆有據焉。本紀之題

目。世家列傳之隨品。亦不爲不精矣。關井世家。蓋馬史之伯夷傳乎。史之筆而不拘於史筆。但其贊之。每々過當。其然。豈其然乎。冬之夜曼。燭之跋見。廢卷就枕。鼻息齁々。周化爲蝶。我化爲牛。忽至某國。三砧於此。十蕩於彼。能見其手練之巧。能聞其胸算之細。全盛則春之花。花散而不止。遣繰則臘之日。拂而又生。指切之血未乾。而口說之涙如雨。忘水上昔痛。嘆身揚之今苦。足袋之掛猶存。鼻紙之通未消。呼客而客不來。遣文而文不屆。鼠曳一筋之手細。猫喫三味之胴懸。揚屋若者。朝々擺屋。而遣手下嫁。夕々叩手歸。深編笠怪山手客之身窄。廻指紙威屋形者之頭勝。痛哉悲哉。月者

播露於野暮天。水者打鉦於風流陣。左一刑而花鳥餘情託於横谷。金次刺而大藏遺物運於窪町。倶歸於鍛冶屋之貧乏。小吉風流。空鎖於晒布箪笥之隅。小大夫月水。遂塊於味噌撞棒之先。則賣色必落於市人之胯下耳。及傾町寂而夜鷹揚。散茶冷而陰馬逸。則豈特此里之式微而已哉。抑亦世中之變態也。思之泚顙。瘖擗有摽。最早老婆之茶飲時也。乃次第其言。以書卷端云。

史林殘花序

我登待乳山。而有小天下之志。飄々乎御風。縱一葦之所如。武藏下總之間有大河。昔男之墮涙也。秋水渺々。焉接雲。大虛茫々而墜地。大橋跨空。椎木在右。牛島民戶。駒形市廓。寂寞與繁華易地。繫舟於一橋之下。片是今戶橋也。淺草寺之鐘砭耳。焦心於瓦屋之煙。有物漂於中流。視之一函。而啓之則一書也。題曰妓史。初喜其奇。書中嘆其奇遇。終痛其泯滅。紙腐墨渝。纔見千餘字之文而已。不忍弃捐。拾摭記之。不知何人之述作。固知良史之材。見班馬於伯仲之間。嗚呼全書不存。我廢卷一大息矣。若有博雅君子。編修國史則庶幾

小補乎。蓬底吹燈筆之。我者誰也。不知何許人也。不詳其姓字。命編曰史林殘花。誰不探史林之春。誰不尋史林之花乎。以爲之序

地理志

聖門之徒。有司馬牛者。乘桴浮海。東海之東。有東武國。其北隅有吉原。固是遊君子國也。（日本稱君子國。妓女稱遊君。）司馬牛相其攸。卜其居孫〻世〻。成一都邑。義不食東夷之粟。賣薇而爲業。（其國薇與女陰之通稱。音假用。）故其國到今稱賣妓之長曰轡。蓋取義於司馬之姓也。稱賣妓之奴曰牛。是亦取義於司馬氏之名也。其妓有大夫。格子。山茶。梅茶。局之品。其價有三十七。二十六。十五。五三錢之差。山茶梅茶者。野也。大夫。格子者。文質彬〻也。或爲悅己者。切髮入黑子。吳國斷髮文身之餘風乎。先賢政淸所謂切髮。切指。入黑子。與爾之習氣者。（妓女稱與爾。）是也。

日本隄。國門之外。曰之日本隄。長路漫〻。水田漠〻。縮隋帝之隄于此乎。士農工商。貴賤貧富。皆出於其路。傾編笠。被羽織。鼻吟小歌。手把細杖。隄上一町。有一亭。戍卒深夜擊柝送客。曰之送拍子

木春曙過之。則長天餘霞。遠花一片山。歸雁兩三箇。夏夕望之。則涼風可人。蛙聲喚誰。飛螢隨風。高下不定。所視所聽。恰如畫圖。秋夜者。殘月一痕。平野無人。鐘磬之聲。隱々隔林。冬晨者。風雪滿堤。玉龍臥雲。烟飛鳥下。自無情者觀之。則風物信美也。自有情者觀之。則無不從淚。無不驚心矣。

衣紋坂　國門之外。有衣紋坂。嫖客整襟刷裳之地也。

大門　國門曰之大門。無日無夜。士卒戍之也。戈戟森々。燈炬耿々。班超所謂願生入玉門關者。疑指此地乎。陰莖稱玉門不入此關。則不足語男子也。

中町　國中有正路。商賈成市。繁華都會也。詩人所詠。周道如砥。蓋此謂乎。人而不可不由此正路矣。

伏見町　境町河岸。本町河岸。皆邊鄙之地也。人物不足論焉。土地有臭氣。人皆掩鼻而過之。

江戸町　二町口　角町　新町　京町

人物嘈雜。三絃聒耳。一節成文。眞是人間歌吹海也。此海也、陷溺者多矣。樂天巫峽之水是安流者。豈他求哉。往欽哉。往欽哉。

揚屋町　王者之都也。人物不野不文。外無曠夫。內無怨女。聖王仁者之遺風餘流乎。客衆爭色。女萬鬭美。風流花陣之戰場有不戰相挑者。有以口舌遊說者。有一夜下四五城者。太平樂（洛音）事也。

藝文志

細見圖　一日不可無此書焉。不出戶牖而知天下。文可徵矣。

評判書　多々益多。眞僞難辨。不足採之。盡信書則不如無書。唯取二三策而已矣。

祭文　一卷。竹田所著也。有腹者世界之戀山。臍者客衆之玩物之句。膾炙人口。

俗方言　三卷　不記何人之作。略揚其一二。妓年高者曰年增。妓富春秋者曰新造。指新成者稱新造。蓋擬之乎。買妓者曰客。客耐久

者曰馴染。馴染之客曰深間。深切之客曰思別。非常之人。別有深切之思也。從妓巾女曰禿。老婆曰遣手。國俗凡稱謀事爲遣繰。老婆有遣繰之手段也。客智者曰通者。又曰水。水者以無不通也。客愚者曰屋暮。不知戸外之事也。稱富客曰大人。稱貧客曰無伽羅。又曰祐成。伽羅者棋楠香也。豪富席上之珍。不落貧賤之手也。祐成者曾我氏之子。十郎之諱也。十郎貧窶而買妓虎。故稱之乎。金銀曰花。又曰露。相恨相妬曰口舌。交戰曰茶。今又曰膾。註說繁宂。不可強解。闕疑而可也。進酒曰構。曰碍。曰間。妓不得相逢曰障。相別曰去來兮。客呼妓曰敵。妓呼客曰方樣。妓始薦寢曰水上轍耕錄所謂上頭之類也。兩回相遭曰裏。蓋表裏之謂乎。買妓曰揚。妓自出金銀曰身揚。妓入揚屋町曰道中。紅靴窄々。陸地生金蓮。可見可愛。遇客之間。又別遇客曰橫。妓自稱曰女﨟。不相交戰曰振。妓能從客所命曰廻。妓欺客曰懸。客欺妓曰手練。食客從大人者曰太鼓。又曰御咨。客零落喪身者。曰打鉦。國俗有池魚災則

打太鼓。火滅則打鉦。客初若火之始然。終零落如火之已滅。

律曆志

琴材用燒桐。譜有十三組。三味線材。用紫檀。黑檀。唐桑。花梨之類。有二上之調子。琴三味線雖並行。彈琴者阡陌之什一也。三味線者。雖五尺之禿。無不知之。禮樂之盛行。文物之全備。風不在成周之下矣。

投節曲　太古之音也。陽春白雪之哥。和者皆難。異國山吹之後。不得其人。雖起綿駒於今日。不能容易開口。惜哉。其統既泯矣。

三嘆曲　幽鬱無聊之音也。昔葛城囚於道順而所作也。

蹈鹽曲　抑揚太過。惜哉衰而傷矣。

起行兮曲　有東之白兮。最早老婆飲茶時之亂。三歲嬰兒。能知誦之。

童歌五闋　日本國大儒竹洞先生之所作也。是亦勸懲之一端也。其小序曰。春將晚矣。花飛紛々。獨坐小齋。對卷泰然。外廳有二幼孫之高

歌曰。游女兮游女。盍少自嗜兮。內無復闕（復闕者。謂男子所居也。見詩經衛風。）者。何樣兮。惡生兮惡生。坊樣兮坊樣。盍少自嗜兮內無敵鐘者耶。何樣兮。惡生兮惡生。傍有老學戲之曰。學生兮學生。盍少自嗜兮。內無明德者耶。何樣兮。惡生兮惡生。余隔壁聞之笑曰。里巷詞謠之鄙。亦有所可取之乎。斯言。嫌外省內。捨變守常。閑邪存誠者。果夫不取之乎。戲作童歌五闋。

其一。游客兮游客。豈其勞外索兮。盍少自嗜而貞兮。內無閑庭花竹者耶。何樣兮。吁嗟有生兮有生。

其二。巧言兮巧言。豈其求外援兮。盍少自嗜而誠兮。內無聖經賢傳者耶。何樣兮。吁嗟有生兮有生。

其三。貪夫兮貪夫。豈其願外需兮。盍少自嗜而清兮。內無精金美玉者耶。何樣兮。吁嗟有生兮有生。

其四。祿々兮祿々。豈其干外祿兮。盍少自嗜而精兮。內無書中千鍾者耶。何樣兮。吁嗟有生兮有生。

其五。俚俗兮俚俗。豈其從外慾兮。盍少自嗜而明兮。內無本分之性者耶。何樣兮。吁嗟有生兮有生。

司天坊月令曰。朔望十八日。正月者。自雞日至人日。十四日。十五日。廿日。二月有初午。三月上巳及十五日梅若麻呂之墜命之日也。四月更衣。有名而無實。猶著絮衣。五月端午。七月七夕。盆。八月朔。十五夜。此夜籠菓子。飾杯盤。且贈小原盃於客。盃中書艷詞者多矣。九月重陽。十三夜。十月亥子。廿日。十一月。十五日。十二月。煤掃。餻舂。曰之紋日。端午。七夕。八朔。雖炎熱之酷。不用細葛。著白衣。寒暑不同。氣候不齊之地也。

品川。千住。板橋。護國寺。新宿。是五等之諸侯。附庸之國也。按此是地理志之文錯亂在律暦志之中乎。姑舍焉以俟好古之人而已。

有高雄。薄雲。濃紫本紀。僅存題目而已。其餘本紀有數卷。不分名目。況於片言一句乎。嗚呼。可惜之甚也。有花鳥。玉川。唐島。若

紫。逢坂。音羽。江口。几帳。薫世家。存名目而已。幸得關井世家一卷。數十卷之中。得見此一卷。幸中之一大幸也。有明石。和國。三芳。西尾。梅枝。入江。明月等列傳。數十卷之間。存此題目而已。

關井世家第二十卷　此篇初叙項籍世家體勢。中暗憑張良傳文勢云。讀之者按史而可也。

關井名藤子。山口人也。容貌秀麗。神仙中之人也。初從其姉逢坂學三味線。不成去。學書。又不成去。書足以記姓名而已。頗按歌曲玉音婉轉。使聽者消魂斷腸。其爲人如實不實。如虛不虛。放蕩不羈。若不繫舟。以色論之則能得音羽若紫之骨髓。以體格風致論之。則不得濃紫之皮毛。音羽若紫以美施聲於世。濃紫以風致洒落馳名於天下。若夫色與風致全備。則天下之名妓。無出其右者耶。物不兩全。果天乎。關嘗爲禿時。此下疑是有脫文。從容至關所。關愕然欲逃之。客出一編書曰。讀此則爲全盛妓矣。後三年見我。町南海老峰下大人。即我矣。遂去無他言。不復見。視其書。乃白樂天長恨歌也。

古曰。妓唱長恨謌者。増其價。其明年秋。關爲妓。三年。果遇一客於海老峰。（即海老屋也）機縁倶熟。一見如故。客好酒。關亦然也。相遇則相對酌。相對歌。共醉共倒而止矣。客者忘歸。關亦忘我。後從玉川子。以七碗之茶碗酒。乘此清風登仙去。不知其終。（巴屋玉川嗜以茶碗飲酒。）大人公曰。關也乎非人間之種。呼作謫仙人而可也矣。蓬島雲遠。一擧登仙。初逢異客。抑是亦神人乎。將杜牧之後身乎。緑樹成陰。子未滿枝。嗚呼奇遇哉。果是天授也。述讃曰。

關乎麗質　睹者欲狂　眉如楊柳　睡則海棠　貴妃掩面
飛燕愧粧　美人々々　在天一方

史林殘花畢

點金窟

序

瓢巷之爲郭也忘八氏居焉使攝江城裡人而曰喫丈二雷槌乃其榮可知耳徒經其境不干其事者謂之空過人也巷之上下有肆有店亦樂其空過人西口溫麵東橋米餻貴買而賤賣焉欲其悅己者或沽鬚香油而竊倣實盛之顰欲卜其離合者專就投算師而高唱衢占之歌所謂芻蕘者往焉雉兎者往焉此之謂耶瓢金窟之辭善盡美盡矣何用又頭上安頭

烏有主人假托序

瓢金窟

此篇擬張文成遊仙窟叙女肆之艶態瓢取一郭之名金窟借諸妓之盻畔云

若夫艶色郭者在金城西南漂客所樂也傳云導不粹粉頭登于有頂天即此郭是也放蕩子斯遊焉斯樂焉嗟遊樂之不洹歟銀子之不多一去一來客不同一人三千色不新於是江口苍莨蕪菜根之田圃神崗月夕諫鼓鳥宿塒西行假宿無趾白女口舌無聞也而星移年更遂迁于之地其郭也四曲苍街通東西拵南北巷門界之而通一郭往來也總呼瓢箪町俗稱新町蓋一

瓢之浮水也汎々任去來風借之以喩使彼探苍子泅
々如水瓢故以瓢單名焉九軒揚屋七々茶邸連
櫳結甍含金吐玉奇麗壯観夸甘檮之昔笑東山之
古鱗次盡美矣又盡善也就中娼舘小夜格子前張
貯桃梨之美妓藏梅棠之艷娼爲一朶千金之計其
妓品各有等松位貴賞問稻葉山之昔於今則皈來
分言尙不忘咽霜雪而常盤色卓爾不後凋昔秦皇
封五位因有太夫号也梅位次之綻難波津之春媚筑
紫之海畔則得菅丞相鍾愛而後即呼天神也鹿戀
發兎餓野之圓夢成猿丸之奥山吟也傳娼不必篙土

之妻鴨母不必鎗奴之嫣多是昔全盛去而不復夾騙之困膽無人施苍橘之緣由無由求時有浮萍之歎而常誘水之思不亦深乎香兒蕾而未綻則追客而東西手艷帖而南北或給茶侍酒或使私宿通間夫多少事々與知於是乎荏苒交謀慣俛焉騙賺熟矣既而南枝花始開上頭則呼新郎君命雅名寄月更科君武藏野君祝花梅枝君櫻樹君或託美川則玉川君清流溶々逐茶蘗色或假佳山則松山君深契鬼々欲波不越擬名所琴浦君爪音切々以情扱客名國都々路君迂詐欲々泣田舍漢也若夫語其妖態則

皆絶世之尤物婥兮妍兮髮梳黑繻子乱嬈鬢露重指
髮際曲髩乃反鬟扁ゝ鈎□枝影搔頭之照也于雲
而見天日花鈿之美也求月而耀夜錦顏含蕣花朝
露黑黛宛似春霞帶遠山朱唇幾染紅葉皓齒誰家
瓠犀滴下醬露瀼ゝ沃情人恒歛千金笑而酸往來之
足巧笑倩兮美目盼兮腰不厭細帶不厭廣踏足徐ゝ
踐八字飛足輕ゝ散蘭薫淘掛也必歛衿蹴出也必
翕裳小裙之高也脛露而雪白風搏裹反乃緋交襠閃
ゝ仄見引龍田之方而醉色競芳野之最盛而死香千
狀萬態彌華如何難言是以椀久者仆松山色藤伊轉

夕霧姿山崎根引朽吾妻萬助紙袍揉總角艶道之粋
蝕身末熟之呆子陷耳游耳鳴呼、夫平康里浮華之習
叩全盛之春於花鳥感謂之高尚競借上之秋於月
雪興謂之位足偶入其佳境則戀山峨々聳情谷巡
々廻風姿市會貴賤間氣湊繋船風流揚屋粉飛花奢
茶坊紅跳酒池湛々酩酊強舌樂焉肉林蔚々食客鼓
唇遊焉唯酒無量左旋鐺子引音狆滝右轉盃酌武
藏野獻兮酬兮間兮支兮滅兮覆兮一席之歡樂不知
春秋魁蛤肴念入房鰒醋浸有獨念鯉魚軒登客之具
歟燒鳥賊延鼻毛之設歟花開牽頭支股露結儇子文

作連鼓三絃洋々盈耳可惜暫花香歌相夫戀也殘下
襲三星吟拍舟詩也五尺窈女手巾語香兒之昔羈
種乎花萩忍浮名之今初會挑濃紫之色熟馴探常盤
山之深綠有遊虛者有樂實者遊虛凡猶新助樂實濡
與色概一場之同樂也所謂青樓浮華之習有虛之實
有寔之虛張三主繫雲乎李四主縛風乎吁無遜吁不
好吁無禮皆一郭之艷語印通千杯白露万盃不前問
不後顧樂我唯我獨尊飲兮歌兮一寸先暗目迷浮
兮譟兮心蕩氣疎不堪徹肝不知夏不知冬呼來哉借
來哉聲頻期太鼓報罷郭中之漂客別袂於東門

歟將約朝續復寐夢歟天成安養土於此地毛蟲山蜂
如頡子何於戲旨哉樂只今日只今酒力醒茶煙歇時
什公生郭中事粹不粹思焉悟焉呵羅ゝゝ喝

瓢金窟畢

瓢箪町女郎屋之分

槌屋利三郎

- 大夫　大　刕　引舟大里　カブロ亀五郎
- 大角　引舟つまぎ　カブロ春三
- やりて　たつ
- 同　金子　引舟三浦　カブロ菊三
- 織琴　引舟かづま　カブロ哥の
- 仝　たまこと　引舟茂がわ　カブロ梅乃
- むらさきの　引舟大[illegible]　カブロ重三郎
- 仝　よし野　引舟しのぶ　カブロまきの
- 小むらさき　引舟戸崎　カブロ大三郎
- 仝　八重むらさき　引舟大さき　カブロはる野
- 店女郎　玉出　カブロ重三郎
- しづか　カブロ小さん
- 柏木　カブロいその
- ま津山　カブロ菊之丞
- 名山　カブロたみの
- さがミ　カブロ伊三郎
- 三ッ塩　カブロまさの
- 三國　カブロさく二郎
- たかだ　カブロ大二郎
- 和哥尾　カブロとのい
- わかしま　カブロ初三郎
- むめ川　カブロ大蔵
- よし川　カブロなし

京屋了喜

- なかば
- つねよ
- あげまき

堺屋甚右衛門　和氣女郎　井筒

大和屋平三郎　子供屋なり

伏見や壽軒　和氣女郎　とよさき　と見え

天王寺や辰之助　和氣女郎　しげやま

葉や善治郎　和氣女郎　さくら

近江屋平治郎　おなじく　八千代

いせや松治郎　店女郎　あかし　いろか　はつざくら

田中屋安兵衛　店女郎　吉田　カブロいさの　釆女　カブロ留之介　いくせ　カブロ春野

扇子や彌三郎	店女郎 江口 カブロはちや	見よしの カブロ源治	千代春 カブロたつさ
	はつきく カブロはきの	大夜 カブロ大吉	たきがわ カブロきよの
	道とせ カブロ亀之丞		
三ッ扇や半兵衛	店女郎之分 花ざき カブロ菊次郎		
	やりて かめ	津るざき カブロ小からし	高田 カブロ市彌
ゑ屋新兵衛	店女郎 岩崎 カブロ菊之丞	行ちよ カブロよし佐	
	やりて はつ	見さお カブロまさの	たき川 カブロつねさ
	まさご カブロはやし		
	豊川 カブロしげや	千代橋 カブロ菊三郎	せやま カブロ見どり
	とやま カブロまつの	長門 カブロいわ乃	
亀や喜三良	店女郎之分 うすぐも カブロきよ見		
	やりて むめ	つま浦 カブロ千與助	若扇 カブロ大吉
	松山 カブロしげ之丞		

住吉や意香
店女郎　小櫻　カブロ嵐
小田まき　カブロ元之丞

吉田や忠兵衛
店女郎　大原　カブロちよの
大野　カブロ龜五郎
うす雲　カブロ春雲

やりて　はつ
かしれ木　カブロきくさ

扇子や孫七
店女郎之分　はしど見　カブロ松三良

丸屋すえ
店女郎之分　はつね　カブロうのじ

やりて　むめ
大しう　カブロ小てう

淡路や庄兵衛
店女郎之分　見やこ　カブロミどり

むめがへ　カブロ才學
井筒　カブロ駒太郎
花まつ

車屋ひさ
店女郎之分　千代春　カブロ紋太郎

花づる カブロ駒三郎　花の井 カブロふじの　かほる カブロ長蔵　まさご カブロいさ乃

車屋九左衛門

店女郎之分　萬世 カブロ源治

千代さき カブロきよさ　たきがわ カブロ金蔵　花かき カブロとよの

住吉や吉兵衛

店女郎之分　玉柏 カブロ半治郎

やんて かめ

初紫 カブロ十蔵　からさき カブロせきや　玉のへ カブロ小源治

小式部 カブロ花の　半太夫 カブロミきの　初崎 カブロたきさ　八しほ カブロ大蔵　和國 カブロ絲之丞

佐渡嶋町拘欄(ヲチヤ)之分

泉屋九右衛門

和氣　ふじさわ カブロさきの　ふじゑ たかさと

同　喜左衛門

和氣　つしま せやま カブロとめの　松がへ カブロかる

大和屋藤兵衛
藝子　市二　鶴ざき

泉屋善左衛門
店女郎　はなよ（カブロ げんじ）　ちよ菊（カブロ 滕之丞）　万代

大和屋與兵衛
和氣　なるせ　さかき

井筒や半兵衛
和氣　乙鶴　吉野　な見え　井筒

大坂屋彦三郎
大夫　長哥（引舟 さなへ　カブロ いろは）　百菊（引舟 と澤　カブロ とこよ）

やりて　ふり
仝　高まど（引舟 初野　カブロ ふせや）　ひなじ（引舟 小西　カブロ いなの）

仝　綾羽（引舟 おしま　カブロ さかき）　和國（引舟 雲井　カブロ 小吉）　繪合（引舟 よつま　カブロ 侎乃）

仝　津かさ（引舟 いもせ　カブロ 小倉）　ふづまや（引舟 世州　カブロ 扇野）

店女郎之分

やりて　見よ
宮こ井（カブロ いさの）　松しま（カブロ だつや）　花おか（カブロ なぎさ）

茂　塩　カブロ梅乃　龜つる　カブロこぎの　花　里　カブロ才　三　ふなぎ　カブロ長　哉

はつはな　カブロ才　佐

茨木や重右衛門

大夫　姫　菊　引舟瀨山　カブロ菊次郎　花まき　引舟野澤　カブロ扇ノ丞

やりて　はつ

仝　七　浦　引舟いもせ　カブロ竹之丞　金　子　引舟つ川　カブロ色之丞

仝　大まき　引舟茂□　カブロ若松　龜　菊　引舟のしほ　カブロ小ずへ　上ヶまき　引舟たき川　カブロ扇　乃

若倉　引舟小わた　カブロさなへ　とも　引舟なるせ　カブロちよの　しやう太夫　引舟幾世　カブロ哥の　吉の　引舟眞砂　カブロ梅之介

店女郎　ことうらの　カブロ宇源治　はなさき　カブロまさき　うねめ　カブロ龜之丞

とのぎく　カブロそのふ　うこん　カブロまつや　おとめ　カブロ小そめ　梅がえ　カブロ見どり

びぜんや宗兵衛

大夫　高　尾　引舟かづま　カブロしげの丞　はんしやう　引舟しつま　カブロ千　鳥

やりて　むめ

店女郎之分　千代鶴　カブロまがき

あさ香　カブロとよの　玉おり　カブロ若　松　玉しま　カブロ千代の　おとづる　カブロ才治郎　まさご　カブロ大　吉

びぜんや治助
店女郎 はな紫 カブロ千鳥
難波津 カブロ小まつ
やりて はつ
花崎 カブロ見どり
玉かづら カブロちよの
亂ぎく カブロちどり
おとつる カブロ菊之丞
ひなつる カブロさよの
玉琴 カブロはやし
巻絹 カブロきよ乃

八幡ヤ長右衛門
店女郎 橋立 カブロ小君
くれなひ カブロきく乃
やりて かめ
道しは カブロ千鳥
す見のへ カブロまつ山
わかむらさき

泉や太郎右衛門
全店 長哥 カブロきよの
大里 カブロ見よしの
長門 カブロまさの
やりて よし
むめがへ カブロ市三
はつきぬ カブロげんじ
千代春

きいの國や平七
藝子 小もんど
こまち

清水屋庄吉
わけ かほる 津ねよ 花染
都哥 文

はりまや勘七
げい子 たきの
小しな

きいのくにや治兵衛	和氣乃女良	おぎ乃
京屋彦右衛門	同女郎	井筒 高尾
鯛屋八兵衛	わけ	小櫻 色香 ちよ菊 おぎ乃
丸屋太介	げいこ	ひで たかくら たかを
平野や他人	同	小西 哥仙 たつた
若松屋新十郎	和氣女郎	小りん 小蝶

新京橋町女郎之分

木や喜右衛門	店女郎	もしほ あづま

げい子　三五　小勝　あやめ
　　　部　高尾　瀬川

泉屋武兵衛　和氣　岩園　岩崎
　　　　　　　　玉ちよ　カブロきちや

ふじや吉郎兵衛　同女郎　見つしほ
　　　　　　　　　　　　あつま

吉野　つねよ　カブロとよの
たつた　カブロよしや　全きくや

錢や半兵衛　和氣女郎　うこん
　　　　　　　　　　　大まと

京屋庄右衛門　げい子　わかの　小松
　　　　　　　　　　　おとめ　まさご

久寶寺や吉兵衛　和氣女郎　おのへ　あさの
　　　　　　　　　　　　　とやま　禿むめ乃

古橋や作右衛門　同女郎　みやこ
　　　　　　　　　　　　そめのへ

木津や嘉兵衛　全女良　いくの
　　　　　　　　　　　かしれ木

扇子や吉右衛門
仝　八重菊　友菊
　　龜菊　菊のへ

きんご　玉菊　まつ乃
花菊　カブロよしや　まつ屋

廣嶋や庄兵衛
店女郎　八重菊　もんど
　　カブロまさ　仝さよ

和氣女郎　きんご　つしま
　　いづも

大和や久四郎
和氣　八千代　見よの　禿さよの
　　小菊　きゞの　仝ちよの

伏見や才治郎
仝女郎　長嶋　長橋　仝まつの
　　松嶋　カブロ小よし

ふしこや妙榮
仝　高尾　柏木　大和　仝小春
　　色香　清鶴　カブロ大吉　千草

天王寺やきち
和氣女郎　野蝶　大橋　まさ乃
　　都　カブロそよの

京や辰之介
同女郎　ちよ橋　豊川
　　大和　千代崎

豊嶋や六之助	全女郎　おのへ　いよ　せんよ
花梗や庄兵衛	おなじく　あやめ　まつえ　みやこ
田中屋三右衛門	をなしく　そめづる　と見かわ
河内屋長治郎	全女郎　かめきく　よし乃　しのぶ
京屋定吉	和氣女郎　いづ見
京屋彌兵衛	全女郎　大くに　やよ菊　あかし
よしだかもん	小ざくら　屋よづる　カブロきしの
中嶋や庄右衛門	同　見なと　もんど　きんご　カブロまつの

住吉や喜兵衛	全 大野 まつ山 す見まへ 山城 カブロむめの
扇子や利兵衛	全女郎 見はし 岩はし
菊屋忠兵衛	わけ之女郎 なか川 國山 もしほ カブロしげや
とんだや傳六	全女郎 梅がえ しが しげやま カブロ春乃
傳法や源七	おなし女郎 たかを まんよ みはし
松原や作立	全女郎 あやめ かよひ
河内屋長兵衛	全女良 若倉 友千代 三ツ塩 吉野 正ご カブロしげの
千切屋長四郎	見せ女郎 やしほ 和國 しづか

和氣之女郎 玉千代 しげ山 あづま

新堀町女郎之分

菱屋吉三郎
和氣女郎 かせん 浦ん 紫 カブロ岩乃

佐野や與市
全女郎 和洲 まつしま カブロ大藏

鹽屋伊兵衛
店女郎 小紫 カブロしげ之丞 染絹 カブロ小松
小倉 カブロ見よの 若倉 カブロ大吉 初紫 カブロ千草 高尾 カブロきよさ

廣嶋や伊左衛門
店女郎 大橋 カブロ松の 櫻戸 カブロたつさ 坂田 カブロ縫の介
下鶴 カブロちびき 九十九(ツクモ) カブロ若松 八ツはし カブロ千代の 井筒 カブロさよ乃

九軒揚屋之分

住吉屋　嘉兵衛　　　山口屋喜右衛門
住吉屋　長四郎　　　吉田屋木右衛門
京　屋　惣　七　　　住吉屋　孫三郎
住吉屋　彦三郎　　　吉田屋　金　六

新堀町揚屋之分

山田屋　吉兵衛　　　住吉屋　半次郎
山崎屋　名前不知

佐渡嶋町揚屋

扇子屋　伊兵衛　　　茨木屋　助五郎
高嶋屋佐右衛門　　　折　屋　善兵衛

茨木屋四郎三良
相摸屋　松之介
伽羅屋　虎之介
河内屋　吉兵衛

新揚屋之分

兵庫屋　仁兵衛
播磨屋　勘助
山城屋　伊之助
丹波屋　清兵衛
京屋　平三良
河内屋　惣兵衛
河内屋　宇之松
高津屋　五郎吉

佐渡嶋町茶屋之分

大黒屋　利兵衛
和泉屋　九兵衛
河内屋　庄介
播磨屋　久兵衛
万屋　藤介
平野屋　清兵衛
大坂屋　八兵衛
三原屋　善吉

新京橋町茶屋

古橋屋　左五良　　和泉屋　嘉兵衛
阿波屋　長次良　　中村屋　平兵衛
大黒屋　平　吉

新堀町茶屋之分

堺　屋重右衛門　　八木屋　八兵衛
多見屋理右衛門

瓢箪町茶屋之分

三木屋　嘉兵衛　　上村屋　平兵衛
富士屋　與兵衛　　松　屋　佐市良
福山屋　龜　杢　　貝塚屋　富之介

井筒屋 他吉
住吉屋久右衛門
平野屋 嘉介
鸚鵡屋 宇平次
八幡屋 彌兵衛
菊 屋理右衛門
芝子屋甚右衛門
堺 屋 市三良
大竹屋 彦三良
櫻 屋 富杢

河内屋 藤七
鍮 屋 甚兵衛
木本屋太右衛門
松原屋 久米松
平野屋吉左衛門
天王寺屋善兵衛
炭 屋 藤吉
備後屋 與八郎
大和屋 伴次良

此外小宿略之

たいこ鸚鵡宇平次
仝　正助
仝　そべこ
浄瑠璃語
竹本菊太夫
竹本三和太夫
竹本三木太夫
三味線　兵四郎
瓢簞町中之籠會所
西口籠會所
東口籠會所
九軒籠會所
佐渡嶋丁西籠
同東籠會所

法師
今川勾當
民嶋勾當
久米崎勾當
梅川勾當
人形居づかい
三升藤助
三味線　兵四良
籠數十　丁
籠數十二丁
同　十二丁
同　十　丁
同　十四丁
同　十　丁

東門子　喜兵衛　　西門子　儀兵衛

南門子　權兵衛

もん日

正月	朔日ゟ 二月朔日マテ
二月	十五日 ひがん七日とも 廿二日 はつむま
三月	三日 廿一日 四日
四月	朔日 十七日 八日
五月	五日 廿八日 六日
六月	朔日 七日 十日 十一日 十二日 十四日 十五日 十六日 十七日 廿日 廿一日 廿二日 廿四日 廿五日 廿七日 廿八日 廿九日 卅日
七月	七日 十九日 廿四日 十日 十六日
八月	朔日 十四日 十五日 十六日 ひがん七日とも
九月	九日 十日 十三日 十四日 十五日 十六日 廿日 廿一日 廿二日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 卅日
十月	十二日 十四日 廿日 十三日 十五日
十一月	八日 廿四日
十二月	朔日 十三日

此外いのこせつぶんかうしん

直段附

大夫	四十六匁	雑用	廿三匁
大天神	三十匁	同	十三匁
店天神	二十二匁	同	十一匁
小天神	十八匁	同	九匁
見せ女良	十六匁	同	八匁
分女良	五百文	同	二百文

はなあそび

大天神	四匁
店天神	三匁
小天神	二匁
店女良	一匁
わけ女良	四十銅

名寄

その昔奥州の方をあづまとよばせ給ひしもあがつま戀しとのことなりしとかや今あづまやといふ名にめで九重の元遠きひなぢに住なれしかたくなるゝ人も一ト夜の情に屋ハらぐハ和國の風にてむりならぬとぞかし大學などいふ名をきゝても三かうれい八もくとやらんハ思ひもかけず一もく二もくなどいへるとのおり／＼きこへぬるハいごのしやうぶニ而もある事やらんかたへにハ折琴玉琴などかきならし糸による長哥清げなる一トふし聲高まどよりもれきてよそのきゝをよろこばしむこれやげにさひばらをそうするかとうたがハれ盃をとりてハあげまきとのゝしるとり／＼なるたのしミ見るにゆかりぞもとめたき初紫や小紫思ひ染にし心の色は淺からぬ八重むらさきのなつかしさむらさき野に名もしるきひぢりの高次乃遊君ぢごくといへる名をきゝてまかりにしむかしのためしおもひやられ今もことなる名のミ多して初くら大まきとのも金吾などいふめるを見ればいとも艶なるが夏乃あつさもしのびたへ綾羽乃織物身にまとひえならぬたきしめのかほりおひ風のよふひもせでしどけなきさま見るに心もときめき春秋のながめもよそにハあらじ吉野山花に名高き花まきもさるものなれどかきねにさけるきゞく白菊姫菊や百ぎ

くのあかづもめづる秋は來て七〻浦〻も立こむる朝霧のひまよりもれて玉嶋やまた玉岡や玉乃井がふかきなさけもくミてしる淺からぬちぎりにつけても彼源氏の繪合とやらんむかしのことまでとり〴〵おもふも見那此里へゆきかふもの〻ならひならんかし

獻笑閣藏

百花詩林

百花評林叙

花可花非常花把多情喚閬苑芳心斯訴一味三弄而知花可花非常花既知之則百花雖閉春苑而自通其情而後探華之三昧盡焉百花評林甫就矣固聊記歲月以爲之叙云

丁卯春正月之吉

探花亭主人題

百花評林

此篇擧平康里之諸花以評其風度意氣古人以美女比花者多故以百花命題云

○太夫

松位者爲花木之長高砂尾上之若緑契千世万代之春貫四時全盛之松色還稻葉山之昔於今不變不易之風姿威而不武位而不嚴諸分意氣不凡下交謀擧動不野鄙式部情深而小町張強實花中之聖者也傳云万花榮春一紅同不同處在三冬時其斯之謂歟

年さむき松の心もあらわれて花さく道を見する雪かな

○椀久先生評して云。此君を物にたとへていわゞ。富士の山を筑山とし。近江の水海を泉水とし。松嶋象潟の風景を取よせて。庭をかざり。更科の月を不斷に詠むる風情ならん

○山崎先生が云。太夫なれバとて。あまり結構過たる見立ハ。かへつていやミ有もの也。たゞかるくはづミたる所に。風雅の味ひあれバ。それがしが存するハ。音羽瀧を液汁にして。吉野の櫻を一輪うかべたる吸物の風情なるべし

○探花子が云。わん久は其姿の大びらなる所を評し。山ざきハ其風情の。ゐならぬ所を見付たるなるべし

○天職

梅位者風流第一花自冬籠逐難波津之春濃染色深而匂于袖色于心染之傳之以生田之盛則一枝花髪飛千百媚業平暗尋香頼政閑窓而待之姿與情不歪劣太夫宿鶯囀歪盛之辰春雪添此花之清艶也古人爲百苍之兄誠花中之賢者也傳云梅無雪則不精神雪與梅併作十分春斯之謂歟

うつりつけに身にそしミぬる梅花ににほひハ袖に色ハ心に

○藤伊先生評して云。此君を物にたとへていふ時ハ。みよし野ゝ花盛に。龍田山の紅葉をこ

きまぜたるを。衣裳として。姨捨の月に打きせ。道中させて見たる心地なるべきか
〇探花子が云。此君ハ雪の夜のあけぼのを。膾にして。花の春を。盛分にしたる風情ならん

〇鹿戀

鹿戀者如櫻花乎綻三芳野之春如月彌生之盛八重九重之色深交常盤松友三春梅俊成攀白雲探姿定家凌霞尋色諸分意地不滅天職實花中之達者也傳云花色惱人暗香奪心共斯之謂歟

みよしのに入てそ見つる山櫻うき世の外の花の色をも

〇山樂評して云。今は別に鹿戀といふ君ハなし。今の小天神。見世天神などいふ君達ハ。むかしの鹿戀の部ならん。近き比までも大天神につゞきて。小天神と各段の位ありしが。いつの比よりか。大天神といふ位の君さへ見へわたらす。鹿戀といふ古き名斗残れり。又近年。見世太夫といふ君ありしが。是もいつしか名のみとゞまりて。今はなしと聞侍る。扨此君をたとへて見れバ。惣金の屏風に。極彩色にて。八景を繪がきし風情ならん。古びても。直打はあるものとぞんじます

○探花子が云。たとへバ山里の。柴の庵の寄れいに住なしたる所にて。琴の爪音けたかくほのめくに。心まよひて。其主をゆかしく思ひて。立さりがたき心地の君といハんか

○月

月君者似浅茅生菫菜浅紫色有艸縁由赤人誤此花色結一夜夢於春日野但恨色香乏耳

かすが野にすミれつミにとこし我そ野をなつかしミ一夜ねにけり

○春夢評して云。此君はうき藻をかきわけて。池水にうつる月を見るがごとし

○探花子が云。龍脳の過たる薫物のごとし。少ししつこき所ハ。其御位なれバ是非なし

○影

影君者如沢辺杜若濃紫色奪朱八橋之花盛業平駐馬小町寄此花而乞琴賓苔中之媚者也

八はしのむかしの跡のかきつはた同し心にこひわたるかな

○歌夕評して云。此君は花見に行たる時。思ひもよらぬ人の來りて。酒を飲つくされ。ぜひなく日の内に。花を見すてゝかへる心地の君也

○探花子が云。此君は安南の伽羅ともいはんか。すがりまへに。少しのこりおゝき所あり。是も其御位なればせんかたもなし

○汐

汐君者似井手棣棠一面金色粧玉川之春八重花葩含歯香蔚陰露薫下行水則蛙愛色香而吟三月之盛世人比之光次印通誠花中之清艶者也

もろこしの人に見せはや焼金のこかねの色にさける山ふき

○露情評して云。此君も今の小天神の格式にて。鹿戀の部なれども。むかしより月は一ッ。影は二ッに。三つ汐といひならはし。各段の位をさだめ來るゆへ。本文にも。月影汐の三品をあらはして。それ〳〵の評判をするとはいへども。前にもいふごとく。此君もむかしの鹿戀の位なるべし。扨此君はしだり柳に海棠の花をさかせ。梅が香をふくませたる風情な

らん
○探花子が云。無疵のさんごじゆの。心ほど賓のひろき心地かとぞんずる

○分

分君者垣根槿花也花脆無匂纔半日之榮不待暮師兼深怜此花之下紐固苔中之短者也

とくるかと見る程もなし朝かほの夕かけまたぬ花の下ひも

○吟之評して云。此君は。庭にふるあは雪の。むらぎへしたる風情なるべし

○探花子が云。此君をしやくしかけとやらん。けちとやらんいふは。あまり成悪口也。此君も花の中なれば。あしさまにいふべきやうはなし。伽羅の焼がらともいわんか。いにしへはいかなる人やらん。小町がゆかりやらしれぬはさて

○婐娼

引船者似村濃藤苔常纒常盤松紫緣由色契千壽之春因松與藤甚

睦古人嘗詠此意焉花中之順者也

むらさきのゆかりの色にふちの花かゝれる松もむつましきかな

○其風評して云。此君ハおし出してのつとめといふにあらず。太夫にハぜひ付もの也。たとへバ月に陰あり。花に香のあるがごとし。祝言の夜の嶋臺ともいふべき君ならん

○探花子が云。うつくしき下女に。櫻の折枝をかたげさせ。旦那の供につれたる風情也。外の目に。どふやらこのもしく見ゆる心地なり

○鴨母

遺手者似殘菊雖有餘波色而三冬霜枯姿荒嚴寒雪風色埋又不免鬼薊之譏也

色かハる秋もすへのゝしもかれにうつろひ残るしら菊の花

○千風評して云。此人ハ色のさめたる。むらさきぢりめんのどし。むかしの色ぞ忍バるゝ

○探花子が云。年久しくなる挽茶のごとし。色も香もどこへやら

○香兒

禿者其品頗多矣有松若綠有梅櫻莟開上頭而後定其位也今嘗言之則類倭瞿麥歟二葉藏金錢之色復及生長而八入錦誰染之侯三五之春云

まきしにハ同したねぞと見しか共ちくさに唉る大和なてしこ

○三鳥評して云。たとへば巣だちのうぐひすの。梅の花をおもしろがり。枝にたハむれあそぶ風情ならん。可愛らしきものなり

○探花子が云。香敷にのせて出す伽羅のごとし。焼ざる内がいのち〱むかしより玉子にたとへ。花のつぼミに見立るハ古けれバ。今あらためて評する事右のごし

○素人　一名呂州

白人者在南嶋及北濱之新地其花桐壺牡丹也不唯花之富貴一段

風流姿夸太夫之妖態一等之艶色驕天職之妖冶益清彌美四方之雑苍無敵之者古人賞之爲花王誠不虚矣傳云一枝白牡丹費四五日刻人不敢知之共斯之謂歟

さしよりちりはつるまで見しほとに花のもとにて廿日へにけり

○南風評して云。此君を物にたとへて見る時ハ。三井冨山の土用干を見る心地ならん。至極見事なる中に。ぼつとりめきてじミなる模様もまじわり。端手なる中に。くすミたる色もあり。品めきたる所に。地道なる氣色もあり。郭の君達と。地女をつき交にしたる也

○探花子が云。上々の白米のごとし。上つかたも召あげられ。地下人も食す。上下おしなべて賞翫するものゆへ。白米にたとへたり。なんといづれもそうでハ有まいか

○厨娘

中居者如八染紅葉平日之紅韍秋深染盡龍田姫風容一段洒兮無花不見開落但三秋之榮也耳

わかす見る心にわくる色ハなし枝の紅葉のこきもうすきも

○秋思評して云。日くれに菅笠かたむけて。足ばやに通る女中のごとし。色あひさだかならねども。心にくき風情といわんか

○探花子が云。虎屋の焼まんぢうのごとし。見かけからどふやらこのもしく。喰て見れバ。根が地女なれバ。各別のうまミありと。つまミ喰したる人の評判なり

○歌兒

藝子者百花之生茅也不競色不爭香故曰無色若夫有色者不在此限

いろ〳〵に薄くもこくもなき渡る花とつやとの中そゆかしき

○春夕評して云。雨あがりの虹のごとし。色ハ見へながら。其色がねにとられず。藝子になづむ人の心をくミ分て見れバ。大かたかくもあらんかとぞんじます

○探花子が云。金五を引がごとし。十二三までが花なり。十五を過れば。ばれ氣が見へるものと。ある人の見たて置れしなり

○坂町

坂町花者似芙蓉清則清雖未及牡丹之艶色而此花次之因古人爲小牡丹花中之潔者也

朝なけに渡る心もふかミ草うへしかひある花の色哉

○哥情評して云。此君ハ川むかひの花をながむる風情なり。わたし舟ハない事か

○探花子が云。郡内の羽織に。茶綸子の裏付たる心地す。少し斗くすミて見ゆ

○堀江

堀江花者男山女良苔也其花如蒸栗遍昭愛名而落馬有勿語人之口号頼風妻之縁由歟花中之嫋者也

をミなへし多かるのへにやとりせハあやなくあたの名をや立なん

○芝山評して云。此君ハ香の淺き。にほひ袋のごとし。しめやかならざるかほり。何ほどか殘多し

○探花子が云。窓さきの干物か。少しうつとしくぞんずる

○難波新地　高津新地

二處之花共似宮城野萩幾村盛有與色爲仲愛之都土産固花中之軟者也

人はこぬ草葉のとこのつゆの上にかたしくねたる萩か花つま

○花吟評して云。此君達は打つゞく五月雨の心地ならん。しつぼり過てさびしき風情あり

○探花子が云。平にも壺にも。味噌をつかひし。こつてり料理を喰がごとし

○街子

街子花者如谷陰躑躅樵者探花杣人逐色固花中之不艶者也

つま木にはもれしつゝしも山陰に心と花のたくほかけかな

○探花子が云。いたづら後家の。ひぢりめんの内衣したるがごとし。ほのめかして見せとふもあり。又人にしられんもいかゞと。つゝましく思ふ所もある風情ならんか

○私料子

蓮女者似浮萍漂池面吟行澤邊伴水而任去住所謂蓮葉者也

よるへなき身はうき草の根をたへてさそう水あらはいなんとぞ思ふ

○探花子評して云。夏の火燵といふべし。何とやらあつかましく見へます

○比丘尼

比丘尼者枯野之小花歟緑花鬘空散而不見下草之餘殘無春色者也

也

霜をきて色なきのへのむら／＼に見るゆや殘るお花なるらん

○探花子評して云。頭は出家にて姿は遊女。手足はむかでのごとくにて。なく聲ぬれに似たり

ける

○辻君

總嫁者暗夜落花也色消姿亡失春氣不足賞美者也落花浪藉者斯之謂乎

やミの夜のすかたあやなしちる花の色もなけれハ香までかくるゝ

○樂水評して云。此君ハうぐろもちのごとし。日の光をおがむ事ハなりませぬ

○及之が云。此君の中にも近年ハ。ひらひ子といふもの出來て。牛なしに自身二役せらるゝと也。夏の蚊といわんか。日ぐれからざハ〳〵出て。餅つきに行るゝハさて

○探花子が云。竹田の木戸口のごとし。十文づゝじや。どなたでもござれ〳〵

百花評林終

路婦人傳

色說序

竜も穴に住では土龍の店をかり鯉も淺ゝに出てハ目高と鼻をひとしうす此書ヤ也むかし〳〵入江の婦人せきが顯す處にして色道玄々〳〵の至極を述たり既に紙屑籠に投じて老鼠のしとねにならんとせしを例の道人傳をあらはし文を編して漸く二三が六章を得たり至れる哉盡せるかな葭簀がこひの切り賣して寂光淨土の揚屋を見くだし釣り髭したる奴子を相手に眞實自然の情を悟る文ハ辻番のいやしきより出て理ハ火の見櫓の高きよりたかし河岸端のいぶせきに居て二階座鋪の尊きに通ず何れ一流正統の粹人なり是ハ高慢の鼻かけ地藏の化身たる事うたがひなからん

抑至盛ハ大夫の德にして廓中の本尊なれど春霄一刻のたのしミ難波の事のよきも悪舗も吸蔓の花のから名にしたがふなるべし勢ひつきてハ蛸も足をすぼめて蛇となり鱣が發心して山の芋となるかもしらずされバ黄金の肌とハいふならん思ふに身ハ中流の船と等しく常に帆あしをかけつはづしつ客の機嫌をとり梶面梶おせども〳〵或は地色の風にそらされまたハ密夫の波にしづんで彼岸に漕付る事ハ桃源のおもひに等しかるへし跖は實に老君子の肺肝にいり江口の君の流れをくんで眞實不二の妙處に至れり婕妤も口をつぐミ式部もゆびをくハえるの才にあらずんハ誰か此理を發明し何ぞ此章のこゝろはせを知ん酔て

考へ醒ておもひよく〳〵此書を熟讀して大門にいたらん人は此道の聖域にいるべし嗚呼かの闕文見まほしきことを

寛延ふたつの秋

風鈴丈人漫書

跖婦人傳序

水の清灑なる塞でながれざる時は孑孑を生じ五穀の生をやしなふ饐て食する時は脾胃を損ずすでにあんばいをうしなつて咎を羹にぬり付る思ふに無躰ならずや傾城流をうしなつて山猫を生じ地色味を損じて御赤飯組となる凡物ミ長ずれハ必ず方圖なしいにしへの色たる者二ッ今の色たるもの數十に及べり僧形の洒者あり賣物の地女ありいゝつべし下流に居て上に反する徒なりと予か友泥郎子や爲人瓢輕にして普く此道に通習せり上は揚屋の雪に映じ下ハ笘船の螢にてらし悱ミ憤ミたる事すでに年あり且せき婦が六章を一覧せしより忽龍の雲に乗じ大晦日に金

を拾し如く臂をはり鼻を微駈つかせて一旦豁然として色
道の團底をうちぬきたり終に跖婦を推し貴んで風情を江
口の下にあらずとし是が爲に傳をあらはし來つて予に見
せしむ予是を熟覧していはく天まさに跖婦を以て拍子木
とせんとす我もまた子が爲に序せんか泥子完爾として笑
て曰く善哉〻〻此書の全意これをもつて見つべき而已

寛延二年

孟冬既望

杯物郎書

跖婦人像

四十振袖好
相見惹容頰
交情總若醴
常笑獨醒人

跖婦人傳

夫造物者の功用たるや。千態万象にして。其變化も又きはまりなし。南枝北枝の梅の開落。既にことなるを見るにも。非情すら猶かくのごとし。況んや人倫においてをや。好惡貧富ハ。則天の命する處にして。人力の施す處にあらす。下惠盜跖が兄弟の如くなるを以てかんが見るべし。是等ハすんど上代の事にして。しかも見ぬ唐人の寐言なれバ。虚かもしらず。いつの比にか色と欲との堺町に。仕切り場を勤めし男ありけり。坪皿のそこはかとなき。仕凝博奕の。どうも動かぬ身となりて。小見せ物のいゝ立と。變じて見ても。川太郎の尻がつまらず。七化のばけしまひが。終に二人の娘を賣喰にして。果ハ虎落の角めだちて。忽闇雲にうち乘て。何くの空へか逐電しけり。誠に鐵砲の玉と。人の行衞は。しれぬものにて。妹むすめハ。新町の三浦へ買れて。高尾に仕はれ。靑柳といへる格子女郎と成て。嫋なる名を。揚屋町にかゝやかせり。生賢利口にして坐銳なく。位あつて。やはらかで。古手買にミせても。孔雀絞りの。立ものとはしられたり。夫に引替て。姉娘は。すこし。食粒の過し生れにて。おなじ流れのう

きふしながら。ひよんな處へ。入江町の夜鷹と成て。川竹にハあらず。うき材木のかげに。功勞へて。三十振袖の。洒者となりぬ。青柳は我身の。全盛につれて。あねの事をおもひ出せば。おなじ勤のういが中にも。我は錦繡のあたゝかなるにくるまり。名木のけふりにまミれて。金銀ハいやしき物と。手にさへふれず。萬づ雲上にのミ。くらすを思へば。大名の御姬樣も。我身の果報も。只毛の三筋。たらぬばかりなるべし。夫に引かへ。姉ゐのくるしミ。寒風に素布子きて。犬の產所を見る樣な。菰張に床入して。露霜をしのぎ。漸く。ぶつかけに腹をふさげバ。はや夜鷹蕎麥の。浮名を立られ。嘸やくるしかるべし。其上夜鷹に。あね有と。沙汰ありてハ。公界する身の。恥なれバ。兎角此里へ引取りせめてハ河岸か伏見町の勤めでも。今の苦しミ外聞にハ。遙に勝るべしと。前〳〵より。度〳〵いへども。本ゟ氣強き。生れつきなれバ。我がいふ分でハ。中〳〵聞入給ふまじ。とかく。姉女郎衆をたのミて。とくと合点の。有樣にいふてもらひ。すかしたり。恥しめたり。どふがなして。得心させましたく。此あら增を。高尾に咄せば。高尾も聞より。成程。尤なるねがひなり。手前の口から。いなものなれど。おれも高尾といふて。其名高く。此道の惣大夫となり。幼少より。世界の。粹の中に。もまれて。諸譯手管の仕かけ迄。一ッとして。くらからず。自恣な。客衆口利の末社。無理な

口説に出合ても。ついぞ一度のふ覺をとらず。おぬしの前でハ遠慮なれども。陸場所へも。往と〻かぬ。姉御の口先キ。どのやうにもいひくるめて。其日から此里へ。勤たいといはんす様にして。見せませふ。もし此事をいひふせすバ。おれも高尾じや。二度此さとへ。かへらぬ法もあれと。花車な口から廣言はなつて。いつぞの序をまちゐたり。折節幸と。深川の開帳まいりに事よせて。妹女郎の。山路をも引つれ。三人連にて會所より。樓船にのりて。はやくては。目だつもいやなり。晝の間は二間茶屋にあそび。かへりがけに尋ぬべしと。なにがそれ者の寄合。此三人が口を揃へて言廻さば。いかなる天魔。鬼神なりとも。黒雲より。猪牙にのらせ。鐵杖をも。質屋へやらすべし。まして。夜多妹の。五人や。三人。わが粋方の。いたつた咄しをしてきかさバ。いか程我强き姉御なりとも。忽ち。賤き心をひるがへし。夜鷹の。苦患をすくふべしと。自慢たら〳〵。夕しほの。暮かゝる時分洲崎より。船をかへし。材木がしを見わたせは。今ぞ夜見せの。出じほなりけりと。三人ハ船より上り。いづれもかぶろを。左右に引連。やり手若ひものに。かしづかれ。八文字の道中。ゆたかにねり出せば。光りかゞやく。生無の瑇瑁は。いまだ月あらざるに。なんのかげぞ。蹴出しにひらめく緋縮緬は。時ならざるに。なんの紅葉ぞと。目をおどろかせり。青柳は先へかけぬけ。あねを呼出して。立なが

らつもる事ども。そこ〳〵に咄しぬ。扨姉女郎衆。今日開帳参りの序に。御前に御目にかゝりたいとて。跡からこゝへ御ざんすが。ちよとあふて。私が御世話爾なる。禮をもいふて。下んせといふにぞ。あねははや。合点して。慥に是れ妹にたのまれて。吉原へ藏がへのすゝめにきたので有べしと。ひとりのみ込み。成程御目にかゝらふ程に。つれましてきやといへば。青柳は悦で。二人の姉女郎を案内すれば。あねのせきはすこしもされがず通〳〵と丸太にこしをかけながら。件の蘭席を左りにかゝへ。喰殘りのけんどん茶椀を右の手にかいこんで。すこしもうてたる色目なく。高尾山路を目八分に見くだし。是れ〳〵御二人の衆よふこそ御ざんした。青柳が何やらかやら。いかいおせ話になるげに御ざんす。随分かあいがつてやつてくだんせと鰾なき言葉に。高尾は仕すましたりと會釋して。アイさよふで御ざんす。それ〳〵は青柳どのが。いたい氣にしてくだんすれハ眞實信の兄弟とおもひまして。何のかのと勤のうさをもかたり合まして。きついちからに成ます夫に付ても。ぬしゐの事を。青柳が不斷いはれますれどふぞして。おなじ廓につとめたい。互の樂しみにもなる事じやと。私等までがおもひます。申すのもどふやらしけれど。廓といへば。色里のつかさなり。きこえもよく。人〻の信保しだいで。座しき持にも。たて物にも。ついたらるゝが勤の手柄。今の御勤の艱難は。嘸〳〵

苦勞でも御ざんせう。其上御前の。御器量なら。假大夫にならんしても恥かしからず。先第一にッひとつてなく。はりが強くて功者もあり。粋な容ほどうけ取座配。いく度床入さんしても。大義にもおもはんせねば。床第一の。屋形衆にもしごくよく。功者が有て床がよければ。本に鬼に鉄棒。はやらしやんするは。たしかにわたしがうけ合ます。おり〳〵御こゝろのはなへぬけるのも。兵四郎風のめりやすには。どふもいはれますまいし。是ほどの御身をもつて。今の勤をさゝんすのハ。玉を泥にすてるとやら。さりとてハ惜ひ事。御前を女郎に仕て見たいと。そろ〳〵と勸かくれば。せきは聞より色を變じ。いかりの鼻聲耳にひゞきて。コレ高尾どの。皆まできくに及びませぬ。それは。粋を虚氣にするといふ。言まはし。咄のやうな事ながら。毎夜壹貫五六百は。端目なしに。賣こなす此せきでごんすぞへ。其様なしらん〳〵しい。直胷意くるめで。今時の人が。かゝるものでハ御ざんせぬ。白化の今の世の中に。中〳〵二人の衆のやうな。青ひ事でハいけませぬ。夫も道理わづか。三町四方たらずの廓のうちで容衆の五人や拾人や。取りさばかんす心で。わたしらをくるめさんすハ。ほんに天水桶の孑孑とやらん。大門の外の事しらぬ。目狹き衆の口からは。慮外で御ざんせう。わたしらが勤といふは。こなたがたの二月分程の客衆は。夜食前に勤ます。そふして。色も情も粋も家暮もしりもさんせぬ心

で。いやしいやうにおもはんせうが。湯殿雪隱とりあつめて。百疊たらずの揚屋のざしきで。土藏の間から。狹ひ空を見て。くらさんすつもりでは。そふ心得さんすも尤なり。幸の事なれば。眞實の色道。わたしらが遊びを。はなしてきかせませふ。文盲なこなた衆が。功學の爲にもさんすがよい。まづこなさんがたのつとめといふは。波にうかべる水鳥同前。よそ目から打見には。悠〱と。情も色も。あるやうに見ゆるけれども。下から見れば。内證は釣合だらけで。其水搔のせはしなさ。八寒八熱の苦しミ。盛衰は。猫の眼とひとしく。丸くなり長くなり。頼ミ切たる客衆の氣がそれ。當にしておく無心がはづれて。いきつしんづの苦しミ。其樣に衣部〱と。着かざつていさんしても。明日は質屋の藏をふさぎ。わが着物に損料出して。かりぎのかなしさ。麁相な客衆の酒盛には。今や上は着へあびせらるゝかと。火の粉を防ぐ取廻し。寢相の惡ひ客衆が枕失せは。蒲團のよごれに夜の目もねられず。赤飯臭き禿を見れば。胸の動氣にひつしと應へ。元日より大晦日まで。月に華に二百日程は馬の籠ぬけする樣に。伸ッ屈んづ。其苦しさ。何の際にか。情をしり。色といふ道をわきまへさんせう。指爪起情の苦痛。茶屋揚屋への付ヶ屆ヶ。連衆末社への心づかひ。そふじやとて。着ずにもゐられず。やらすには猶濟されぬ身の上にて。然も我物とては。錢が拾文楊枝が一本と さらになし。皆客衆の

懐を當にする境界。これがなんと正直で。情をたてゝくらさるべき。心ハ山賣同前に。どふかなして括り付ヶねば。たちまち借金の地ごくに落て。赤恥をかきのれんの住居となる。呵責の苦しミ。大夫の格子のと、位があがつて全盛する程。物入が多くなり。もの入もおほひに随て。欲が出來れば。追詰メハ手工だへ落て。かうすれバ客衆がのぼる。どふいゝかけれハ退引させぬと。明ても暮ても、仕かけを工夫し果ハ十露盤ぜんさくに成て。色も情もとり失ひ。粋でも杭でもなく成しハ。當時御まへがたの身の上なり。中／＼わたしらが仲ヶ間には。その様なひれつなる。さもしき欲氣はさら／＼なし。色を賣情を見がきて。意氣地を以て第一とす。そも／＼夜鷹の遊びといふは。誠に色道の眞をつねとし。欲をはなれ賤しき事なし。天をつり夜着とし。地を三ッ蒲團とす。月影を以て燭臺とすれば。あかりの届かぬ所もなく。しんをきる世話もなし。川風に床をあふがせ。夕立に打水させ。八百八町の河岸通り。ミな私しらが。次の間とおもつてゐれバ。百萬人の一座でも。ついぞつかへた事がごんせぬ。物日なく。身揚りなく天地破れねバ。寝道具疊の表がへに氣づかひなく。引込禿も。もたざれハ。客衆をたのむ物入なし床でくるめる間がなけれバ。客衆をたらす僞をしらす。飢へし奴子が心に任せ。ふるといふわがまゝなし。横にゆくべき卑劣もなく。心中の間夫狂ひのといふやうな。鼻毛の

長ひ客衆がなければ。此挨拶に氣ばねも折ず。廿四文で廿四文が情をかくれ〻。口説といふ様な。家暮らしい沙汰もなし。いやなれ〻こず。すけばくる。客にうそなく。此方に手工多なし。只眞實信の心にして。少しもかざる僞なし。僞りなきより誠なるはなく。かざらぬより正直なるれなし此正直なる心を以て。男と女のまじはりすれば。こ〻が色道の根元にして。ちと洒落才ことながら。陰陽自然の色道なり。此色道を以てたのしむ時は。客衆に勘當心中の難義なく。女郎に自前借金の辛勞なし。もへ出ると詠ぜし。妓王が操し心とむなとおもひやりし。江口の風情も。おのづからわきまふべし。女郎に苦しミなく。客にたのしミありわが色道の玄〻微妙なり。おまへがたのほめそやさんす粹達〻。椀久さまをはじめ。藤伊さま紀久さまを先として。いづれも盡して見さんしたれど。是ぞ此衆の流義といふしるしもなく。添通した女郎もなし。只時の張合にて。金つかはんしたばかり。いはゞ是等も青ひから。あたら身上を皆にさんした。是といふもミな女郎によくあるゆへ。金銀でせり上。客衆を流浪させましたり。辻立や狂氣にならんすもこなさまがたのやうな衆が。立物がほして。全盛するゆへ。惜哉。名叟。素女 檜垣。といへる君たちの。流れを汲べき女郎もなく。色道の風情はすたり果て。手近くいへば。欲と虚との二ッでかためたこなた衆と。かざらず。むさぼらぬ此方の意氣かたとは。大

鵬と。土龍ほどのちがひなり。またも片腹いたき事にハ。色も情も胡椒丸のミの女郎衆。わが身のねむたい腹たちか。扨は前方なる客衆をふり付て。是を一廉張と心得。ちつと時花出すやいなや。無情によきかとおもひ。饐日なもの前には。俄の床がけ。このいやしさ。さもしさ。ぶ洒な女郎の勤を捨て高尾さまも夜鷹がましなり。山路合も。妹も諸ともに。わたしが弟子にならんせと。一言もなくいゝふせられ。二人の女郎は。天窓も上らず。膽をとられて暮正月を頼ミし客の。俄に國へたつたるおもひ。取はづしたるあしたのごとく。忙然としてたつもたゝれず。うろ／＼するを。よふ／＼やり手に助られて。舩へ逃込ミ。初て。黄なる息をつきぬ

泥郎が曰。我はじめ此章を得て。其言を信ず。後三浦の。遣手が咄しを聞て。其行を見る。爰におゐて。おもへらく。象も。吾髪筋を以て。繋ぐ事をしる。鯰をも。吾匏を以て。押へる事を得べし。蝦蟆に至ては。是を釣べき餌をしらず。彼は是。婦中の蝦蟆也。

老子曰。虎も其爪を措處なし。生姜酢でもいけずとは。誠に。せき婦がいゝなる哉

里雀曰大坂夕霧ハ座頭に一度の情あり江戸元祖奥州ハ中町にて一文錢をいたゞきたり是等は諸客の美稱する處なれともミな一に意氣地にして大道をいふにたらず一代男の與之助が女護の嶋

渡り椀久が小判の豆まきもみな浮氣の沙汰也粋過れは虚なり虚なけれはおぼれやすし青樓あり

てよりせき婦か如きれいまだあらず

色說序

余つねに。彼せき女の高風を悅ぶ。故に。其事蹟をたづねまほしく。一日入江甼に到て。問もとむるに。名を隱し跡をうづんで。さらに知れる人なし是に依而。是を見れば。江口は誠に。普賢菩薩の化現なり。跖もまた察するに。鼻欠地藏の權化なるべし。入江町を去時に臨で。名染の辻番が。一夜留メて。二八の上には無理處望せしより。止事を得ず。終に十六章の色言を著ハして去ぬ。惜哉十章は雨漏にくされしを。後の辻番がために。蚊帳の釣手によりこまれて。失ぬ。殘る六章は。番屋の壁中より出たり。故に闕文ありといへとも。誠に玄〻の方言

萬世の色則と言つべし。時に九月十三夜。梅溝の貧客泥郎。於鐘撞堂書焉

色説　　泥郎章句

粋の章第一

粋の粋とすべき物ハ。つねの粋にあらず。實の實とすべき物ハ。常の實にあらず。諸客皆。粋の粋たる事をしるハ。不粋なり。故に大粋ハ粋ならず。是を以て粋なり。不粋ハ能粋なり。爰を以て粋ならず。粋人絶ざれハ。色道さかんならず。血文をやめ。起請を捨て。女郎に實あり

色の章第二

色道すたれて。物日あり。間夫出來て。仇ぼれあり。大盡ふもてにして。くるめ有。内證昏亂して。心中あり。故に貧ハ客の常。心中は女郎のおとろへなり

手巧多の章第三

數百の手くだれ。床の一悦にしかず。此一悦に至て。粋もなく家暮もなし。共無によつて。無量の極意あり。

第四章

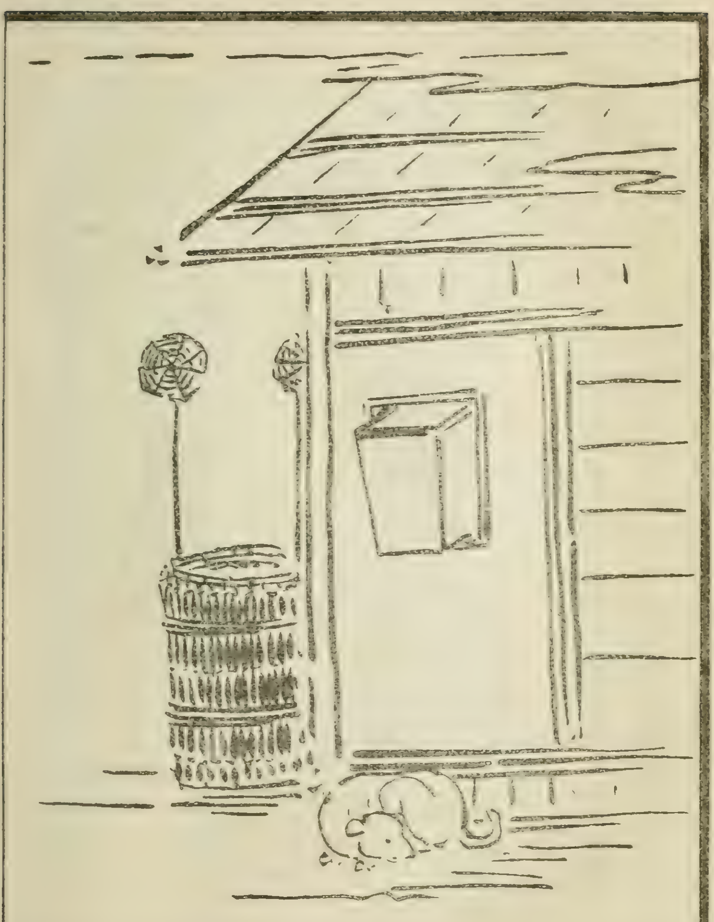
第五章

第六章

各闕たり

遊の章第七

能あそぶ客は。もてるにこゝろなし。能楽しむ客は。面白きに心なし。もてるに心なく。おもしろきに心なき時ハ。何處にあそぶとしてか。もてざらん。何れの女に逢としてか面白からざらん



第八章

第九章

第十章

各闕たり

大盡の章第十一

粋をやめ知恵をすつれバ。遊の利百倍なり。ぜいを絶もてを離れて。女郎眞實にかへり。間夫をせかす。口説をせねは。女郎に僞なし。大盡いたりを失つて。粋に落。粋を失て。手くだにおち。手巧多を失て。指爪あり。指爪は。女郎の難義にして大盡無手金の初めなり

間夫の章第十二

女郎身の上の章第十三

意氣張の章第十四

右三章條目有て闕文

太鼓の章第十五

古のよく太鼓をもつ物は。大盡を利口にせんことを欲せず。愚にせむとす。遊の續きがたきれ。粋になるを以て也。粋になりてあそぶれ。遊の下品にして。樂しミのつきかゝりたるなり。旦那おろかに末社たれけにして。遊樂長久なり

第十六章闕たり

評

泥子曰。椀久物狂と成て曰。やぶれゞ。ぐわちもなかりける。葛城むけんの鐘をつくとき。やぼならこうした。うきめはせまじ。此言やうやく大道をしるに似たり。窮して正にかへる惜哉。屁放て。尻をすぼめたること又曰。四代目の高華曰。粋じや〳〵といへど。来ぬが粋なりといへり。此言大道に似たる。異端なり。これ斎無にして。せき婦人が。不昧因果にそむけり

浮世の是非。彼我へ萬事塞翁が馬なりと。古風の洒落者の。諺にして。誠に万古不易の金言なり。凡木の曲れるものは。木挽町に鋸の難をのがれ鷄の聲よき物へ。瀬戸物町に鍋の害をまぬかれぬ。よつておもへへ善は不善にして。ふ善へ善とやいはん。とかく犬猿の寄合。蠻氏觸氏の角めだちたる有さま社まことに水懸論なるべし。鼻凹の見にくきをわらへば。闇の夜に用心よしと悦び。聾のふ自由なるをおかしめば。雷の聞へぬ徳ありといゝしは。ある肝煎姥の骨稽なり。彼が鼻欠ケにならん事かたく。是がつんぼにならん事かたかるべし。只虚靈にして谷心中に座せんこそ。我儘の妙所ならん。爰に一日石原社にあそんで。一竹管を得たり。これ。せき婦人が言の葉にして。鳥の跡たらず。傳へて六章あり惜哉。その全書見る事不レ能。今猶のこれる所を察觀するに。至玄神妙。皇々としてその奥を得ず。默々然として。翫味し。しばらくして悱々焉たり。やゝあつて夭々乎たり。反復するに。嬉々挹々として。仰で嘆じ。俯しておもふ。眞に。其辭簡にして。無レ聲無レ臭の妙所にいたり。卷ときへ。懐にかくすべく。のぶる時

ハ四海にあふれつべし。其化のおよぶ所。野夫飛で粹にいたり。眞御侍たちまち戀の淵にはまる。彌高く彌堅し。惘として座をわすれ己をわする。眞に後世のたま物也是が爲に事を好むの雅英子。せき婦が事蹟をつらねて。一卷として。其遺章の後にしるせる處。綱領細目南華老子の腸にわけ入。猶其上に出たり。心術を論する。きもなますのふとひ獻立に。伯夷叔齊が。蕨とつて餓死だ偏屈より。比干。子胥が無分別尾生が。ばか律義。いづれも犬死の取沙汰。人間わづか。百年たらぬ命。そのうちにも死だの生たの。頭痛疝氣の事まで。十露盤にあてゝ見れハ。口明イてわらふ日は。漸〱一月に四五日なり。夫に八百萬年もいきる氣に成て。名利につかわるゝハ。いかいたわけ大廈千間なるも。夜臥ハ八尺にすぎずと。一口にいゝこめたる。神色容貌。歷然とえるやうなる文勢。勇辨遺文。卓然として句〻金玉の聲あり。これがしりえにつたなき辭をそえん事。印殿に煉珊瑚樹の。とりあへせにひとしく。見る人のそしりわらひ草となるかも。きかぬが極樂と。そら嘯いて。是も志意をよろこばしめ。命をやしなうのそちな

りと。随意の荷擔人して放言なをやまず。王濟杜預が類にはあらで。これ又筆癖のしかするところなり

寛延己巳歳長月下院

葛飾守株窓

はじらひもなく校合し。序を作れる事。永き日のいさほしとて。棚おろしと共に筆をおさめぬ。直に題してこんたん惣勘定と名付侍るも。陽氣に向ひ花〳〵しき金をふらせ給ふとも。跡さきのしめくゝり勘定をあそべせといふ。教訓の一ッぞかしと云爾

寶暦四の早春　石嶋政植題

魂膽惣勘定目錄

○大意
○初會心得の事
○遊里言葉遣ひの事
○金銀多く遣ハすして能もてる事
○遊里に三のいましめある事
○女郎の好不好を知る傳受
○座敷に忌み嫌らひある事
○女郎の實のある無しを居なから知る法の叓
○女郎買極意の事
○後朝の客に四ッの見様ある事

○附錄華里通商考
并傾國の圖

魂膽惣勘定卷之上

○大　意

火炬ももたぬ寒き日に。紙子一重着て。過去りし昔を思ひ出せば。無益の金を捨し事よと無明のねむり初て覺んとする枕にすがりて。若者數百人色里諸分の指南をせよとせめられ。しかつべらしく上座になをり。夫妓樓に登らんと欲するれ。大てい軍の出立に異ならす先大門を大手の城戸と心得中の丁の書はり毛せん金屏のらんぐいさか茂木に場うてせす。小袖羽おり提物懷中物の六具をかため。相方の女郎を。敵の大將と定め。禿若ィ者幇頭末社の從軍。いか程あるとても。かれらに後ろを見せすして。味方の軍師光次に。桐のとうの旗眞ッ先にさし上させ。すは一戰に及びなバ。手合の盃。さしちがふる程こそあれ。かけ引しらせの三味胡弓。行儀乱さす入みだれ。或は音曲地口見立けん酒等に座敷をくつろげ。詰の勝負れ床の内敵の手管にのらすして。内兜を見すかされす。五計七計秘術を盡し。攻詰る物ならばいか程はげしき。女郎

なりとも。やわか從へざるべきや。但しかくいへはとて。はやりをにすゝみ給ふべからず。味方の兵金何百万兩ありとても。大將の下知つたなければ。却て敵の助となり不慮の敗軍ある物なり。猶謀計のかけ引ハ。千變万化かぎりハなけれ共。先其大概を記す事左のごとし

○初會心得の事

己れ心を寄せあはんと思ふ女郎あらば。先初會に心をつくべし。其女郎の行跡。孫子傳を以能ゝ見定め。大門の四ッより前にあがるべし。それより後にあがりてハ。余りよろしからぬもの也。いかゞとなれバ。暮の六ッより見せに居て。地廻りの口端にかゝり。つらき瀬をこゑもはやひけ四ッもちかければ。とくとやすまんなどゝ思ふ所へ。初會の客あがる時は。女郎の心よろこばず。其ゆへハ今迄見せにさらされ。見せもひけなバ。ほうばい女郎の内。なしみの客のある座敷にて。心安く呑喰せんと思ふ。其心をやぶれバ。大かた此客もいづかたになじみあらんに。今ごろ是へ來れるハ。さだめてもらわるゝか。口舌などして俄にかけ出したる物ならんとかく今宵のやどりならんと思ふゆへ先したしみつかすそれによりて客も心おもしろからず。むしやうに酒などのみ。女郎の心にあたる事ばかりいゝちらすゆへ。女郎いよ〳〵それと

心得て。床おさまりてもさつそくハ。來らざるものなり。如此にてふらるゝハ。此方よりふらるゝ事をこしらへて。ふらるゝといふ物なり。こゝろをつくべき要なり。

すべて女郎は。十に七八は。武家ハあまりこのまぬものなりかるがゆへに屋形のおもわく第一の心得なり。武家のならひ。鬼〻蕩〻として道をまもり。事をつまびらかにするを本定とす。吉原にかぎらす岡場所にても。遊女の類。如此ことハみな好まざることなり。慮外とがめ。言葉づかひ。衣類懐中物等の事ハ・兩巴翠月集に見へたり仍て是を畧す。

女郎を能逢んと思はゞ。先客の客躰をとゝのふべし是大學の脩身齊家治國平天下の理なり。其客躰を整と云ふは。孫子か所謂五ッの藝。四ッのひやうひやくなり。扨此藝利口ありとも。我こそ是を知りたりがほ決して無用なり。是を用るに時あり。三味線こきう尺八の類。禿などに云付て取寄せ給ふ事。是又用捨あるべし只願くハ。長哥はやり哥又は出來口などにて。座をくつろげ給ふべし一座などにて藝をさきだて給ふハ。たるこめきていやしと。翠月集に書たるも理りそかし。初會にてハ獨は猶さら二三人四五人の一座にても。とかく女郎と客と。兩側になる物なり。此そなへをくづし入みだれて組打のはれ軍をせんと心得給ふべし組打とて座敷なかばに。懐附押伏などするにハあらず。互ひの備へ齊〻としてにらみくらをするやうなるハ。

よろしからさる程に。只敵味方。うつゝ・うたれつ。つめつたり・わらふたりするやうに心得べし。初會の秘事と云は。とかく女郎を遊ハすると思ふがよきなり・是易に曰苦に損し後にますの理なり。

○遊里言葉遣ひの事

郷に入ては郷にしたがふといへる事あり。孔子も大廟に入つてこと〳〵に問ふ。是禮なりとの給へり。先其所の言葉作法をしり給ふべし。其里に入て其ことばをしらざれバ。万の理通ぜずして。あたかも馬鹿のごとく・初會に馬鹿と内かぶとを見すかさるゝ時は。其女郎に逢ふ内ハ・一代その疵いへがたし是本をつとむるの第一なり。たとはゞ。

こは。	すかや。	きついげいさ。
きついすきさ。	おがみいす。	おがむによ。
きつと。	きざ。	らしい。
もてる。	はねる。	むかふの人。
ごてさん。	あにさん。	ぬし。

おいらがとこ、

凡此類なり。此外時により家によりて。少〻づゝの言葉あり心を付見聞し給ふべし。これとは。諸事の枕言葉なり。たとへは。こハ何をしなんすへこハあきれへすにへなとの類なり。すかやとは。すかぬと云ふ事なり。むかふの人とは。商人のこと也。きついげいさとハ。しそこない。又ハこしらへごとなどしたることの。あらはれたるをいふ。きざとハ心がゝりなることなり。きつととハ。たしかなる事なり。たとへば。きつとよひ杯の類をいふ也きついすきさとハ。わやくをすることをとかむる言葉なり。おがみいすとハ。いやがりあやまる事なり。おがむによとハ。頼む事也いはゞ。これなおがむによ。此みを一寸と屆て下さいなと也こてさんとハ。茶屋船宿のていしゆなり。あにさんとハ。茶屋船宿のむすこ。或は兄弟の事なり。らしいとハ諸事の下つかさ也たとへば。ばからしい。いやらしい。にくらしい。氣の毒らしいの類なり。ぬしとハ。客の事なり。もてるとハ。女郎の氣に入て悦たる事なり。おいらがとことは。あね女郎の事なり。又若ひ者茶屋などが。一分二分ないし壹匁二匁百匁などゝいふは。銀遣ひの事にあらず。金壹分を一分といゝ貳分を二分と言。金壹兩を一匁とし二匁と言は二兩の事百兩を百匁といふ。是手形證文にはかくハ書ねども。口ずさむときハかくいふなれバ。おの〳〵

心得給ふべし

○金銀多く遣はすして能もてる事

おなじ金をつかへハとて。用にたつとたゝぬと。二色あり十兩遣ふて十兩にはたらかすハ三尺の童子もすへしたとへは十万の兵を防ぐに。十万の兵を以てせハ何のたらさる事かあらん。甘寧が百騎。曹操が五十万騎の兵を襲へり。如此を奇とすべし。ある人正月四日の夜まかりて。おもしろき遊をせしときけり。惣花かるく共二階花は出すべき事なるに。まわしかたとやりてとに花を遣し。外へは何の心付もなし。此時はさぞ女郎の心氣の毒なるへし。余に二三人も客ありいづれも惣花と見へて。座敷へ罷出一禮を述へてかへる者多し。しかれ共座敷しづみて更ににぎやかならす。かの人時分よしと二分の錢を買よせ二百文づゝわかちあたへ。寶引を初たり。此由をきゝ若ィ者ハ申に及ばず。女郎交りにあつまる程に座敷ハさながら日中の市の如く。笑言啞ゝとして。喜悦の聲たへす十度程すんで。いざ／＼酒ゝと言て又酒をのみうたひかなてゝ居る内。はや丑の刻に及べり。廻しかた床を納んと乞ふ故。是にしたがふ揚代の外入用何かに一兩なれ共。其家一番の客のやうに思はれたるハ少しのはかりことなり。其後行きし時

みな〳〵來りて先度は面白き事にてありしなんどゝ噂して。其夜も又賑かに遊しと也。是寡を以て衆を伏す。誠に妙算といふべし。又女郎に送るも同し。女郎の懐あたゝか成内は。いくらも遣ふてしまひさして悦にもあらず去ながら只居るには益しなれ共益なき事なり。時によりては紅白粉をかふ錢もなく明日のばんは誰〻一座で中の町へ出ねばならぬ。あの客衆に貰た小袖はくめんしてあるがとふしやうやらと詮かた盡きたる時節。一分もおくれば。産神にあふた様に仰かれ。いか程にくしと思ふ客も。此夜は少し笑顔を見せてしたしむ事あり。先は物前〳〵は分てせつなき時分なれは。其節は少〻心付らるべき事なり。平生二兩やる所ならばしばらくこらゑて節句前一兩送り給ふべし。女郎はすべて心慮なき者なれば。平生もろうた金は外物のやうにおもひ。何のやくにたゝぬ事に遣ひ捨。物まへになり俄にぐりをまふ時。あの客衆はせん度心を付られたるに迚。用捨する心ある女郎はすくなし。先跡さきのあつまひなく無心いゝかけ。埒があかねはむりなるはらを立。禿はおもひかけなくつめられあの客もせん度くれずとけふ頃日くれゝばよいに。野暮めがなどゝ人のしりたるやうにきね棒にあたるは遊里の風なり。一座などに廻りの女郎くわゝりて其女郎分限不相應によろしき小袖かたびらなど着たる物あらば。かならず酒などかゝらぬやうに心をつけ。くるう共目立ぬやうに其衣類をかこうべ

し。大方かり着や。たとへ我物にもせよ是壹ッ物なれバ。余所の内へも幾度ゆきゝするやらしれず。手かすのあたる程くめんあしう成ゆへ。大樣なる㒵はすれども。心の内ハ赤子を撫るか如くなれバ。能く心得べし。是をこしらへて遣りたる客も。早く着よごしたるを見れバ悦ぬものなり。予去る方にて深く逢ふたる客を見たり。朝大門迄おくる迚。はれ着を着かへて居たりしに。其客茶碗へ酒をついで飲んとするを。彼女郎つとよりて。其茶わんをむたいにとりて。酒を身にあびたり。是は相手もうれしき心也。深く逢ふ客のかやうの事するハ。おもふ中の小いさかひにて。其時はりやうらきんしうたり共いとはず。女郎のたて憐むべき㕝なり。

右のごとくいへばとて。必ず金をおしみ給へといふにハあらず。たゞ金の死なぬやうに遣ひ給へとの事也。當世の客おふくは。己か利口を鼻へ出し。金遣ずして女郎を剝やうにと心を盡す事。誠に妓道廢する前表にや。夫れ遊里は利口を表にたて。十露盤を胸にたゝむ場所にあらす。いかにも世智賢き猿利根をやめて。世間にもたれて遊び給ふべし。人にすぐれてもてんとすれバ。却てふもてになる物なり。人なみにあそべは。自然と其内に人にすぐるゝよき事あるものなり。是ぞ誠のよきと云也。されば古き書に。

夫女郎買者買㆓女郎㆒也事不㆑惜㆑金而代物之女郎不㆑奪㆑魂苟己被㆑奪㆑魂則代物之虛

實不レ獲レ察レ之矣故不レ奪レ魂而不レ惜レ金則女郎之虚實能徹矣女郎之虚實能徹則或吝或寛千變万化而莫レ不レ被愛女郎矣

此心得以て見るときは。只放心セぬ様に仕給ふべし

魂膽惣勘定卷之中

○遊里に三ッのいましめある事

遊里に三ッの法度あり。一に日限染ありて外へ行事をゆるさず。二に日一家にて女郎かゆる事をゆるさず但し新造は格別。三に日一家の女郎と色をすることをゆるさず。是をおかすものハ髪をきり。坊主ハ眉をそるのいましめなり。

女郎の好不好を知る傳受

惣じて遊ハ我人うつさんの事なれバ。心遣ひなとハあるまじき事なれ共。其中に能遊ハんと思ふ人ハ。少しのこゝろへあり。先女郎のつゝしむことあり又放ことあり。遊びなればつゝしむことハなきなどゝいふは非なり。客のつゝしむ事あり。放ことあり。是則仲尼曰。心のほつする所にしたがへどものりをこへずと。何程あそびなれバとて。法外のことハ如何なり。依之

其つゝしみ憚べき事をあらまし爰に記す。先女郎の嫌ことは。しつこき有樣をきらふなり。薫袋をいれ目をなゝめにして女郎を見。色めかしき身ぶりをしいやらしき風あせ手拭などをふりにまき。女郎の皃をほめ。衣裳の有なしをかたり。くしかふかいのひはんをし。かさがあらふの。くさいのとハ決していふべからず。我身の上のちまんをしふるめかしきちわなどするハ。きつういやがる事なり。女郎の好事ハ。淸音にして。淨瑠璃。小哥。三みせん。こきう。尺八の類あるひハおどけかる口。見たて手あそび等也。此見立といふは。何事ぞといふに。たとへは。扨大きな松たけなどゝ・男根に見立たるなり・すべてやくたひのなきじやうだんをこのむ國風なり。女郎のつゝしみといへるハ。いかほとなしみかさなりても。うかひとおはぐろよは。ゆるさず。たとへいつゞけにても。とかくあされ内にいりて。うがひおはぐろおしろひなどハ。する物なり。髮ハたとへむすびておくとも上の式は色客ほとかくはするなり・能く心を付給ふへし。心をはなちていとはざる事は。はな紙たばこの類ハ。いくら遣ふ共いとはず。我りくつを腹一はい云ふ事ハ。すこしもおくする者にあらざるなり・客のつゝしむべき事といふは。すべて客の善惡を云ふへからず。外の家の女郎の噂すべからず。たんすなどあくるそばに居る事なかれ。これいろハ無用なり。若者などを言葉ぎたなくいふへからず。いやしき言葉遣

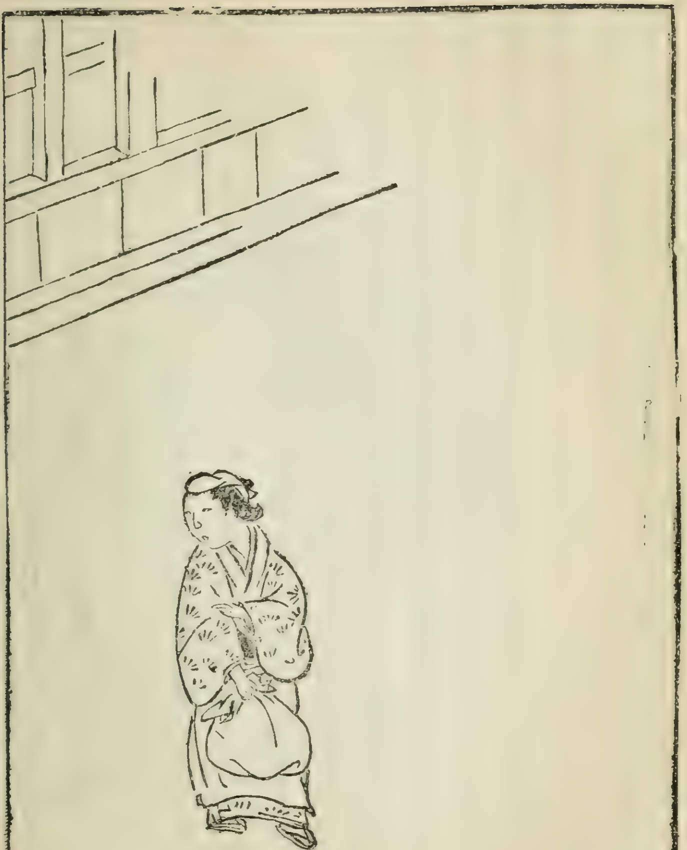
ひして。はねる事はならいあり。初學の及ばざる所也。すべて言葉ハさつはりといんぎんにして。居るに形つくらす髪月代はせすとも。髯は剃り沐浴爪など長からぬやうに。あしきにほひうつりたる衣類下紐等。かならず無用なり。たゞ常のかたちにて。身むさからぬやうにしてよろし。けふハ女郎をかいにまいるがほにて。衣るいをとゝのへ。はなの露をつけ・ぎんだしなとをぬりたるはさも事になれさる侍の。俄事にあいたるやうにてたちまち敵に内かぶとを見すかさるべし。是客たる物のつゝしみなり。又客の心をはなつて。用捨なくすへき事ハ夕飯夜食などの類は心一はいにまいるべし。しんじやうふるハかへつて初心なり衣るいへ物のかゝりたるはいとはず。扇子たばこ入の類やふれあるひハもらいかけられたりするともおしむけしきハいやしいかにもすぐにおくりてよし。もてたる時ハかならず。たばこ入なと。何となくもらハるゝ事あり。それも新らしきハもらハぬ物なり共時是ハ持ふるしたるゆへかさねてとゝいへまいらせんなといふハ初心なり。かくいへばとて我こそもてたり皃にてつかハすは見くるし。只なんの氣もつかぬていにてやすいことなどゝあいさつして。そこのしなにより。その女郎のたはこ入なりとも夏ならば扇子なり共。所望ありてよし是は見はからいにすべしかゝる事ハ何がなゐんに。したき心ざしありて女郎もうらか三度くらいの客に。かやうの事いふものなれ

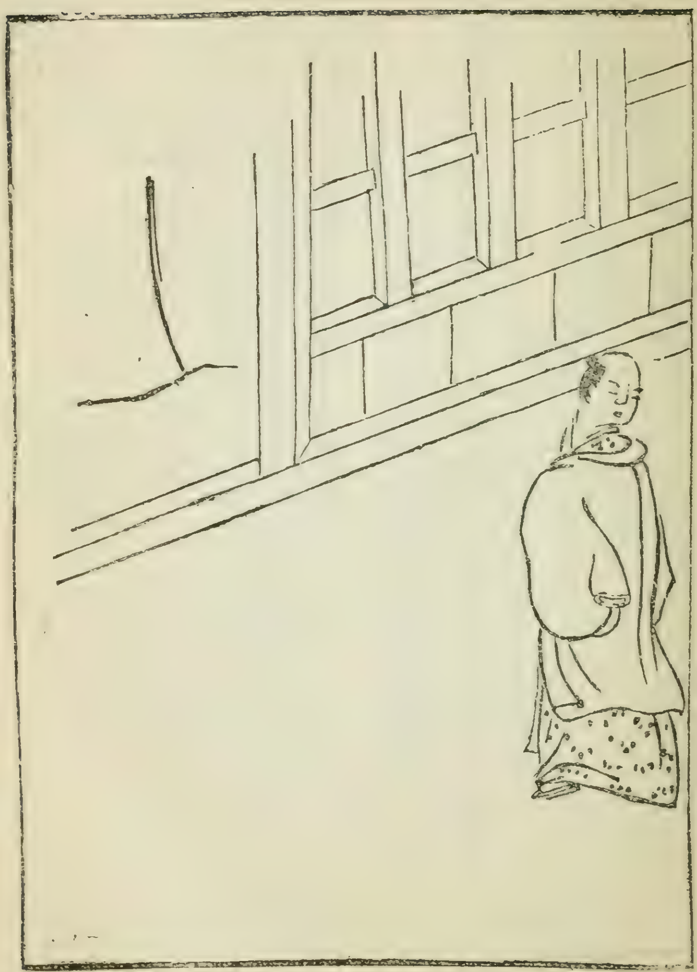
は。心をつけてよきに取はかり給へ。ある人つれの方へ行し時となりの座敷にて女郎あつまりて。ものくふ音しけり。かの男ふと言葉をかけぬれバ來てくひ給へといふ。直にかの座敷へまかりて見れハしきやきをくひていたりしを。此人つとよりて其しきやきをつまみてくひけれはゆひみそだらけになりたりはな紙を出してのこはんとせしを。一人の女郎かのこちりめんのちはんを着ていたりけるが。其袖口を出し是にてふき給へ・何かゑんにといひけり。かの男少しもおくせす。手をつと袖口より奥へいれてたもとのあたりにてふきたり・此座につらなりし女郎。寄てかんしんせしときけり此心をよく／＼くみわけて諸事に心をそへ給ふべし

○座敷に忌みきらいある事

女郎の忍ふ事あり。又忍ハさる事あり。しいて尋ぬれハ女郎のきつふこまることあり。またいゝあらハしして女郎のあんどすることあり。たとへは。下女などふろしき包なともちて。廊下をころ／＼して。誰さまはなと〻尋ることあり。勿論客にハたづね〻どもかふろやわかいものなとへとふことあり。是ハいかなるべしやなど〻。しゐて尋れば。一座の中もし是に用ある女郎あれバ。甚氣の毒に思ふものなり。大がい此人にあいたき用は。内證むきの事なれバ。返らぬ

内にとうぞと思へと。立にれたゝれず。氣はせく。心はもだ〳〵して。あいさつもどぎまぎする事あり。かくては座もおもしろからず。かくのごとき人ちらとみへて。座を立女郎あらバ。しらぬかほにて置べし。とくと用をたして來れバ。一きわわらいがほあるものなり。みなくめんごとなり。又此くめん事にて。地色の手管もあり。一様におもふべからず。其女郎のけしきにてしるべし。又誰さま一寸なとゝいふて座を立。禿などさゝやきて。座を立。廊下をきつと見て。座を立なとするれ。大かた客來りてよび出すなり。たとへもらわずとも。座敷へかへりてすまぬ顔色なるれ。來れる客。其女郎見せにをらぬを見て。外へ行たるを。其つれなどしらせたる物也。座敷へ歸りて心をくばり。目を廊下へかよわすれ。名代をとらせて置たるなり。座敷へ歸りて酒なと飲は。諸事心にまかせぬゆへなり。座敷へ歸り平にしてうごかす。床へもはやく來り。小用のときも早速歸りて。床の中へ入ねころびて。たばこ一二ふくものみ。或はのますして。きやくのそばへ寄そふてねいらざるれよろしきとしるへし。此氣色をしるは。場數をかさねざれば。しれかたき事なり。されども大むねかくのことし其心得にて氣をつけ給へれ略知るゝことあり。此外の變は翠月集に見へたれば。畧するなり。取合て學び給ふへし。又忍ばさる事といふは。忍ぶへき事なれとも。あらはしてよろしきにかへることあり。此類は時





によりてある事なれハ。かす〳〵しるす叓かたし。先女郎のさし合に成たる時。おふくはあさくさがみを見るやうなる紙をつかふ一座か又はほうばい女郎。あひかたにても。此紙をあやまつて。とりおとしたり。わすれてたちたりなどする事あり。是れ言ひならハしに白き紙をつかへば。けいかうをふかく見るとて。此紙をつかふと。さだめてわけある事なるべし。もしかくのごときこともあらば。あいさつしてどつとわらふがよし。さなければ見ぐるしき紙をみられ。めんぼくなき事におもひて。共座敷へ出ることをはつるなり。あそびの心得といふは。女郎にはぢをあたへず。我もはぢをかふむらぬやうにすべし

○女郎に實の有なしを居なから知る法の事

女郎のあやなすといふ事あり。是客たる物の心を付へき事なり。先共女郎の世帯を知るべし座敷不相應に夜具あしきか。禿なと見ぐるしきか。或は禿年たけたる衣裳とゝのハざるか。又はうハ氣に見ゆるか。地色のあるやうすか。深き客のあるか。此類はあやなす事あり。此しやうこを見んと思はゞ。詰の勝負に心を付へし。いか程わざを盡したり共。勝負のわかれに來て。さつそく刀を拭ふ事をいそがば。是あやなしなりとしるべし。しかれ共女郎もし取はつしたる

時は客の心を汲て手まはしする事もあり。是又女郎の氣質による。うるほひ遠しき時に。とく鼻紙とりたるは是取はづしたと心得べし。とくと虚實を見んと思はゞ。三度ほど出て見べし虚なれば二度めには。ふせう〳〵の躰有。實なればいよ〳〵喜ぶ躰あり。又虚成時は。一儀終りて直に。たばこなどのみにかゝるはうそなり。又小用に立てあいだあらば虚としるべし横に行ておそき事もあり。心を付べし。とかく懇にまかせ。ほれたり貞をいふは。皆虚成べし。實に逢ふ女郎は。馴染ほど父母の一子をあいするが如く。此方に思はぬ事迄心を付。寒き時は。其客の寒からん事を恐れ夏の日は涼しき事を招き。無理いゝても。無理と思わず只きげんのかんがへ。己が身はくるしみても。客の身を救はん事を思ふ。然るゆへ言葉に花はさかせねども。自然とふびんなるなさけあらはる。是則中に誠あれば。色外にあらわるゝの理り也。客病をうれふれば。我代りて病ひをうけ度思ひ。ひんくにせまるを聞は。我身をすてゝもすくひたきやうに思ひ。顔色すぐれざれば。いかなる事かとおもひすごしさま〲の事に心遣ひのみして。ねむる事をわすれ。後のあしたはぼうぜんとして。家を失へるが如く。晝は見せを忘れて。俄病などおこし。やり手にうたがわれん事をおそれていたくもなきつむりをはち巻し。悪る迄の氣扱もぬし故なればと。苦勞を却て樂みとし。ほうばい女郎にもしのびて。跡や先

に成たるみを書て。半切の一巻を遣ひ。返〳〵と書てもたらぬゆへ。書そへをし。又いゝたらひて追而書などをす。ひらき見れば皆同事なり。それハ何ゆへなれバ。昨日のうれしさ。よひよりのくたびれ。心ハもだ〳〵。いゝおこし度事は山〳〵。人めハつゝむ。何角に心轉〳〵するゆへ也。かん心の事ハ取落して。同事をいくつも〳〵書物也。是ハ馴染程感情になりたるものなり。又我座敷へ女郎おふくあつまり。自分〳〵の色客の咄するはよし。同集るにも。只一通りの咄斗して居るはよしとするに足らず。是はわけあり。しるすにいとまあらず。夜みせの出はなに格子よりそつとのぞきて。見せにおらばつれか船宿に。我名をよばらせて見べし。其時急に立て。躁まハるは實也少もおとろかぬていにて。ふせう〳〵に立あたりを見るハ。いかほど座敷床にて。よき共にせものとしるべし。若つれも船宿もなくば自身格子より其女郎の名を呼て見るべし實の心ある女郎なれば。歡顔として。取物も取あへず。立て内へ入。ぞうりもかた〳〵しにはいて。客いまだ外にをれバ。さつそくかけ出御無事かいかゞと尋とひ。客を我座敷へいれ。其身ハ外の座敷へゆきて。けせうをなすやら。紅をつけるやら。ゐもんをつくろふやら。狂氣のごとくになりて。人の物いふ事も耳に入らず。とつかわして座敷へ出。たばこ入もはな紙もわすれ。禿を呼て。今おもひ出したるやうに云付て。見せより取よせ扨先に記せ

しごとくの事ども。はじまるなり。是女郎の庸寶をしる秘事なり。又言く深く妬み。或は此品はもられぬもの。あれハやらぬものと。愚痴らしくいふも又寶なり。ある時二丁日邊にて。年たけたる女郎に逢へり。客其女郎に向。御邊さだめて不日に此里を出べし。彼女郎大におどろき。肝魂をうしない。何故に此事をしり給ふといふ。客のいはく我妙術有と答へて。其夜ハあかしぬ。後廿日あまりして其女郎里を出ぬ。つれあやしんで問て云足下何ゆへに此事をしるや。彼客の云隱毛長し。此故に里を出る事不日ならんと思へり。はたして然りとて。二人手を打大に笑ふ。

私に云。是近ゝ里を出る事あるによりて。自然とたしなみうすく成たるを察したるなるべし斯のごとくに心をつくれば。かやうの事までも。さとらるゝ物なれば。諸事知れずといふことなく。人ミな女郎をあハれみ給ふゆへ。まどわさるゝなり女郎は我敵とおもひて逢ひ給へば。餘りはまる事ハあるまじ女郎を我敵とおもへといふハ。いかゞとなれハ。あやまつて其計にあたれバ。大は家を亡し。小は身をうしなふ。故に敵と心得給ふべし。扨其敵を味方にとき下セは。却て利を得る叓多きものなり。小子がをしゆる所は。敵を打にあらす。打るゝにあらす。敵人をして。能伏セしむることを言也。敵を打といふは。たとへば。女郎をはぐの事な

り。末は夫ふになるべきの。女房にすべきのといひて。なけなしの衣類をくめんさせ。或は年季を延させて。仕まひハ國へ登りたるハ。或ハ死したるなんどゝ云て。見捨る。是敵をうつたり。如此事に逢ひたる女郎。我二三人も見たり。咄傳に聞たるも余多あり。是不仁の至りなり。遊里に身をしづむる事。たれか數寄好べき。皆やむ事を得ずして身を穢す。ことなれバ。共にあハれむべき事なるを。かくするといふハ。人たる物のせまじきことなり。我國天てらす大神の。いづれか御めぐみの無き事あらんや。然れバなど人として人をそこのふ事をいたすべき。すゑにわれやしなひすまさんとおもハゞ。なるほど衣類金銀によらず。借り求ても共何かくるしからん。始終我養ふ事のならざる人ハ。かゝるやくそくなどして。すゑを見捨給ふ事なかれ。當分ははつめいらしく思ハるれども。子孫必又人にあざむかれ。家をも失ふべし。人ゝ此言葉無下の事と見やり給ハゞ。是非に及ばず。能ゝ心にこめて見給ハゞ。いたづらなることにてハあるまじ。

魂膽惣勘定卷之中終

魂膽惣勘定卷之下

○女郎買極意の事

客たる物のおゝむね。さま〲なる物なり金銀をあくたの如くに遣ひ。十分のわひをなしてたのしむ物あり。女郎をあやなしなけなしのいせうをはぎしまひ。俗にいふたゝきばなしとやらにするものあり。やつがれか所存はしからず。此二ッの間を行ん事を思ふ。人ゞはり合てあふ事をこのむ物あり。是せざる事なり。たとへはりかちたればとて。さして功にもならぬ事。又はりまけても。ともたちのひはんをうくるも。いらぬ物なれバ。さやうのよこあひ出ざるやうに心得べし。すべて人我一ぶんといふものハ天下になし。大小ともに父母主人といふものあり。しかればいかほどぶげんなれバとて。父祖の家業を我がたのしみにすつるハ。ふかうの大なる物なり。又主人ある物は武家商家によらず。日ゞの行儀あり。そなふべきこともそなへず其家の業すべき事をもわすれ。ひとへにあの女郎を手に入んとし給ふは。無下の事とおもハる

然はあそびはせましきかといふに。さにあらず。我に應ずるあそびをすべし。人はあいふんきふんにて。爰にてもてぬほどにとて。かしこにてもてぬと云事はあらず。しかればもてる所にてあそぶべし女郎の容儀は十人なみならばふせうしてあひ給ふべし。十間か十間もてる樣にと思はゞ。孫子か傳の通にすべし。しからざれば。十軒ながらもてることはあるましとかくゆふふんにして。にくからぬあそびし給ふべし。凡初會にてもてるもてぬはしれる事なり。初會に能くは裏にゆきても見べし。うらにも能くば馴染給へ。その善惡を見わけんと思はゞすこしきてん有左にしるす。

到て宜しきしなしは。つと座敷へ出その客を見て。欣然として笑ひの色をふくみ。座になをりてかたちをとゝのへ。酒をもふかく飲ず客强れば。こわ〱微笑して。一ッものみ。たばこなどのむにも。そこつになきやうに。諸事をつゝしむていにて。たゞ顔色嬉しきいろあり。笑ふ時は口に袖をあて。其客は何にてもいふ事なす事。こと〱く心にかなひ。わらひ恥かしきていにて。おりにふれては。きせるなどにてたゝくまねなどして。くらきかたへ顔をむけ。そばへよりたけれ共。なにとか思われけんと。しんしやくし。かほにたよりをまつけしきあり。其時此方よりも。少しいたづらか。こよりなどにてあやなど取るていをすべし。こ

れらをたよりに。そはへよることあり。此時しすましたりと思ふべからず。しらぬていにて酒などのみて見へし。かくのごとくするほどなれバ。其やうに酒をのみ給ふななとゝいふ。その時のあいさつ。先の氣にあたらぬやうにあいさつして。もちりやうの哥なりとも。淨瑠理なりとも少し語り給ふべし。長くは無用也。彼是する内床をさまるなり。此時に淨瑠理なにぶしにても。義太夫ならはけいごと一ツもかたり給へ。余ハ是にならふべし。扨たばこの四五ふくものミて。まくらをよせしづまり給ふべし。又たばこの六七ふく程のむ間ありて來るかぶろをつかふ女郎なれば。是をよびてもはやいてねよといひて。そつとはな紙出させ。一寸座敷を出て。となりの部屋などへゆき。とく來るなり。これ何事にゆくなれば口紅おはくろなとおちたるかいなかとかゞみにむかいて。扨これ〳〵とこへ入たばこをとりのみつけて。客へいだす。客とりてのミ。またつぎかへて三四ふくものむべし女郎もまた別のきせるに四五ふくものみ客のまくらをつけるをまつ。客四五ふくにてたばこをやめ。まくらをとるべし。まくらへれはな紙をあつることなり。しかうしてのち女郎もはな紙をとりて。まくらにあてすこし客のかたへよせうつむく。是伏すにあらず。顔ばかりをうつむいて。さもはづかしさふに見ゆ。此時の女郎のこゝろは。甚客のこゝろをはゞかり。あいたき心も十分なれ

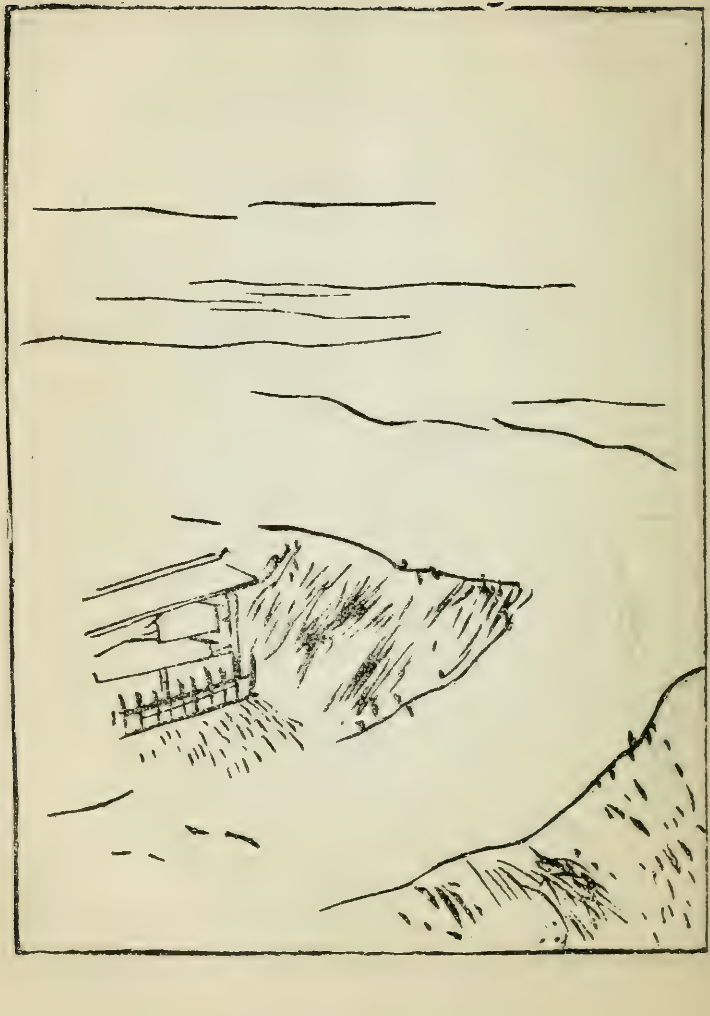
とも。そふとはいわれず。只うれしくこわいやうにて。どうかこふかと伺ふていなり。客は平氣にて配合すべし。ことおハりてもさつそくはな紙へ手をかけず。じつと客の身うごかしするをまつ。客思ふほど引しめ。其後すこし身をかたふくべし。女郎はな紙をとり一物を淸め。此後いよ〳〵はづかしき躰ありてきうにもたゝず。また用ありげに見ゆ。

右のしなし類は。上々なきもて也。なじみの末いかやうになるべきもしれず。此次は上のしなしの内十斗もあるハよし。上々なり。七ッ八ッもあるは其次なり。四ッ五ッあるはなミ〳〵なり。なミ〳〵といふはとこいりのようすかはる心を付くへし。座敷にてよけれともとこにてあしき事あり。これは時により。外になじみあることなど。つぐる物あれば。座敷よろしくてもとこにて一通のことあり。察すべし座敷にていぶかしく見ゆれども。とこにて打てかへたるふるまひあるもあり。かくのごときはまた中の上なり。至てよろしきにはあらず。生付あいそふげなき女郎にても。至極我心にかなへは。笑顔になる物なり。此理をよく〳〵さとるへし又女郎の氣によりて。うちつけに物いふもあり。たとへは菓がごとき。おきにいらぬはづなれとも。せめて今一度御こし下されかし杯いふことあり。是よろしきなり。しかれども末のほど頼みがたし。二三十會に過べからず。其余はおぼつかなし。いかゞとなれバ。己がはじをすてゝ

いゝ出すほどなれバ。思ひかねてのことなり。されどもあまりよすぎたるも又心かわる事はやし。故に聖人も。人として不仁なるこれをにくむ。はなはだしきは。乱なりとのたまへり。能ゝ分別すべし。さりながらけいせい買極秘といふハ。なか〱口上にはのべがたし。仍てわか年來秘する處の書物に。分里年中行事といふ書有り是は吉原初買ゟ師走の仕舞紋日までの仕様。并に傾城買のひミつつまひらかに書留置ぬ。何れも懇望の方へは。進借致すべく候間。銘くゝ御寫しおき内見仕給ふべし

後朝の客に四ッの見様ある事

客のかへるさに。もてたる客と。ふられたる客と。口舌したる客と。あやなされたる客と。平なる客とは。ほゞ見ゆるものなり。先もて客ははなハだねふく。顔もおとろへものあんずる姿にて其さますいなり。ふられたる客は。いかりの色面にみち茶屋船宿をしかりのゝしり・かつ其客見にくゝ風やぼなり。あやなされたる客は。さもいなかめきて。面に喜色有て物語ふつゝかなり。口舌したる客は・いからずして・つれか茶屋船宿のものと理屈をいふなり。平なる客は顔色常にして。歸宅をいそぐ躰有此四ッの條ゝは。いらぬ事なれとも。能人を見わくる人



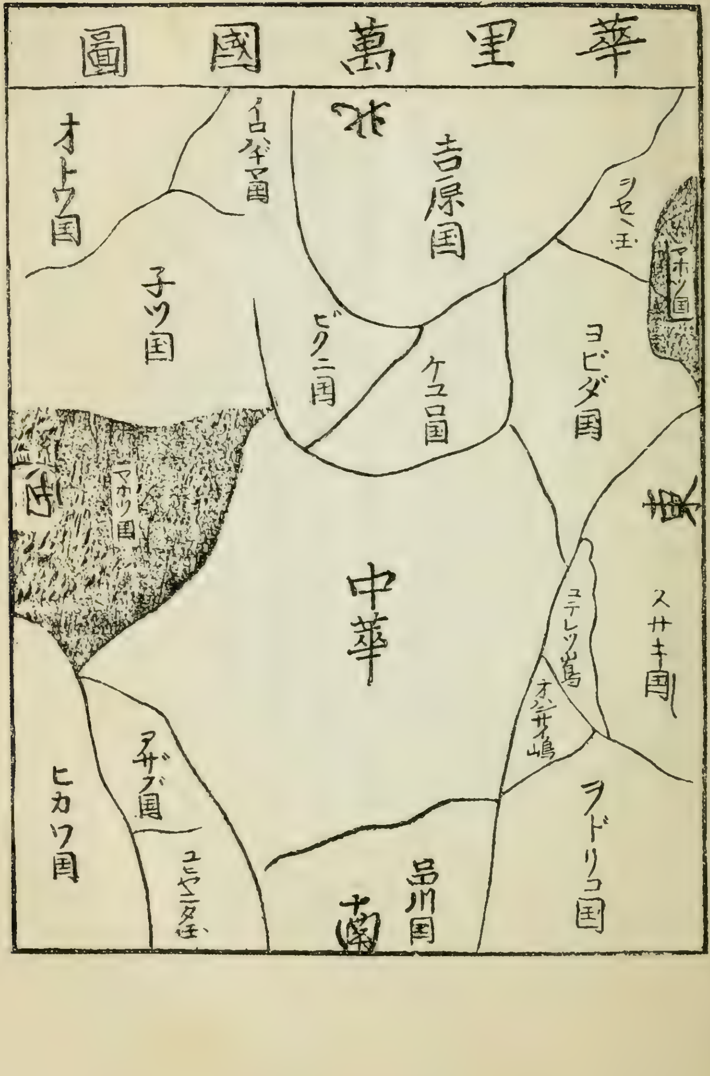
は。ミなゆびざすべし。かるがゆへにあらましをしるせり。是ハ大むねにてくわしく述がたし
能〻諭知し給ふべし

是等のおもむきハ。武藏野〻手ひろきあそひの有様をかたはしのぶるところなり。なを深くもとめ。遠くさぐらは。花のみやこのはな〳〵しきいりわり。難波の梅のすいなる物すきところにより品もかはり。名もたがふ事あるべけれど。あそひの本躰においては日の本のうちハおろか。こまもろこしのはてまでも。天地配偶の理りなれば。一もつて是をつらぬくへし。しかれとも初心の客・はじめより此書のおきてをまもらんと欲すれば。あそび手せまくなり。ことわざにいへる。いき過と云やうになり・かへつて。害になるまじきものにもあらず。たゞこの書をそらんじて。極意はかゝるものぞと。本躰をかためおきうハべな隨分と大やうにして。いさゝかの事にかゝわらすたとへあから様にしるとも・しらすがほして。すゝとけのなき人とおもひつかるゝこと。肝要なりいかにもなどやかに遊ひなれ場數をふめは自然と事になれ物におぢわひ出來て。一言一句あだ矢なくむかふ所なびかすといふ事なき。良將ともなり給ふべし。さればはじめより。長老はなしと申せハ今この書を見て。遊のたすけとなし給ふ人も。年を經すして。此書にひはんをうち給ハん事・くびすをめぐらすべからす・然れども兵糧のたくハへかん

しんなり。いかほど功勞を積み。藤伊碗久をあざむく程の。古今獨歩の名將となり給ふとも。山吹色の粮盡なば。手づめの戰ひかなふべからず。すでに。楠ほどの大將も。手はじめに。赤坂の城にて。兵粮につまり。自ら城を放火し。山林へ逃こもりぬる事。察し給ふへし。然れば跡先のわきまへなく。兵金をつゐやしぬること。誠に愚昧の至りなり。とかく細長く。あるひはせめ。或はしりぞき。あやまつて。敵のはかりことにのる事なく。氣をたすけ性をやしなひ。物事一たんにし給ふべからす又は兵粮たくさんなりとも。はやりをにすゝみ給ハゞ。敵のためにくるしめられ。毎日毎夜居つゝけの水攻に。味方の淫水盡きはてなば。防ぐに術を失ふべし。其外よろづに思慮をめぐらし。無益の大酒を好むべからず。宵にははやく宿を出て。あしたはゆるりと歸るべし。古き書にも。君子はあやうきにのぞまずといへば。連なくして夜道をゆくべからす猪牙にのる共天の時をかんがへ。地の利あしくは駕にのれあゆむにまさるいさほしあり。供をつれなばすいふんいたわり。言葉つたなくいふべからず。遊びのひはん。其身の人からも。おふくは家來の反間により。無實の惡名とる事もある物なり。宿へかへらば主親はもちろん兄弟妻子にいたるまで。いさゝかそりやくなすべからず。扨又友か第一なり。つれの內にもけんくわすきあるひハ酒狂をするものか。無益のせいをはる人と。愚痴にきたなき者あら

べ。付合決して無用なり。奢をおさへ欲をやめ。朝ねひるねをせぬやうに。所在の家げう情を出し。根をかためほぞをかたくし随分堅固に遊び給へ。さりながら此趣は。あやうきを渡らんと欲して。棧を作るがごとし。必ずかくのごとくといふにはあらず。大むねをあらわすものなり。只廣覽を求め明智をたづねて。ならふべしと聲をはかりにしやべりまわるとおもへば。鳥のこゑ耳をつらぬき。年ゝ明の女郎と友ねのゆめも覺ぬ。實數年心の駒に。手づなゆるさしと。思ひし事共。初ゆめに見しは。是すなハちとりもなをさす。春のはじめの春駒なんどゆめに見てさへ。よいとや申すと祝ひおさめぬ

魂膽惣勘定卷之下大尾


華里萬國圖
北
吉原国
イロハギマ国
オトワ国
シセヘ王
マホン国
子ツ国
ビクニ国
ケユロ国
ヨビダ国
マカリ国
東
中華
ユテレツ嶌
スサキ国
オハサイ嶋
アザブ国
ヒカワ国
ラドリコ国
ユヒヤニタ王
品川国
南

土産

蛤。杓子（食盛器也）魚類

ヲトワ。　子ヅ。　イロハヂヤヽ。　スサキ。　センジユ

此國ミ。南楼のもて餘し物を流す嶋國也。ヤホツ國に。少し毛のはへたる所也。ゴテレツ。オハンサイ等の外國の食物と成る。

ヒカワ國

此國。昔しはオトワに續たる處なりしを。元文の比。けいどうと云風大に吹ひて。家屋悉く倒れ終に夜國となり。人倫なし。

ヲドリコ國（舞國共云）

家屋少しといへども。奇麗なり。孝を專にして母につかへ亦役者國に。心を通して音樂の妙を得たる國也。上は天の氣近し。故に熱國也河水を好。船中に來て遊。諷聲。迦陵びんがの如し價甚貴し。加沙子嶋とも云也。風俗北國に異りて。後帶を用ひ。結び下け。亦堅結にする袖の長サ二尺四五寸。多市松染。龜藏小紋を用ゆ。

土産　三味線　扇子　長手拭　塗下駄

ビクニ國　丸太國共云

人物毛無し。天丘の風俗に近し能く佛法を信じて。勸進を專にす。但し此國晝有つて夜なし大に日照國にして笠をはなさず。

土産　頭巾　文庫　足駄　ひむさくら

ヨビダ國　ヤマ子コ國共云歟此國けいどう風折ミ烈し嶌人行客ともに足に苦しむ

ヤマ子コと云も此國の類屬也。人往て是を呼べば則來る常には。何國に有といふ事をしらす。北國の立引の如の法也。志し厚く。遠國他鄉の人歸帆する時は。船を出し送る此國かばやき。笊蕎麦多し

ケコロ國

此國。魚類貝多し。人物賤し。踊子國のことく。そばへた者也。皆木綿のみを着す。蛸の足。

すつほんの吸物にて人を釣る。

ヤホツ國

此國。夜る有て晝なし至て毒濕有。とうへん木と云木を生す。亦へちまといふ草多し。何れも。たわけの根。悉く蔓り。米粟不レ生。常にきらすといふ者を食す。鮫が橋。鐘叩堂。じくく谷。ふなまんの國。皆同し。人物至て卑し。非人倫の類。色。どす色にして。甚青臭し黒んぼの。どてらを着し。白巾を以。頭をつゝむ。年齢十四五より。七八十まで。多く振袖を用ゆ。道路に立て有ましき押賣をする。不法の國也。往者必鼻を失て歸る。

土産　唐の竿　馬沓

華里通商考　終

魂膽惣勘定成焉、東都妓樓之情、至矣、盡矣、正因于此書而學者、人物、地理、方言、可審之而已矣、

平安　　玉泉女跋

近日出來

分里年中行亊

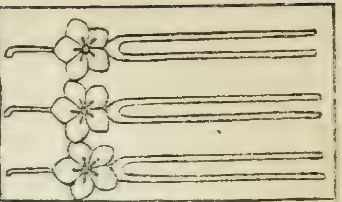
全部五册

右ハ新吉原初買より年中紋日の仕方并に女郎買の極秘口傳等悉く著す

本町四丁目
東都書坊　中村治兵衛梓

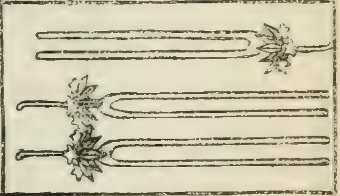
浪華色八卦

なにはゐや名にふる芦をめとに折てうかれ遊ふ里〳〵の情遊妓の吉凶を卜して蕩士の風俗をわかつ夫易に五の名あり日と月をもて易となすれ相惚の夜晝思ひて忘れず河圖出て倡家に價定り後天といへるは大少天神娼の名をおこし繫辞れ甚惡醜と詞の伊達を備へ十翼の傳は世に鳴る艶を稱に哥に作り糸にのせてうたひ流すの義や猶意味の深きれ髯のさん木によつて文意をさとすへし



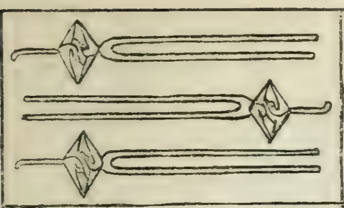
キヤウカウ
桔梗卦
ききやう

嶋の内
坂町



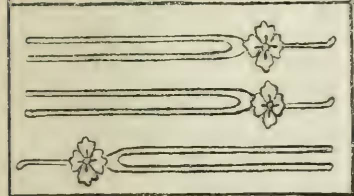
リヤウタン
龍膽卦
きさアんこう

北新地
中町
ろうそ町



クワクリヤウ
鶴菱卦
つるびし

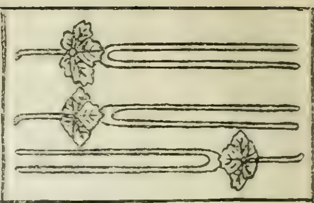
高津新
尼ちる
吉すゑひ
播まん



クワリヤウ
花菱卦
はなびし

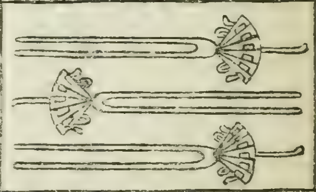
安治川
れいふ
八軒茶屋
御霊裏
吉田山
北堀梅畑

奥ま色道又ケ条を秘伝をあらはす



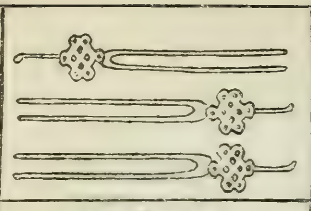
蔦菱卦（テウリヤウ）つたびし

上治町　野堂町　百場先



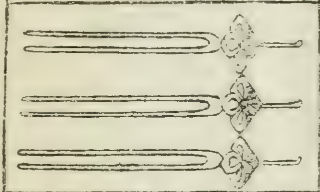
檜扇卦（クワイセン）ひあふぎ

茶彩　新部きさ



宝結卦（ホウケツ）たからむすび

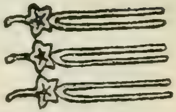
堀江



桐臺卦（トウタイ）きりのとう

新町

浪花色八卦



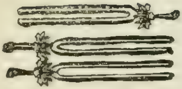
桔梗ノ卦

桔梗ハ嶋の内井坂町の卦也○活氣の人多く來ル○万花麗を好ム○色变時〻かわりて久しからす○此所八卦の中にてさかんなる事の第一にして女郎も共うぶなるハ十五六より出し　浪人の娘　貧醫の妹　婢のぞけしまひ　梵妻の還俗　舞子の果　京の仕替　西の落北のなぐれ吉トなり凶トなり万物容の卦なれば舊きを去ッて新しき妻とし月に日にものかわりうつりて事をてんするを妙としはなやかに面白きハ此所にまされるハなし女郎も共勢ひにのつて意氣強くいやミをぬけ色道の禪氣や野郎を買ふ中居あれば役者に賣ル藝子ありて粹がる事を專とし衣裳手まわりの物すきも人のせぬ所をあんじゑしは大王も紋にして付たがり髪も折にはぐる〳〵巻にて黒

繻子のうしのくそ若きハあめの鳥のやうなるもありてにくてらしひ仕立色事を隱さずしてはりこんだ所をすれば却而評判吉にしてはやり事多くせりふもまだるい事なくサァといふと客にもはりこむ事きびしく又うつけ客のいやミあるハ喰ィちらして賣り〱ひどいめにあわせ年より客のくせにァタなめたと思ふがさいご閨中てもどうよくにまゝ子あしらひ贅も相應にいひ・はやり言葉絶ずしてそれがやめは是かはやり早う覺へるを手柄とし知らぬを文盲がり古ルけれど折にハせんぼうもあがき客も三日往かぬとはやりもの＝おくれ遊ひがとぼつくなり中にもめてなる女郎ハ猶まけ惜ミ強く一度も逢ハぬ客でも名の高きものにハ夕ァも逢ふた噂なんなと仕出して哥に諷れたがりしさいらしひ事いふて見たがりわたしや此中西照庵で哥を仕たら砂原の五さいじやうさんかほめてゞあつた下着ハッレ高らいばしでもなひ所のしつとうさんにからの唐画かいて囉ふ筈じやと取てもつかぬ片言さゝせの多葉粉入のつぶれぬやうにしんを入レなから持て居るハなさけなしそれをよい事と心得て・にやこい客が共通＝してもたるゝハなを論に及はず菅笠は初て神からきかけ何の願も祈もなきに物詣を第一としそれもあいかた同前ニ心得てギゥこんひらゐでもないと此比ハ長町裏のびしや門ゐへはり込ミ色事も飛つくやう＝するかと思へバすてる事はやくきのふのやさ男ハけふの坊主役者＝かわり共醫者がおもしろかろうかァ

ゞ糸鬢に出かきよかと少も着する所なくして氣味のよき所や客もさま〳〵の風俗ある中に二十そこらの若い男くすんだ着物ニ色ハ鼠當世茶の細帯どんな小紋の短羽織びんには油けをもたさす女郎にハどく〳〵しひ事いふて俗のはなれ自まんいつかどの粹じやと思ふて居ル客とまきごんをきん出してひからせ裏うち帯して長哥のしやくり諷ひする客とかたちハかわれど根性のいやミハ少もたがわす此罪業の秤でかけて見たら色男の方が五六匁かるい事也何となひかたちハせられぬ物と見へたり女郎の手くだもありふれたるハいふに及はす男ぶりのわるいくせに九も十もくわぬ客にはほれたといふてハがてんせねバおまへのやうな悪人ハないとたつた一言の悪といふ字に無量の氣味合をもたせて嬉しがらす事也色事の中宿も盆んと唱へて戀無常をごちや〳〵に入くさひあたりの家居爰にても手ばりの奢強く折ふしハうまい物會も興行仕三ッ肴の味ひも疊へくぜつも一際新しくせりふをつけてはなやか也客が茶屋の門口這入ると中居のつかミ付様にいふてうしハ又外になき勢ひ也法師いつれもようろし外里の幇間ハむしやうに拍子つき檀尻藝を見るごとく烏さしも仕かねぬいきおひこれハ幇間の下品也此所ハ幇間の水上にして仕うちばたつかすせりふに穴なくそれ〳〵の客の氣にあてがひ森田幸介をはじめ平助喜六宗助與八松治音太夫伊勢太夫其外數もしらす利八隱居して日養坊となりたるも與也繁花第一の地なれハ

勢ひ強く二人ﾘ三人請出してもそれには曾而おとろかすむさき身請などは却而客の名をくだし生涯の恥となる也よく／＼愼ムへしばらくもけだいなく通ひて貴白をまき遊ひの仕うちよきをもつて名を上る所也茶屋もめい／＼伊達を專とし中にも品のよき　ハ貝半大七さかなつでうしのはづミたるハ川作大才又近江屋井筒屋。おとなしきハ大治盡三足代伊長吉。橘嘉天吉ていねい。落つきたるハ足代太若吉。富市綿庄ハ茶屋柄を作り。嶋九竹傳賑きやか也其外岩長岩居長喜河庄あぐるにいとまなし又坂町の盧路の内によしやといふ呼屋ありて此地の黒がり所にてさま／＼の獣集る也御はらひのうちハとり分ヶ芝居側住九より角ト丸迄の間俄の本ン舞臺にして數万のてうちんをつらねて夜のあくるをしらす此灯の影に出張してのらの面を照らすべし此卦六月ハ大切の月なれハ晝夜わかたす心身を盡して遊ふへし



龍膽ノ卦

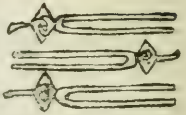
龍膽ハ蜆川曾根崎新地の卦也〔〕朝迎遲し〔〕比言中〔〕幇間のけんかまひすし此卦も万物發生の所にして其女郎の風俗ハ新町ト京の祇園町を合法してそれより一段つたなき位也強きともなくやすらかなるおもむきゆへつたなからす牙婆トいへるすさましき女郎も此地へ來ルとにつちやりと見へて手を取らす事多しかりかしの定りなけれど女郎のきまりゆるやかなればひとへ帯のなりでちよつと來てちよんの間をうたせこまかなる客をよろこばしむ娘より中ッといひ丸花ととなへ新造ばやりのする所にて出かわりめきたるも多く出す也しかもよき判官あまた入リ込ミ近年よほど飛んだ仕うちも見ゆれど一躰ぽつとりと遊ばせる所なり其ゆへか在所から十一の年さる問屋へ丁稚ニ來て酢にもたこにも遣われ店番する間も錢ざしをなひ難行苦行して親方の眼にとまり元服しても茶屋といふ物ハ牢屋の如く恐れ折に土樋口かつまりと現銀買にさらへ。飯喰ふた箸ハ三度ツヽ禮拜する手代今ハ番頭となつて銀も自由なれどにきりつめ。ある日梅田へ葬禮に往た時わるい連レに引すられちよつと此所へふんごミ味を覺へよろつうちばなる所ゆへ人に知られぬを調法がり二度行五度通ひ見るほとの事新しくするほどの事嬉しく四十有余ニなつて漸極樂の道に入リ宿這入銀の成佛うたかひなし。こそ〳〵と大銀つかふ親父客の多き所也舞子座敷藝のたぐひは新町の道具なりしを今ハ此所ほど繁昌するハなし金らんの着もの着たこび

つちよに地をする藝者共か大勢付いて最初が肖かり。玉豊のしつと。奴の道行には此女の子にふんとしかゝせ尻をクイトからげるがはねになつてよだれを流す客もあり所の風俗ハかわつたものでよほどきようといとは思へど此所て遊べはごばん人形もしばらくハ見て居らるゝ物也藝子もやわ〱と。つとめたいこ持ハけんを第一の藝としてはげむゆへおしならして此所強しはやりうたはやり言の遅きも女郎の知らずに居るハかへつて心床し折には廿日卅日南の哥舞妓此所の芝居へ來ると女郎もはじめはこたへていれど役者珍らしくかへ名を覺へて樂屋付合ついにハほころびてそれにもこれにも持て參り地女のぞけたやうになるもよほど笑止なもの色事好きの役者ハそれを給銀のかわりにして行げなと法界りんきする人のいわれしも尤也小茶屋のうちには居續すると。きもつぶすもあり亭主が出て兎角細長う御出下されませと染んだあいさつもおかし蜆川北側呼屋一丁目より初て三丁目四丁目迄すき間もなく座敷の工合庭のとり方皆同し行ゝた也南へわたつてハ大茶屋鯉新鯉作松坂屋中にも菱屋善五郎といふうがちがしら客とともに遊んでびらをいわすてつ水といふ俳名の通りたる茶屋ハ浪花に是ばかり也此地の妙ハ始人に二人りか三人外にもなきほどの飛切を出す所也客常〻油斷なく通ひて福ヲうる卦也

此變卦に中町といへるは格別事かわりたりいかなるゆゑんにやうちかけしての店つきが一躰現

銀立テの所にて遊ぶへき客を見立て引込ミ木戸トいふ下女さだめのことききわめて奥座敷へ客を通す欄干つきの椽に庭は泉水に蘇鉄きりしまあしらひやセかれた石臺の蘭小便箱の傍にすへ手ぬぐいかけおごそか也奈良の木辻のもやう思ひ出らる盃か出ると店にありたけの女郎どや〳〵と出て來て百万べんくるやうに居ならへバどれこれとさし圖して其夜の君をさたむる也取肴やうのもの硯蓋きつしくに取合ハセうす平ラたい大鉢に花のある物をかいしきして作り身を哥かるた程に切り立蛇の鱗のやうに並へてふしミ燒の擂鉢にゝた小皿へもりわけてさし出せは扨もからしかきいたと客があたまかゝへれば酌する女童が盃とり上ケて其口へ一ッ上れとしミついたあいさつ床の段になりても置屋ての遊ひなれはせりふくぜつもなく只一儀終ると去ぬるとがいつとき寐る事一へんの客ハ四ッより泊りを取て伯母の所に寐るやうに酒ものますに屏風に入りゆつくりとやるもおかし此所も必殘すべからず

こつほり町ハ蜆川の東につゞいてはるか品くだりたる所也店つきをなして局めきたるも見へたり多くちかき在郷の人の樂しミ所七八年前にはやりし桐の木の印籠南帋入レそれをはやらぬ先きから持ているわろ達が多く此所をはいくわいし綿初穗のわたくし新麥のぬけものが錢と化して皆此淵へ捨たる也泥龜やの戻り足爰に夜を明かすもありそれ相應の意氣地も有るへし



鶴菱ノ卦

鶴菱ハ高津新地六万臺勝曼此卦に屬す高津新地ハ相生橋二三丁の間を上品とすなんは新地の女郎に堀江の強あるものなりまへも妾より嶋の内へ出て鳴たる婆子多し釣鐘筋耳をふさぎ溝の側に鼻を覆ふ近比は東南の端に塩町野堂町からひきたる呼屋五六けんあり春ハ野郎つれた凧巾のぼしも來て水茶屋の床几も賑わしけれど此上へ工夫してなんぞ持直す事あらば所〳〵の明き家もふさがり古道具屋もないやうにのこらすあんどうを釣て繁昌すへし

尼寺前といふは月江寺の西の門から十文字に軒をならべあるしの女房か門口につつはつて鼻へ聲を入レ顔でまねいて客をまつ酒肴も望めは出してもてなす女郎ハ方々の落チ合もめんの黒布子にぬいもんしてあじをやる書の四ツ過比よごれ布子に一重帯でおもい〳〵に居風呂屋へ行キあがり場でわいら同士色事の噂も共いきおはひとつなり往來い在所者此所にうちがいをたゝく

也

六万だいしよまん此所煮賣といふものを立にして内に呼ひ物のあるも見へ又外からもつれてくる尼寺のてうしなれと折に少まさりたる有り皆此あたりハしろとめかさす心いつはい女郎めかし艸双紙屋か作ッてわたして門〻へ諷ふて來る國太夫ぶしせめてかたけの精進をといふ反吐の出る文ン句を覺へさても能ゥこける聲じやと思へは愛ハ祭文かたりの住所なれハ共ひゞきなるへしなじミ紋日の沙汰もあつて相應の花をやる也

花菱ノ卦

花菱の卦ハ　安治川　靈符　八軒茶屋　編笠茶屋　眞田山　北野　梅畑

右皆此卦に屬ス安治川留島新地堀江のかたありて女郎ハ汐風にもまれてしやれを専とし緋鹿子のじばんの襟おしくつろけ引すり下駄なやしかけて呼屋入ッ客もさま〴〵のていある中にこゝ

大臣と見へて空色つむぎに江戸ぶとりの帶羽織ハ着ぬも着たるも打まじりて碇をおろし初よりゐびすの繪のある大盃で呑ミかけヤアラめでたの若松ゐとてつぺいから聲を出してうたひ女郎よんだ客ハてんま舟のごとく腰元ニひきつけゆふへ松屋の門てあふたのにヨウ見ぬ顔でまぎつたナアとひぞりかゝればツンナ太郎丸いふておくれなトレ其酒瀬ごししやうかと助ケてやる又酌に出た小女童とらへてぬしめはたしかにあら屋じやおれがゐぶ付てをこと手を握ハ此はつさいもまけて居すヨツトあたつてくれなんすなあま貝しやといふハそんじものじやといふ事か陸では聞なれぬ隱し詞て遊ふ所へ亭主がそとから戻つて是ハ〳〵ありかたひ重荷かとれた富士見客に浪くゞりなんぞ珍らしひ吸ものをはしらかして參りましよと臺所へ立て一座のかぢをとればこれから遊びに足かいつて屛風へ入津の段をたのしミ曙の追風に目をさまして戻り道迄をねまきなから送り狀みのかね言も僞ならぬ住よしの神かけて只無事着をいのるのミ也九條嶋ハ又はるかおとりたれば其品をしるすに及はす芝居ハせねど櫓もあつて遠國入込ミ繁昌の地なり船おろしによばれた戻りか鯊釣りのついでによつて此卦のおもむきを見給ふべし

北野　梅畑　此わたりハ表へあらわれすしてよほどふるき所也素人といふは楯にしてよび所も外商賣をかねひるの燒餅店　夜るハ其生餅屋となり又畑近き井地のほとりひしかきの格子の家

寺子屋かと思へは内には菅笠風呂敷包なと取ちらしかうかい髷いほつとり風俗二三人藪入あゐいは出かわりと見せて大かたまつ黒なるしろもの也すぐれたるは曾根崎一丁目の素人出の位也能々目利して遊ふべし

眞田山　此所の婦人靈符の格にしてちかごろさびて又かわりたり狐の穴深くほのぐらきのうれんから一重帶の尾を見せかしられ四ぶ一のかんざしに水牛の角く櫛安おしろいの厚化粧藻をかづくやうに身仕廻して顏も鼠色ニ化けちかき在郷の若ものにのりうつるまたぐミたの長兵へ八坂の三六など異名て呼ふ客多く入リ込隠し詞も一段おちこさんせうをつみ色なじミのわけありてたてひき強く春ハ相應に賑わひわなにかゝる人多し

あミ笠茶屋こゝも素人を表にして大かたくろし雀すしの名所なれば百迄の巾着錢にて樂しませ折にまこと素人あるハ皆はぐれた伊勢まいりのやうな風俗毎日風呂へ入りやるかときれい好きする客がとふて見るほどの事也つとめなれたるハ相應にゐたいをかざる折にはミめよきしろ人出る事あれとも甚まれなり其時を能考へてもらすべからす靈符此所ハこばん屋町より這入ル門あつてそれより細き辻子にのうれんをつらね婦人ハ曾て素人めかさすずいぶんくろがり菊野さくらなど大名をよびなじミの義理あいかたのせりふもかわ

ることなしこしをのすとあたまうつ二階を座敷にも寐間にもつかひ床の段になるとあるじのかゝがさくらさんッコ味よふしてへといひてはしご下りれば合点して江戸繪と山水の天狗とはつてある二枚屛風をひきまわしひぜん湯のやうな嗅のするふとんに木枕二ッ紙くず籠も枕元に近し寐ながら多葉粉のんで逢ふ事をひつはりおまへ御なじミがあろなとぞつとするほどおかし血氣の若ものハもつたいなくも朝參のついで空腹で遊ふもあり爰も好色の修行所也

八軒茶屋　此所ハ靈符と品かわりておじやれの躰なり店にハ蛸の天蓋鳥貝の高もりを置いて前たれがけにて人をうなづき客ハ多く武家の奴ッこらさを初として近比多く入込ミ繁昌す遊ハんと思ハはずつと這入て座につき是をと思ふやつをうなづいてきせるか茶か乞へばはやわれじやと合点して前垂はづし閨中の事に及ふ也かゝる所にハ看板の首といふものありてよい顔を門口のきつはしへ出してまねかすればそれを目當にして這入りこめろ呼んでさし圖すればアレハ内の娘御じやとれぞ外のになさんセといへばぜひなくどうぞやくをつかむ事あり能ミ見さだめて遊ふべし

蔦菱ノ卦

蔦菱ハ　上塩町　野堂町　馬場先新地皆此卦に屬也婦人ハ塩町五六丁目馬場先すじ野堂町此あたりを上品として御寺のしくじり請出された始人倒た小茶屋の娘喰さがされの中居新町ほぐれのとしま肩落して内義出又博奕打のやけミた女房とあいたいづくで廿日卅日つとめさせ呼びにくると子をとなりへ預けて俄に唇に紅粉をぬり張る乳をもミこんでつとめるもあり一昨日から坂田市太郎が後家か出ると珍物さま〲の落合ィ所也衣裳ハつむぎかゞ郡内じま素人出は糸しまに黒ぬめゑりはゞひろからぬむらさきちりめんの帯おの〲價ハ段〻ありて花のせん香ハ呼屋の臺所に立て客へきまりをミせ呼屋の上品といふハ路次の内にたいがいな隱居様といふかまへ又下屋敷の住捨てしかもよき庭に木〻しげく石燈籠ハ見へず鴨居にハ額の取レた跡の折レ釘のミ殘りようすの調度の家居にとりあわぬもおかし又品くだりてハ表ハ肴屋裏ざしきをとり

つくろひて客をするもあり大かた路次の内の住居多し藝子もひんしやんと仕まわり琴引きの瞽女も來今川といふ法師此近邊の住居なれば大かた是を學文所にして今ハ浪花獅子いさゝめも間に合ハする也ひところハ野堂町に地ぞうめんといひ一名長刀ともいひて存もよらぬ判官どもいりこミはやらせたりあつちにハねからじまんせぬ事て此所に過たるよいものハ曉也裏道の野傳ひ秋ハ朝露にむしの聲殘りおちこちの鐘によべの酒氣をはらひなかめつゝありくうちに遠き山に日の代ほのめく此景しき又捨られす馬場先新地の婦人ハ同し格に見へて又おとり塩町も一丁目ハ位はるかおちたりびんろうし染丁子茶ぎんはな色皆もめんじまひしかしひぢりめんの内衣のはつかけハよつほど珍らしき物也同卦たりといへども變爻にわかちあり能ゝ考へて遊ふへし

檜扇卦

檜扇ハなんば新地の卦也女郎ハ坂町のおち堀江の仕替　尼出　娩出　新造の出る事さし紙口ぶれ日ミ數をしらず又此所に我内あつてかりミせから出るすいがらしまたい顔してつとめる狼ありよう行くといふ女郎ハ存之外りきミはやるとはやらざるとハきつぱりと衣裳にあらわれ入レこゝの新造どやつき此間逢ふたまかない出を呼にやれはけふハもつ去んだトいふ出るも入るもいそがしくちか比別而繁昌の地也新造といふも大かたくわせものにて誠の素人ハかへつてしろとめかず出合の女郎にもまけずすいらしひ事いひたがり味やろふとする所是本白の正銘也爰も藝子ハ女郎より勢ひ勝て内證の色事もしたへはどふなりと是になづんで入來る客多し是まで嶋の内て鳴らす藝子此所より出たる事あまた也うつぼさるかたし貝かつら女三ッ四ッ覺へるとはや十一二から座しきへやれは可愛がられて大ぼやしにまけずはやり扱もよい顔立じやマア二三年したらきつとしたものじやと思ふて居るうちちやんと向ひ側へ出た噂此所の福新といふ置屋必よき藝子を仕立る店也中にも年のたけたる藝子ハ强仕立にして着物も壁下地のあらしま裾ミしかに着なし帶ハかるた結ひ髪ハひつゝき地聲ハ少うらがれて何やらわめき〳〵座敷へ通り客を見てコリヤ珍らしひ顔じやなあとなめかけなんはの鉢のミ今にわすれぬわいなどふじや河堀へ御出たかとがいなる事をいふを專にして三味せんつぎ國太夫の道行よいもん何な所を中程

から諷ひ出して古〻けれどよいかげんに山にそつきにけりサァこれで祝義ハおさまつた其馬びしやくの酒助ヶふかと胸を叩ィてゑら呑ミけんもよつほどじまんでゆびをそらし　バヤ　リウサンカ　よいやなあと角力身になりこれを悦ぶ客は六月の土用の中でもまんざいをひかせて聞たがりさかなばしで傍にある茶碗たゝいて拍子取りしつほりとたのんますぞとしんそこからおもしろがり此やうなあばれ藝子を奴トいふ異名つけて稱美すればのりが來て腕まくり上ヶ濱芝居の物まね客の羽織とつて着ておくりがてらのぞめきたいこ持らしびものに行合ふて辻て新八よあほよと大聲上てのゝしり皆興のさめたるおかしさ也又たいこ持の中にも漸〻跡の月から八百屋をやめたれやらが弟子に成ッて苗字をもらひあんどうへ名を出したつたひとつのかたびらに五寸斗のもんとりもちひつぱつたやうな黒ちりめんの羽織を三種の神器ほど大切にして呼にやれば少遲う來て只今向側へ往ておりましたと問ハず語り嶋の內てつとめたを官位に進んだやうに覺へしいおらしさ是にハかへつてあハれミありて能客の付〻ものなり呼屋ハ座敷へかゝが出ればとゝハ板本にひかへかわる〲つとめて小女童をあしらひ家なミに榛かし一本つゝハきよろりと庭に植て土細工の燈籠ぶらくりきたない柱のふたにした聯も一二枚かけたり此地ハ嶋の內の料理人仲居のミせ出しといふもの有てそれをつたいて思ひもよらぬ客も來り醉さましに

歩行きまわつて此所へ落るもあり近比よき客人の入込事おびたゝしそれかと思へは嶋の内の茶屋置屋の親父曾て色事の出合にはあらずして内のあしらひのうさはらしに此所へ來て客となりて大判官の遊び孫に持そふな藝子をくどくやら又向ひ側て名の通つた何澤何山などいへる法師折／＼客になつていぢのわるいむりいふて遊び我つとめの骨を休める也種〻のおかしミ有て勢ひ強き卦也

新屋敷是も右之卦に屬して女郎ハ一段おとりたれとだん／＼はなやか也ちかき比まではハ呼屋置屋もそこ／＼にありしに次第に賑やかなるによりて其隣の豆腐屋又となりの灸屋も仲間入りして軒にかけあんどうをつらね千とせ屋松もとやなどめかしかけて終に一トかたまりの色里となりそれ相應に藝子たいこ持も涌て出て遊所の道具皆備りたり女郎ハ堀江のおち塩町の仕かへなど往來しちかき南方の在郷を引うけ木津なんばのふし達入り込つつこんで遊びかけ間夫の立引のき狀のせりふまだ日のくれきらぬうちからちくごのもんのついた手ぬぐひ頬かぶりにして久兵衛や七兵衛やと呼つどひぞうり下駄かまびすし中にも素人藪入などいふて一段わびしき呼屋もあり婆々どふじやといふて這入るとたれでもちかつきのあいさつして置屋へ呼に走るついでに肴もいふてくる女郎めんふく仕出しにむらさきつむぎの帶燒桐の引ずりぐわらつかセ若きハ

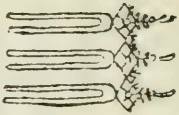
ぴいとろに綿糸の入ッたかんざしやうのものあたまにかざり座について八文粉くゆらせ手あらふない客と見ればおまへがたハこんな所へほんの氣で來やなさらぬとおかしひ所でのぼしかける手くだハ相應に覺へたり素人とゝいふもの折にはあり近比けしからず色里めきて繁昌の所也

寶結ノ卦（たからむすび）

寶結ハ堀江の卦也○衆人入り來ル事しげし○迎ィ甚性急也 ○大前髪と色を諍ふべからずかならず力强し 此所船手を請て近來繁昌の地にして活氣の遊ある所也本茶屋といふ名目ありて此宿へはいくわいする女郎を上品ゝとしそれより下ニ至て羅生門柳小路まとり町ありあい町の類多し大路地ハ此所の古地にて濫觴の所なれと今ハさびたり阿彌陀池前ハ糸北野七本松同格也上品といへとも一座二座のわかちありて新造始出時ニよつて景物多し又藝子の器量ハ浪花におゐて此所にまされるゝなし此藝子の色事にて活氣陽氣のよき客いり込はなやかなる遊ひも出來る也此里に限らすいづくても

むかし女郎より藝子をひき廻したるものを今はうらはらとなつて女郎から藝子にひらをいひしたかふ様になりたりとりわけ爰の藝子器量すぐれたれど衣裳のもの好ミものゝいひはなしつよくいやしきハ殘り多しかり初にも藝子會といふ事ありて座敷の噺にもきのふの會には南から靏山さんと政嶋さんと見へたと一向宗か門跡様の御傍へ出たほどに有がたかりあつたら能ィ器量に三寸二ふの大ばちシャにかまへ浮寐の鳥か潮照姫と道行をやりかけ淨るり三味せんを専とし鼓弓尺八までを持あるひてつとめたいこ持の古老ハ曾部子梶忠今ハ後生一へんに取入りたるよし夫より後の若ばへの幇間數多ありて拳と打て置けとで座をくろめて賑きやか也隣座敷て強そふナ客の咄ニ七めが此中卯月八日に爰へ來てゐらうさやしおつた一口に拾七貫手放したと錢ざん用もをかし何やら市といふ座頭をよへは思ひもよらぬ年寄りにて比言ハきび獅子にぼたんをいまだに宙で覺て居て大事の物じやけれどひとつ旦那へ上ヶませうと有馬の小間もの賣がいふ様なしミついたあいさつしてひき出すを聞ば靑ものつくしの宇治川の先陣中程から中居にふき込んで止めて囃へはまだ上戸と下戸とのせり合の淨るりがござりますとへらず口是もいつそ興となる此所の呼屋の景物違きものハさだめて音にも聞つらん天にとゞろく關取はなやかなる客入込詩人書家誹偕師茶人画工乱舞かた様〳〵の獸此所へ行かぬもなし此地ハ南ニまけま

ひとする活氣あれば先此鏊子を手に入れ女郎のたばね買たいこ持の大よせと出かけ肩をはつて名を鳴らさは日〻いせひ強き卦也



桐臺卦

桐臺ハ新町の卦也〇日夜諸國より待人入リ來ル事速也〇かりかし有て毎夜心のまゝ也〇婦人門ヲ出るにハ障りあり〇太皷ならは事を定むへし

此卦にあたる女郎ハ十才にミたさる比より抱へ仕立て禿となづけ其容皃大吉ハ太夫ニつけ半吉ハ天神につかハせ凶ハ追廻しの小女童となり是も時を得て鹿洲の位に至ル也其身禿の比より我したかふ所の女郎のいきこミを見習ひ又樂屋のせりふ內證の物うき事を知りぬいて居てもおもてを高上に仕込ムゆへ爰を大事とつゝしミ其事をあらわさず曲輪の外といふ物ハ夢にも知らされハ世界の義理もおこないも皆こんなものと覺へしぜんとあどなき所あり其運をひらくの時を

得て新造となり思ひもよらぬ子細らしひ名をつき姉女郎が形に成て引廻ハしねりものの足揃へするやうに引て出る迄の稽古に身を入れ道中の座ヱ腰鼻に汗もかゝず裲くばり裾さはき内股を見セず初對面かしの座敷一段と位をとり酒事のもてあつかひも能の泣様ゥと同し事て盃ハ口迄ゆかずこつつりじまひ申是にと斗ふうわりと立ッ大やうさ茶も生花も間にあわせよろづの事舊きを聞て新にあらためず衣裳手まわりのものも古風に物數奇をくわへ發句の一枚摺を嘗て南艸入レにせずむかしからの疊紙引舟といふ番頭有て賣り方のせりふは是に打まかせ世上のはやり言隠し言葉知つて居てもかりにもいはず粋がらず野良役者の出合座敷ほれて居てもまあびろつかず女郎同士のせりふ付届ヶ外よりハきびしくわけのわるい客ハ禿を大門口に待たセて付させ髪を切ルなどいまだにやまずゆびの沙汰起請のとりやり間夫をぬれとゝなへていつ迄もぬるい事して居るが一段高上なる所にして此味ひなくば曲輪とはいわれまじ陽氣一へんの判官辦慶揚屋入りの高調子ヤツアコリヤ〱ナントカナァと門口からなりこめは花車中居きよろりとした顔でていねいなあいさつ此拍子には合わぬ所也それにもこりず座についてものまね身術輕轉と出かければ南てするやうな事なはると中居か輿をさますたいこ持ハ大かた菊太夫須磨太夫と正風躰な名をついて座しき浄るり宿替へする程本をもつて來て只今小栗の三の詰をかたります

とていねいなあいさつして眞顏てかたれはうれいの所になつて一座の女郎中居ほろりとした顏腹をかゝへる事也又屋敷客の弓矢八幡左衛門大座敷に居續してサァ太夫どのと一所にたべふ叓へ膳をすやれと思ひもよらぬ物ずきもの喰ふ間もはなさぬ仕うちもうるさい顏をせず宿の妻とひとしき女郎のあしらひなれは身か奥にせにやならないとのりか來る𦬇におとらぬあづまもうろく格子先から覗て扇を鼻にあてヨイヤ〳〵トほめるなど西霸時代の双紙本にある姿今に殘りておかしあいかたと双六打遊ひ折にはたいこ醫者相手に碁を打つもあり白人ならはごばんをあぜかへして仕舞ふ所をきつとつとめて傍をはなれす是此所の女郎の行義をミかく段也禿の卷之丞が太夫さんの使にいたと見へて首斗ハおごそかに身ハ內着のまゝて何やらうまそふな物を紙に包んて戻る所を客にあいてくわつと顏をあかめよこきれにはしるなど外里のわるじやれ女童にハない事捨られぬ所也中にも客のさびたる揚屋ハ只座敷のミはきちぎり庭の梢にハ落葉うちかゝりからうすのごほ〳〵糸車のびい〳〵もかすかに聞へてわびし又時にあふたる揚屋ハ調度いかめしくうまからぬ物を臺肴の目八分亭主ハむさと客にあわすたま〳〵座敷へ出るを見れば思ひもよらぬあわせ賛五ぶ下ヶあたま前大阪一象の來た時分にはやつた男ふり名も何五郎何三郎とつき文盲な高上な噺をあつちから仕かけて遊ひに來てくれいとはたいていでいわず此一風

俗又おかし水遊びの本家なれは色事爰にまされるハなし闇を帷幕とし材木をしとねとせる惣嫁さへ西横堀を見れは夫レ〳〵のわけありていかつけなる男爰かしこにたち。のくのかぬのせりふ同し事て東堀市ノ側の惣嫁を見るにむくつけなるものの袖引込メば此男少聲ひくめて八文で合ッ点かといへは此君袖ふりはなしそんな心じやないとあちらむく賣詞に買言葉ヲ、銭ハこつちのじやといひ捨て四五間に過行ケばヲ、イ〳〵と呼戻すどふじやまけるのかと立かへれはヨゴンスそんなら遊びなんせと茄子賣同前辻君さへ西横堀ハ根元なれハこれほどの違ひあり。さる田舎儒者の物語せられしハ此所ハ炭火の有た時から風流今にかわらすどふなはまセこふなはませのことばつがひゐといふをスとゝなへるハ子の字ニテ敬ふ詞也それゆへ油上の豆腐も爰でハひりようすといひ又きやしやな所をいわば内證で禿呵ルにもけたいのわるひをけもじのわるひといひますとしかつべらしく申されたり下手な誹偕師に宗匠といへはほゝゑミ弱ひ角力取を關取といへは肩ふると同し事にてはし女郎でも太夫スといへば心わるからぬてい是おもてを高くもてなすゆへ也なしミの客にゆびを折モゥ何年ンのなじミじやと久しく逢ふ事に深く義理をふくミふるべき所ハきつとふり逢ふからハべつたりときて閨中の事をもつはらにして其情厚し。ぬれの小宿よろづかゞくうしきをいとわす色情のミをたのしむ色事の出合ぬけつくゝつつ又外

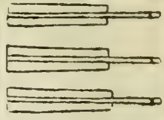
になき味ひなり九軒の揚屋高嶋屋兩いばらき屋佐渡住よこ住次に茶屋も數しらす共あしらひの定味皆一同也是をはなれてきやら平といふ粋會所ありさすかに外里とちがひて明八よろ又などいふひゞきのわるい名もなしちか比ほの〳〵といふはあかしやの事にてしろと仕立のこそ〳〵金魚の中の石くらひも又一興也只傾國の情ハ此新町の古風にとゞめたり客此卦を得て名を上んと欲れは先揚詰にして次に請出すへし高名疑ひなく勢ひ至て強くなる卦也

附　錄

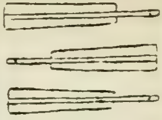
色道五ヶ條の占

來るか來ぬか
内に居るか居ぬか
うそかまことか
末とげる緣かとげぬ緣か
叶ふか叶ハぬか

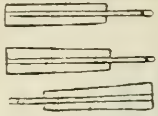
此五ッの事を占ふにかんざし楊枝扇にても一本持心をおさめていたゞきいづれにもせよ信する所の神佛を念じて扇をなげまさまにても逆樣にても竪になりたるを陽として頭を左りにし横になりたるハ陰としてかしらを右へなし三度なげて一卦をおこす也はじめに投たるを下モの爻として段々後ほど上になる也なげたる扇のゆかミたる時ハ竪へちかきを竪とし横へちかきを横と定むかくのごとく三度なげ三爻を得て一卦成る此卦を奥にあらわす所へ引合せて其占の吉凶を知るべし



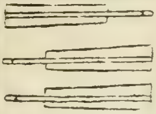
來たらす
うちに居る
まこと
すへとげる
叶へともあふ事遅し



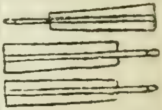
すゝやかにきたる
内に居ず
いつわり
末とげす
叶わず



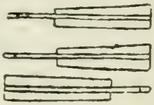
來らずして多來る
内に居ず
誠なれととりしまりなし
末とげず
叶ふ



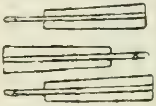
來る事早し
内に居る
誠ふかくしてわするゝまなし
末とげる
叶ふ事早し



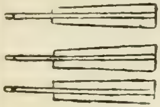
來たれとも遅し
内にいる
まことなれとじやまあり
すへとげる
叶ふ



來る
内に居る
誠なれとうたがふ心あり
末とげる
叶ふ事遅し



きたらず
内に居る
いつわり
末とげず
かなへず



來たらず
内に居る
誠あれと人に深く隠す心あり
末とげる
叶へとも少遅し

[illegible]

句花縱情

月花餘情序

其殘先生曰。蓋聞天以日月爲枕。地以四海爲褌。四結易解。神閼深閉。孔子刪詩也。關雎爲之首。宜哉。君子也。小人也。何莫由斯道也。由則耽々則爲恍惚。余嘗見江南妓邑之俗。大低有鄭衛之遺風。由此知其笑止。辛氣。肝積。則亡國之音。我飲。拳酒。無息。則内損之基。有色君子。豈夫不愼乎。採色子在傍曰。是其殘樣何爲謂乎。夫色可色非常色。若欲知其色。可色者非常遊妓邑劇場之間。則何能知彼其色。可色乎哉。月花餘情成矣。因題其端云。是其殘樣何爲謂乎。

見釣行燈曲中

獻笑閣主人題

月花餘情

此書。不知何人之作。初有妓邑記。次之以燕喜。〻〻ハ即詩閟宮之語也。終有祕戲篇。祕戲即帷幄之事也。於菟饅頭之甘。多良須計之苦。各有其味。非味中味。而膾炙人口者。豈非此書耶。

江南妓邑記

浪華江南有妓邑。故蜻蛉之地今屬島之內。其地也帶二江之雙流。一長堀。一道頓堀。望高津之本社。劇場前張。櫓高懸。木戸常喧。幟大連。有歌舞妓。有操。有唐繰。有見世物。終于此。初于彼。徘徊于其間者則男女老少坊主神主。目送者。顧眄者。呼者。應者。趨者。躡者。見招牌者。運辨當者。衆口囂々有喧嘩。有千話。絡繹不絶。凡人之往來千百人。而莫有同者焉。其間有妓。通稱白人。於妓之中。又有新造者。年增者。皓齒者。若詰者。異体而同致。有御所出者。有屋敷出者。後家出非愧見。而夫。尼出何得持五戒。帽子。被。菅笠。則適其宜至衣帶之美與頭上之飾。凡畜妓家。曰置屋。不遑勝論。匿衣服風呂敷。曰包子。從妓奴輩曰廻漢。送迎必乘駕籠。置屋。妓在置屋不侍客。々來酒樓。則使人至置屋招妓。凡買妓。一日一夜曰揚。如客容一九一分晝夜。買其一或二三。炷線香占刻謂之坐切。妓來曰送。歸曰迎。如馴染而逢者。不俟駕行矣。有稱藝子者。彈三味線。而佐酒。年紀略限于二八前後。絶不薦寢席。因又稱無色。取于情竇未開之義。然而今稱無色者。則無色。而大色也。酒樓邪俗稱茶屋之婢。稱中居。於其選也。不論美與醜。專貴妖態。凌于世。重于

客。緡兮廊前垂輕翻。緇兮繻子帶高結。袖手振腰甚於轎夫。向斜日則反掌障影。醉生于小歌曲。夢死于淨瑠璃。唯酒無量不及亂。劇場則不欠初日。而定評判如時花曲因循藉口。中居未染齒者。稱小女郎。雖夙傚顰。首飾之產毛未除。爪垢猶黑。至其染齒。則婉妖異常。詩曰。螟蛉有子。蜾蠃負之其斯之謂乎。紋日則不移子所謂。從于門松立旦。于桃于柳菖蒲。檐灯籠二度月。菊佳節歲暮。是宊其他。至如彼岸庚申之類。凡三百六十日之間。而有三百餘度之日柄。噫夫此邑之華也。燕喜之娛也。秘戲之味也。遊此境。則不懼親父之折檻。而致居續之長。太皷酒闌忘吐血之朝。中居賞頻思醱醵之夕至間夫狂之手段。通殷勤于格子。忍人目于檐下。歡然相見。私情相語。於此也。引替寒聲之昔飛雪。而恨野側幽僻之地（女所謂城偶之類）。詩謌之書出。食言于鉄漿付之客。盡情于深間之夫。與下離此全盛之邑。而受中出彼江湖千里之屋暮作上。寧作權助三助助左衛門（稱部疑之人時花曲中之詞）之下嫁乎。凡百君子。敬而聽之。

【客花情來ル】どふじや。いかふきむいの。【中居とよ】花情さんよふおいなはつた。サア。おあかりなはれ。これお久米どん。御茶あげまさんせ。サアマ。御上りなはれ。【廻シ左助來ル】わたしが所の。おとよと。お尋なさつて。下さりませ。【とよ】はやいぞや。【客】いかふにぎやかなの。神樹のもてなしがよいとみへた。【とよ】サアニおつしやるやら。是おなつどん、花情さんのおいなはつたぞや。【中居なつ】ヲ、よふおいなはつた。御まへ。マアせんどれ。きつうのましなはつたぞへ。今ン夜は。きつとしかへしせにやならぬ。【客】それおれがしつたとか。ろしうがのましたのじや。【くれしやつや奥ゟ出きまに】これ喜八。中の間へ大こんの塩煮出しや。ヲ、花情さん。よふおいなはつた。とよなぜ奥へやりましやらんぞいの。サァ御こたつへ火をいりや。マァ奥へおいなはれ。【客】いや〱。今ン夜れ。いなにやならぬ。【くれしや】なんのこたいやいな。そして。マアどこへおいなはつた。【客】ちと此邊に用があつて。【くれしや】そんなこつよいわいな。マアちよとおいなはれ。ついもどしますわいな。ちと御咄し申事が有わいな。ほんに是く云ふか。とよおなと挨拶さしミてかも。歌夕さんの。御みおい。きて有ッた。

【中居くめ】ァイなんじやいな。花情さん。奥へおいなはれといふて。手を取【中居くれしや】諸ともに。いや〳〵マァちよつとおいなはれといふておだてを塩に。【客】ア、御意がおもひ。然らバ奥へといふ露の。すつてん〳〵。ヤァ喜八髮高にゆふたな。大分能ィ男じやといふて。あたまをちよつとたゝく。【料理人喜八】ハァ是れいたもとじや。【客】やつはり我商賣で。口あい。やりおつたと。いひ〳〵。奥へ行。こたつにもたれ狀よむ。【とよ】たばこ盆持出ル。御こたつの火ハよふござりますかへ【客】ゥ、よいぞふな【とよ】夕ァ申シ。ろしうさんのおいなはつて。何やらぎやうさんに。御かんしやくで【客】てきハ常かんしやくじや。またそしてのんだであろ。ヱ、夕ァきたらよかつたもの【とよ】サァ夕ァおいなはるとよいわいな。たいていおまへを。戀しがりなはつた事じやない。又大びらい襖になつてな。わたしも。喜八どんも。とんといきついてな。【客】そふであろ。よふのむやつじや。【くめ】とさん持出テ申シ。歌夕さんへしらすぞへ【客】いや〳〵。あのばゞいやじや。【くめ】ナァニをつしやるやら。そんなわる口おつしやると。つげるぞへ。【客】大事ござらぬ。日がらのへんがへするよりましでござろ。【とよ】又やつはりわる口じやわいなサァ一ッあがれ【客】どれ一ッのもふか。そりやくめさいたぞ。【くめ】ハイおとよどん。こなんにさそ。わしやちよつと。歌夕さ

んの所いてくるぞや。〔とよ〕いてごんせ。〔客〕どふでもか。人身御供にとられたと思ふていよわい。〔とよ〕ヨウおつしやるぞ。〔くれしや〕罷出。いかふさミしい事じやナア。夕さんへ。おしらせ申しやつたか〔とよ〕アイおくめどんの。いてござりますす〔くれしや〕申。御まへハ此間。桔梗屋においなはつたかへ。〔客〕ちと付合が有ッて。〔くれしや〕それにマア。よふ御寄りなさらなんだの。そして。おまへハ何ンぞあくしやうなんしたそふなの。夕さんのきゝなんして。夕アわたしが所へちよッとおいなはつて。大ていはらたてゝいなんしたとじやないぞへ。〔客〕いや。それハてきが間違ふたゆへ。付キ合ヒに。何やら新ぞうがきたが。きつふ。酔ていて。何じややら覺へぬ。〔とよ〕いへおまへそふじやなかつたげな。〔客〕もふよいわい。のもふじや有まいか。〔くれしや〕御てうし。なをしておじや。そして喜八に何ぞ爰てたくものしておこしやといや。〔とよ〕アイ。〔くめ〕罷歸り。夕さんおいなんすぞへ。〔客〕よい事の。〔くれしや〕是くめあんどもひとつ持ッこおじや。〔くめ〕アイ〔とよ〕こうし直し持出て片手に濱梅持來ルしばらく存内のかつてより疊こがさわ〳〵なりて〔女郎哥夕來ル〕座に付。直にこたつへ當る〔女郎〕おつやさん。夕アハ。〔くれしや〕ハイたんとべゞきなんしたの〔女郎〕アイとつとわたしや。今宵ハ。いかふさむいわいな。〔くれしや〕マア一ツあがれ。〔女郎〕アイ又しばし盃事あつて亭主〔佐右衛門〕紙子のそでなしの綿入羽おり着て出ル花情さん御出遊しませ

【客】すつきりあれぬの。佐右衛門ハイ今宵ハ。樋屋へだいそく構に参りましてござります。扨精進酒ハどふもゆるせでござります。壹ッのミ直しますでござりませふ。これハ。マア何ぞ御吸物出さぬかいといふて。手をたゝき。中居をよぶ。【くめ】アイといふて出る。【佐右衛門】こりや。喜八ニさいぜんのくもわたを。ちよつとすましにして上ヶませいといふてこひ。扨。マア。あがつてごろふじませ。むかいの京升屋が。此間京へ。仕かへものについてゆかれましてその土産に。若狭のたらの。雲わたを。けふもらひまして。御座ります。きつと。じまんで上ヶます。【若】そりやよかろ。【女郎】くもわたとハ。どふやらこわいよふなものじやナア。へ、、、、と。手のかうを口に當る。【くハしや】わたしもあないなものは。いや。それ巾。猿のこしかけといふものが有ナ。てふどそれいな。【女郎】ヲ、。いや。きミのわるひもんじやなア。【客】ヲ、。きさまのいこうぶつの。りうきういも程かわいらしいものハ御座るまい【女郎】ヲ、にくといふて。きせるでせなかをぽん【客】そりやあれるハ。【佐右衛門】おまへにきせるでたゝかれた引ハ、、、ミゝ【小女郎さん】料理なべにせうやきしてもち出る【くハしや】ヲ、あぶないもちようじや。爰へおこしや。【とよ】火はちの火をなをし鍋をかけるさん 何やらくハしやのミゝねぶる。【くハしや】ヲ、そこへいことい や。

【客】何ぞ。大きなものにしやうか。【佐右衛門】よふござりましよ。これかいと云て。吸物

わんの覆。【客】よかろ〳〵。先はじめ給へ。【佐右衛門】ハイ。北の方つぎ給へ。【くれしや】よしになんせいでの。だいもく酒がよほどあるそふなぞへ。【佐右衛門】ア、そふいわずと。つぎめされ。ヲ、。上かんじや。旦那上ヶましよ。【客】ちよつといはゝか【佐右衛門】南無有がたし。夕さんはゞかりながら。ちよつとなさつて。おくれんか。【女郎】ハイついでくれなんすな。夫より酒になる又【中居かね】出る【客】どふじや。ねからかまわんな。【かね】イへ。よいから巾。御客に付キまして。岩田屋へいて。おりましたといふて。客いミヽねぶる。【客】しまいにしておけ【かね】ハイといふて。かつてへたつ。【くれしや】巾げいこさんなとちよつとよびなんせんか。【客】いかさましめ野。よびにやつてミや。もし内にいずバ。さんごなと【くれしや】ハイといふて。たつ【佐右衛門】巾ちよつと一ッけんさんじましよか。【客】そしたら。此大びらの覆にしよ。【佐右衛門】これハきつい。アヽ。まゝよ。スウ。ロマ。サンナ。無手。リヤンコ。ロマ。おはね。イツコウ。スウ。トウライ。【客】サア。どふじや。【佐右衛門】イヤこれハきつい【げいこしめの】来ル【客】すつきりあわぬの。【しめの】アイ夕さん。さむいな。【女郎】アイ。かハいらしう髪いひなんしたの。【しめの】こちらのお春どんの。ゆふてくださつたが。どふじややら。ぶら〳〵して。わるひわいな。【とよ】たばこすい付やる【しめの】おとよどん。わる

い色じやぞへ。【とよ】二日ゑいじやわいな。【しめの】二上りチンシヤンそでにつゝめど小袖のあられこぼれやすさよワがなミだツンテレ、ツトンロンともになきつれかへるからチンチテツトツトツウテチリ、よそに見なし一思ひこそやれなとや心のながるらん【客】しめ野ひとつのミや。【しめの】アイ【客】（小便にたつ 其間にしめの）夕さん。夕ア新さんにあふたにぞへ【女郎】アイ。わたしも八ッ過にしまふて。あふたわいな。【しめの】楽しミなさんすの。【女郎】ナンノイナ。なんじややら。むしや。くしやじやわいな。それ。されどいナ。たばこ入レの事でな。たいていはら立てじやないわいな。アノ。そしておまへの所の。妻木さんや。やつはり文五郎さんかへ。【しめの】アイ。此間わ。なをしこりじやわいな。【女郎】ゑいやうに。心得てくれなんせへ。（【客】小便を手水鉢のまへ ゑしてもどる【しめの】）哥うたふ【佐右衛門】所作する。（【客】ねころぶ此時し ばしされぎ【女郎】）おや〳〵ひとつくれなんせ。【とよ】アイ。茶もつてきて。夕さんちよつと。たいなん努。【女郎】アイといふて。勝手へたつ。【佐右衛門】勝手へ引【くめ】しめ野さん仕廻なんせ。【しめの】アイといふて。先ッたばこのミて。三味線しまふ。【くめ】はな唄にこよひあをとてよもないかどを行つもどりつしめ野さん。おまへのたばこ入レ。見せなんせ。ア哥がるたにしたものじやな。天神さんかいな。【しめの】なんのいナ。くげしゆじやそふなわいナ。鳥もなく。かねもひゞかぬ里

もがな。ふたりぬる夜の。かくれ家にせむ。【くめ】かわいらしい哥じやなア。【しめの】さばへ。【客】近日〳〵。【くめ】おゝしやうししめのさん。ふり袖が。ひツくりかへつて有わいな。【しめの】わしやいやいなと。いひ〳〵。勝手へはいる。其間に。次の間に。屛風のおごく拵へある。其外。枕のせめ道具有。【くめ】巾。ちよつと御休被成。【客】寐て居る。【くめ】おゝしやうし。巾。あちらへいて。御やすみなされ。巾ゝ。【客】ゥ、。ア、。よふた。どりや小便してろくにねよか。【くめ】ナァニ。いゝなさるやら。【女郎】つてにてか おつやさんわたしが。つゝミれ。どこにあるぞいな。くれしや それとよ。夕さんの。つゝみ上ヶましや。どふじやいな。正月の。いしやうれ。大かた出來たかへ。【女郎】さいな。すつきりわたしが。思ふやうにならぬわいな。わたしや。黑ちりめんの。しろあげもやうに。しやうといへバ。こちのお熊さんが。そう色ちりめんの。無地がよかろと。いゝなんす。どふで。おもふやうにならぬさかい。わたしやもふ。かまやせん程に。どふなとなんせとうそバらが立たさかい。ぐつといふたわいな。そりやそふじやが。花情さんに正月五日出てくれなんせといふてやつたが。まだ何とも返事なんせん程に。おまへも。そふいふて。くれなんせ。【くれしや】ァィ。わたしも。そふ巾そふほどに。おまへも。そふいゝなんせ。そして。おまへハ。いつが勝手しや。【女郎】

まちなんせやといふて。鏡袋より。のべの覺帳取出し。こうつ。マア。五日と。九日と。十三日と。十七日と。廿三日とが。わたしが。勝手じやわいな。【くわしや】もつとよい日を出なんせ。そりや。おまへ。わるい日。ばかりじやぞへ。【女郎】さいな。それもまた。どふなとするわいな。マァおまへも。そふいふてくれなんせ。【くわしや】ァイ。マア。奥へ行なんせ。まゝ上りなんせむか。【女郎】いゝまゝわいやじやが。ちや〳〵一ッをこしてくれなんせ。塩いれてへ。そしてわたしが所い。源七が。見へたら。たばこ持ッておじやと。いふておくれなんせといひ〳〵屛風の内へ

秘戯篇

此篇蓋記㆓帷幄之事㆒

而今ハ亡ブ矣惜哉惜哉

內臺雜篇

陽臺遺編序

博愛之謂色。行而宜之之謂勤。故勤有全盛有下卑。分其階級則傾城。湯女。白人。誦子而無他壹是皆以薦寢爲本然而手管口舌之夕也。曙也。捫咬付且恨且泣遯揚詰之御客潛小宿之逢瀨其將如何滔滔者遊女皆是也。於是乎錯錢淵日以深切增年月以重憔悴干切戀遂落于劇場之文作孔子曰少之時血氣未定戒之在色宜哉矣余頃日得陽臺遺編一本此蓋月花餘情之後編而奇談益多情趣尤切唯恐讀者以其閨閤之支而忽之聊附之小言云

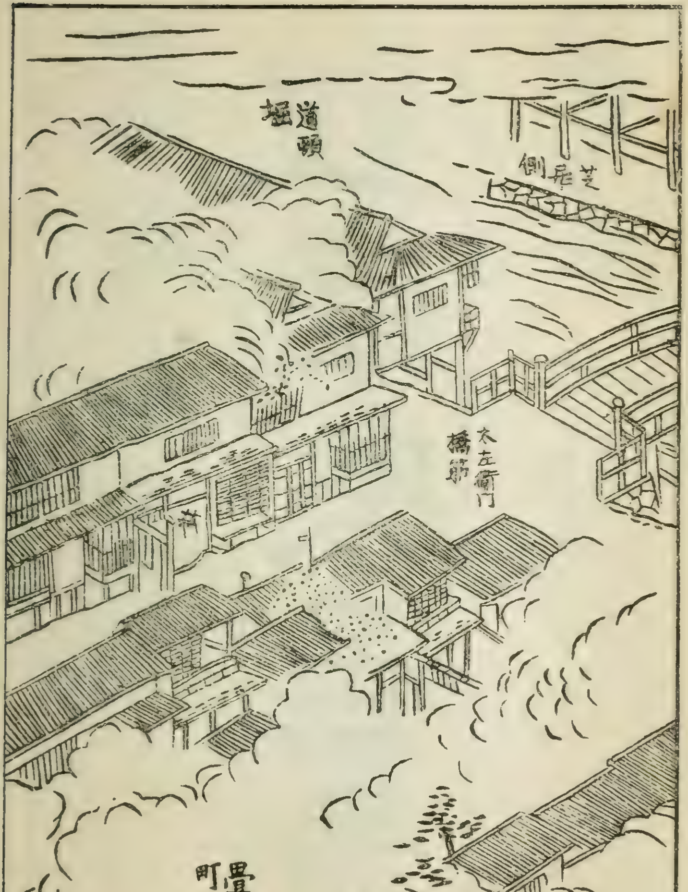
獻笑閣主人題

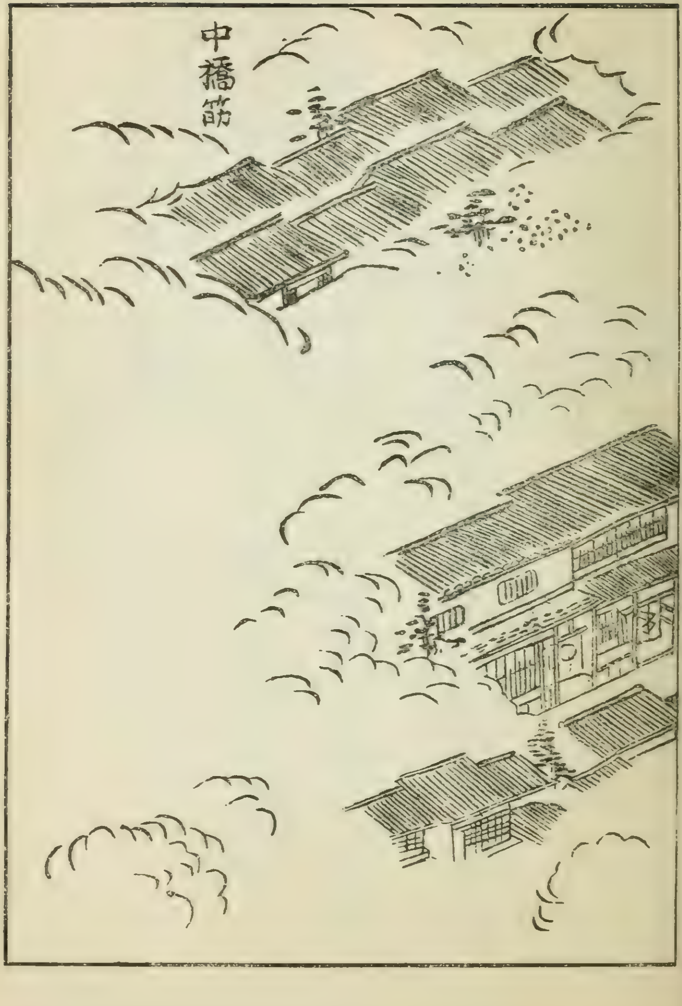
毎部必有印記
若無者係僞刺

竪橫細見

江南數邑啚

開卷一覽


道頓堀
芝居側
太左衛門橋筋
畳屋町


中橋筋

江南花樹歌二首

其一

席邊花亂眼　隨意欲飛香
可賞紛紛色　渾含帝女粧

其二

捲慢花奇麗　賞心薄暮時
坐中餘逸興　慇懃春風吹

江南早春

浪速之陽春色開　雲霞帶彩入樓臺　傳聞此際繁華境　無數東風
實快哉

秋夜游酒樓賦

得春花色色新

臥閣頓生春　春花色色新、
先欺庭際雪　或就陌頭塵
對酒偏含笑　吹香倍帶銀
可憐風雅事　堪弄賦詩人

觀妓

秋風張宴浪華濱　醉愛傾城掌上新　生憎搔頭斜墮玉　況堪動翠謾催春　若非羅綺叢中薩　定是瑤臺月下人　願使麗情長不負　欲期佳節別相親

戲贈妓女某氏

絃歌聲湧翠樓邊　初月如花帶笑懸
寄語扇家年二八　含情幾度鬪嬋娟

贈歌妓某氏

秋滿江南十二樓　新歌一調轉嬌候
恨無由薦陽臺夢　買笑千金醉裏投

浪速之陽有妓邑（中橋街太左衛門橋街疊屋街汚地志云此三街者人物絶倫風不在成周之下矣）妓邑之間人文而不野博又玄也財産豐積樓閣宏麗無朝無夕紅靴窄窄聒耳曳紈綺珥金翠光麗與豔逸霞蒸雲蔚揚映千秋歌調則奏當時之紗曲庖膳則窮海陸之珍味春宜燕喜緝翠蔓於苑間雲霞呈彩秋宜祕戲出明月於枕邊金碧交輝風景之佳也恰如画圖自無情者觀之則消魂斷腸自有情者觀之則無不流涙無不驚惋孟子不云乎不觀於此邑者難爲景遊於此邑者難爲言千歳不易之確言也哉此故逍遙于此邑者亦皆翩翩孔門之選也（德行顔淵閔子騫冉伯牛仲弓言語宰我子貢政事冉有季路文學子游子夏）不讀六經而志大雅君子之道不務弄翰

而修文章不朽之業今古不可以無此邑而不可以無此遊矣是歳早春予與二三遊子運朝夕之策定合會之計而遊于此邑遊則有按歌調妓者原是稱藝子者也自金以來呼藝子稱無色多以妓之富春秋者而當此役然有年及不惑務于此役者但是百中之一二而已以按歌調爲悅者也有白人者原是稱白人史記游俠傳索隱曰原是稱薄仁而可達可行於天下而後行之者也有也一一音訛轉以薦寢席爲務中居者呼酒樓之婢稱中居不論美與醜凌風塵而重賓客者也其他有爭色而負恃者及鬪美而取憐者數等皆遂婆娑乎交戰之場休息乎口舌之囿嗟夫此邑之華美也人物之文雅也抑亦聖王之遺風乎將仁者之餘流乎禮樂之盛行文物之全

備蓋此謂乎予感嘆弗已毛髮皆立背上灑々然不覺賦蕪詩若干首而當故友之覽故友速爲冊子名陽臺遺篇而贈予亦不得已遂叙陽臺之由而酬之云爾

旹九月十三夜醉題于江南酒樓

秘戯篇

【女郎哥夕】まづたばこのむ（中居くめ莨持テ来ルまた切炭のいけてある火入と下地の火入といれかへる）【中居くめ】夕さんなんにも御用れないかへ【女郎】いゝへ源七がたば粉もつてきたら。くだんせ。こなんれおきばんかさむかろふナ。【くめ】ァィおきばんしやわいな。何なと用が有ならいひなんせ【女郎】その屛風もつとこちらへ引てくだんせ。【くめ】ァィ哥川乃瀬もなる夜半もなるにといひ〳〵勝手へ行。【女郎】まづねる。ふとんきる。扨たばこ吸付ル巾し。これいな。又いなまたたぬきねいりなんするといふてこそぐる。【客】ゥ、、、ァ、ついねたそふな。もうなん時じや【女郎】しらんわいな【客】しらんほどなら。もふよいいにおぶんじや【女郎】客のかいなへ喰つく【客】あいたゝこりやめつたにかぶるまいほうれんそうの汁がついて有ぞ【女郎】だんないわいな。いつそしんだがましじやわいな。【客】ハ、ァ世をくれんじさつしやつたの。此上に櫻のつぼミがちつたらよいていはつものじや【女郎】わたしがていはつしたら。よろこびなんしよな巾といふて。又きせるをとり。ェ、心いきの通らぬきせるじや。おまへれせんど桔梗屋へおいなんして井筒さんにあいなんしたげなようきくと思ひなんせ。どふできた。井筒さん乃よふに。わたしられ

ないはづじやわいな【客】これ〻めいわく成程以中（イチウ）や祇童（ギドウ）と付合で桔梗屋へいたが井筒とやら井げたとやら〻しらぬ。【女郎】ヘヱさよふで御座りましよ。わたしやそのあけすぐに井筒さんへ〻付届して置キましてござりますアイきつと〱いふてやりまして御座りますといふてつめる【客】こりやむごい。こんやはちやうちやくにあいにきたのじやまで【女郎】それおまへ乃氣はそんな氣じやわいな。ちつとさわるとあたげふさんな。【客】われが事じや。ちよつと桔梗屋へ行とかゝりかましう何ンなどいふて。のきたいか。のいてやろぞ【女郎】おまへが何ンのかのといふてのきたいのかえアタむまひマァなりませぬでござります【客】ならぬはたごや三輪の茶屋じやの。【女郎】そして何じやいな。きうくつらしいたびぬぎなんせ。此帯〻なんじやこはくならちつとならして見よチウ〱〱（女郎枕に紙あて。ねるくろしゆすとく）（客ふゑふき目になる）【女郎】ヲ、さむといふてふとんきる手はいとふ〻ないかへ【客】ハテいたくとまゝよ（拗いな聲姿して。フウ〱〱〱〱）【女郎】大ぞうさやうしなんしたといふて。手をのばして紙をとる【くめ】さんじましても大事ござりませぬか【客】ヲ、ずつと書院まで御通りなされ【くめ】夕さん源七どんがたばこ持てきへました【女郎】アイ爰へ下だんせ。【客】こりやくめもうなん時じや【くめ】まだ串夜半になりやいたしませぬ【客】われおそふいやゝもう八ッ過じや【くめ】いへ串ほんじやわいなまだ串むかい乃松屋

乃あんどうさへひきやいたしませぬ【女郎】めつたにこんやはいにたがりなんすワいのなんぞ内かたにょいことが有ものじやあろぞいな。【客】ずつとょい事が有るはじやにしかられる。【女郎】よいワいなあしたわたしが居ていひわけしてあげやんしよ【客】そりやすうきがよふて牢へ入よふなものじや【くめ】マァもそつと御休ミなされ。わたしがょい時分におこしますわいな【客】そしたらマァ一寸きらりよ【女郎】なんでそないに。そは〱なんす井筒さんにやくそくしておきなんしたか【客】又井筒がでた。その次而にいつゝやの客れどふした【女郎】のいたわいな【客】どふいふわけで【女郎】どふもすめぬ事が有たワいな。こんどいふてきかしますで御座んしょ【客】聞れきついりんきしやであつたげな。【女郎】どふもなるものじやなかつたわいな。やうじにたつ事もならなんだわいな【客】いやそれほどにまたおもワるゝといふ事れたいていい乃事でれないさためし御馳走がよかつたものであろ。【女郎】あたいやらしい。そんな事いふてくれなんすな。あのはなしれきくもいやじやれいな【客】（また少シおきて手てんがう）【女郎】ァ、何なんすぞいなこそばいわいな。ろくにねなんせ（フウ〱〱〱〱【客】ねかへり【女郎】アヽ）こないに髮をそこのふてあしたいんだらワらひくさろ【客】いやもいのわい。【女郎】マァよいわいな。まだ八ッ過じやぞへ【客】八ッ過ならョ、こワやチョン〱と手をたゝき【くめ】ハイといふて

來る〔客〕駕籠いふてやつてくれ〔くめ〕ハイ〔女郎〕又いつおいなんす〔客〕こちの乃すゝはきのばんにこふ〔女郎〕いつじやへ〔客〕いつじやしれぬ〔女郎〕そないなめつそうな事。そしておまへにあしたみあげやんす程にちよつと返事してくれなんせや〔客〕ハア、君の仰ならば返事はおろか書出しなり共上ますでござりましよ〔女郎〕にくてらし〔客〕ァ此にくてら筋の駕籠はこぬかの〔くめ〕御かごがさんじました〔客〕ヲイたばこ入レは爰にあると鼻紙紙入頭巾が見へぬ〔女郎〕まちなんせヱ、爰のふとんの下に有〔客〕勝手へ出る くめねむたそふなかほじやな おれかあとへいてねい〔くめ〕御歸りなはるか。御ちかひ内に〜中路しうさんに心へておくれなはれ。〔客〕ヲイかごはいつもの所におろしてたも〔駕籠〕ハイかしこまりました〔くめ〕仁兵衞どん頼むぞや〔駕籠仁兵衞〕ヲイ心へましたあとでどうこでまたびさしやれ〔くめ〕かまいくさんな〔女郎〕表のくゞり戸のきわて よふ御出なんした〔駕籠〕ハイ／＼／＼／＼〔くめ〕哥夕さんもとの所でねなんせ。わしもおまへとねよぞへ〔女郎〕またんせはしやちよつといきたい所が有〔くめ〕またかいな。もふ七ツまへじやぞへ〔女郎〕だんないわいな。ねんぱらししや。ちよつといてこ〔くめ〕そんならまちなんせはたしがついていく。これおさんちつとの間おきていやこれ／＼／＼いの。てもよふねる子じや。これいの〔小女郎さん〕ゥ、、何じやいの。〔くめ〕これついあそこ迄夕さんおくつてくる

程に共間おきていややねやんなやさんァ。「女郎」かわいそふにノゥ。そんだいあしたわしが、いまめぎんちやくやろふぞやサァ來てくだんせよい人じや「くめ」おまへの事なら。なんのいなといふて。中橋筋の門のきわで「女郎」ヱ、もふねてゐるそうなわいな「くめ」そふほかいな。「女郎」ヱ、ついこゝにねてじやけれどどふもおこされハせずまたんせ砂ほつて見よばら〳〵〳〵ヱ、これでもおきくさらん「くめ」もうよしになんせけつく内の首尾がワるか新さんがわるかろぞいな「女郎」サァそれおもふてゐたゝかんわいな母親はなけれと子ハそだつ。よしおもハじと思へども。袖は涙に道ハくれヱ、こないにいふても馬の耳に風ほんにかぜひいたそふなハァくつさめサァおくめどん。こんやハいのあたとんなこないにさむいめして來ても何とも思ひくさるまい「くめ」サァどうで男といふものハ。女子の思ふ程にハないものじやわいないつそこれからいむてじやうが酒壹ッのんでねなんせ「女郎」ほんにそうしやうわいなこなんいかこたいぎじやあつたなァおさんもかわいそふにねむたかろし「くめ」サァもどつたはいりなんせ戸ぐハら〳〵〳〵「女郎」おさんとんねむたかろふのふ「さん」イ、ヱわしやもとりなんしたらと思ふて玉子酒しているわいな「女郎」よふきかついたかわいゝ子じやおくめどん一ッのんでねやんせ「くめ」アイせいがつきすぎやうかいな「女郎」よいわいな。わしとねるとよいか

げんになるワいの【くめ】サァおいなんせ花情さんのあとでねよ是おさん表はしめておいた程にもふねやゝ【女郎】そのあとならふるふてくだんせ。【くめ】そんな事いゝなんすと花情さんにつげるぞへ【女郎】いわんせだんないわいのといひ〳〵もとの所でねるより高いびき早壹番太こにからすと共に朝むかいのかごにのりやかたへもどりすぐにべゞきかへこたつへはいるよりほんの夢中〳〵

娼閣秘言

置屋の段

置やの小女郎【たね】哥夕さんおきなんせ【夕】ウヽ【たね】これいなおきてまゝもくいなんせ。風呂もよいぞへ【夕】ヲヽせわしない事じや。何ッ時じやいの【たね】もふ八ッじやわいな【夕】そんならおきて風呂へいろか。花咲さんハおきかや【たね】アイもふおまへよりさきに風呂へいりなんして。今まゝくふてじやわいな。それでお熊さんのはやふをこしてこいてゝ【夕】コレそしたらふろへいかふ程ニかぶらおろしておいてたもそしテの玄周さんのかうやくをやいとのふた程ニ二ッしておいてたも 夫ゟ風呂へ入てまゝくふ身じまいべ屋へ行前ニ 置やのくハしや【おくま】これ子供衆早ふ身じまいさしやれ。たまく留りに行と。七ッ時分までねて。そして風呂の。身じまいのと。それじやさかいでよそからよびにくると。一ッもまにあふことじやない。またこちの子供衆程よふねむたがる衆ハない程にの 夫ゟ【花咲】【哥夕】ハ早化粧べやへぞ入にける

身仕廻部屋の段

【女郎花咲】哥夕さん夕ァ新さんにあいなんしたか【夕】いゝへ。夕ァも客を早ふいなしてしまふやうにこつちから帯といて手廻シたけれど。つい七ッまへになつて。それからかどへいてわめいたけれど。よふねていたわいな。あげくのはてニ風引てのけた【花咲】ほんにおまへのはよくじやわいな。わしら此間ねッからあわぬ。そしてあたいやらしい。あの伊丹の客めがねから夜があけにや。いにくさらん。そして夕ァもぬかす事聞てくだんせ。あのこのやうにあつかましういふて。あすは身仕廻ぐやで。御そしりであろふとぬかしくさつた。それでわしがおもふにはなんのおのれがこと啣しせふと。心で思ふていたわいな。そしてマァおまへァノ新さんとどふでもめうとになりなんすか。浦山しいことじやナァ【夕】サイナ新さんもマァもつきなりわしももたるゝ氣じやけれどおやごさんがかたいそふなわいな。それでマァわしも氣にかゝつてどふもならぬわいな【花咲】なんのいなおまへがたは高で此嶋での色じやもの。なんぼかたいといふても。町方のおやごさんたちのやうにやないわいな。そりやついちつとあちこちともやくがちつとあろと。それでついおまへは新さんの所へいきなんすやうになるわいなどふもこんどすめんのがわしらのじやわいな【夕】それでもあの助五郎さんの親ごさんは。たいていすいじやないげなぞへ【花咲】サァそのすいも。こゝらでいふとたいていのやぼじやないわいな。

それでわしや末の事おもふと。とんときがわるいわいな【夕】そりやおまへのがまちがひじや。こゝらのすいといふれ。大分あつきかまじるわいな町の粋のすいなれねからどくがないさかいで。たいていよい事じやないぞへ【花咲】そりやそふかいなァ、まゝよ来年の事いふと鬼が笑ふといふさかい。いきやいにやりはなしに思ふていよふれいな。したがわしらがよふな者が町へいたら。どふさんせ。こふなんせといふたら。わらひおろし。そりやそふと角の道行にそれ。身仕廻部屋のたのしミにかわい男のうれさしてとはよふいふたものじや。（十ア茶屋山里やの小女郎【やつ】がきて）哥夕さんうちにならこのふミあげましてくれなんせ（置屋女子【はる】）どこからじやへ（小女郎【やつ】）ヲ、わしじやわいの御つかいがまつてじやほどにいまへんじしてくれなんせといふてくだんせや【はる】ちつとのままつていやんせ（小女郎【やつ】）おくまさんなになんす（くわしゃ【くま】）これわこつちの子どもしゆの。正月のきりこミいしやうにかのこのふりかけたら。みなしろぬめがよいとおつしやるさかいで。御はりにさそよりわとおもふてかけかへるのじや。わがミも早ふ大きうなつてこんなべゞきるやうになりや。そしてこないにこゞといわんやうにしやゝ【やつ】ほんにかのこのふりわ今はやらんわいな。こちの小松さんも白ぬめじやぞへ。せんど利八さんが見なんしてナヲ、ふいしゆのだんじりの狐の尾見るやうなといわんしたぞへ。これおはるどん御返事わいの【はる】ヲ

ゝせわしない子じや。これ。いなんしたらの。かうしうさんに御ゐ下されました。御返事いたしとうござりますれど。今つかへがおこりましてよふ御返事いたしませぬ程に。おいちさんによいようにいふてあげましておくれなんせといんでいふてくだんせ。〔やつ〕マア そんなら早ふいふたがよいわい〔はる〕やかましういわずとこけぬやうにはやふいにや〔やつ〕それおのれ＝おのれにおしへらりふかヮァィといふてはしつていぬる〔夕〕なんじやいやらしいあのかんしやくもちがみぜんさくおいてくれ。去ながら見てやろか。何じや此程はさむさことにまさり候へどもいよ〳〵これはしれた事よ何じや過しの御おもかげのたちさらでヲ、いやそして何じやのきのふさんき山里もとへまいりしよし＝而御うわさ承り候得ば。何とや過しのわけ御心にそまぬ事あつて。御はらだちありとの御申と聞へ候それハ何事かぞんぜぬ事。もとよりこなた身にとりまさ野とやらんの事ハ。ねから覚へなふ候兎角。ひとかたならずぞんじ候へばあらふ事かあるまい事か。御げんにことハけ申べく候つきてむかふ日十月ハ山里屋もとへ御出あり度候くどふハ其ふしと〳〵。春の氷なれてもいやなやつの。こりや戀のみ盡しから出しおつた。うすい心といふ心かいな。そしてなんじや澤辺の火より。さつてもかきおつた螢の事でこがるゝといふやうな事であろかいな。すつきりうす雪物語のよふなことじや。したがよい帋じや。此紙

で首筋ふいてやろ【花咲】コレそないにいひなんすた客めうりにつきるぞへ。そしてあの御客から来たみハ廿日もわしらハ取ッて置く。又どのやうな事てそのみ出してせりふするといふやうな事が。有まいものでハないぞへ【夕】なんのいな。なんのかのがありや。のくぶんじやわいな。したがマァ十日ハうつたものはよふいにおりやよいがマァ新さんにしらしておこわいな。わしらハ助さんのみより外ハ。ねからとつておきやせぬ。其次郎ニせんどあのわしが身あがりの覺留メて置く延紙の手帳をだれが引ずり出しおつたやら。旦那が見付ヶて。こりやなんじやといふたゆへイヘなんでもござんせぬと引たくつたが。ほんにめつたに錠いない所にかくす物ハおかれぬぞへ【花咲】サイナわしも先度中拂の書出しの内に野側のつしまやの書出しをお熊さんめが見付ヶてれいのあて事でわしやモいつそねた顔していたわいな【夕】イヤモフあのあて事はらたてふなら。じやうじうけんくハじやわいなほんにはなし斗していてねからけふハ髮ができぬ【花咲】ほんにそれつとがゆがんであるわいな。デヱわしよふしてやろ。あちらむかんせ。その筋立おこさんせ。それ〳〵それでよい【夕】ヲヽほんによふなつた。わしや其内つのぐりハゑゆわんわいな。咲さんこなんのも筋たてゝやろ。こなんのかミハよふできた。したがもふ何時じやいな【花咲】もうやがてくれるそふな。ほんに日ハみぢかいこつちや。扨

どこからもよびにこぬわ。いつそむかいノ京屋へいて。二切か。三切買ふて壹ッのもじやあるまいかへ【夕】わしらも大分こふてゐるがェ、まゝよ。どふなとなろぞ。したが牛につられてじや。そしてどふしやう【花咲】わしさきへいてこなんよびにおこそ【夕】ヲ、そうしてくだんせ【花】コレおたねちよつとおじやものいふてきかそ。これ。こう〳〵【たね】アイそんならいきなんすか【花】ヲ、もし。とこからぞよびにきたら。京屋へそつと呼ニおじやといふて。ちよこ〳〵と京屋へさして急ぎ行 京屋女子【まつ】 哥夕さんおくりましてくれなんせ 【はる】アイ そこへおくりましよ。哥夕さん京屋からよびにきたぞへ【夕】ヲ、たれじやいなといふて。駕籠に打のり京屋へこそ

濱の京屋身上り之段

【花咲】夕さんごんしたか【夕】おつやさんとふじやいな。 京やくへしや【つや】 ふたりながら何ッと思ふておいなんした【花】いやこふじやわいな。こちノお熊さんがねすりこときゝあいて。あんまりきしよくかわるさに。いひ合て一ッのミにきた。一切か二切か程。呑ミこんでくれなんせ【つや】がてんじや〳〵是おかねあのおやまさんの所から市兵衛が見へたらおきやくのあるよ

ふにいふておきや。庄八が見へても市兵衛が見へてもじやぞへ【かね】ァィ【つや】ゆだうふでもさそか【夕】【花】いへ〱ヮァ一ッのましてくれなんせ【つや】てもきついせきやうじや。これ源七ヮァのくずなもついやきや。そこに海老もあろ。サァひとつのミなんせ。ほんにおまへがたもきのミじかい。また〱こちのとなりやなんぞれ。ほんに又よたいてのきばじやないぞへ。まだおまへがたれほんにつとめよいことじや【夕】いへもわたしも咲さんも外のことはかまれぬけれど。ねすり事と何ンでもない事ニうたがれるのにれ。ほつとしたわいな。もふ此噂やめて一ッのもかいナ【つや】いつそ覆にしやうかいナァ【夕】それもよござんしよ。【つや】サアマア咲さんせんじやあげやんしよ【咲】アィこれいなこほれるわいナ【夕】是やろか。こなんのすきのゑびじや【花】アイサア夕さんさそ【夕】アイおかねどんさそか【かね】アイお久ぶりじやおもどしもふしましよ【夕】おさよかいな【つや】わしあいしてやろ【咲】すけてあげやんしよ【夕】肴ニわしおもしろい事引てかそ。おかねどん三味線かさんせんか【かね】アィ【夕】ヲ、此はちわいの。鼠がくふたかいなおゝしやうし二上り雲にかけ橋かすミにちどり。及(ハル)びないとて【咲】ア、それがなんのおもしろい事ァ、久五郎さんニしらしたいな。いつそ。みやろかい【夕】わしもくだんの所へいきたいが。あのおつやさんいつそよいやうニ

してふたりながらしまふといふてやつてくれなんせ【つや】ほんにおまへ方もやくたいじやぞへ【夕】いやもふそんはかけぬわいなへよよ【つや】そりやよいがな。そんなら何かへ夕さんハ中橋筋かへ【夕】アイそふじやけれどあのさんも内の首尾がしれぬさかい。わしや野側の大和屋へいてあそこから人やるわいナ【つや】そしたら吹さんハ【吹】わたしやいつもの通リ爰から人やるわいな。御世話なからみやつておくんなんせ【つや】アイそしたら夕さんも一ツのんで裏町へいきなんせ【夕】アイそふいたしやんしよヲ、よふそへおろしくれなんせ【つや】サアおまへのおろしが出ルと木ンのこつちや。そんならいきなんせ【夕】そしたら市兵衛でも庄八でもきたらよいやうニしてくれなんせ【つや】そりやきづかいなんすな【夕】吹さんそこでほめかんせ【吹】こなんこそたのしまんせ。こちらとほひいさかいにしれやんせむ。【つや】おかね夕さんニついていきや。是夕さん朝明ケぬ内ニこちへむけてもどりなんせ【夕】アイいてこふへと別レてこそれァ、、うらやましや　大尾

月花餘情　出來

無盡之帖

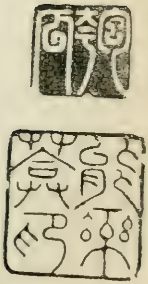
巽素六帖序

世之在宇宙者也夥焉陰陽之煦蒸萬殊之區別苦樂渾淆情愛逼迫惡可勝言乎放心六合卷悟密室蟻動爲牛鳴者聽之乖也蚊足爲鬼脛者明之異也若夫知乖異之所以爲乖異則豈無乖異歟近覽巽素六帖太素可以染哉染而後爲萬々多々之色如夫有色則必有想有想則樂亦在其中矣二十五有之中有北鬱單越又名北俱盧州翻勝處勝東南西之三州大樂長壽無憂管弦之絕地也事見寶雲經當今謂之北州者方語之畧也於爰乎序

寶暦七丁丑載孟春良辰

无々道人

與素六帖



異素六帖序

本邦の色を通曉したるものはおほく異邦の色を轉飜したる書は鮮し今この六帖は青楼の精微と北州の全盛とを折中すしかもその秋毫の末をいふすら實に綾なすの一事たりこいねかわくは黠聖ありて和漢の情相おなしき數〳〵をあらハさは野暮をして活物た羅しめんもの歟將粋長の鳳凰臺上に飽悶せるものをして蝸盧にうつくまらしめんもの歟と中氏嬉齋自序丑のあゆゝおそき日

めてたきはしめ

和亭主人

異素六帖

發例

三つの徑踏わけがたき葎か宿ひとつ竃は寒食の家を欺き米櫃の中は塵積て山姥に似たりいさかふべき妻しなければ摺小木を柱にかゝりて蛬の聲に睡り野分の外に立ましけるへき人なきに壁を隔て聞ゆるはみたけしやうじにもあらていと喧しくいゝ罵るに驚てさし覗けはあやしのおのこ三人ありてひとりは歌學者とみえて一人は儒者なるやらん今ひとり浮屠の道にかしこきにて口〳〵爭つのり心の浪たちてさわかしきもおつればおなし谷川の流れの身の事とそなりけるおかしさ忍ひかねて吹出してもきこえばこそいよ〳〵つのる言種を筆おつ執ば

佛者すこしせいたる氣色にていへ〳〵今も中通り街賣女色といふ事がござるはさ哥學者ただこたつぎなからそらおつしやるな天地ひらけ初りてあなうれしとの給ひし又ハ出雲八重垣の神詠より陰陽和合自然天然の色事ハ傾城買ては濟ませぬ諺にさへ誠なしといふものを正直の首にやどり給ふ神國の操

てはこさらぬハテみほつくしの巻にも儒者がいわくこれ〳〵これその源氏物語の憂樂も皆無常の夢のうき橋と成りはてるでハないか此間二人も痴に思ひ入ありそこじやに依て其著を離れるための遊女ト御聞なされ既に經にも引導衆生令離諸着と御說なされたは衆生を吉原へ引つれて諸〳〵の執著をはなれ彼と三昧に入るやうにとの御心遣ひてこさる といふてあたまの汗をぬぐふ 又若一日若二日若三日乃至七日とあるも皆居續事で 哥學者吹からあら〳〵はたきながら いやもふこなたそれほと賣色御執心ならば佛者相應によし町へでもこされ 儒者云 わるい御了簡わたくしが賣色好ばかりでいふてはこさらぬか無心所着の德は遊君淺妻のうへでハこさらぬか とたゝみをたゝく 哥學者 いやさそれでハ 儒者ハテまだ合点さつしやれぬ 哥學者 いゑ〳〵〳〵 儒者扇を又にかまへて片手をあげ 御ふたりともにおたまりなされ既にかた〳〵よらずかたよらず是を中と申すそなた衆の樣にかたよりたがるへんくつてはまいらぬしかし遊ひといふ事を論すれは佛道ておつしやる北倶盧州また品洲とも申す樂第一の所色の中に遊びあり遊びの中に色ある事 聊 まされりともいふべきかそれゆへ十に八九は北〳〵とうなつきます去ながら遊ふ事 必 方ありと申て方角のきわまりてある事でこざるもし鼻ても落るやうな所はかならず御無用になされとすこし分別貌なり 哥學者 貴樣のやうに和らかにいわるれは我等も岩木にあらされはいなとは申さぬ成程古哥のうち北州の法にかなつたかこさる

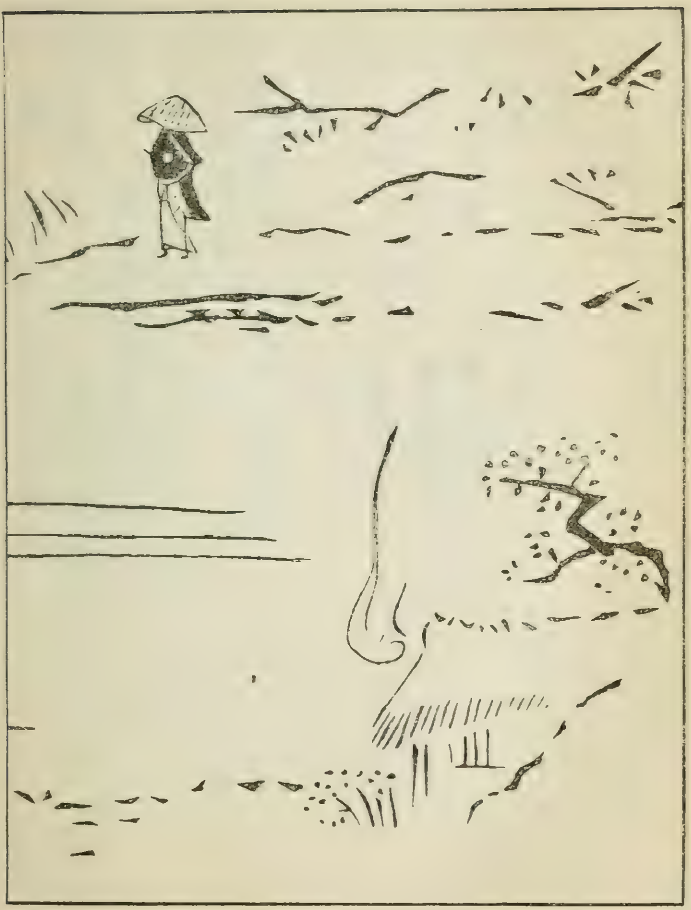
儒者云オヽサ詩にも我等それのミをよふ覺へて居ます佛者鼻をひく〳〵して笑ふエヘヽエヽヽ詩哥になくて何といたそふサァ〳〵論ハ無益先承りたい儒者いわく笙歌日暮能留レ客と申は儒者いわくアヽおつしやるな鄙の景色すかたやかて目の前に見るよふでこさる哥學者云身を盡してもお逢んとこそ思ふ佛者云是ハうまいことだ儒者云時々來往住ニ人間一佛者云ハヽア茶屋舩宿のすがたをよふいふた儒者さりとは貴樣のやうに心を付てもらへは本望しやのふなんといゝなから哥學者にむかふ哥學者っなつきなから乙女のすかたしべしといゝなからふたりニむかい是は太夫の揚屋入りをよませられし歌しやがとてもの事に題をきわめて詩と歌とを引合てみたらはどふこさらふ佛者儒者、是は至極〳〵サァ題を出しますぞ

六帖目錄　その題のミをしるし詩歌幷ニ註釋は次の卷に具ふ

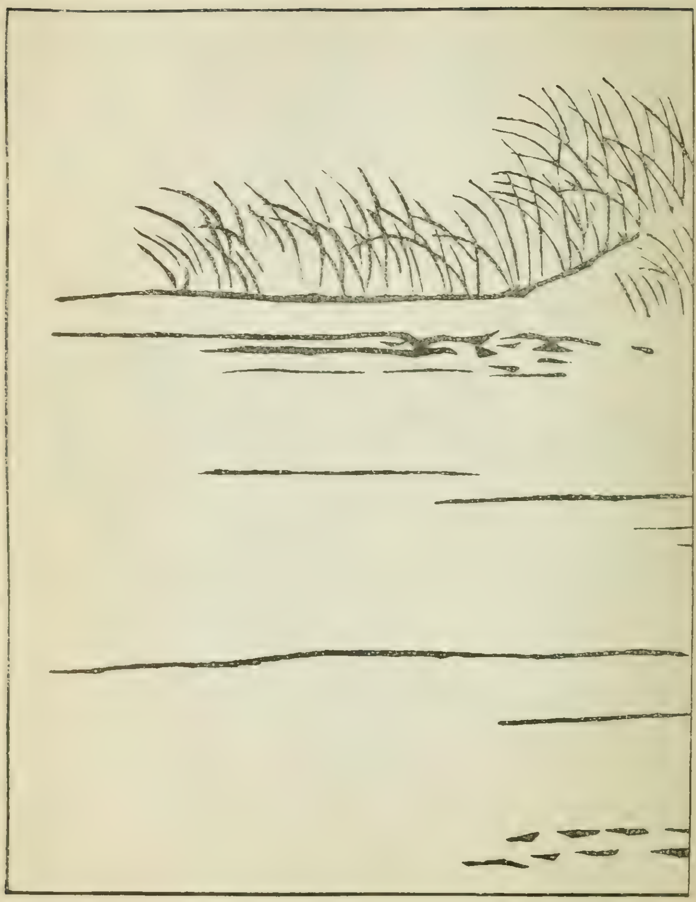
△太夫の揚屋入　女郎の衾の內
三月の中の町　番頭女郎
年明の近い女郎　けんたいふる女郎
欠落した女郎　指を切し女郎

はやる女郎
心中した女郎
俄に客のへつた女郎
性あしき女郎
いやな客に請られし女郎
工面の出來ぬ女郎
親の爲に勤する女郎
△初會能みへる客
ふられし客
早く歸らねはならね客
もらわれた客
夜道をこわかる客
無縁法界の客
△子を賣し親心

はやらぬ女郎
心中をいやがる女郎
素性のよい女郎
横に來る女郎
工面のあしき女郎
賣られて來る女郎
お茶引女郎
初會切りの客
旅へ立つ客
醉つふれた客
喧嘩買の客
戸まとひした客
爲に成てもいやな客
勤の身



八



たま〱逢ふ間夫　雨ふりの禿
牽頭に揚つた新造　月見の臺の物
面白く逢ふ夜　夜番
舩宿　惣雪隠
揚屋の紙屑籠
△質を置女郎　わるい病の有る女郎
床のよい女郎　居すまいのわるい女郎
床で骨を折し女郎
△水上の客　年寄し客
△大門の懸行燈　大門の番所
吉原の眞實

といふまでの題にてふたりともに流るゝごとくにいひしは我も聞覺えし唐詩と百人一首の哥にて有けり此時佛者感心のよだれをなかし合掌して曰誠に黄金の肌をみがき二つ蒲團三つふとんの蓮臺に座し有縁の衆生を救ひ夜みせの行燈は迷の衆生を導き晝となく夜となく黄金の光たへずァ、

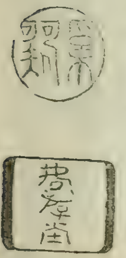
彼金光明所と說き給ふ事ことむべなり〳〵といふ時淺草寺の初夜の鐘ごん〳〵と響おもてに人の足音おほくヤツアコレサといふ聲繁し三人は顏を見合てサアといわれしより各〳〵袖形頭巾とり出しみな〳〵かしらに打かつき何れへか出られし我ひとり忙然となりてはしめて筆は硯箱に納りぬ

異素六帖上の卷終

異素六帖跋

百敷や舊代の拾遺集には遊女の歌を入れ人惜人恨の聖主は淺妻の咏をのこす加之唐紅の中將は着筒馴仁志嬬を戀ひ加古知顏の法師は江口君か爲に大悟を得たり者足曳の大和言葉諸越の芳野の里に白雪の積る文筆裳いづれか娼家妓郭の風流に洩んやと松裳むかしの友達の咄を集めて異素六帖と題し光融和き春の日の閑を助くる物ならんと其後に跋する事しかり

何遊堂爰歌



異素六帖

六帖五十五段通計

一　初三全盛の威をいふより以下の廿二段女郎のうへをいふ

一　廿三より十二段客の事をいふ

一　卅五より十一段雜事をいふ

一　四十六より五段又女郎をいふて秘事をあかす

一　五十一五十二又客の談笑をいふ

一　五十三より五十五まて總論

太夫の揚屋入

紫陌紅塵
拂面來
無人不道
看花回
乙女のすかた
しれし
とゝめん

紫陌紅塵共に唐の太夫の名なりしはくれむらさきのミちとよむ我朝にハ花紫小むらさきといふて太夫の通り名とする事なり紅塵とは紅葉のちりしきたるけしき是も太夫の名とす我朝には紅葉のゐんにて高尾と名附貴ふこのゆへに素見い人ハ花を見てかへる心地セりと也

女郎の衾の内

冷艶全欺レ雪

餘香乍入レ衣

けふ九重ににほひぬるかな

冷艶とはつめたくやさしといふ字にてあふさむなどゝ云なから夜着きたる肌の雪の伽羅のかほり猶さらにいふへきかたなし

三月の中の町

名花傾國兩相歡

外山のかすみたゝすもあらなん

名花傾國或說にいはくはなとなつくるところは黄金鼻紙の事といふ又傾國の傾ハ傾動の傾にあらすと云々今日いつれもあしゝたゝ女郎と櫻と共にたのしむとみるへし

ばんとう女郎

年光到處

皆堪賞

我身世にふる

なかめせしまに

年光はとしたけし女郎のひたゐ口の薄くはげてひかる男子なれはあたまの光るころ也としによりてかしらにひかりの出るをいふかやうにとしひさしき女郎の格別なるを

みな人感ぜし

となり

年明の近い女郎

紅粉楼中　いかに

應計日　久しき

物とかれ

しる

紅粉楼は女郎の化粧するところ也年のあき日をゆひおりかぞへといふも此事なり

異素六帖　一九

けんたいふる女郎　なり

白眼看　ふり行　けり

他世上人　ものハ

我身

白眼ハにらむ也又色目也床柱に寄りかゝりたるありさま目前のやうなり此詩尤多情なり

欠落したる女郎

返照入閭巷　　あはて

　　　　　　　此世を

憂來誰　　　　すこしてよ

共語　　　　　とや

返照の照ハ生也一生を過去へかへして前世界の住居なり手習の巻の意味歟閭巷ハ町の裏屋也

あハて此世　勤を止て客にあはて世を渡る也

ゆびを切し女郎

憑添兩行涙
寄向故園流
なかれもあへぬもみちなりけり

憑ハゆびをきりいたむによつて兩眼より涙を出したる也故園ハ小椽と注す其血を小えんかわへ出て流しすつる也

時花(はやる)女郎

春潮(シユンテウ)　人こそしらね

夜々(ヤ)、　かはくまも

深(フカシ)　なし

春潮(しゆんてう)はうしほ也汐時(しほとき)のさすと引(ひく)と也盃(さかつき)をさすと三絃(さみせん)をひくとを汐(しほ)のさしひくとなぞらへていへるなり

はやらぬ女郎

客舎平居

絶送迎

わか身ひとつの秋にはあらねと

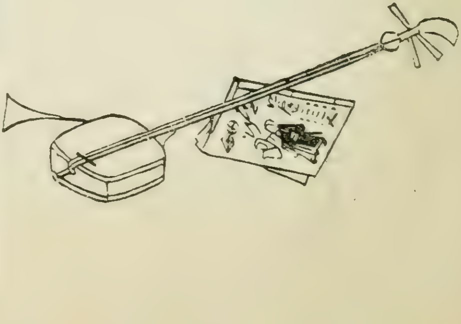
客舎は女郎屋なり平居は見世にはかりゐて客のおくりむかへにも出さるをいふ

心中をした女郎

縱死(タトヒシスモ)猶聞(ナヲキカン)

俠骨(ケウコツノ)香(カウハシキヲ)

名こそなかれてなをきこえけれ



俠骨(けうこつ)とは遊里(ゆうり)の常談(しやうたん)にしてたとへハ大きな聲にて　コハ　スキンセンニヨ　なときやうこつにいふ言葉也　香(かうはしき)とはその言葉の昔かたりにのこるをいへり

名こそなかれて　その身ハもとよりなかれの身にて又名までなかるるといへる哥なり

心中をいやかる女郎

我心渺無際

河上空徘徊

人のいのちのおしくも有かな

渺としてとハ屏風のふちにある鋲の事也こゝにあるかとおもへハこゝにハぬけてなく一定ならぬをいふ河上ハ川岸と通すかくのことくつたなき女郎ハ川岸へ出てはいくわいすへし

俄に客のへつた女郎

空山不レ見レ人

但聞二人語響一

あまりてなとか人のこひしき

空山ハ喰殘也にはかにはやりやゝんで不景色に成た女郎ハおほくの人の喰ふたのこりといふこゝろ也

あまりて　ミな揚られし中に獨店にあまり殘る也

素性のよい女郎

美人天上落

戀にくちなん

名こそおしけれ

天上より落とハ雲のうへ人ともいふへきすぐよき人のいやしきつとめするゆへ落るといふ或說に天上より落るとハおしき女の腰かぬけねハよいと案するこゝろ也と云々

性あしき女郎

澗水東流後向西

身のいたつらに

なりぬへき哉

澗は間也間夫の事也水は粋也間夫する身の野暮ではならぬゆへ凡て是を間粋といふ東流とは流れの身のひかしの人をもあやなし西の人をもくるめるをいふ

横に來る女郎

相見兩不厭

まつとしきかは

今かへりこむ

兩不厭とハふたり客をにかさぬためのはかりと也或説に云不厭はお助の心ありといふ此説よろしからずつとめなれは也

いやな客にうけられし女郎

只有此山中

雲深不知處

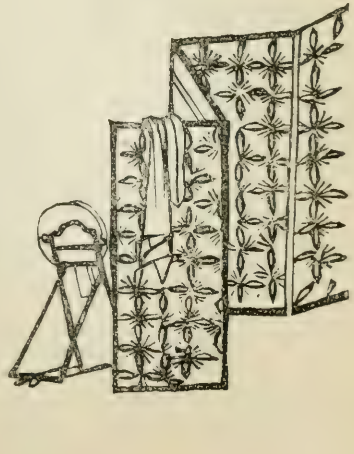
むかしわものをおもわさりけり

雲深してとわいはゆる有頂天之下暗雲覆といふかことく也

くめんの
出來ぬ
女郎

妾心正斷絕　君懷那得知

ものやおもふと人のとふまて



妾とハ女の自稱の詞也その初を考に玄宗皇帝色をおもんじ艷を専とし給ふゆへ女を見ると酒にしよう或は踊にしよう妾〳〵との玉ふにより宮女自分の事とおもひミつからも妾といひしより女の通稱となる君を懐とハ客をさしていふその身のくめんあしくくるしむを客のしらぬとうらミたる也

くめんのあしき女郎

但見涙痕濕

不知心恨誰

人をも身をもうらみさらまし

涙痕ハうらみのなミた目をうるほすといふあくびやめうばんにてなくをれいれす

賣られて来る女郎

故郷(コキヤウ)今夜(コンヤ)思(オモフ)二千里(センリ)

寒しと思ふ　世の

親のためにつとめする女郎

獨在異郷爲異客

毎逢佳節倍思親

うきにたへぬはなえたなりけり

異郷異客の異ハ花里通商考に云風俗地女國に異なりといふかとし

佳節ハ紋日なりそのくるしミことに親里をおもひ出す也

御茶挽(ちやひき)女郎

弾琴復長嘯(タンメコトヲマタナカクウソフク)

なか〳〵し夜を
ひとりかもねん

嘯(うそふく)とハ嘘(うそ)の皮をむくといふ事也我うそいまた誠(まこと)のうそをつとむる事ならぬゆへから隙(ひま)なる時(とき)うそのうハかはをむきて眞實(しんじつ)のうそをミがきいだすこゝろ也

初會よく見える客

吳姬緩舞留君醉

今一たひのみゆきまたなん

吳姬はうつくしき女也吳はほめ詞也美服を吳服といひ若竹を吳竹といひ食喰ふ物を吳器といふかとし

初會切りの客

羽客笙歌此地逢

離莚數處白雲飛

行衛もしらぬ戀の道かな

羽客ハはねがはへてとびありくきやく也或書に四手駕ハ羽胖か翅を生るといふたくひなり

ふられし客

深林人不知

明月來相照

かたふくまての月を見し哉

深林ハ大きなる林にて帆柱になるへき大木あれとも人しらすして用ゆることあたハすくやみたる心也

旅へたつ客

欲別牽郎衣

郎今到何處

今ひとたびのあふこともかな

郎とハ男子の通稱團十郎介五郎なとゝいふかことし

早く歸らねはならぬ客

遮莫　　　あかつきはかり

隣雞(リンケイノ)　　　うきものは

下(クダルコソ)五更(ゴカウニ)　　　なし

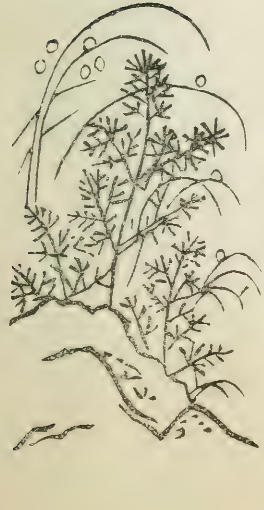
醉つふれた客

醉(ヨツテ)臥(フス)ニ沙場(シヤジヤウ)ニ君(キミ)莫(ナカレ)レ笑(ワラフコト)

みたれそめにし

われならなくに

沙場(しやじやう)は砂利場(さりば)也君(きミ)はつれをさしていふ

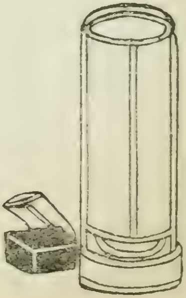


もられた客

閨(ケイ)中(チウ)只(タヾ)是(コレ)

空(ムナシク)相(アイ)憶(オモフ)

ころもかたしき獨かもねむ



閨(けい)はねや也圭(けい)れ玉(たま)とよむ字(じ)なり門(もん)のうちに玉あるかたちかんがふへし

喧嘩買の客

獨自狂夫不懐家

人にしられてくるよしもかな

狂夫ハ競なりきをひ男也獨とハ音どく毒と通す人のどく〻なれはなりひとりと訓する事ハ人の非を取用ゆるゆへなり

夜道をこわがる客

送レ君還二舊府

明月滿二前川一

有明の月を待出つる哉

君ハ女郎也旧府ハとしふるき家来也府ハ夫也君か送て旧夫とかへると訓へし

戸まどひした客

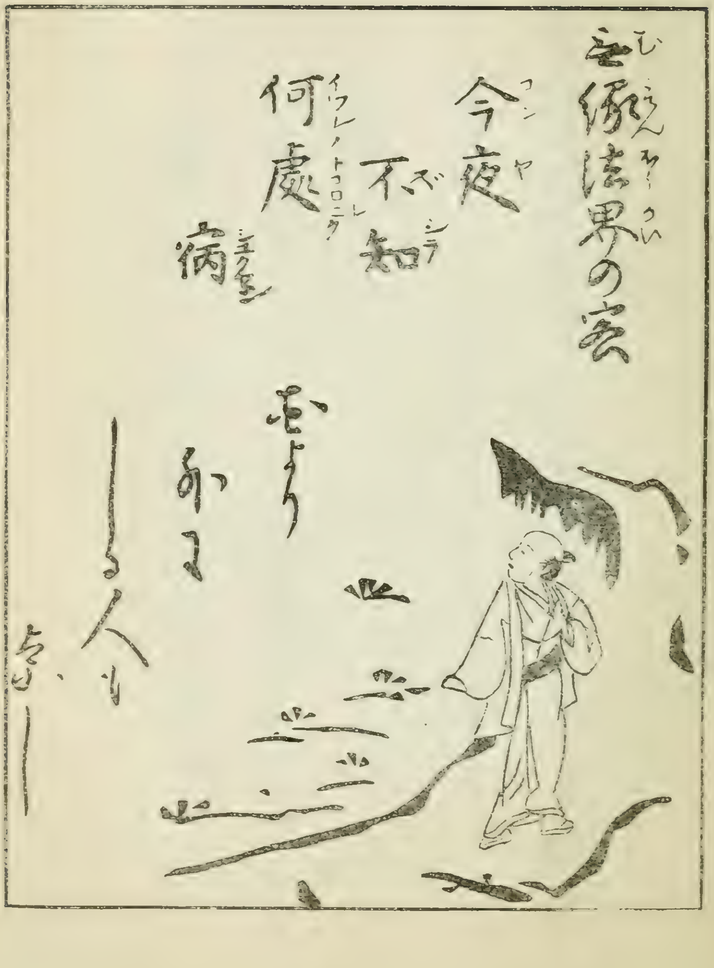
擧頭望山月

低頭思故郷

雲のいつこに月やとるらむ

擧頭ハ仰なり低頭ハ伏なり戸惑して小便に出小便するとき首の所作あり人道ハ常なり

この情工夫すへし


無縁法界の容
今夜不知何處宿

爲に成ても　人こそ

いやな客　見えね

何處　秌れ來に

秋風至　けり

秋風至は身にちかく秋や來ぬらんなどよみし心也秌風に扇をすつるといふて客に逢氣もうとくなるなり

子を賣し親心

愁聽寒螿淚濕衣

我衣手は

露にぬれつゝ

寒螿はきり〴〵す也此むし篭にやしなはるゝものゆへその聲をきゝて我子の籠入になりしをおもひ出しなり

つとめの身ハ

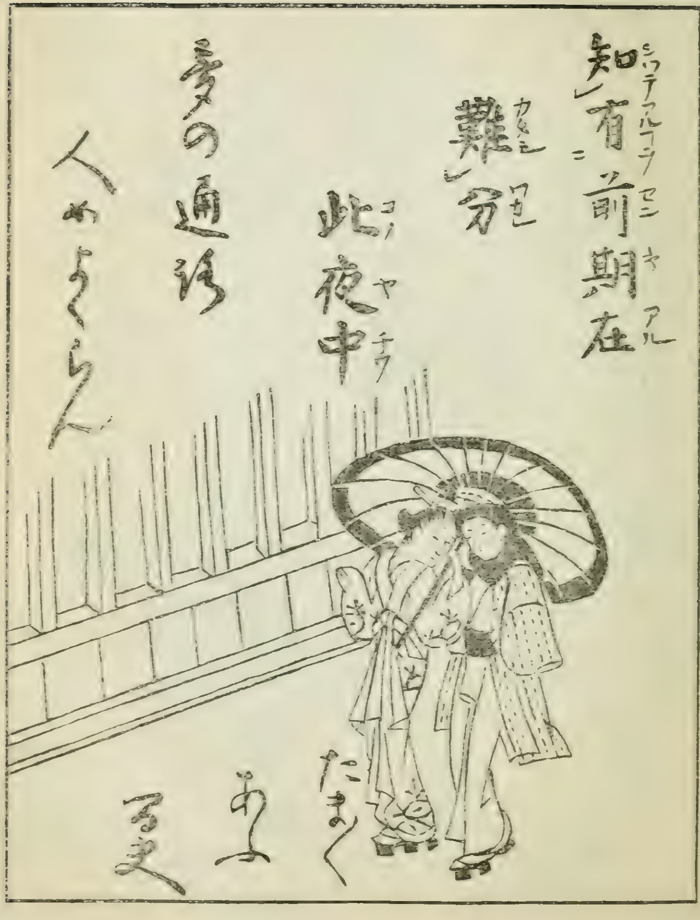
相逢(アイアヒ)　しるも

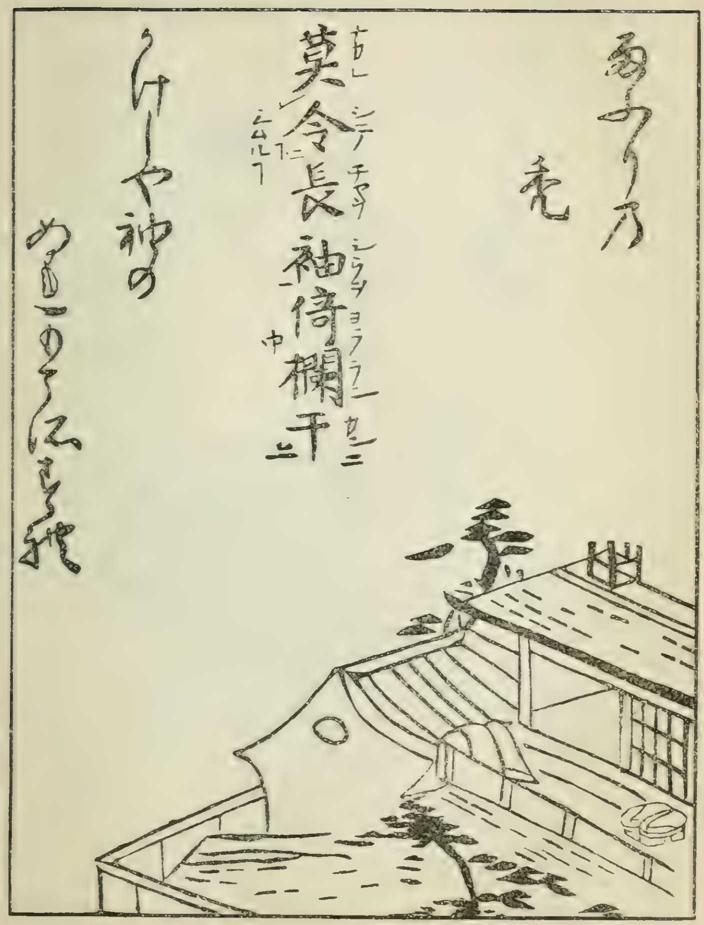
相値(アイアフテ)　しらぬも

且衘杯(カツフクムサカツキヲ)　逢坂の關

且衘杯(かつさかつきをふくむ)とハさかつきをふくむに法(ほう)ありその一二をいはゞ　チヨツトアゲヤセウ　マヅ〳〵

ワツチハタベヤセン　オトリアゲナンシ　なといふ粉骨(ふんこつ)あり


知ㇾ有二前期在一
難ㇾ分
此夜中
夢の通路
人めよくらん


莫令長袖倚欄干

前期とハ古注にやくそく契約なとゝいふ今考るに期の字盖起の字ならん歟前起るなるべし此意にて見るときハ次の句をのつからわかる

長袖ハふりそで也長きものゝぶら／＼するをすへてふりといふ事和名抄に見えたり

かけしやらんかんに袖をかけし也又駈出したるともいふ義つうず

たいこに揚つた新造
閨中少婦
不レ知レ愁
またみも見ず
あまのはしたて

閨中はまへに注することく少婦はしんぞうをいふ
あまのはしだて　あまとは是も新造也格子はしへならべたて置ゆへはしだてといふ

月見の臺の物

一時回首月中看

三笠の山に

出し月かも

回首とハ中の町の方にてくびを回セバ月の臺爰にありかへつて座敷に向へハ又月の臺ある也

面白く逢夜
總向春園裡
花間笑語聲
なをうらめしきあさほらけかな

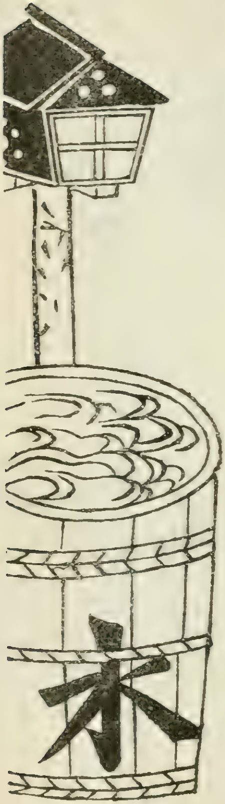
春園裏とハ花に對するがとき閨中をいふ花間ハ花ハまへにもいふごとく黄金鼻紙なりその花をやる時ハ坐中賑にとりはやすゆへ笑止なるかる口を無理にわらひほめる座持を云

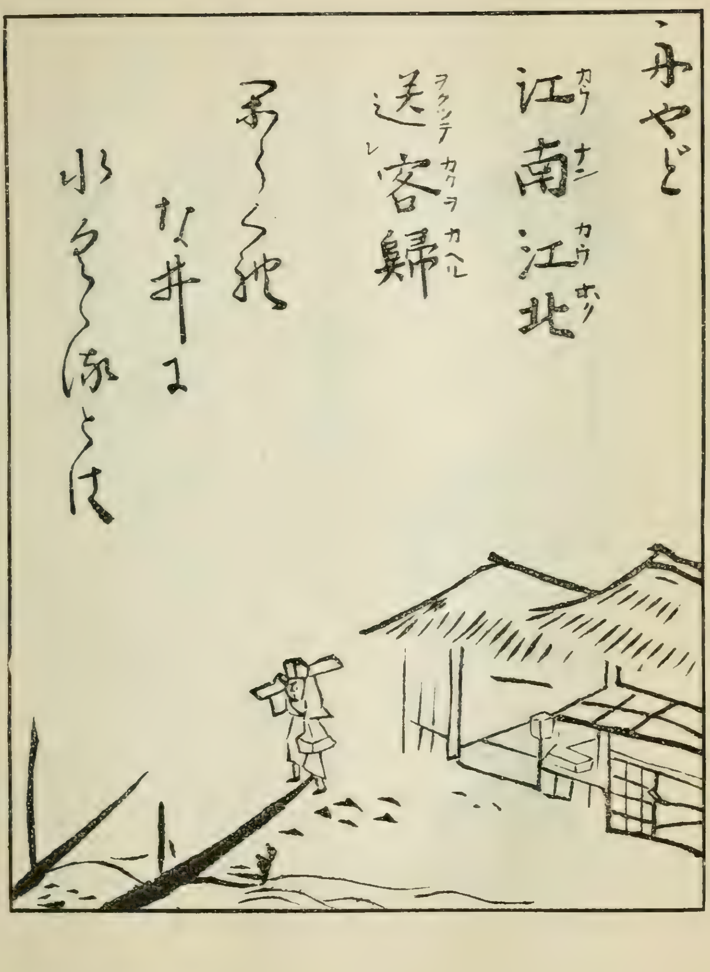
夜番

旅館寒燈獨不眠

白きをこれは夜そ更にける

旅館れひとよふた夜のとまりに來る人の宿なり




舟やど
江南江北送客帰

惣雪隱

黄河入レ海流

こひそつもりて淵となりける

黄河とハきいろの水のなかるゝ川なり肛門關の邊よりながれ出糞州に入ルと漢書地理志に見えたり　漢音閑書言所

揚屋の紙屑籠

積雪浮雲端

不二の高嶺に雪はふりつゝ

積雪は紙のおほくて白きかたちなり閨中にて□□□□□□□□□□□□といふうらに陰陽の外しる人なき味ありその端ゑな此積雪となる

質を置女郎

寶劔直千金

分手脫相贈

をきまとれせるしらきくの花

直とれかうがいくしとうの打物直に金となる事の妙をいふ分手とれ天窓に今までありし簪を脫で何屋へもたせをくるなり

ワるい病のある女郎

年ミく花落

無二人見一

しつこゝろなく花のちるらむ

花　異本に鼻に作るハ非なり

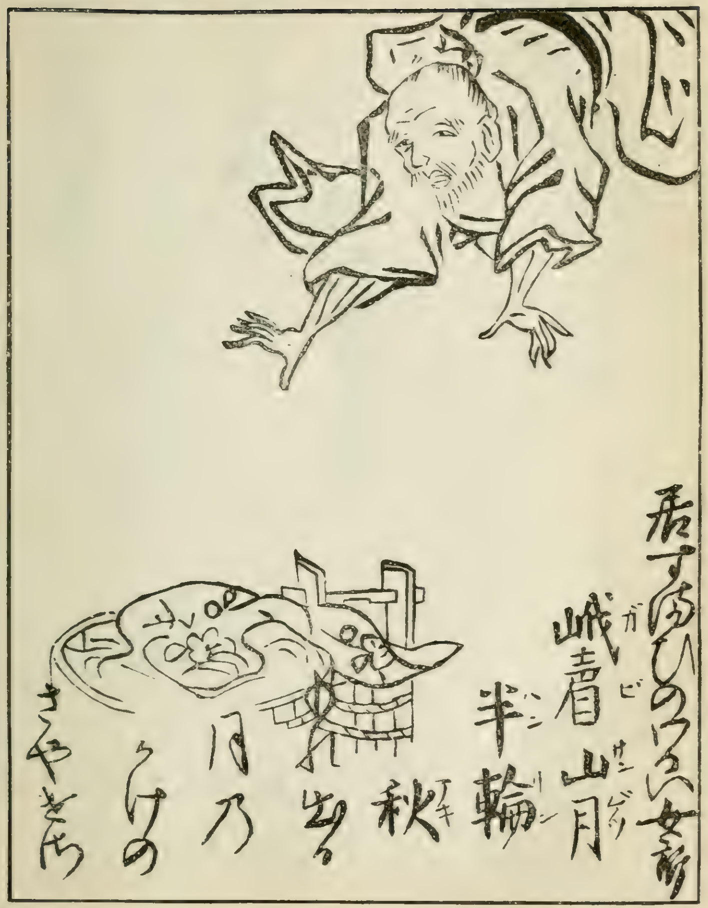
しつ心なく　しつハ賤也いやしきやすものをいふ

客心争日月

床のよい女郎

なかくもかなと思ひぬる哉

争日月とハ日数月数揚づめにせんと客ごとにあらそふなり


峨眉山月
半輪秋

床で骨を折し女郎

孤城遙望玉門關

黄沙百戰穿金甲

みたれてけさは物をこそ思へ

孤城は一本立の城也黄沙は功者と聲通す穿金甲は軍士甲冑を帯し關中を破らんとして時をうつし戰ふ有樣考ふへし

水上の客

此夜断腸(コノヨダンチヤウ)　われても

人不見(ヒトズミエ)　すゑに

あはんとそおもふ

断腸(だんちやう)とハはなはだいたむ事をいふ人不見(ひとミず)とは客(きやく)の外(ほか)の人(ひと)ハ断腸(だんちやう)を見ぬしらぬといへるなり

年寄し客

春光　　忍ふることの

不レ度　・・よれり

玉門關　・・もそする

春光は春のごときあたゝかなるよき心持にならぬゆへ不度といへるなるへし

大門の掛行燈
ひるハ
きえつゝ
物をこそおもへ

雙ヘ掛テ日月ヲ照ス乾坤ヲ

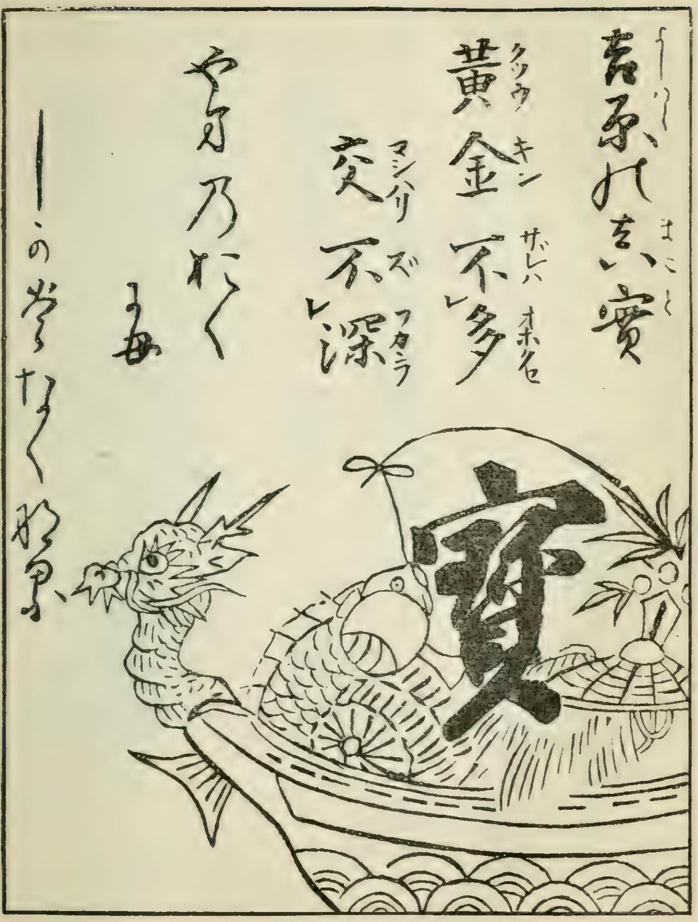
乾坤とハ二階と下座敷とよ

大門の番所

爲問門前客
今朝幾個來

幾夜ねさめぬすまの關守

幾箇來の箇ハ駕と通す或いはく荷也と駕篭のむかひ門前にあつまるを見たるさま也


黄金不多
交不深

寶暦七丁丑歳正月吉日

東都淺草御藏前茅町二丁目

六河亦次郎板

書林

本材木町四丁目

柴田彌兵衛仝

遊客年〻考序

夫鏡は像を照す而已にて心の遊びを見べくもあらず爰に鮮仁軒聖語にもとづき遊客内〻の好悪事を筆に任すと一夜袖にし來つて予に序を請是を披き見バ万客一代の遊びを記ぬ熟て味ふに明白なる事擧てかぞへ難し閻王の鏡も是にはしかじ人〻面を脊くとも鮮仁軒の筆に千里眼有て掩ひ難かるべし宣哉此遊客年〻考によつて工夫有べし穴賢〻〻

丁丑秋葉月中浣　易色齋序

清るハ陽と名け濁るハ陰と号す陰陽須臾もはなるべからず出てハ遊婦あり入てハ家婦あり是人に於るの陰陽なり萬世界ハ天地の媒遊國猶良媒あり士を躰皷といひ女を媒居と言身躰拍子附て鳴事よく腰下紅垂能美婦を指す共に青樓の良媒なり曰鶏をさくに牛の刀を用むやこれハ是戯言なりと聖人すら戯言あり予も又戯言あり語をもつて本とし萬客時〻遊ぶに序ある事を記す題して遊客年〻考と呼白黒の誤あらば後の大臣を待としかいふ

丁丑歳仲秋望

鮮仁軒自序

〇十有五の篇

〇三十の篇

〇四十の篇

〇五十の篇

〇六十の篇

〇七十の篇

○十有五にして色に志す

神の昔れ此時分より色を覺へ人の今れ十一二より志す十日夷子や庚申參内の手代がつれて行囃子のもどりに連中のお世話になり終にれしのゝ奥に入始り扨もよい事覺へたりはや人の數に入たと嬉しひこと限なく夫ゟ色心彌增りぜい八百を言ちらし扇紙入煙草入持かへ〻友どちに逢れゆふべもどこへ行けふも暮なば出かけんなんど女郎も若きれ氣にいらす前帶こなすと自慢顏この取持を媒居と呼先お盃たばこ盆お羽織おこしそれお脇指となをすうち此間れきついかんしやく何太夫れ大亡錄ワたしもほつと致ましたと間に合い挨拶かき團にあふぎ上笄で燈火かゝげ先ちよつとしらせましよと呼にやり返事れどふじやと手をたゝきお銚子早ふも共序一獻のんでさす内に今夜れ揚でござりますと勝手のしらセにヲ、けたいそんならどふぞ囉ふてごんセ夫もならすれのち程ちよつとおいでるかお文でも取てこよと極つた仕内をパ女心のはたらき顏後にたてる燭臺や長蠟燭なかパたつその陰よりたつた今しまふたと火の光を後にあて居女郎に氣もいつそり夫からお夜食上ふといへばひと所へ膳すへさセおれがきわでもの喰れきつとゐいなとなんでもない事悅で段〻つのれパ躰皷持じやのひき語のとそれよりそろ〳〵芝居を

覺へ相應の役割其身ハ立者氣になつてゐる身のたてりも能と譽今の仕内ハどふもじやの旦那のきばハけうといなどゝぴらにのつての思入じまん夫より替て人形つかひ文三も當世もふむかぬと氣ばつかりいき過てかしこらしうりくつ立そふもない事かんしやく起しそんなじやないとめつたむしやうにちやり自慢座鋪まハりや女房に佗言さすを嬉しがり彼者の替名をしつた顔あらゆる肴をひとつにししたミ酒やら酢味噌やら菓子椀に打込で何太夫是のめとがらしたつぷりさいぎりの蒲鉾をどうミやくくわしたしこなしぶりいやながら半分たらすやりかけてこりやたまらぬ似セ日をまハセば南無三づいたと氣附に一角口になげ込よミがへらしそこで殘とせめかけて呑だ跡ハ大熱じや手水鉢の水一盃とあびせられぬれた着物をぬぎかゝれバ又召替を頂戴しお座しづまつてま一盃今度ハ拳で參らふと馬上盞に酒を湛さセゴウトウライも事終なんと近夕拳會を趣向我等拳臺寄進といへば私にハ拳まわし願上ると能付込女郎もちつと乘がくるとやがて身請の思付早直を付ても間違たり或ハ追付年明まへどふでも旦那へ上まセうこちらのお客へ聞へのためたいこ附をとそやされてやつぱりぬかれた人も有そのげいこをと媒居をたのミやう〳〵出かけて事しと呼るゝも嬉しくどふぞ樂の身にしてやりたいと手附やつても其跡が埒のあかぬも前後ふ覺遊びも段ゝ狂わしきハ廿九迄の事そかし爰を見ぬいて聖人も十五より色に志

し二十をぬいて三十へとびこし給ふハ定らぬ人の心を御すもじ誠に智者の奥儀とかや

○三十にして大臣の名立

其人四方の遊里に聞へいづちといへども替名をしりいつまで居てもじかりてなしと居續の朝酒難波行の石御器のミ茶屋めぐりのぞめき酒ハ躰皷もきつとめいわくなり初ハ友に咄したも度かさなれバ後にハかくし誠の色事是からなり女郎媒居のミめ能もあまり若きハふまへなく我にほれたとふれありくそこをこしたるを思付手寄〳〵の小宿へ引外の客ハ早ふいなし仕廻ふととつかハと逢に行これがほんのうその中の實しかしかわいがあまつてハいくよね覺ぬすまの關人めの關も思ずして色〳〵のでき心扨ち命ハ捨やらず心中の用意かのけて置坊主に成も男ゆへ夫に似せる姿もしゆしやう濱しばるハやめてほしい茶屋かぶき女郎のたゝりぞかし媒居とするも他生の緣花火じやのはぜ釣のとかこつけの船ださせ相肩の女郎ハ下に置二階でふたりものしたり豆喰斗の座鋪かりおやかましござんしよといふていに又ハ晝より趣向にて晩ハきまりにこふ程に西瓜ひやして置へ或ハ鰯一升を半分いつて半分ぬたなんばうどんに玉子酒能物くれると見込だりやさのミ心に叶ハねど色としかけて先達の宿入したる家〳〵へ手筋〳〵につれて行是が髪にハ

大象もよくつながれて名にしおふ大臣の位のゝゝもあらぬ住居に行給ふこれを誤頃日の外山翁が色八卦に難地を稱じて能客入こむ地なりと誇ど誠に行事にハあらずしかしむさとハ乘がこす一ッ二ッハ出かけてもぬめたに仕廻が七八分此緣無量の事なれバ上下筆にハ盡がたし橋の上の長口說軒下門のかぐれまでくわへきせるの法度のやうにもならず指切髮切起請文血文からすの似セ爪までもそれ〳〵罸のあたらぬ仕樣客からいふてわるじやれ也月ゝ多きその中に水無月雨度祭にハ手拭にほほかぶり躰皷引つれ俄の趣向女郎をだしに娵居のそしやう張込衣裳ハ家ゝの揃をミめとめいわくハ客にこけ込玉すだれかいまに見ゆる前垂ハ緋越後か緋縮か紐ハ白縮緬子綸子雪の下の今織緞子これで撫れバやけどがなをる中村十藏たのまぬと兎角なんでも高上ずきあまり替つた事せうと紐紅に鼠の前垂眞言比丘のたいこくか日養坊見るやうな夜ぬけして欠落か心中しそうで見へわるし來年ハ大かた坊主の娵居を出すべしこんな物してやる客ハたゞのりにさすでもあろが祿腹がかまつたら跡のさばきがちとお笑止かの六彌太ががんばつたりや止にならふもしれずとの先ぐり未來記作る楠が學びそろ〳〵わるぐろき始りなり

○四十にして身請に惑す

躰鼓持のミなかミハ職人舟引安菓子や水汲じやの青物やのと其木亂れて此商賣重箱のまも欲ハはなれず四も五もくわぬ髭口で私ハきつと物祝ひと少しの事もけたいがりさしてもなき口あひ面白からぬ事いふても旦那もし是ハ〳〵きつい所へつれて行れたとちよまづいた附合よりやつぱり醫者や道具やがまし芝居も三四の棧敷ハ若輩らしい十軒めあたり折廻がひろふてよい天神祭も隨分きれいなかうばいで色なしになかゐ二人慰にハ撿校獨で茶箱を用意よしづの小屏風入させよともでぎやうすいするやうに別艀にて料理させ元舟すゞしくする物ずき花火も能程たかすべし余所にたくのを樂しむなと万事次第を考てかね附前帶袖詰紋日かぶろ立出世太夫白人藝子年明前の相場も合点下屋鋪に置分別思ひ付ての身請間違なくその當座ハ毎夜の通ひ芝居俄の見物にハ被着て腰元二人男一人にしば引の脇指さゝせ其身も跡よりいて遊ぶにぜい込て面白いと思ふ内色事仕だし身がまへしめつたに衣裳拵へて置にをかれぬ仕内もあり二年待ずに花香をぬかし仕附の拵取急ぐのハ源四郎追打やうに思われ最早二度とハせぬことゝ惑ひをとけど又仕替續のりするも有姿に上中下のわかれあり暫身のくわつけいあれど宿の妻とハ成がたく二度の縁を結ぶハ上の身請初よりつまとなり一類やう〳〵合点したと氣の落付ハ中の身請苦界からの色事で此夫今少の手傳し年が明と妻と成枕いさかひの仕廻口ハ何屋の誰がゐい

身にしてやろと言んしたにそこへいたら此苦勞ハセぬものと節づいたねすりことといふハ下の身請なり

○五十にして遊びを知

しきりに遊びを好ミもセす行ねハ又なをわろし太夫も月に二三度その余ハ借て遊るゝ南北の日柄もとき〳〵いくつ心當の日が差合も幸いとがもぜいも大半ぬけそろ〳〵後家をくいありく客もあり氣の毒や今の媒居ハ三味線ひき淨留理かたりちつと白い客ハくひ背張がいんで居ると躰鼓に渡してのけて置ひと所へセゝくりより色咄しと客そしると今夜ハ起番あすハ晝迄ねすにゐてと物詣か逢に行工面じんじやうなかと思や振舞の仕廻口ハ夜食出したりやいきたいとさゝやかぬ夜ハその替にこんにやくか芋たかそふじやあるまいかお客が水あがるとおつしやると皆かこつけの砂糖水こりやけつかうと一二盃芝居行にハ朝とくより身仕廻し暮前迄ものくわずに酒のんでもどるやいな臺所の角に目が大きなつたと腕まくり紅手拭首にまとひ茶漬四五盃蕎麥切ぐひに流しかけ緋縮緬の湯具ハぐちらしい紅鬱金か藤色か縹色白も一向ゑいと言にハふ都合なといらひかけいやこれさつぱりとした夜食と淨留理三味線ひく黒い菓子を呼にやれ今差紙の

きた新造面白かろとまるもぐちつい去ぬぞと二八余りを呼にやり四七の算用やゝ覺へ紙入脇指集てくれともどりしなに臺所で女房とらへ駕籠のくるまで一ぷくいたそ早けれどいにませう昔の粋が長ふ細ふと言たハかうした遊びしたが今の客ハ多能な事女郎も座鋪で子をうめバとりあげばゝも覺にやならぬ其内に若い時かたい人といわれて中年過からこつそりと妾置たり遊ひにくるハ必わけのないものじや心得て客にしやしかし灰吹と大臣ハ青いのが花その内にハ屋鋪ぶるまひその時ゆるりと致ふと言捨かごに打のれバ宵から是で二盃めと烏賊か鮹かを言やうにつぶやきいそぐ其跡からお近い内と口〻に皆〻送り歸ける

○六十にして耳を借ず

それがやめバ是が起ると若い女郎をだいて寢にこそ〳〵と遊びに來て前ハ此堀に傘屋の五郎兵衛とて茶屋の始じやといふて今の茶屋のれき〳〵とも皆一門その時分にハ見世附があつた追付元に立かへりそんな事も出來ましよと昔咄ししわゝよれとも若い顏あたまに青黛髪箱づと末社召つれ通ふもありしかし此あたま附ハことむなきものゝ内こんな客ハたま〳〵先大躰心ハかわらねどふり行年に恥がわしくわかい妾をかこふて置バむす子がけふたく機嫌とり勸進能か芝

居の戻りしたゝめがてら寄かけて揚屋の亭主に數寄者あり茶屋の女房に茶人あり是等を便に茶湯ばなし當世言葉もちとふ通し近年の板本ハ料理ハ少しわるふてもしまつするをゑひとかゝへるゆへあたまからひやし物かと思へば御所柿やらくきじややらこぶやせんべのあしらいで客をつまミの安ひかんがへとのにふ聞はつたはやり哥附て見ても節合ず尻聲のじゝくじやするのが氣の毒さに謡ばかりて間に合しふ出來な口合いくつも言て酒のむ内げいこなりとお呼んかとの媒居が挨拶きつうはねる芝居じやのと心一ばいの返答にて取肴引よせくわへと鷄卵はさむにはますとへるとの口上そへ去迚ハ今の女のあたま附吾妻の髪のかたちかや又ハさつまの櫛卷とやら烏蛇のひる寢すがたか琉球人見るやうなお笑止ハ首筋のそうじがわるいと見にくいものいくつに成ても後帶三伏のあつさいとわず綿入て猶腰付が大きなと昔忘れぬわる口女郎呼ねバ耳を借す媒居もなし西へ行かまだもてる年に相應したそうな筑後の芝居が替つたら孫をだしに見にこう向歯まばらにして蛸の味をわすれと西鶴が書しも道理そろ〳〵めも歯もわるふなり少しの酒にも早ふ酔ふ是から遊びに行所が火屋の隣のさいたら畑とおもき事をもかる口とあめ緒の雪踏でさらバ〳〵

○七十にして心の欲する所に從へども茶屋へ行ず

わが親ハ百近いきて酒がすき八十の三ッ子といふ事ハ八十のとき三ッになる子ある事と酔まぎれの一ふしハ何のむくひか浮世の夢にと語出し人に異見をいわるゝにハ連に誘われ茶屋さんとうへ行まいものでもなければども今日も明日もはいりこむハ存の外としかられ近年遊びすきの多い事ハ前と替つた事がある　遇逢ばかのへ申と近松が作た庚申が今ハ紋日になつたげなそれで悪ひむす子が出來ると獨言むかしはやつた大きな紋がそろ〱本へ戻て來て孫が付るをしらずしてそちハ若いが古風でよい結句親父ハちいさい紋でだてこくと二昔も間違たほめそしり今時の若い者ハそんな事でハいきにくいなんぼ人が誘ふとて悪所へ行斷いふに義理の立ぬ事ハない心ある人ハ譽こそすれ笑やせぬと一口にぴやつしやりと氣味合な異見してさへ遊びしらずの祖父さまにかゝりその方さまのお名ハとゝへば了齋と申ますはなかけ了を書ますげなお名乘ハといへばそりや若い時の事名取川と申ましたといふやうな人でだましよく其身ハ仕合して置て上いたらしいおしかりと陰でハ言て居をるげな又ある時ハ粋がゝりにやつて見てもぬらくら

と言廻し請れよけれど空言ばかりめつたにしかるも猶きかす人によつて法を說と佛の教に打仕セそれ〳〵にやると思へども昔の月にハ逢ふやら若い者の先ぐり強くあの異見も半分ハ言かけ五分引て聞ハ親父も合点といつかな用ゆる事でなし末世の衆生ハ度し難し併通用あたまべしの異見が先よし少し粋を加ゆる事大秘傳也大名借のかねの歩を一トかた上て前月を入て囉へと言附る厘毛わしる心にハとんと引合所なし心のまゝに何しても道共かふ氣ハいづれとも遊びにゆく氣ハもふ出ぬ頃日の彼岸まいりにそれかれつれだちもどりがけにちとお寄なさりませ御休ながら御酒ひとつとなんほいふても其氣が出す太左衛門橋よりそろ〳〵そり流に耳洗ひしぞ次第を經たる鳥居の功盧生にうへゆく七十年の眠りの夢迎ふさめたも面白や人間萬事塞翁が駒大悟〳〵ゝゝ

跋曰始より西南北の三地に行以下の遊びになづミなし難地坂町堀江より買上れバ其次第知といへど登る程面白く黄白家藏皆水の泡網にかゝるの患あり名附て出世大臣といふ唯三地の客能その止る所をしらば實に是色道の龍にあらずや

于時丁丑年仲秋□學齋時中誌

書画部

序

天窪し地臺る所物一等といへども又物の等しからざる遊彊とて婦の市あり此地を踏ば粹と成是まつたく地理の所爲所以の法也纔を隔て江南の樹を江北に移さば乍その轉變すること宛も御月さまと泥亀と準ふに等しされハ此書を讀に孔老釋の三聖彼遊彊に遊ひ日轉し夜に叫ひて欠をしらず二人枕のねはんより黄水の道行果は漢土の言語に腹を抱へし寔に靈鷲山一代の説經にも則妙法と説き法とハ則チ乘るの訓聲妙の字ハ女の傍に少の字を从ひ女に少し乘の心を示し後世此道を知らされハ人粋なく愛なく土氣に成ル、則バ自五常を失ふ事を考へ三聖一致に家ゝの斯

果に尺氏ハ三界猶如火宅の斷に假の世太夫に涎し孔子ハ明徳の大道太夫に信鼻毛し諸分手管に入の門也の謀斗奇哉々里仁爲美擇不處仁焉得知とあれハ早娵妃ある遊彊の里を擇んて諸分手管を學ひ明らめたまへかしこれ時實曆丑水無月娘に宿る五日燈下に俔焉して是が端し書して諸君に訴るものならん

揚屋亭主 李白	女房 瀧	中居 なつ もん
孔子大盡	合方 大道太夫	
老子大盡	合方 大空太夫	
釋迦大盡	合方 假世太夫	
右之外客名寄セ		

客 五柳先生陶淵明　合方女郎 菊
周茂叔　女郎 蓮
韓退子　影子 孟東野
客 目蓮
同 阿難
たいこもち 鐵拐仙人
書置の事
釋尊かりの世 道行
くるわ唐韻

費長房　合方女郎 鶴
東波　合方舞臺子 李節推
客 文殊
同 賓頭盧
たいこもち 白樂天
其外畧之
同 辭世
風流酒花
目錄終

雪月花

綿蠻たる黄鳥丘隅に止ルとゞまるところにとゞまらざれバ鳥にだもしかしといふ四角な文字の廉取て鳥ハ木に住ム魚は水にすむ人は情の下にすむと日つき哥にうたハすこれも和國の道ならぬ郭の哥ハ客の浮気をたねとして万のはうたとぞなれり長歌短哥せんどう馬うたたけき悪者の心をやわらぐるもゆかりのつきの一ふしぞかしされはこそ銀猫は擲ども江口の君のなげぶしにハ腰をぬかせしためしもあり爰に聖人のかよひたまへる郭あり揚屋の亭主ハ李白とかや中にも孔子ハくるわにてすいといはれて端手ならずみちご縮のかたびらにもんろの羽織すそながく深あミかさにあわざうり古金買の目利にも太夫かいとは見へざりし李白かかたへ御入りあれハ▲亭主李白是ハ仁さまおめつらしいサアく〵おくへともてはやす▲孔子ナント李ス此中ハ久しいの無事で珍重〳〵と座敷へ行▲李白女房瀧是ハおめつらしいおかほ● おうハさばつかり申ておりました▲中居なつもし仁さま此中横堀でお見うけ申しましたゆへ大かたおよりなさるであらふとぞんじましたに● よふまたせなさつたの▲孔子ヲヽよりたかつたけれども行時に徑に

よらず●そちをちらりと見たゆへ太夫にことづてしたかつたけれど十日所視十手所指其時馬喰町の方へ人かはしつたか何事じやとおふたれども君子ハ危にちかずかずとすぐにもどつたがなんであつたや▲中居なつそのときハ馬やが●ちとやけましたげな▲孔子曰人ハ怪我ハせなんだかといふて馬をとハず▲中居ィヱ〱けがハござりませなんだ▲孔子ョヽそれハ可也久しうこぬうちざしきがきれいになつた富ハ家を潤んどふでも李白出來たの〱▲亭主李白おまへゟがたの御ひゝきゆへだん〱仕合つかまつりましてよろこびます▲孔子ョヽよいことじやシタガ瀧親父にすいぶん酒をとめたがよいぞや酒ハはかりなけれども乱に及さずすぎぬやうにしたがよい▲李白ィャモ朝からばんまでさけのたゆるまがござりませぬ▲孔子ィャサ座敷ハつとめにや●ならねども終日百盃すれども三盃に過キずで心でひかへるがよいぞや▲亭主とふでなる口でござりますれば一盃〱又一盃とふでも過ます▲孔子ィャそれが座しきばかりでハない内證てもたきが顔を見てハのミ瀧を見てハのむゆへ瀧見の李白といふてよふ繪に書ぞや▲ていしゆハテわるじやれなとわらひのさいちうらうら口からひろそでのゆかたに丸ぐけの帯じたらくにまへにはさんでくるを見れば老子なり▲瀧是ハ老子ゟうら口からおこしハおめづらしい仁ゟもおまちなされてゞござります▲老子ャアおやじハさきへきたかといふを聞て▲孔子玄子これへ

〳〵なんとしてうら口から御いでぞ▲老子ィャ藏の間の切戸があいてあつたゆへ是ハさいわいの道があると裏から仕かけたれバこゝの久助めがくらがりから牛の出たやうなとおれをうしにしをつた人我を牛といふ時ハ我にうしの性ある事を知ると腹をたてぬそ一徳なりかゝる所へ釋迦ハかりの世といふ太夫と相合駕籠にてだいどころまでかきこませ▲李白見るよりコレハ釋迦大盡の御來迎太夫様とのあいごしコリヤムマイありがたいまづ〳〵是へとかごのたれあぐれバしやかハ紋紗のかたびら袷にりんぼうの紋所金らんの帯に異香くゆらせ立出給ひナント李白まめなの▲主アイおまへさまにもおかハりなくいつとても御二人つれ比翼の中とそやすれば▲尺迦ヘテ何をいやるぞひの今此やうにつれ立ても會者常離臨命終時不隨者ぞいの▲太夫かりの世あれ李白さん聞て下んせあのやうに無常な事ばつかりいふてゞござんすわいな▲亭主ハテわけもない仁様も玄様もおまちかねサア〳〵おくへとともなひゆく▲孔子老子一時に尺迦す是へとあいさつあれハ▲尺迦コレハ御兩所おまちかね瀧ナント久しひの▲たきホンニけふハマアおそろひなされてよふおこし遊バしました孔子様大道様をかりましにあげました老子さま大空様を見セましに人遣ハしましたといふ内に▲大ミち太夫來る尺迦す老子す御出遊ハしませ孔子すけふハよふ御越なされた李白瀧へもそれ〳〵のあいさつハさすか孔子のあひかたとはかたくろしいて

しられけりかゝる所へ大空ハ座敷へ来り何のあいさつもなく老子すけふはこちら風が吹たそふなといへば▲老子けふは少し南風がふきつけた▲太夫ホンニどふでそんな事でござんしよおまへの所にさかづきがあるそふなちとまハしなんせんか▲老子イヤけふもまハしハせずにきた▲太夫エ、わるざれな人さんしやと諛もなきあいさつハ老子の好ふうならん▲主李白ハ鯉のさしミをそう／＼けふはあなたがたのおいりとうけ給り琴高か方から鯉をさし上たいと申て私か方へ持せてこしましたと小皿に入てまへにおく是ハ琴高が志過分／＼としやうくわんあれハ▲主李白折ふし此方に酢をきらしましたゆへとなりへもらいにやりましたが酢かきゝますれハよふござりますが▲孔子やハり鯉ハこくせうがよいに此酢ハきぶい酢しや▲しやかハコレハあまたるい▲老子ハにがいかほして居たまへバ▲李白ハ氣のどくがり是ハふかげんにござりますか▲孔子曰イヤ／＼酢ハすいが酢のあじしや釋迦のあまいといわるゝハ方便也苦イトあるハ老子のすねなり心こゝにあらされバ喰へどもその味をしらず酢ハすいにきハまつたものしやくろハですいもあまいもしつたものたすいといふハ此時よりぞはじまりけり▲老子けふハ荘子が来るはづじやかナセおそいぞ▲大道荘子さんハおまへのおつれかゑホンニおきしつがよふになさつたなんしややらゆめに蝶になつてくるわへ来たとやらよふ嘘言らしい事をいふおかたてござんす▲中居文出て勝手へ白楽天とのか来ていられますが酒

のお相手にさしきへおよびなされぬかといへば是ハさいわい樂天が國太夫ふし久しうきかぬこれい〳〵といふよりも白樂ざしきへ出何も〳〵久しうおめにかゝりませぬ御きげんよふごさります▲皆〻久しう見へなんだがとふしや▲樂天されバてござります私も一生のおもひでに嶋原へいてのんで見たいとぞんしましてこの中夜舟て牧方あたりまでてかけましたれはなにが夜のほの〴〵明に八幡山に雲のかゝりし氣色そのおもしろさ白雲帶に似て山の腰をめづると口ずさんで一盃のミかけましたれバいづくともなく白髪老人壹人小舟に乘てわたくしが舟を目がけこぎ付牛房くらへ酒くらハぬかと申ましたが中〻叶ふものでハござりませぬ伏見までいかぬうちにけん酒にまけて道から迯て歸りました其酒にあてられて此中ハねておりました▲太夫大道そんならハむかい酒に一ッよかろとさす▲樂天おさかづきハいたゞきますが御酒ハ今のじやおゆるし〳〵したが此間めづらしいはなしを乘合で聞てまいりました費長房ハ御そんじてござりますかといへば▲客それは鶴とねんごろしていた費長房かといへばナルホドその鶴をつれてかけおちせられましたが京のすゞミて長崎壺わりといふ菓子を仕出し唐人姿でほり〳〵歯もろふてあまいと涼中うられましたげにござります▲中居文そふであろふとおもふたてやどの繪本を見ても鶴に乘て飛あるいてたいていいやらしいおかたでハなかつた▲孔子ノ曰幾はぐの人爰におゐて

平生を誤と朱子か胡丹安をしかりしも無理でない周茂叔は蓮をうけ出したといふがほんかや▲樂天ィェ〳〵茂叔先生ハ蓮を愛してハござれとも遠く見るへし馴翫ぶへからすとやらいふてござつて中〻手いけにして見る御心ハないそふにござります柳子ハ御ぞんじなさつてござるかといへば▲孔子曰柳とは陶淵明が事か▲樂天ァィ五柳先生の事でござりますあなたハ菊にきつい打こミで此中も絃もない琴を彈眞似して●さわいでござりました▲太夫大そら樂天す此中身なけ心中が有たといふがじやうかへ▲樂天ィェ〳〵心中ではござりませぬ美生トいふ男が近所の娘と濟流ノ橋にて出合約束いたしまして橋のうへで待ていました所になにが此中の大白雨でにわか水が出て來たに爰をさつてハ心中が立ぬといふてやつはり橋の上にいたげにござります其うちに上のつゝミが切れて水か一時にすさましふ出てはしが落てながれてしんたけにござりますそれを娘が聞てそのやうなおろかな男なら●あハひで●よかつたといふていますげな▲太夫大道義によつて命をはたすハ人たるものゝ道なり美生もやくそくを變ぜずして義のためにいのちをうしなひしは●かわひらしい心じやナァ▲太夫かりの世ソウトモそれハミな前世からの●やくそく事過去ノ業因でござんすノゥ大そらす▲大空ナンノイナァその美生とやらがせまいさゝの葉のよな心からその女子壹人におもひつめるといふかちがひ其ばんにやくそくがちがふていやと

いふならひろいせかいに● たくさんな女子どれなりとがてんする女を女房にしたかよいわいな

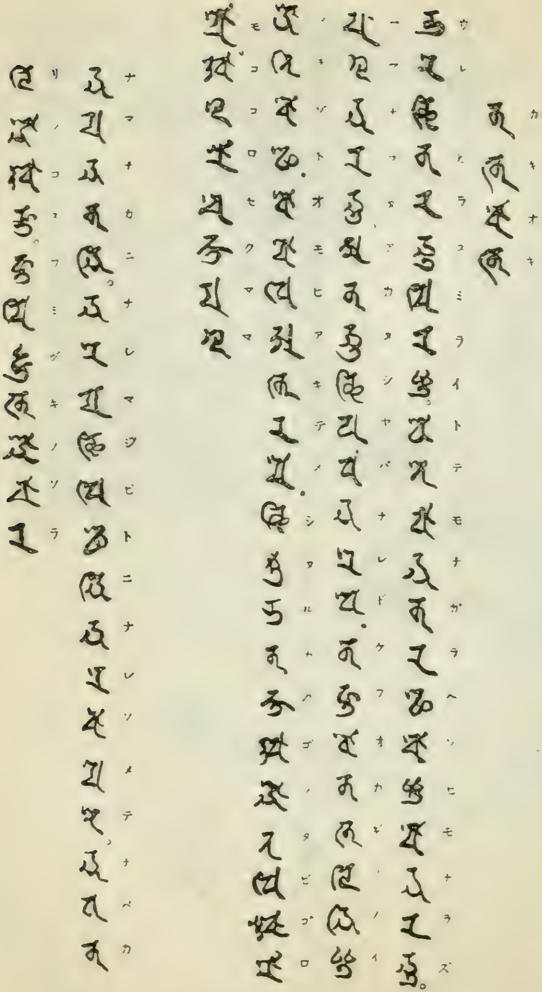
三人の評判ハ孔子老子尺迦三聖の氣うつりとしられけり

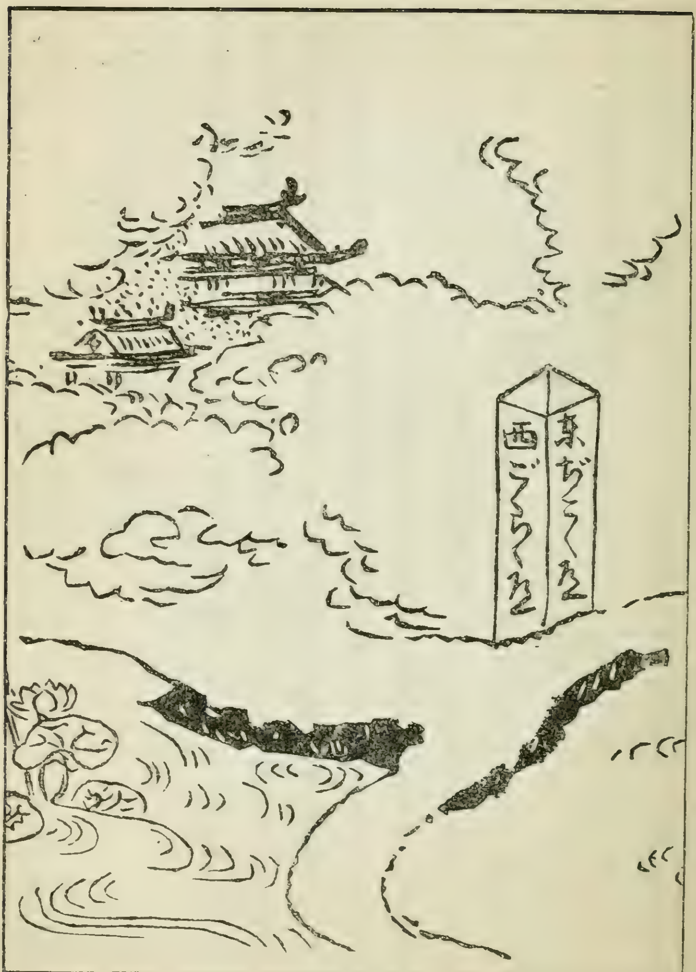
▲樂天其美生か河流を風流求女塚といふ狂言に女伊達を取組明日から伜の芝居ていたします▲くろ舟にハ誰かなるぞ▲忠右衛門ニハ竹林の阮籍でござるげな阮籍が靑イ眼海老藏が目よりすさましいと申す評判蝦蟇仙人の非人かたき打きついあたりてござります東婆ゐハ李節推といふ若衆方にきつい打込で花ミちから李節推が馬ニ乗て出られましたれバ馬に乘少人勝美なりといふ譽ことばハ東坡ゐてござつたげな馬をつないで岸に花落るを知るといふ詩を其時つくりて遣ハされしとてそれをやハらげて駒がいさめハ花がちるといふ小哥が只今大分はやります韓退子樣ハ孟東野といふ影子にきつい打込で韓雲孟龍のちかひといふ事があると申て御名が立ます▲釋迦聞たまい漢の裏帝が御衣のたもとを斷しも男色の心中なり此道ハふかいものぞふな老子すこそうらみちを好れそうなものじやと笑ひになりぬ▲太夫大空コレ樂天す甫にめつらしい大こ楽が出るといふが付合なんしたかといへハ▲樂天申それハ誰が事じやな▲大空イヱ名はきかぬが口からいろ〳〵のかげ繪をふき出すげな▲樂天ヱ、それハ鉄拐が事でこさりましよといへハ▲瀧開て是なるほどそれハ此中此方のお客か手まへゐつれて見へてゞござりました其時花の高尾と傳七とを吹てゞござりましたそれは〳〵ハおもしろい事いな▲大空ハ

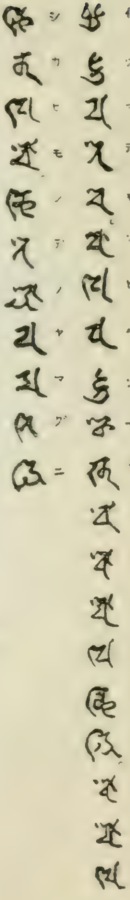
なんとそれハしやほんてしたらなりそふなものでハないかいな▲釋迦ハかふりふり中〱そのやうな事でハない此方の善導大師が三鈷を吹た時さ。さつふむつかしい事じやなかつた紙を玉子にしたりはなへ釘を入たりするが合点のゆかぬものじやとはなしが。しめバ老子ハ大欠▲瀧ハ氣をつけ是ハ老子様お氣がつきたそふなあちらに床もとらして置ました大空さんつれましておいでなされませ▲大空イヤさつきにからこちらで日がらの事をいへばあのやうにあくびしてまぎらかしてござんすわいな▲瀧日がらの事ハあちらでしつぽりとおやくそくあそバせと二人りを與へすゝめやれバ▲樂天ハ氣をきかしわたくしも勝手に用がござります皆様のちほどおめにかゝりましよとかつてのかたへ立てゆく▲亭主李白此おさかづきまづわたくしがあつかりましよとゝさん持て入ル▲瀧ハざしきを取つくろいかりい世さ様尺迦様をちとおくへつれましておこしあそばせ▲孔子曰コレ釋迦すればたんに入て寂滅已樂たのしミ給へ△しやかコレ大ミちス又おやじが男女席を同じうせずなとゝいふてひぞりかけたらつめつておかしやれと悪口いふて次のざしきへ入ル跡には孔子と大道さしむかいなんじやいなかたくろしいその羽織もぬぎなんせんかちとおやすミなされぬかへ孔子ねるにそばたゝずドレ〱共まくらおこし給へと東枕にね給ふ△大道おまへハこちらまくらになんすかへ孔子も東首したまふ禿よ予が手をこすれ足

をさすれよ△太夫さすれなりやわしがさするコレおまへに見せるものがあるコレ見さんせわにしか心底ハ此通りでござんすと肩をぬげハ孔子命といふ入ぼくろ△孔子ハテわけもない身躰髪膚父母に受たり損ひ破ざるをハ孝のはじめといふにいかに辨しらぬとてやくたいもない事をしやる△太夫なんぼ不孝になつてもおまへなら大事ない△孔子イヤ孝弟忠信其道わきまへざるハ人にあらずと口說のさいちうに△瀧あハたゞしくはしり出中尺迦さまのねやより御手のなるやうにぞんじましたゆへさんじたれだ尺迦ゐもかりのよゐも見へませぬ御二人のまくらもとにこんなものがと斗といき△孔子驚きトレ△亭主李白びつくりしてとんで出る△老子越中褌ひきずりて出る▲ミな／＼何事と書いたものゝくりかへし／＼見るナンシヤ是ハ九重のまもり見るやうな文字ばかりどふもよめんいかゞセんと互に顔を見合氣をもミあせるかゝる所へ△ちやんのはのよな白イ氣を持ちやんな黑イはいたらばの氣を持ちやれトンチリチンテンチヤンホラホすいつくとりつくすつてん／＼いしふしゑんれんきりふくりんとんなチリンテトンしやん／＼よい／＼のよいおどりさわいて△阿難文殊△目連賓頭盧つれだち來るどふじや／＼李白ハうちにか北のかたハどこにぞ今夜もぞめきに出たが道からしゆこうか付たとどや／＼とわめき立る△李白たき是ハ／＼よい所へ來てくれなんしたしゆこう所じや御ざりませぬ・尺迦さんがかりの

世さんつれまして欠落なんした大ていのことでハござりません皆ちやつと奥へ来ておくれ▲四人のらかんこれハすさましいと驚きさしきへゆく▲瀧先此かきをきよんて見ておくれなされませとあなんにワたす▲あなんよむ




東ぢごくみち
西ごくらくみち



イツマデモツヒハツベキトオモヒシニオモシレ
シカヒモノデノヤマグニ

南無三寶欠落所でない死ヌるかくごののこしふミ二人の辭世サア大事〳〵といへば▲老子ハあせ手ぬぐひてあたまからげる▲ていしゆうろたへ是はマアなんとせう▲孔子なんと所かサア〳〵文殊とうぞ是にハよきちゑハないか文珠〳〵是ハしたり文じゆか見へぬもんじゆ〳〵イヤ是に居りますそふあらふとおもふて尺迦子の寐間を見に行しがまだふとんのぬくさ片時もはやく手配してをつ手〳〵たづぬるより外に分別なしといひつゝコレ李白▲李白ハイなんてござります▲もんじゆそのぜに十貳文持ておじや▲李白かしこまりましたツノなつよ小遣ぜにもつてこい▲なつ小遣ぜに持て來る▲李白とつて十二文よむ共間に▲文珠ふところよりはなかみ壹枚とり出し十二文のぜに包ミくれ目連貴様ハ神通の名人なりこんな時の重寶いそき清明の師匠の白道のかたへ行方角の八卦たのんできたまへとわたせハ▲もくれんぜに受取て飛ふがごとくにはしり行ク〔座中ミな〳〵よこ手をうつてさてもぬからぬ〳〵さすがもんじゆの分別とてん手に追

手の用意のてうちんこしらへするやらわらんづのひもすげる内▲龍がさいかく賓頭盧の兩足のふし〳〵こむらおさゆるやらうへを下へともてかへす

道行妹背の送り火

されバにや釋尊ハかりのちぎりもかりの世とふかきいもせの中となりくるわをぬけて只ふたり越路のそらを跡に見て十万億へと心ざす道ハどこやらあとさきも涙の雨のはれまなくぬれてかわかぬ沖の石つれびきにしたその時にわたしがばちをもちそへていとしひぞやといわれしやんしたその一トことがえんのはし愛別離苦の世のならひおふハわかれと口くせにあじきないこといわしやんすそれでわたしがこのつかへ天上天下唯一人おまへならでとおもひつめ此世ハおろか後の世もかわるまいぞと六道のちまたにまよふ戀のやミころしもけふハ文月の中の六日ハなき魂をしやばへむかへておくり火のおくれさきだつ死出の道往來の人のしげければくさ葉のかげに身をひそめ立たずミたまふぞいたハしきかりのよなミたにくれなからかならず・つま子の有人とすへのやくそくせぬものと我身のうへに聞くつらさやしゆたらさんのささやさぞわたしをうらみてござんしよとたもとにすがりなきけれバァ、おろかな人のくりことや色即是空と

きくときハ自他平等にへだてなく共に一連たくせうぞやァレ〳〵ァレあれを見やくぜいの舟の乗合におもひなき身の女夫づれ二世のちぎりのうらやましい一むらそびへし深山こそつたへ聞つる劒の山地ごくの里ハあれかとよ經かたびらのなが袖も偏袒右肩此まゝに是ぞ即身成佛の法のちかひのたのもしく夫婦ハ二世のちぎりぞと手に手を取てゆく程に三津の川の舟よばひ女渡得舟のさをさして彼岸にこそ着たまふ

白樂天舩中之潭

壹ヲ　つうャといふ	二ヲ　かくャといふ
三ヲ　たつャといふ	四ヲ　ますャといふ
五ヲ　てんャといふ	六ヲ　すいャといふ
七ヲ　しんャといふ	八ヲ　はいャといふ
九ヲ　もうことい ふ	十ヲ　かんなといふ

三聖廓中之戯言

廓ヲ　遊所の事を　なんくわんといふ

女郎ヲ　にいくんト云	若衆ヲ　れんつう
娘ヲ　にいつう	女ヲ　にいしん
尼ヲ　にいするん	亭主ヲ　じうてい

中居ヲ	にいとう	引舟ヲ	にいはん
火車ヲ	にいくハん	禿(かぶろ)ヲ	およてい
客ヲ	きや	大しんヲ	くうてき
すいヲ	そうちん	色ヲ	きん
ふすいヲ	ほうちん	うそヲ	へんな
つとめヲ	すいこ	ほれたヲ	ていら
交合(ちぶこと)ヲ	すてき	のいたヲ	はん
寐(ねる)ヲ	すん	おきるヲ	とう
銀子ヲ	ばんつう	金子ヲ	らんつう
たばこヲ	ちやうこ	きせるヲ	すとん
酒ヲ	ちう	肴ヲ	こん
吸物ヲ	しゆせん	盃ヲ	ちうはん
青ヲ	せた	黄ヲ	ぬく

赤ヲ	めんる	白ヲ	ほう
黒ヲ	こう	哥ヲ	かん
三味線ヲ	てんきん	琴ヲ	わきん
こきうヲ	ちよきん	尺八ヲ	げん
うつくしいヲ	ほう	好(すいたこと)ヲ	れん
わるいヲ	しう	すかんヲ	けまな
盃さしたヲ	めんとん	間(あい)ヲ	ちよん
おさへヲ	りやん	助(すける)ヲ	ごうてん

此外悉ハ記しかたし有増をとゞむ

寶曆七年
丑六月吉日

大坂高麗橋筋四軒町
書肆　堺屋市右衛門梓

家常談話

有一書名曰穿當珎話蓋編所有比談之冊也雖余不識其作者而通其志者乃是風天漢之常也思夫談笑莫耶之劒不拔者毘沙門之使者福德者服眼之獸于謂儘獸爲見採筆書之白絲連綿一卷之龜浮木遑編者之舌頭既此舌頭先生之門下乎否于茲應書肆之索加讃辭於卷首然

黑白主人題

穿當珍話序

八幡大名頭戴烏帽身著素袍曳長袴而携開扇獨揚言曰。寡人雖得千乘之爵。侍從不止過二冠者。一日太郎一日二郎。頃者不請暇於寡人。而出矣歸則寡人誅之。無幾何。二冠者還。大名曰。卿等不請暇於寡人而奚適焉。二冠者謝曰。臣等遊於上國。曰。遊於上國者。不告而可邪。二冠者曰。告則不得志。不得志則不能竭忠。大名曰。何謂也。對曰。君之所治者夷也。臣生於夷長於夷。不知華夏。何得事宜。是以遊於上國。大名曰。善。上國如今

何行焉。　曰此言曰可得而聞乎曰有其書於此利口先生與其徒所序也大名曰。　請以此行於吾國二冠者曰諾。遂書其事爲引

天放元年甲子十三月闇夜

八幡大名自書

傳曰。大名諸侯也。　左傳曰。　美城之大名。　漢揚雄所謂高名之家是也八幡不姓不名蓋明神之名也俗稱眞則誓曰八幡。此大名謂自不假則非眞大名也。　蓋作食侯乎。

やしよめ／＼京の町のやしよめ。やしよめ久杢さいもんで。さいもんでかハらの地藏ぼさつ。ぼさつとめましやこなたへと。たへとのふろふきせうがみそ。みそのつとめハ嶋原で。ばらでこざかしうしうらぬ。うらぬぼセつの雪よりも。よりもちつくりあやかりたひ。かりたひのいほのとまをあらミ。あらみつめつて人のいたさ。いたさはなせのおとばを。とばを／＼どのこがほしいぞ。ほしいぞつもつてふちとなる。となるのもちつくきねのおと。おとの川瀨の水ぐるま。くるま町ぢうはやり哥。うたのよあけにかどにたつ。にたつからおちるやうなゆめを見た。お見たハなミだしやくりあげ。くりあげなれバたけのおかハにつゝみましよ。みましよの中のさゝごとに。どにいるやらしんだやら。だやらばしとやあぶらやの。ぶらやのあめハでゝきけじや。きけじやのくちをのがれたる。たるハ道づれ世ハなさけ。なさけの四郎たかつなハ。つなでかくなわ十もんじ。十もんじのおきよにわしやほれた。ほれた百迠ワしや九十九迠。くまでなしたる其中に。其中にはらハかへられぬ。かへられぬつらに水じやもの。じやものあをひのふたば山。ばやま中山せいぐハんじ。せいぐハんじ菊の丞ハ女がた。ながた。めいほう二度丸。びぐハんかうじたちばな。ちばなかぢとるあきのかぜ。のかぜがうつたるつるぎでも。ぎでもやいてもかまれぬは。まれぬハいつせん二セのゑん。のゑんきつねびさよふけ

て。ふけてのゝちハしらねども〳〵

追加

忝ないかしんゐきの。うらなひうらの御ふるまひ。ふるまひハむりをいわしやんす。しやんすなんで見てもなさけなや。なやのはたごやミわのちやや。の茶やがわのゐのころハ。のころハ都のひがしぼり。しぼりハとゝのかざぐすり。ぐすりかたりをせうよりも。よりもめにもなミだなり。なミだハぜにほどひかる也。ひかるハすき也御意ハよし。ハよしがほれたと打つけに。つけにむら雲花に風。にかぜがわのおくざしき。ざしきハこたつにうたゝねの。うたゝねはらハかへられぬ。られぬ都の八重櫻。さくらハ此花冬ごもり。こもりをさきへひかれなば。かれなばたつた三百兩。三百兩のんでもきせるより。るより出たるさびがたな。がたなで道中なるものか。ものが身をせむ夏の虫〳〵

浪花嶋陽の邊りに風雅なる一とかまへ俳諧人の住家と見へ格子の外に必東の手跡にて比言指南と書付あり入來る人も風雅人ふり袖着たる小者をつれ頼ませふと案内乞内よりまいら戸明て十二三成小坊主どなたで御ざります【客】拙者ハ北邊より参りましたが先生には御在宿で御ざりますか【小坊主】ハイ【客】然らばちと御指南を受申たう存伺公仕ました其通申上て下され【小坊主】さやう申ませうといふて追付是へ御通り被成ませといふ【客】すぐに通れば【先生】よう御出なさつた【客】つゐに貴意得ました儀も御ざりませぬ私は中の嶋邊の者で御さりますが何とぞ口合の御指南を被成被下ませうなら忝ふ存ます【先生】それハ御奇特なる義で御ざります成ほど随分御情入れられませ御名ハ何と申ます【客】烏渓と申ます【先生】さあ／＼先是へ御より被成御手上られませ何口合と申物ハ云をしゆるといふ事もなりにくひ物で御ざります随分と仰られひあしい所をなをしませうまづ口合にハ笠をおく事をきらひますとかく其時のとりあひよく拍子よくいふが第一でござります余所へ参りては一通りのあいさつすみてたばこ盃其外其あたりにある道具類又ハ盃にても出れバ其器やうの物に付ヶて随分輕くいふがよいもし又前かたよりいふべきとあんじ置キたる口合あらば其ときのはりあひよく即座に出でたる様にいふが上手わづか壹ッいをふとて前置をなが／＼といふは下手のくせ扨只今世間の口合を聞

にすんどのくを手がらとして五音の開合で聞様に致す故至極聞へにくい聞へねば何の興もない物で御ざりますゆへ手前では随分のく事ハのいて聞へのよいを専と致ます別して初心の内には開合で申のはいひにくし扨聞にくう御ざりますまづ初心の間ハ善悪にかまわず随分達者にいふて見るがけいこで御ざりますいやもふ追付門人達も見へます皆申さるゝを御聞に被成てとも〲いふて御らうじコリャ御茶上ヶませと云所へ【青蜉】【古艶】御見舞申ます【先生】ホホウ御出被成【青蜉】今朝ハ御人被下ましたとかく朝ハながふふせりますあさねやの半七でござり升【先生】成程いや鳥渓丈御聞被成ふかねやをあさねやとナあれものきませぬとんとのいてあさね久松としたひィヤナニ是は今日初て御出被成た鳥渓と申御方御近付に御成被成【青蜉】【古艶】是ハよう御出被成ました以後ハ御心易致ませう【鳥渓】御頼申まする【古艶】私ハ昨日さうれいに参ました扨浄土宗のいんどうハながうてたいくつ致ました長門いんどうで御ざります【先生】笠をめしたのそれもゐんどうとうげの孫ぢやくしかい何に青蜉す共たばこ入御見せ被成ムゥとろめんじやの【青蜉】とろめんいらずの早ざん用【先生】是を羽織に致したい【古艶】羽織新上るりの道行【先生】出來ました【青蜉】先生のお羽織ハ何嶋で御ざります【先生】是は飛彈嶋で御ざります【青蜉】飛彈じまずきなり御意ハよし【先生】うれいをふばかり【古艶】

此火入はいまりで御ざりますな【靑蜉】いまり樣の御火たき【古艶】火鉢ハ津輕ゑぞ松前【靑蜉】火ばしハとまり玉へや【先生】あの一行物御覽被成【靑蜉】ホヽヽ見事で御ざります紅入ニ桃花ニ嫩靑歸ニ柳葉ニ新語もよし先生不調法ながら正眞で御ざりますかな【先生】足下御目利被成【靑蜉】見へませぬで御ざります見へぬはづじや卽飛じやもの【古艶】先生先日の隱元ハ負ますまひかな【先生】あれは引ますまひ隱元あせの如しといふ程に【靑蜉】御尤で御ざります大鵬ハ何と被成升た【先生】大ぼうハさいきんをかえり見ずとぞんじ足下の御すゝめゆへ買て置ましたが買ゥてをけ頽んで地こくかしらぬといふ所へ【几石】來ル【先生】御出被成【几石】皆仰らるゝで御ざりませうヌ【吟之】來ル先生是を差上ませう【先生】是ハ忝い扨見事置花生に鶯の【几石】うがちを菊の花で御ざります【吟之】此間ハ扇の會が專ら行れます【先生】何ぞよひのを御聞被成たか【吟之】叙夕の評に獸に寄物に衞士の火に薺の繪ぬけに出ました【先生】フヽヽ白馬の節會じやの【吟之】又魚籠の繪がござりました【先生】畧して是は蒙求に有る呂望非熊の故事じや【烏溪】蘭古の評に犬によるものに老僧の腰のかゞ見眉白きを繪書たるがぬけに出ました【先生】ムヽヽ是はつれ〳〵草に有る資朝卿のむく犬を引勢て西園寺殿をあさけられし事じや余程聞にくひ物じや【烏溪】【吟之】先生にはよふ御聞被成ます私ど

もれすきと聞へませなんだ【吟之】又叙夕の源に寺に寄物に花見車が出ました【先生】是は京極御息所の召れたる車じや【吟之】さやうならば志賀寺の上人ムゥそれで寺によつた物で御ざりますな其時の哥は何とやらで御ざりました【先生】ア、上の句は何とやら手にとるからにゆらぐ玉のをといふ下の句じや新古今集を御覧被成御息所の返哥もある【几石】返哥この茶のめや【青蛉】殘念の部に何やらよいのが御ざりました【古艶】もうそれは仰られな殘念の事いや鬼がわろふ 府中へ、、、、【吟之】几石公先日御噂の雅物本屋昨日手前へ參りました【几石】何ぞ御覧被成ましたか【吟之】何も珍物は御ざりませなんだが沉南瀕の花鳥の繪と物茂卿の一行物を持ていました小說物に艷史と隨史遺文とを見ました【先生】隨史遺文の庄司重忠かい【吟 】是れきびしい物で御ざります【几石】いやあの書林が參ませう程に先生にも何ぞ御用仰付られませ【先生】准南子を見せらるゝ様に仰られて下され【几石】畏りました【烏溪】准南子みのやの三かつと【先生】成程烏溪丈出來まするそれものいて准南子は人もあきしのやかい隨分仰られい【青蛉】吟之公には十三經を御求被成たげな【吟之】下直に御ざりました故調ましたが汲古閣も板がわるふて見へませぬ嘉靖版のよひのがあらばほしう御ざります【先生】いや青蛉丈論語徵を御返進申ませう【青蛉】苦しう御ざりません先御覧被成ませ【烏溪】論語徵不定

ハ世の習らひ【先生】烏滸式是ハ出來ました後世恐るべしじや【几石】夜前手前近所の衆中二三人寄て口合段ゝを致しました是に草藁が御ざります御覽被成て下さりませ【先生】御見せ被成何じや藤川段ゝしやべります。べります男松のわけ有て。け有てぎやてい腹ぎやてい。ぎやていがいたらあいといや。あいといやの住居も今霄ばかり。ばかりな楠御供にて。供にて陸の戰ひは。かいわの太刀をかうはいて。はいて櫻のなかりせば。りせば半兵衛に打まかせ。任せの浦の朝霧に。ぎりに佐ゝ木がうち渡ッて。渡ッてくだくる男氣の。トコキノヤノハノモノ。ノモノ又平光興。光興ハ爰に須磨の浦。是ハよう出來ました藤川段ゝとはきつうのいたのべりますおまつよし／＼ばかりな楠是ハぬけかいりせば半兵衛とハ面白いイャ烏滸式も初而の事じやほどに口合段ゝを被成烏滸子も仰られいしびりといふ題に致さうといふ所へ【知曉】來ル御見舞申ませう【先生】是は珍しいすきと見へませぬが何と被成た【知曉】ヘェ花情丈の事ニ付て彼是致し御無沙汰申ました扨花情丈氣之毒で御ざります【先生】何と致したな【知曉】また余程盡されまして此度ハ松風ではないが塩ふみに上塩町邊へ閑居の身分となられました【古馳】閑居に伊八とおもやんな【知曉】小人閑居して不善をなすで御ざります【先生】れハ氣の毒是へ見へればよいに日外からとんと見へませぬ【知曉】とかく近所にわるひ友が大分御ざりま

す「先生」孟母の三遷で友ハ撰ぶべき事じや古語にも其人をしらんとならば先其友を見よと有る「知曉」左樣で御ざります「先生」前車のくつがへるを見て後車のいましめ皆御つゝしミ被成「几石」をつゝしミ一とせたらぬつくもがミ「先生」よし〳〵扨知曉丈段〻を致す程に仰られいコリヤ坊主料紙筥の紙出してこい執筆致さう「小坊主」紙出しにいて疊算「先生」是ハあぢをやりをつた「几石」性ハ道によつてかしこしで御ざります「先生」サア〳〵しびりから御付なされ「古艶」しびりが原のさしもぐさ「吟之」もぐさん山道やぶれた衣「知曉」衣にあめをねむらせて「烏溪」らせてに懸しと書置し「青蜉」置しハ火達に假寐の「几石」たゝねがぐふ〳〵「古艶」ぐふ〳〵ハ千年龜ハ万年「吟之」万年で御無事と母ごさま「知曉」ごさまのかぎ迄預けしハ「青蜉」づけしハ物を思ハざりけり「几石」ざりけりのちじよくをすゝぐ「烏溪」すゝぐの神ハあたまから「古艶」あたまからて道中なるものか「吟之」なるものかわの鱠にあぢのやきもの「知曉」やき物月の晦日のばん「青蜉」ごりのばんさきのつえ「几石」つえが身をくふ「烏溪」身をくふの沙汰も銭次第「古艶」次第の目くらに下さりませ「吟之」りませのかしらもしれ〳〵から「知曉」しれ〳〵かうや濱の眞砂ハ「青蜉」眞砂ハせいがうすいかんの「烏溪」すいかんのはなを「几石」はなをの文覺上人「吟之」上人佛の和尚はつち「古艶」は

つち元來かれ木の如し【知曉】如しもよりあしもゝともよへつた【青蜉】よへつたの名方万病一
度丸【几石】度丸したこまつるさぬきの金毘羅【古艶】金毘羅べんぺこぽんぽかや【吟之】ぽ
んぽかやはやすがくぶろの【知曉】ふろのすごもり【烏溪】すごもり彌助といふすしや【青蜉】
すしやに挑燈外聞じや【几石】ぶんじやのはつ物【古艶】初物子ハ枝をさかつて禮儀をのべ
【吟之】をのべたかのめ【知曉】かのめをさきへ引れなば【青蜉】かれなばたつた三百兩【先生】
そるハ梅枝丈も見へぬ程に三百兩で置玉へ扨烏溪丈中ゝ出來まする【烏溪】出ませぬで御ざり
ます【青蜉】私ハもう御いとま仕りませう【先生】なぜに【青蜉】腹がいたみます【知曉】腹が
いたくば吉野へござれ【座中】ハゝゝゝ【吟之】先生噺を壹ッ上ヶませう【先生】承りませう
【吟之】庭ずき成人常住庭を作り替へ草木をうへかへ樂んでいられけるがある時客人來りけれ
ば又庭をつくりかへましたと見せけり客人是ハ菜を大分御植被成ましたの亭主なんとよござり
ますかの客菜とは珍らしう御ざりますが此様に大分植すとも少しばかりおうへ被成たらばよう
ござりませう＝亭主いや大分のやうに御ざりますけれどゆでるとちつとばかりに成ります【先
生】是は新しい【青蜉】私も壹ッ致ませう扨此度若狭の國より召取ッて參りました人くひ姥と
申者を御目に懸ます是迄何か色ゝと御目にかけましたれど此度のハめづらしい者で御ざります

則御目通りにて人をくわせて御目にかけますたべ仕舞ましたればそうゆう様への御いとま乞び
いノ＼どんノ＼とたゝき立て三寶に赤子をのせて出し扨八十有余の老婆の白銀の針の如き髪を
乱し眼ハ日月のごとく口ハ耳まで切れて紅の舌を出しかの三寶のそばにより今は腹がをゝきい
のちにくを座中ハ、ミミ【先生】是ハどうやら人口に膾炙した様に思ハるゝ【几石】先生會ハ
彌明夕に被成まするか【先生】成程明夕致ませう烏溪丈も御出被成【烏溪】畏りました【先生】
毎月會を致すが先月のハ盡に致たが是を御覧被成先月の會の巻で御ざります是を手本に被成い
ではないが先なぐさみに御らうじ【烏溪】いたゞき拜見する

諸道具盡

片手桶つゞれの錦　茶瓶ハいながら名所をしる
茶釜てる／＼すゞかハくもる　火ちりんの子中なすとも
間鍋おちよ　烟筒もちつくり上手めじや
重箱の玉を奉る　湯桶もない腹さぐらるゝ
折敷ハこたつにうたゝねの　眞名板まへ清め玉ふ

小刀さとに馬ハあれ共

茶臺のはしりぼう

杓子惡源太義平

戸障子こい

簞笥なんで見てもなさけなや

衣桁とうげの孫ちやくし

疊小刀とぎ

小柄三合あれば

鑷に懸しと書置し

鮫は正直の頭にやどる

金鍔いよほさいよ

鐺のやミのくらがりに

鑿のめにもなミだ

釘抜を持て新しきとす

庖丁にハ候へ共さした刀はうだの國光

擂木釋教戀無常

障子〳〵あわゝ

戸棚百迄おりや九十九迄

葛籠なく也深草山

櫓ミつちや

鋏にこま形紅鹿子

切羽過ての棒ちぎりき

頭がしからふかぶろが尋ふ

柄ハそれとも白紙の

釿ぬすみに戀の哥

朱鞘酒をくもふよ

鐁ちどりの友よぶ

鉄槌の才ハくつる事なし

家名盡

足袋や道づれ世ハ情
弓屋ひだりの御長者ゐ
金屋今宵の主ならまじ
豆腐やかに御万歳
伊丹やにりかきつばた
石見やいふに勝る
扇やの竈で一ッのも
柳屋にのぼりて見れば
小部屋くわし
革屋の名のミ鴈金の
桶屋ハ壹分五り
俵屋鈴を参らせう

草履屋狐の子じやものを
菓子やかしてをもやとらるゝ
素麪やうたへや一寸先ハ
干物屋ハ身をのがれんと前へひく
葉茶屋がまどに成ル
京屋のあさつて
榎並屋紀の路熊ノ浦
鶴屋はたち
はぐちや合羽もくらうせし
伏見やこくうに音樂聞え
近江やがり小法師

人倫盡

姉てたがひに取かわす
妹めうとはあるものを
嫡子の趣佘の儀に非
女房聞て下地になす
妾ミそこし
伯父伯母の戀も成とこそきけ
鰥にあいて清十郎
出家師走に此在所
木挽も山のかざり
日傭りもつかうや車海老
船頭有やと詰懸る
白人替名の次第

弟ハ氣でもて
繼子り三年柿八年
甥の瀧とりナァイヲ
良人しげの井
手代ども打てとれ
後家にいらぬもむりならず
下女にはあらで幸壽丸
旅人がらくり
左官と成て失にけり
馬奴に目出たういひける
太夫なまだこよ
藝子に命つなぎ錢

湯女にはあらぬいな舩の

魚盡

鱸山薬もぐさ
鮒た替れば心も替る
鯖で見た彌次郎
魬中薬へ亭主かけ出
鯵をいわねバ理が聞へぬ
赤貝小法師
田螺御げんの夜雨
干鮭の一ッ杢
海月わびはさぬ袖だに
蜆京へのぼりや
魳にはんぽの孝

鯉が高ひかべに耳
鱧と顔とはしんきの種よ
鰤のつるには茄子
鯨のあつまがワくせきと
鰑なわやたごの縄
鰯涙にくれいたり
鱈にはせかれ親方に
鱰道によつてかしこし
鱲子の渡せる橋に
鰡かぐはな
鯊ふかばおきつ白波

鱆魚も談合

鳥盡

鳳凰さくハ九千歳
鷹に車をおす如く
鸚鵡源氏の嫡流
雁のかうより年の功
鵲ハ内にべゝぬふて
鴫ハなきより
鳩ハふたりかさしむかひ
雛の盛衰記
矮鶏の赤いハ猿じやまで

孔雀むねのつかへ
鶉おふたがおかしいか
雉子と見合す顔とかほ
白鷗のなまがき
千鳥も得いわずくよく〳〵と
燕は只一筋につらからで
鷄も先たも参りがたし
鶤鶏柿の木ハ
鵺てゝあわ

獣盡

大象岩ほに腰をかけ
麝香の垣のぞき
熊にはときの聲
豹ハ古郷と立別れ
鹿に白むく淺上下
狸まばらにかたふきし
蛇のぬけがら
牛ハ瀬と成飛鳥川

麒麟におふどふなし
猿猴二世安樂
羊千金にかへがたし
兎よミ詩に作り
獅子よ母よとなく程に
狼ゐ見ためはらひ
鼬ハすきなり御意よし
狗子もちハ

寶曆七年丁丑正月

書林

汲古堂
滄浪亭
文英堂

彌味学纸

序

小野のおつうか後にお月といへるおんなわられ十三一ッにして心さかしくおのかむかしをしたひ十とせあまりさきに十二段のふみをかきつゝりたるかこゝかしこにちりうせしをもとめつゝめて小冊となりぬ題号を得んとやう〳〵さくり出せははし書に彌味艸帋とあるまゝに書出しぬ

鎭西翁書

彌味艸帋

初段　それ〴〵のかた地をうけておもてのことなるをもあめつちにめぐみうむ神のくせなるらめやそのくせのけうときものハいやミとなりぬ清く光る玉のうさきに雲きりのかゝれるをや天津空のいやミなるらん人におけるハ共いや見をつくさんにかきりあるべからすまのあたりのいやミをおもふにおのこのが賀紋とあわせひんとハびたつきたりよそじすぎなんころハゆるすべくもありなん上下うちきたるときにハいだけだかにおこかましくありきぶりつねならすあらたまり内股に何をかはさみけん見くるし近ごろおんぞうし流といひてわきざしのこじりをあげてさしていかめし又わきざしのこじりにひだりの手をうちかけてはをりの裾ひきしぼりて前にかゝへたるこれをきて見よかしのへおどりのすがたとも見ゆる此おのこハ只何げなくありくときはなやめり手にハかけものゝ一軸か生け花やうの物もたざれば手のをき所なかるべけん又夏の衣にハおのこたりともいさゝかのかけ香ありやなしににほへるハおくゆかしくもありなん龍麝のにほひあつきハ共おのこの顔うちながめらるゝものにてけふときいやミなり相見ハひんふく

の事によりておのこの眉のみじかきをにくむものなれどこのふミにはそのばほう眉といへるながく生のびたるをこのむにもあらず只ほどよくあらまほし蛾のとまりたるやうなるハ口惜さきまならん

二段　此ころ茶道に入りしおのこの扇きせるやうのものとる手ぶりもおかしくかどだちたるつたなしけれすぐれたりとおもふおのこの女にゆきあふときそのおんなに限もやらずよほど行すぎたるしぶんいく度もふりかへり見るいやミなさけなくおぼゆ

三段　手より團扇とりおとしてもョ、こわといひ又ちいさき蜘蛛を見てしやくをおこすおんなこのまざるものなればさもありぬべけれど只いやミにおぼへてすつぱのかわとこそ見ゆれ

四段　うかれ女ははなやかにしてやすらかならんこそ本定なるに折にふれて哥をよむ事をふれて名をもとめまたもんじをよくよむといへるハよからぬ手にてからうたなどのべいかミとりちらして書すつれバ中居花車やうのものゆうてんの六字を得たるやうにもてはやすかねて此おんななをやしなふ家におきて人のよく知りたらん哥からうたを五ッ七ッとりましへて只わらんべにいろはをしへるやうにこしらへしこみぬれハこのおんなハもんじのこゝろ知るへくやうもなければ只にんぎやうをかくにひとしくおぼへぬ。といこたへよろづのことこれにかけあれすこの

いやミ又たゞひなし客になりしおのこもこれにおとらざるいやミハ中居たいこのけきまへもなきものをあどにしてれんがの會にてゝがらをとりまた立花しうきくに名あることをくりかへしていへともそのこゝろなきものにハそのことつうぜすはがゆく見へ侍る

五段　藝にあそぶものもこゝろそれにこりていやみ多し船あそびにつゞみ入レたる一しはあさましく只つたなくとも船にてよくはへるものハさみせんなり尺八習ふものゝ五尺手ぬぐひといへるひとてをふくやふかずけさふくろにきら美をつくし梵露のすがたいでたちすましつまさきをふミひろげかたをはり色このめる里〳〵をあちこちとさまよひありくさまうるさし藝子といへる女の哥うたふにさミせんハひさにのせゆびにてかきならしてうしをあハせ天手の方へかほをそむけてうたふさまにくましきいやミなり

六段　うかれ女の初對面といふに先ツざしきへつきてわがあひかたとおぼしきおのこにそむけともしのかげに居てかんざしとり出てひたい髪かき此おのこのしらぬすぎし事ども中居と打かたらひいるハ横顔はりたくおぼゆ又床いそぎするおのこの床へいりてむねとゞろくばかりなるにせかぬていしていきほひつよく□□□□□□□□□□□□□はうたなどつふやき□□□□□□□□□□□たへて待たるハいやミにしてつたな

七段　とき〲のはやりものよくしりたるハ何のうハさにもさし出芝居きやうげんのしぐミもいまだ初日いでさるにこれをよくしりてふれありく此おのこハかならず役者のかへなをおぼへてまことの名をいはでいやらし又うかれおんなのことばに文七さん國五郎さんとさまよばわりのけたゝましきハいふにおよばず中よきげい子うかれめたかひに名をよぶに若野ならハわか坊菊彌なれハきく坊とよびあへるハそのいやミ人をさむからしめるといハんなつの夕ァのうかれありきにくれないの手ぬくひ首に打まとひたるハおんなのかたちをうしなふいやミなり二八ころの藝子おのこのはけるやうのあわさうりはきたるもにくし

八段　ちかころはやりいでゝおのこの髮にふきびんといへるあり此ころハしだいにすさまじくつくりなしてもゝの日の宴にたゝかハしむにはとりのいかれる首毛にも似たる物の其さま其人ともおほへずものすごきいやミなれ又びんさきの小びたいハ何れの彌宜とのなるぞや

九段　いやしきうかれ女のひつこき髮こそさることなれど此ころにハ尋常の町へうつりて若き後家むすめそのさまおとれりふるきたとへにくろじゆすのうしのくそとうちくじきたるも宜なるかなるんばんの抑手見るにひとしくことやうのいやミなり

十段　おのこのわきざしのものこのミも其工人に品ミありてふるきをこのみてたくミの妙をあ

ひする中に當世京吾妻の何かしたくミなせる新物といへるものハたくミそれとうちあらわれてにくけなしまことふるびてやさしミあるハよけれどさもなくてあなめ〳〵とむくろしやれこうべなとのもやうふちかしらつかまハりにとりそろへたる我すいなりとおもふいきほひそのいやミいはんかたなし又もんのちいさすきたるあるいハ大きすぎたる笠のちいさすきたる大き過たるあせ手ぬぐひのながすきたるいやなりちかころ禪といふものをしばいごとするやうにこゝろへしやその法味のことハ思ひもよらず禪宗の寺の門あちらよりこちらへゆきぬけてうち通りたるほとの事に僧にもあらぬおのこのもうすをかづき拂子を手にをつとりもちて色このめる里にかよひてつねにいへるにハ酒肉門に入れずとあれど則酒肉を腹中へ入るゝなりさとらぬがさとりなりとあやなきことをいひてものゝくるハしく又切つきの多葉粉入れしたてることくごて〳〵とからうたつくりひよろ〳〵と竹をゑがきおこなひすましたる顏もはやりおこなハるゝいやミなれつぎてハからふろことハ役者を友とするハがくや詞又鷹すきの腰ことばけしからぬハこの比ものゝふの家にもあらで平人の馬にのることこのめるくらあぢたづなさばきうい〳〵しきハ人にはぢてひそかなる野路の月かけに馬をひかせあまた度おちころひていたきめにあひそれよりしてはなやかなる野袴くれないのふさかけしむちを腰にはせ仕よしのほとりさまよひ濱邊の

船には此おのこのなれなしミぬるうかれ女中居たいこやうのものひつそひなミ居るにおのこハこれらの人に見せんはかりののぞミなれはわれおちにきと人にかたられましとりきミかへりてのりまいるうかれ女はすこしもおもしろからすあくびいつることかすをしらすこゑをひそめこれをそしれともしらす一しほあどなきいやミに見へ侍る

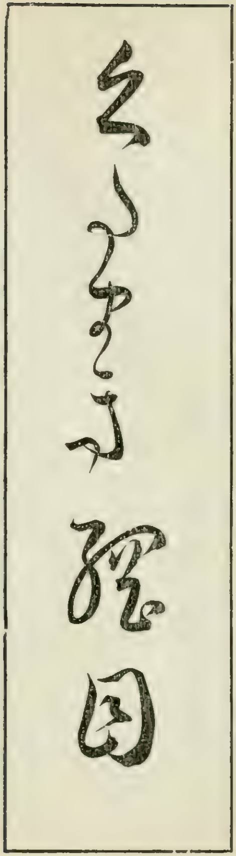
十一段　おのこの帶おんなにひとしくはゞひろきハむなくるしく見へたり又小ゆびのつめなかくのはしたるものありこれらも耳(ミヽ)かきのようをなすものなれとうるさしおのこのふところにはな紙の多く入りたるハつたなし折りかさね／＼とうしめといへるものにてしめく〻りこれハ銀(しろがね)のくわんをつけて鎖(くさり)のきんちやくをさげたりおそらくハこのきんちやくのうちけし人形なるらめなまめきたるおのこのふかくなれなじミたるうかれ女にことなる食事(しよくじ)のあぢハひあつき物をす〻むれハおんなぜひなくうちくゑばそのおのこかんばせうれしげにわれにおんなのこ〻ろへだてなきものからかくうちとけたりとものくいたるをおのが友たちにものがたりしてよろこひあへるいやミばか／＼しこのうかれめハ何の事もなく只(たゞ)うまきゆへ喰(くら)ひたるなり

十二段　おんなにハくせのあることそよけれとたつた河邊といへるふミにもこれを出(いだ)せりうかれ女はくせなきもさびたれどそのくせもよきほどのあらまほしかんざしのふたつもんハいやミのし

ごくなれともこれはとかむへからずうかれ女のふたつもんれたゞひとつのミにあらずいろ〳〵とかわりたるもんとおのがもんとあわせたるかんざし何十本もありてかれが世わたりのたねなるべし山鳥の尾のへら〳〵しくもながきはへさがりをつくりたるハいやミなるものなれそれも屋敷出といへるしんぞうならバはへあひよくもありなんうかれ女はいやミを一躰(いつたい)となせるものなればたゞいや見の中のいやミをあぐるのミ此ころ京なきたるうかれ女なにはのどうとんぼりといへる所のうかれ里にたよりてつとめしにやゝもすれバ京ことばをもつてひとをいやしめ大キイハいつかいぬくいハあたゝか共外やごとなきことばのはし〳〵をおほへてそのうたてさかぎりなしとや此うかれ女ある日はまがわの見せ物鍋(なべ)〳〵ひといふ物をはゐりて見たりしに此ていのたけ〳〵しきものゝいで來(き)たるもげにいなかなりとうち笑(わら)ひしばらく見し跡ニてとふやら胸こゝちあしきといひて万金丹をのミおなじ見せ物ながらいんこ鳥こそやさしけれといひしもにくからぬいやミなり此うかれ女ねやにいりてまじわりたるのちかしらいためるていをなすは其おのこをよろこばせんとふかくあんじたる所のいやミなり只(たゞ)どなたへもかうしてあげますならんかし又耳にきくものゝいやミハ へうかれめのまハしといへるものと中居か花のせりふする聲のざしきへもれたる へ三味せんひくにあだびきの撥(ばち) へまくらとるやいな息高(いきたか)き女 へ閨中(とこのうち)の謠聲(うたうこへ)

へめつたにしさいなるはうたの聲へ曳ずりといふ下駄のせれしき音へかわ草履はきてびた〳〵となる音これらもかそへあぐるに猶かきりあるへからすあやしの言葉に他のなんの七ツれ見ゆれとおのれか十ヲのまさなき事の見へすもかくなんかきつゝけ侍る

寳歷九己卯年
正月吉日
大坂北久宝南町渡部筋
瀬戸物屋宇兵衛板



叙

文祿いつのとしにか撰たるくたまきあり當時はいくわいに遊ふ人この書によらすといふ事なしされは合類あまたにして用捨も亦すくなからすよつてことし寶暦巳のとしあらたに校正してこれを學ふものゝ階梯とす見る人とこしなへに翫はゝなを徳にすゝむの一助ならんといふのこ

不咸山人述

徘徊之事

町儀抄曰。徘徊者道樂也。居讀夜泊りして。遊所に徘徊するをいふ。此病異見をきかす。早く勘當帳に記すべしと云々○徘徊者色里にのらつきて。内の事はなげやり三寶。荒神の雀おどり見るやうに。女房の腹立るもかまわす。酒に遊び色にたわむれ。月花を樂しむをいふなり。是によりて皆人氣違とおもへり。かならずしもしからざるか。案するに道樂の輩は。道にあらずしてしかも道なる物なり。又徘徊ハ實事にあらずして世間知道具なり。故にこれを有内と云。其趣才智學文ある者の口上にまけず火をも水に云かへる也。又は座敷付疊ざわり貴人を敬ふ禮を知り。かたくなる人にもさからわす。夜をふかして朝寐し酒呑て食の進ぬ事など。此道の徳あげてかぞふべからす

徘徊六躰

あしきとおもふこともなきに。無理いひ疑ふて。いちくねわるふぶく客のいろ〳〵

・・いふ断をきかぬとき。一ト

心の辯說　ひねり物いわではんこづいてみせるに。向からあやまつて出るやうに成ぞかし
これ心の辯說にや。言分ハ立た物

詞の辯說　たま〳〵なる客の　それの夜かならずなどうす約束したるが。その夜を待兼て
來るに。外ニのがれぬ客などありて。かしにもゆかず不機嫌にていにしを。
斷の文かず〳〵にて釣出し。其夜の客はさりとハ悋氣深くいけぬくせに。や
かましく。實にいやじやわいな。お前の樣なお人ならバなど夫から附こんで又
一トきわおよがすなど。詞の辯說とやいわん

心の利口　爲になる客の。つなぎて登さんと思ふ時。心ハうつらねども。先惚た心になら
ざれば程拍子わるしとかや。實附やきばバかりにてハ。あくところあるべし

詞の利口　五十越た客の。したゝるきハじつにいやなるべし。又よきことも多し。詞で迯
廻れハくるしきほどにもあらずとや。小便所のおあぶないお羽織ならめさしま
しよのたぐひにや

心の狂

我樂しむ色事ながら。心多きは笑るゝ種成べし。左ハあれど共ぬめたの大いなるハ。物數寄客のつまミがいに召出さるゝ事多しこれも商歟

詞の狂

いやじやわいへ、、、、と。思ひがけなき時をゝへいな詞の出るハかハゆらしい事も有物也。今俗にチャリといふ詞の狂なるへし

右六躰は皆よい女中の咄也。かくいへはとて時に隨ふ習なれハ。我ぬかれしとて人をそしる事なかれと也

諸部

神祇

北野の朝參りハ起番のつれ〳〵をなぐさめ。祇園の宵鉾ハ紋日の數とぞ成し。いづれ御利生ならざらんや

釋教

目病の地藏ハ何の番をかし給ふ。予が知れる置やの嬶願有とて。日參せしハ何を頼んで置しやしらす

戀

今名付て色といふハ戀といふ題にハのらすじつの意味ハ御所奉公して知るべし

無常 鳥部山に立煙も今の世は油断がならす。佛前の挑灯にかわゆらしい紋所がたんとミへける

哀傷 かならす深いといわれんとて。女良の素生親の事など問出して。跡へも先へも行れぬもの也。此時身躰のせんじ汁に茗荷の子一トへぎ入用れハ本腹する

追善 何となふ逢し人も。無名に成しと思へハ何となふゆかしゝ當座ハ親の精進よりも

懐旧 淋しき夜半にのきし女のみくりひろげ。いつハかく有し其夜ハかふ有しなど思ひ出す。ふるい事ながらよし

述懐 叶わぬ用又内の首尾悪節など。九ッなるやならぬにとつかわ歸るに。我ハ顔に時行哥など鼻にならしてすれ違ふて出かける。打も殺しつへし

徒移 付合にもあらで。與風人尋などして知らぬ宿屋に行し拍子無物也。名ハ知らであのお方などいわるゝ。こちよりも中居などコレ〳〵と斗呼□いとゞ間悪し

名所　嵯峨への通し駕。宇治の螢見に船遊びといろ〳〵名ハ替れど。商の字にて悟道ありたし

名物　石だんの下の串團子。二條のやき餅も一物なれども。袖からいだすダレコには。琉球芋にて當りを取ける

餞別　正月も呑込で居。田舎客こそ頼もしけれ。いぬる頃ハ菓子箱など送りてすますに。供の男の頼もしげもなきには。羅紗の鼻紙袋などやる事ハ。誠わざハひは下からとの心持にや

賀　染歯の祝こそ仰山しけれ。十二三からねらひあてるぬか袋の矢次早か。調子のあわぬすて引のちからか。只結の神こそいのらめ

對　緣無も緣有も思ふも思わぬも。こな似合しきこそこのもしう見へける

哥　角前髪の鼻紙袋に。みかさ高くいれて。内でも時行哥うたふていれは。茶屋に居心地する比いとうらやまし

謡　下袴の取持も拍子にのつて。曲舞の同音にてらされて居。中居の良いと見つべし

仁心　無理いわず酒呑す。ねむたうない眼を付合にふさいで。寐させたかる客の心づかひハかず〱なれど。向はさほど思はぬものを

眺望　三條のはしから見おろす涼の火ハ無双なれども。うちの居間へさし込月に。かすかにきこゆる見せものゝたいこハ。格別にゆかし

秀句　長き座敷の内ふと一ッ二ッ口合も有べし。仕事にしていふハ聞ぐるしきにや

言かけ　久しく流布してゝ鎌と名付しに。いつよりか鐵砲とかわるうき世ァゑんしよくさいぞ

見たて　螢茶やのわびしきにも。みめよき有。圖子のかたで風切にも茶名石有ひくきあり。されどよき所あると知るへし

云たて　折〱内の首尾の事いふべし。まゝ成る身も餘り自由すぎれハ面白からぬ物をや

重詞　織物衣裳に高い良して。重言多くいわるゝハ聞ぐるしけれど。あどなきハ又愛しつべし

左禮　悪口もよきほどにや。わづかのことも氣にかける者は。かぎりなきものを

大意

遊の立様ゝあり。先遊ぶといふ字の躰をわするべからす。何心なく出て酒程よく呑おもふ目當を呼て。只万事を忘れ一夜を面白く遊ぶべし。此内あまりけやけき悪口。見へ悪きさわぎ用捨有べし。扨心の儘に樂は皆遊び也。又色と遊びを兩用に用る仕内有。かしかり。逢。退の詞色にも遊にも用る也。但し遊の内にも。呼出す。つながるなどの詞ハ。色の方に近かるべし。乘り。打込などの詞折により遊の方つよかるべし。或ハ月夜の二人づれ。露地口の咡などど。人によりきらへるもあれ共。たまく其夜の興にする事ならハさのミ嫌ふにもあらざるべし。又色に女良のいふなる大へいなる詞も。座敷にてのチャリならハ遊に用ゆべくこそ。此たぐひは客によりて遊にならざるも多かるべし。又心の遊といふ事あり思わずんハ有べからす。口傳數く多し。只遊に成ルならざるなど。至りて深心ありとしるべくこそ

發句切字

下知

しいな　わるいこと　へしいな

いゝな　そんな事　へいゝな

まち　わたしも行れ　へまち

のミ　最一ッ　へのミ

凡此類にて考ふべし

をまれし

圖子の女良ゝ下にて呼れ。實におまれし成べし

上に切字有て下ニ哉留之事

圖子掛の女郎の。上の店より行居るを。下よりあげにやるに。上にて約束になりしれ。下ハ哉

留やならず

けり留

幾度人やりても着にけりが出來ぬ。けり仕廻成べし

三名切

もらひみなどにて店の男にやるに。畏て出てしばし有て今すこしなど。一兩度言來りて。とかくしてよく尋れば町へなどいふ。一度二度ならず三段に手の切れしをや

大まわし

先斗町ぞ不勝手なる。橋などなければ川廻杯しかも遅ふ送りき

切字なくして分別あるべき句

俄にいやになるあり。異見もわびこともきかす。退狀やらすセりふも無て退樣あらん哉口傳

現在之哉

久しくゆかで今宵ハと。晝より樂しミ。髪など常よりいときよらかにゆひて。出かける道にて思ふ目當の。外に約束など有て行に、出合たるほいなし

うき哉

花車中居抔の。今宵ハそれの御約束などいへど。とくと尋ぬ内は。合點せぬなど淺間し

三ッのし

戀し　かわゆし　つれなし

猶口傳あり

おわんぬふのぬ

つめがきかぬ抔。俗にいふなる若き女郎のつつかり得いわぬはたからもしんき也。又さつぱり

のおわんぬも愛なしや

七ッのやの次第

梅か枝が曰たとへ世にある人でも里の金につまるも習と云よ。實此道にて不自由なる恥かしからす。衣服諸道具もかり蔵の用心よき。氣樂なるや 替詞經曰是曲ハ八云々

にて留之事

貳度逢れよきあしきもしるゝ物也。只二度目にて思慮有たし

上に疑の文字ありててと留る仕様

新地の遊でおかしき。祇園を下とごいふ成ル両店の女良下からあげに來る事あり。心よくやるにけつく得いかで。其儘男に抔呼てやはり居事有れ。如何工面仕や

下の句のて留メ

新地の圖子がけれ。泊り四ッ五ッ也まづしき客思わぬにもなし。實思案のてどまり成べし

つゝ留メ

油ぎりし達者ものゝ。しかも酒つよく呑て。期よりさし込呼れ。さながらおそろし。只目當い筒成ルべし

見ゆ留メ

宵よりつられ〳〵て出來ぬにして。駕など言付てさわぐに。見へますと知らすにくうもなし。常の事ながら堀出しのこゝちす

こそといひてれへけせてねえめれと留る世

螢抔馴染にしてかよふ物ぞおかしけれ。いつの程にかこそとあいたいして。安く泊ぞ猶おかしき

言殘す手爾於葉

女良のいわねばならぬ事など。いゝさしてとかくいゝかね。外の咄しなどにてまぎらす事ハ。必聞すもありなん。おして尋るともよき事ハなき物ぞかし

治定してはね字

連中の呼し女郎抔。ミす〳〵なる人やつてそれの抔。断いふていにし跡。いと興なし

かさねらん

きわめてきらい成る女良ある物也。初ハいなはいわねど。何となふ役目の様に見ゆる。又さわれハ寐た貞するに。ぜひのふおさへてすます抔。ひやうしなきにや

八字の付所

帯といた足の何となふ。八の字になるに口元へ手の行までらされる貞を。見る人あらバいかゞせん

一句二ッに成句

田舍の達者なるに。町出のむくなる出合いとおかし。折によらハ三ッにも成るへし

下ノ句二五四三の事

程能直段こそ分たれ。新地の二五まつや出の四寸三。奉公人には似合しきに十一六の眼に付ハいづれ下の苦成るへし

さし合の沙汰

差合の沙汰といへるハ。ぬめたの外ハ。其女中〳〵の了簡樣〻替有て。一決しがたし。先此事に五ッの品あり。連中と。大道具と。一座と。宿屋と。馴染と也。是呼客の心得にあるべし。殊に寢所に至りてハ。猶色〻のせりふ。出來て彌其わけわかち難かるべし。差向の連中あるには。四の五のといゝお馴染衆に譯が立ぬ抔。夫〻の趣。色〻のこゝづも。一通りいゝし跡ハ。逢共譯立ぬべし。ひつきやう差合ハ。ぬめたといわれまいため也。人に寄て善惡もなく。商多くするを手柄と思ふ人にハ。さのミ制すべきにもあらす。又賣遠きは今少しと思ふ内にも。度〻人に客とられて。淋敷なる故によからぬ座敷付にても。功者の客に出合てハ。少

ゝの差合も得いわで逢事也。只賣物買物と思ふこそ。此道の肝要に侍るべけれ

同字別吟

新地掛し女良の。圖子にて名の替りあり。替らぬとも差別あるべし。又上げい子。下女郎抔あり。胸わるきにや

座數幷去嫌

附合　三座も五座もつゞくへし。但酒の程よくにて二座にても捨る

寐間　寐間に寐間付す。但しさし込の所へ馴染抔來られ。二座もつゞく

居續　二句にてかならず捨べし。但し袴にての勤なられ。幾日にても續く

歩行　芝居茶屋一場去也。直に付る事もあれど。氣つまりてあしゝ。下河原貳軒茶屋抔。付べし

神祇之詞

〽伊勢參り 〽北野朝參り 〽主夜神 〽金毘羅 〽蛭子 〽八幡放生會

非神議詞

〽かよふ神 〽神の棚 〽戸帳 〽末社 〽鈴口

釋教之詞

〽清水 〽目病の地藏 〽日親 〽御忌 〽十夜

非尺教詞

〽開帳 〽念佛講 〽廻向 〽鉦打 〽線香場 〽坊主 〽尼出

戀之詞

〽逢 〽退 〽せりふ 〽つながる 〽逢戻る 〽掃 〽馴染 〽分 〽一通り 〽深い 〽色 〽乗り 限りなけれハど、に留む余ハおして知しるべし

非戀詞

〽吁 〽呼 〽寐 〽泣　此類にて考ふべし

無常詞

〽心中 〽辭世

非無常詞

〽死ますく

述懐之詞

〽親の煩ひ 〽内の首尾 〽せかるゝ 〽金の噂

非述懐詞

〽親仁 〽婆ゝ 〽後家茶屋 〽借錢

人倫之詞

〽役者 〽太夫 〽たいこ持 〽げいこ 〽三味線引 〽座頭 〽花車 〽中居

非人倫詞

〽七右衛門 〽介右衛門 〽四郎左衛門 〽介四郎 〽新兵衛 〽金十郎 〽彥四郎 〽左平治 〽源四郎

口傳數ゝ有

居所詞

〽呼屋 〽道や 〽人家 〽店 〽ドヤ 〽ヤチヤ

非居所詞

〽疾病 〽座敷

夜分之詞

〽蠟燭 〽だらにの鐘 〽月夜烏

非夜分詞

〽寐 〽むかひ 〽送り 〽夜着 〽ふとん 〽鼾

山類の詞

〽圓山・〽灵山 〽双林寺 〽瀧の下 〽下河原 〽和國 〽安井前 〽吉田こくうぞう

非山類詞

〽おやま 〽下り坂 〽峠 〽洞

水邊之詞

〽床 〽川 〽床几 〽跡涼 〽彦八 〽金之介 〽車道 〽升婆ゝ

非水邊詞

〽水づかひ 〽はまる 〽およぐ 〽流の身 〽川竹 〽綱 〽渡ル 〽橋かける

四季之詞

春

【正月】三ヶ日五ヶ日六日七日十四日十五日十六日廿日廿四日右之外皆ゝ紋日也

【二月】初午両日　十四日　十五日

【三月】節句前後三日

夏

【四月】朔日　八日　稲荷祭 中之卯之日

【五月】節句前後三日　卅日

【六月】朔日　六日より十八日マテ涼
十九日足休　卅日千日参り

へ祇園五節句。新地晦日より五日までをきらわす。下八斤六上八十四銅にて臨席可レ有ニ覺悟一事

裏

新艘に逢にハ。わる口せりふの類をいミ、白歯の藝子にふり〳〵とさわる事を恐れ。すれからしなるけつの指髮を切に油断せす。など此たぐひのいミ事委 記に及す。其外先粋よりの遺戒を左に記す

一約束の早行　一着座に所作する
一夏衣裳の掛香　一太胸紐大紋所
一寐所の無理　一隣寐間の屛風のぞく
一三味線仕事に引　一物間似似すぎる
一我内のせんしやう　一仲居大へいにつかふ
一連の女良なふる　一女良來ると座淋敷成ル
一ならぬを悦ぶ　一連有付の寐急き
一廻し男と咄する　一太鼓みて迯る
一花車いぢる　一身振する

一我着替苞腰物さげ物帋入た薬こ入殊外大切にする

一手を引て歩く　　　一天窓の置手拭

一扇笛吹　　　一家來呵る

一かり初にはだかに成ル

一吸物椀のふたに飯よそわせる

一町だいこおろしてつかふ

一盃の無理いふ　　　一かしこぶる

一肴の小言いふ

一色事の噂高〳〵と座敷でいふ

一義太夫ぶし長〳〵とかたる

一相方の色事吟味する

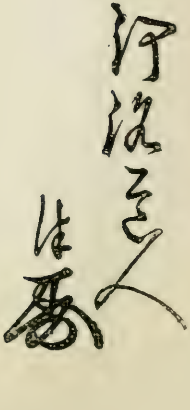
右之外法令多しといへ共。記にいとまあらず。只たらわぬ顔にて遊こそよけれ。里の噂ども知り顔にいふれ。にくまるゝたね成ルへし。だまされまいとおもふのがすぐにだまされたるのと知るべし。欝氣をはらす所とばかり心得たまへかし。粋といわれんと工夫する。これ不粋の只

中(なか)也、能(よく)かんがへたまへかし穴かしこ〳〵

くたまきなりぬ巻をひらけは河東の風流こと〳〵く備れりこれをもてかれを思へは全盛ハこれ春の美花落とも實をむすはすやりくりハこれ師走の月拂とも亦せうす水上のむかしをわすれて身あかりのいまをなけく盆屋の橋なを殘てしち屋の通ひいまた消す祇園寂〻としてほたるはやり新地森〻としてあんま歩行あんはいよしの聲高ふして客の夢をさましりうきういも賣殘りて中居のねむりをとむるいたましひ哉かなしひ哉此里のおところへたることしかはあれと朝にかへり暮に行水となく野暮となく橋を渡れは心の正月足は露にたちかくれ一寸さきの古言ハ昔も今も我徒の輩一日も此書なくんハ此地に徘徊をなすへ

からすとみたりに書して述者の求に應すといふときに巳

のなかき春の日



高僧傳

先賢卜子夏著

不許翻刻
千里必究

聖遊郭二編列仙傳

寶暦癸未冬日

文王江藏梓

列仙傳序

昔者孔子有乘桴之志而不果。則遣子路浮海東方求仙于日本。子路之歸也。哲人既萎。子夏慮其志之遂沒。筆之於冊。名曰列仙傳。以與六經并傳于世。迨秦始皇焚書。則此書以其藏于呂不韋家獨得免灰塵之厄。寧也自幼好讀之。心甚有慕焉。夫中國之所謂仙者。蓬頭垢面荷衣百結。癯然悴然。如華兒如疫鬼。壽雖後天而無益耳。此書所載則異於此。中洲之古雅。嶹陽之壯麗。屈江之淸唱。江北之妙舞。眞人之術。金母巫姬迎駕而趨。仙郎之雄。漢武楚襄束修而至。其所以適從者各從所

好。　故有短衣長劍侏離鴃舌者。有劇態優語虎拳鯨飲者。或有婥勺冶郎淸歌飛塵。　班白先生丹青入神。　或有枯態野情惟金之賴。　漏屋落戸是色之好。　千情万態不可枚擧。而至於其超凡絕聖解脫葛藤理窟。　遨遊無量世界。　磨而不磷。　湼而不緇。　則一也。　是其所以爲仙也。　而其間亦各有得失。　里謠曰。　彼子洵美兮。　牡丹上頰頭。　黃紛儻傳去。十分好冶娘。　言責備於賢者也。　後之學仙者所當致思焉

康凞十八年癸未冬十月壬午

七十二叟可亭董寧薰
沐拜序

南京沈無有謹書

有朋自遠方來不亦樂乎　日本の粋宿太曾部やの能因とハ是歟唐土よりの使者參りたりと高らかによばハる臺所役の季吟といふ浮藏主まかり出請こたへしてかくと奥へ通じけるにあるじの。能因居士衣あらためて出向へバ魯國大聖人孔子の使として十哲の壹人子路といふもぎどうもの足の達者なをとりゑに遠方の使溫袍にはちすともめんどてらわるびれすどつと座し扨我國には先生孔子をはじめ老子釋迦の三粋あまたの粋達引つれ靑樓にのぼり座敷哥舞妓大だて大さハぎ專粋道をみがく眞最中也大かたにあそびも盡きたれバさだめし君子國大日本のあそひハ奇なる所もあらん急ぎ參り趣向立方見聞き參れとの事なり此段諸君子へよろしくとつまびらかに述らる能因手をうちこれはきよとい〱先長く逗留なされて和國の立かたも見給へ　則日本今六人の粋連の揚屋吉田やの兼好と俳名でよふくせものあり是を貴君の旅宿にきわめ御出の様子廻狀したゝめんと手はやに書つけ季吟をはしらせ吉田やへあないしてどつとなりこめばあるじの兼好けふハ客がないかしてつれ〲なるまゝに硯にむかひゆふべの帳合して居たりしがかくと聞てはしり出子路子を亭の間へ招じ入れ能因もろとも盃をめぐらし待所へそりや御出じやと中居がしらせまつさきには在原の業平色事のきつすい嵐三五郎といふもので入來らる次に中村哥右衞門づくり大伴の黑主其次によつほと顏も骨だちたれど中村吉右衞門役の喜撰法師又中山

文七といふ身あんばいハ僧正遍昭其跡は文屋の康秀ひいきの多ひ藤川八藏といふ男とのやうな狂言ても舞臺いつはいに面白がらす粋連子路出向ひ座につき禮をなす事をせぬがちつとわれらもしぶり皮とおの〳〵ちかつきに成喜撰法師まかり出我朝ののらかぶをかくまでしたひ玉ふ事祝着せりとよろこふうちたれかれにおくれて出てくる小野の小町中村久米太郎といふかあいらしさておなごたてら此中間へはいりねつからよめりせすに立あるくゑぐひしろものサァ揃ふたわと酒になる子路がいハく扨各〻様へのミやけ孔子も何かなとそんじられましたれど蠟石ギヤマンぼりてもなしとんとこれにこまりしが拙が國のさる强冨が先日あミ舩に出られましたが其日ハきつい精進綱で鯉のかハりに何やら眞赤な實をひろわれました則先生孔子へ進上致されなんであらふと尋られしがこれは甚めづらしひ物じや大ィサ斗のごとく萍實なりと申されましたなんでも酒毒を消事ゑらし是を各〻へ進上と大キな籠から引ずり出せは是ハありがたいとさんごじゆ人參を囉ふたよりも嬉しがり黑主さいわい二日醉小刀出してほじくり少ばかりのんどを通すやいなやさつとさめてたちまちのめるいきほひコリャ一達が解毒散もはだしじや仲間のしろものと悦ぶなり平巾さるゝハいやめつそふに此妙藥のさたをすなッレ嶋の内に居るせいそうとやらいふうがちもの萍實散などゝ名を付てかんばん出そふもしれまひ康秀こたへてヲヽ

それハいつやら戀のやつことゝいふものを案じ出して賣らせたものじや亭主兼好しやしやり出てやうなけつかふなおミやげをつかハされたかハりに私家につたハる料理白うるりの吸物を致して上ませふと臺所へはいる其外美酒佳肴つきまいたつぷりととりならべ中にも河豚のう[illegible]ぶ煮すつぽんのわさびあへなど中〻ひつじの濱燒牛のなんば煮も及ばぬと子路も數盃かたむける押さへるハつぎめじやと酒せりふに成てうがむ瀨にまさりし貝盃で二ッ息なしにやりつけしハ能因坊コレハきついと僧正遍昭ほうびの詞にふところのはな紙一まいがこかね壹兩の紙花能因ありがたしと押いたゞく亭主兼好ハいつてきも得のまず幾夜さにてもあそぶのら彼吸物持出て能因の背をたゝき下戸ならぬこそおのこハよけれとうらやむ花を下された拍子にもひとつつぎかけよと能因が持たる盃へ瀧流しにつぎかける能因しばしと聲かけ

〽天の川苗代水にせきくだせ
　はなくだします紙ならばかね

とどやしかけてぐつとほす各醉中にかんぎんす子路居直りていハく興に乘じておたづね申事ありこれや此日のもとは敷嶋の風流あまたなる中にも哥連俳茶香とつゞき此道の行ハれることいかん其味ハひをかたらせたまへ▲喜撰おつとつてサァチンプンカンをやりかけをつたいでや

かたつて聞かせん哥ハ我朝の道にして貴様も知ッている通り出雲八重垣つまごめといふからはじまりこれハくどふいふに及ばすえんにめでたきものなりときにちかき比下町人めつたと哥ざんまいをする人柄を見るにぞんの外なものじやわかいときから茶やの座敷ハばけもの屋敷のやうにおぼへ一錢でも人のかすりをとる事に心をゆだねとう〳〵家を買すさまじくいんつうをたもち家來多くめしかゝへ扨むす子には我が不器用のむねん覺あるまゝにさま〳〵の高上藝を習らハせ嫁どり名前ゆづりすんで我が別所を建させいんきよ樣といわるゝ時珠數つまぐるより外なんにも藝がなければはなし合ふ友もなく御堂の役所ばいり毎日はおもしろげなく喰ふては寐く〳〵まかないと丁兒を呵ろふより役目なく我身ひとつをなぐさめかねる是が正眞の有財餓鬼おりに來るやぶ醫者がすゝめにて地下にあるかの哥よミといふものへ思ひ切て金子百疋包んで入門し扨それからおもやへいふてやつてがてんもゆかぬ哥書を買あつめ寐るにもおきるにも哥よみでうしになりさくらやかきつばたも面白がつてまたゝきもせずにらみつめているを花見とこゝろへ名月前に月のお哥ハと人が尋ればゞ只今愚案最中大かたにつゞりましたといふておきかの哥の宗匠へ何やらかきつけやるゆへさてはこしをれにてもミそひともじをつゞめたるかと見れば名月の哥かくまでうかみ候とかきて共おくに

はれわたる

此五ッ文字ばかり也かの宗匠の返書におうた珍重すこしてんさくといふ文にてはれわたるの五ッ文字に二十六字足てどふやらかふやら哥のやうなものにしてくるそれを同行のたい夜に参つてじまんらしくものがたりする事これを似たよミといふ也サァだれなとかわつて次キを言へと息つぎに茶碗酒グィとやらるれば▲康秀さて哥の所はあらましすんだり次に連誹茶香なり此連哥といふもの急度出所正しきものなれど地下い連哥といふ物の近來すたりたるわけハ上ざまにては連哥も興あるものなれど地下にては哥ほどにうちあからず又誹諧ほどに切れもせずくち〳〵したものにてマァ不器用ものゝ醫者坊主のたぐひせふことなしにちや〳〵としている事也はいかいは遠くハ貞徳中比芭蕉宗因などいふもの出て段ゝ繁昌して誹諧せぬものは下賤のごとくにいふほどに行ハれし所にはるか世をへだてゝへ半談翁といふ誹師京より浪花にうつりコヤツ日本無双の横着ものにて我がけんしきをたて誹諧を聖人の道のやうに位どつて傳授口傳の我流をおこし句姿も奇妙なる所へ取つて飛ばし門人にはへ周章へ嗅穴後にへしろさだなんどゝいふ富ミたる弟子どもをとらへさぼてんといふもの世上の誹人季なきものと心得たるハ大ィなる相違なり季ハ秋なり季ハ秋じやといふわけハきつうむつかしひ事で口傳じやもときさぼてんといふハ

梵語にてサボテン此四字に一字ヅヽ意味深長あり高弟へ周章へ嗅穴までハゆるしたれどへしろさだハ末弟なれハサボの二字ハゆりたれどテンの二字ハまだゆりぬなどゝいふて涙ながして傳授銀出す事なりしがさしもの狼も老かさなりて人を喰ふいきほひもぬけて身まかり同じふるき誹諧師へどうれんも古人と成へ五盃堂も隠れければ跡ハごちや〳〵なりたる中にも此半談などを今にそしるものあり半談が我流をおこしたるハ其器量にしてはいかいが上手なるゆへなりないもせぬ事をもの〳〵しう傳授ものじやといふをあつと人のがつてんするは元ト半談が誹諧にたけたるゆへにて凡誹の及ふ所にあらず誹諧にては海内に名をふるひたる名人なるにそれに今ごちや〳〵のはいかい師ともがどふのかふのといふは濱芝居の役者が立テもの顔するやうなもので本舞臺へ出ぬ事也此半談が跡ハへ村川武天也惣躰付合ふて面白きハ誹諧にあそぶ人なりしかし万事うがちたるものにてぐわつさりとするゆへあたりつけぬ人ハびく〳〵する物じや今もはいかいにいきどほりてちからを入れるものは古人へぎやうさくの連中にへ如洞へ土馬へ娥州又古人へかくうの門人派にへしうかなどいふ古ルつハものひとり武者ハへ鬼上又へきんどへぞゑんへきやうごなど皆はいかいのしれ者なるがつね付合ふてはしろとはよりつかれぬほどに万事江師に見ゆれど内證へはいてからすんと心安く文字へんの事ハ鼻の先の事でも不吟味な

もので間口ほどには奥行がなく只粋がる斗也中にも点者といふものいろ〱有て笠付さへろくだまに出來ぬやつがすさまじき誹名をつき桐の細き板にはいかい梅に鶯と無造作に書つけあらゆる人形を板木にほり机にならべよい事かとおもふて程明巾をもめんにてぬわせ打かぶり雜句のすへに五文字付といふものあつて其中にもとりわけ下手のした卷もつて來て点料ハミだけ錢ながらさし出す子細らしく押直つて卷をひらき見る所

五文字題　梅のはな

ながむれば

ぱつと嗅

さかなミせ

など書つゞけあり何の事じや段ゝ奥をよミ〱むつかしう工夫顔して其中にて秀吟たるものを奥ぬきがきしてやる使の者嬉しげに持かへり連中居ならびて卷をひらきしぼり〱ひらくいつちおくにある卷頭の句を見れば

能ゥ肥たといふ題に

貴くてといふ句なり

此卷頭の句ぬしまくり手にてなんときついかおれが名句じや實語教に人肥たるがゆへにたつとしといふ書物の故事をいふてやつたに學文のある点者じや能う閙おつたとほめそやしそれから段々はやりはやるにつけてそろ／＼此点者も風雅になられ借家住居の屋ね裏の見へる内に額を上げ拂子を買ふてかけて置く氣になつたげな天道人をころさず身過は仕よいものなり町の〽夜番月別錢とりに來ておいそがしござりますかとあいさつすれば〽點者ちく／＼で御ざるさてこなたハ段々付が上手じやげなの〽夜番ハイらつちもない事を申ます〽點者いや／＼風雅なるじやちつと誹諧も又仕て見やしやれどれ誹名をつけて進ぜふこなたハ兎角夜ル寐ぬがせうばいじやによつて其こゝろをもつて斯ゥ付て進ぜると卷紙切て書つけさし出す〽不睡と云文字也これハねむらすといふ事じやと講釋してわたせは〽夜番お祝ひ被成て下されました忝うござりますわたくしがせがれめがほうさうを致しましたがかるう仕舞ました願ほどき油かけの地藏様おまへ樣の評で折句の五百よせ仕りましよとついしやういふてかへるあとにて兼てこしらへ置たる門弟帳にはや〽不睡といふ名を書出し人さへくると其帳を取出し唐土の孔子ハ門人三千と御ざるが私は三千二百人弟子が御ざります先孔子に二百人かちましたと自慢はなし世上のはいかいしが物をしらぬにへ助に此度むしくひばといふ誹書を作致したなとゝわけもないといふてい

るもはんくわなる所ゆへ耳にかけるものもなく〳〵おせ〳〵に世をわたる事なり風雅なる誹諧をもてあつかひがわるひゆへにらちもないものにしなくだりたりちつとがてんじたものが出て此ゆがみをなをさいでと思ふとじや又茶香の二ッは其式にくゝられている所あるゆへさすがに人柄をくづさず茶も何流かりうとわかれて當時大ィに行るゝ事にて是も近來存もよらぬ宗匠出てことやうの事ともおしへるにや茶師にてはなく茶の湯つかひ多し妙喜庵の數寄屋に敷居を一ッへだてたるは貴人のあしらひなるべきに今は此敷居をもふけて茶やの亭主やくつわやの息子を招ずるハけしからぬ事どもなり香利ハひとしほ貞實に式をたがへずていねいに嗅ィで居る事にて面しろミのうすいだけ長久なるへし〳〵子路こたへて有かたし〳〵まづ此丘ッの道もおうむね得たりこひねがハくハ青樓の意味も少しく聞かせ玉へ〳〵僧正遍昭遊里のあぢハひハ月花餘情色八卦其外數多の粹書にあらハしたれぱくどふいふに及バず新町嶋の內をはじめ時〻の風流いろ〳〵とてんするものなれど女郎の情ハふゑきのものにして誠あれバゆびを切り實なれば起請をかくといふものがやつぱり誠の表にして其裏の有がたき所はいやでもおうでも請出された所が誠だましてもやつても添た所が實なり是客に添ふと間夫に添ふとの二ッにしていづれもまとなるべし扨近比ぐつとわるなつたものハ客のあそびかたじや銀つかひながらおかしい仕うちを

するは芝居がくやのものそこらあたりのむすこどもに友だちあしらいにせられるを女郎へあたる粋とこゝろへかねのいらぬやうにするのが至極黒ィ所じやとこゝろへ淺ましきのらどもわき出るによりて所〻の遊里まへよりハ次第にさびしくなる事なり女郎にそやされ牽頭にやられしかも其女郎のそやす事も牽頭のやる事も能ふ知て居て何くハぬ顔て馬鹿になつてつかふほどのかねをぐハらり〳〵と理屈なしにつかふのが玄〻まことの粋強富といふものなり近比中方以下のあそびハ甚あさましき物になりくだり牽頭持に何やらふるまわせたり茶やを引合せて囉ふたりそこらを悦ぶ近來出る牽頭持といふものもだん尻のてこ押シ見るやうなものばかりにてそのやうな客につきまハるも道理成べし牽頭の上官といふハ年がよろふが追こもふがへ森田幸助へ石場宗介といふ顔ハずつと見るとおかしみあつて物まね仕といふ場ハぬけて來て牽頭のずいいちたりつゞいてへ霸井與八へ大西平介などほつ〳〵と只の咄し仕て居ても自然の面白ミありこれらこそ牽頭と稱すへき座敷へ來ると汗水流して飛たりはねたりする内に牽頭といふものでなし先たいがい意氣かたハこんなものじや兎角こんりんざいのあそび人ハすくないものじやが珍らしひハ當所のさる商家に男子三人ありしが惣領大ィに立て藝道によつてあそひ其次男もあそびつくして武官と成り三男ハ三郎ハ今の家を知る人にて金の紋付てエラダチなり三人が三人

うち揃ふて粋道入ルといふはたぐひなき幸かな三ツ子の格で内裏からひよつと呼びに來てのら舍人にせねばよいがと案じているげな當時あまたはうぐわんある中にも我等六人ハ出入方の町人御馳走に呼にやつて置た其中にも〽方ミ往喜右衛門〽ふらのミや永太郎當時病氣にてしばらく立かた斷りて御ざれば其外の出入方是へ呼出すべしの聲におうして入り來るふらだての豪傑ゆへ家名も〽傑や興左衛門めやうだい弟きめ治郎年ハゆかねど其きものたくましさ〽茶向といふべんけいを引つれおも／＼と座につく次キに出るは是も水の出ばなのはうぐわん〽淡崎屋ゑん兵衛とて名は大キけれどもまだ前髪の大だて末頼母しく見えたり手先につれるけんとうハ〽毛先ぼ左衛門六十におよんでいまだ色事のげん氣おとろへずあいかハらぬ仕うちなり此淡崎屋といふは代ミ立てゆるぎなき家にして今此家の綱をひかへる支配人も其むかしは〽ていふといふて上品粋のうちなりしが近比は立かたも相やめての大役旦那毛先におたてられわかいのらにはなるまいが筋よき遊びになれがしと心つかいすることそ尤なれつゞいて〽すべた和三郎〽はづミやゑん右衛門〽なぶろや治兵衛〽きほいや仁兵衛思ひ／＼に相つめたり在原の業平つつと出て今日各ミをむかへたるハ唐土孔子聖人より我國の遊びを見んとて子路子が見へたるニより又珍らしき趣向もやあらんかと是のミの事也とのたまへば出入の町人がた誠にはうぐわん冥理に叶

ひしと悦びかぎりなし〽きおひや仁兵衛罷出此御客ぶしらいには幸の趣向あり只今はやります中ゥ芝居の浄るりかぶきを御らんニいれませふ今北の新地で粋の神ゐのやうにいふ〽天川多物も呼よせ趣向ども相談いたし衣裳道具等の手まわしは古ルけれどやつぱり南の〽うりうを呼よせがくやまわりの事まかすべしァ、私も今はむかし古人になつた北の〽三蝶と兼道をいたした事もござつたにそれからみれバよつぽどかびました扨先諸方の粋達へ急ィで廻状出し役者と見物方をふりわけすぐに御らんにいれんッリャこしらへよといふより惣がゝりになりもてかへす五十疊の一ト間疊あぐればたちまち舞臺となり幕よてうちんよととりそろへる所へ〽うりう來たつてこれは珍らしい顔じやと嬉がり頭取の役なればはな道見物場氣をくばりサァやぐら太こじやェ、たれもたゝきてがあるまひおれが前〽清二郎に習ふておいたのをやつてこまそと頭取手づからよせ太こをたゝき立ると表の方ざつハ〳〵どいや〳〵諸方の粋ども役者がたはがくやロへ又見物場へいて見人衆になるもあり押つめ〳〵居ならび毛せんハ紅葉の谷にひとしくさげ重菓子てうし鍋弓はりでうちんゆきつもどりつ顔見せの俄芝居近年の大入正面の高き所のもうせんには今晩の一客子路す共外粋連せんば組上町組堂島組にハ〽銀波〽早虹〽鹿食七兵衛組讃岐の國の〽烏方新町組鳴い内組新地組には〽とうたん〽けつ水天滿組にもあらゆる粋ども

北の禪僧組又儒醫にては〽比男川源如組東堀には〽由新組又〽艸卦組其隣には前からはなやか
な事もなけれどツリヤといふと顔を出す〽ため武組上町組には〽伊村宗民〽艾甫又近比どこか
らやらなぐれて來た画工あたまそりこぼつて〽蛇東とやらいふこわい名をついて唐人まじわり
する小坊主そのあちらには〽如波宅右衛門〽川波僧助ひとりはなれて座したるハ表具ぶしの上
手な針術者〽山山是風又今によい男がつている〽青春でい我〽本庄善介〽さん六其すミのはう
ニよい男の年のよつたのでもおくもめんきる物にとろめんの帯してうちしほれているものあり青
引春ためつすがめつ見てヤァ貴公ハ本町の〽濱六ではないか【濱六】ヤァ青春か是ハ珍らしひ
【青春】なんと貴様ハきついしまりじやの又そふばかりでもあるまひ思ひなをしておりふしハ
たてたもよかろ【濱六】これ御らうじあたまもとんとうまれのまゝで五年あとから青黛のかざ
もかゞさぬとはなしとり〳〵又どいや〳〵東ぼり組〽かま平〽長万〽うら六其外大勢打つれ其
丈六尺ばかりの大坊主さきに立てどもりくる此坊主の顔を見れバ前の李棟大僧正眼ハ一ッにな
つてても生キかわり死ニかわり立通ふしのべんけいおれもつれていてくれひと何やらあやちも
きこへぬ事いふてうがちくるハ竹田唐軒にて又妙北寺の宗玉組木津の〽土仙なんばの〽かんろ
今宮の〽折も其外助松組其次に黒ごん附にて仕立あげしおとこハ〽鳴や和五平なりつゞいて糸

や町の〽殘興に〽繪やのりよこう毛ぼり名人の〽九調まで長わきざしにさゝれて出くる〽翌舟りん孝〽沖右衛門又〽鐵茂麟之介上塩町といふ片土ニたつたひとりののら藥種やの艸樂なりツレ役にも立ぬうそをよふいゝあるく〽南波とやらいふ点じやをつれて出てくるげにいかなるてんまが見入れたやら近年のら仲間へ顔出しせぬ〽惣田余平も珍らしく座るつらなり里三かぼく尼崎ゑんくハおとろへたるもさかんなるも入り來りこゑんすいかうとうていが生て居たら嬉しがろに片町のたいがハどこにいると見へのミ噂サアはじめよ〳〵とよつほとたいくつな所をがてんしてミづからくれし〳〵と賣あるく見物の四方髮の足を踏にじつたをいひあがりヲノレ匹夫めおれをたれじやと思ふ俗の時の名ハ〽宅十郎今浪花のひんがしゑんていといふ所にひそきりいる〽艸高といふ大儒を何んとしをる打切て仕舞とふとわきざしひねくりまハせばミづから賣りもひるますどんどりやかましういわれなヲレモおしろいの〽此兵衛といふてそんな事でゆくじやないときれぎ出すと座中よつて引わけはやる芝居にはありうちといひなだむるとよせ太鼓打きる幕の内から東西〳〵上ミ下モにて口上いひ〽秘事谷長兵衛まかり出

いづれも樣御見物に御出下され座本ハ申に及ばず惣座中とも大慶ニ存奉ります扨御斷申上まする今晩加樣に狂言隙どりまするハ狂言の作者川又〽ぼう慶と頭取〽うりうと双方時代違ひの

古片意地をもふし時刻延引仕りました此所役者座中不殘罷出引合せ之段左樣こと
拍子木打ハ　龍の日榮　かち／＼／＼
幕引キヘ　可といふ親父さつ／＼

よい／＼／＼／＼うつとけしやん／＼もひとつせいしやん／＼しバらくなりもしづまらずして口上秘事屋長兵衛引合ハせあんどやぶれ／＼／＼東西／＼／＼おなじミの座本〔藤井山蝶でござります少シつむりもはげましたれど道頓堀のやぐらを四十年一年も休まず相つとめます御ひいきの役者狂言ハ佐渡嶋長五郎のかたで仕ります東西／＼座本〔さんてう〕出て　たかうハござりますれど顔見世のお禮これよりつらりと申上ます扨此度ハ中ゥ芝居淨るりかぶきの不調法なる儀をとり組御らんに入レます殊ニ今晩初日の儀でござれば狂言の仕組のくハたつき椀家具菓子盆硯筥趣向の木地よりも藝のぬりたてを御らん被下御ひいきの私義てこざればわるひ所もよい／＼と江戸注文の絕る時なく爲替の手都合極上布きせびんととりこむ簞笥の錠前身上繁昌長持といよ／＼御ひいき賴上ますヨイヨ／＼／＼〔長兵衛〕おなじミの〔名美谷棒陽でござります狂言ハやつわりとして少し小むつかしい所で市野川彦四郎のかたで相つとめます〔棒陽〕相かわらず顔見世の御禮をこれより申上ます段ゝ御ひいきの私まだ此うへに千年も万年も

御當地をはなれませず後には芝居の宿老となり敵役の町代をねめつけ小結の夜番を取てなげ狂言のたばねをしていよ〳〵智慧をふるひますよふに御ひいきを頼ミ上ますヘ長兵衛三升十明でござります此度實悪をかねまして狂言ハむかしの十町と申た大谷廣次のかたで狂言大キう仕ります【十明】顔見世のお禮を是より申ますと扇を持て立あがり狂言鎌御ひいきのつぼを得て。酒の泉の淸らかに。わけざく賣り賣ればつくり。藏〻にほまれの名酒。さいわいありあけ。世界のやつら鬼ころしくわつ〳〵と御ひいきを願上ヶますヨイヨ〳〵ヘ長兵衛是もおなじミの園池素道でござります男はちいそござれども狂言ハ前の志山と申た市山助五郎で仕ります

【素道】是より顔見世の御禮と御ひいきの御禮と小ミじかうはや口に申上ます私を馬じやと思召なんでも仕合よしといよ〳〵御ひいきを願上ますヘ長兵衛ヘ永井縄つらでござります狂言ハ爲十郎のかたで仕ります

【縄つり】顔見世ハ御目見得是ゟ申上ます敵役の義でござれば兎角人をころすやうにおぼしめそふが拙者ハ隨分助ヶます御見物も私〻ともにことぶき万〻年玄關物中のたへませぬやうにつらりつと御ひいきを頼上ますヘ長兵衛實悪ヘ石田沖西でござります狂言ハ三保木儀左衛門で仕ります

【沖西】おなじみの沖西でござりますなんにも申ませぬ今一たびはなやかに立ますやうにどつさりとごひいきを頼上ます〽長兵衛道外形〽赤川重齋でござります【重齋】餅喰盃にあづきもちいれて持て出御なじみの私でござります御ひいきの御禮に茶をたてゝあげましよと存てこんなうまい物をもつて參りました兎角世上には物しりがござりませぬこれを世上で茶菓子と申まするハ大キな片言じや茶ぐわしんとはねるのがほんまでござりますろじハろうじうハ艸履ハうわじやうりと申すがよしあんまりわたくしがものしりじやによつてたるまそんじやと申ほどに兎角錢のつかへますやうに御ひいきを頼上ます〽長兵衛敵役〽藤川社夕で御ざります狂言ハ茶谷半三の形で仕ります

【社夕】是より顏見世の御禮を申上ます相かわらず此芝居を相つとめますやうにござりますしばらく誹諧芝居の座本を仕りましたれどなか／＼心にたらぬとゆへかくの通でござります御ひいきもちまして前の通河のせも鳴らしますやうに手合よろしう御ひいきを頼上ます〽長兵衛おなじみの〽難波谷士山で御さります狂言は三桝大五郎で仕ります

【士山】是ゟ顏見せの御禮をつらりつと申上ます私儀もしばらく狂言を引まして隱居役を相つとめをりました所當座本さんてう見へられまして何とぞ此芝居をつとめますよふに段ゝすゝめ

られましてござりますか様にたのまれまするも各〻様御ひいきのつよさとあなたがたのほうへハ足をさしてはふせりませぬ前かたくゝりざるの色事でも御ひいきの評判高くつきせぬ縁の吸付ヶ多葉粉關東西國舩まんよろしく積出す持込む內證の火まわりよきハ國部の味ハひきつと御ひいきを賴上ます〽長兵衞扨別而お斷を申上ます女形は御存し舞子ども相つとめます女形の巻頭ハ泉屋必でござりますおなじミの唐團のやうな顔いよ／＼御ひいきを賴上ます

【必】是より　顔見世のお禮を申上ます御存し通私ハちいさい時扇治郎と申ましてあられもない男のやうな名をつきごばん人形に出ました時より御ひいきつよく只今ハかならすと申て此芝居をつとめますやうになりましてござりますわたしと狂言をはり合ました香屋の周と申す舞子も古人になられましてわたしもちからをおとしましたなを／＼相かハらす御ひいきの段身にしミましてはゞかりながら各〻様もわたくしもよわひハ千字文をかぞへ石摺よりもかたうおまめでたとへ唐やうの奥までも御そばをはなれませぬやうにほんにしんじつ指筆のゆびでも切てあげたひ御ひいきの起請文ずういとくだんのごとしョイョ〳〵〽長兵衞次ハ〽靍屋の亭でござります【亭】これより顔見せの御禮を申ますわたくしハ艸画の玉じやとおぼしめしてどなたにもお氣に入るやうにいよ／＼賴上ます〽長兵衞五ッ屋岳でござります【岳】これより御禮を申ます

わたくしハ心よい筆じやとおぼしめして御ひいきも墨ぐうに只かけ〳〵と御ひいきを賴上ます〽長兵衞 おなじみの 〽伊津や雪でござります別而御斷申まするハ雪儀當年仕廻芝居にかとり姫の役をつとめましてけがをいたし面躰に疵つきましたゆへ膏薬をはります見ぐるしうござるゆへおことハり申上まする【雪】顏見せの御禮をずいと申上ますほんに前年おなごたての狂言を仕りまして町中樣御ひいきの評判高くそれより段〻さま〳〵の狂言御ひいきつよくわたくしがやうなものを極上〻吉じや吉じや吉じや〳〵と御評判をなし下され共節は 〽鄕里白といふお客から竹の画ののぼりなどを下されしも皆御ひいきゆへいよ〳〵おなごだての狂言のえんを引てるるはで顏を立通ふしますやうにずうい と賴上ます 〽長兵衞 立役女形のこらず御目見へ仕りました續ィで淨るり哥はやしかた迄不殘御禮を申上ます淨るり竹本双紙太夫でござります此太夫事ハ竹本大和門弟にて廿年このかたの修行にてこざれどもいづれの芝居もつとめませず一音も聞たものがござりませぬけい古斗に心をゆだね居られましたゆへ名を双紙太夫と申ます【双紙太夫】いよ〳〵御ひいきを賴上ます 〽長兵衞 次ギ哥かた 〽あらつな三藏でござりす當地にて久しき御ひいきの三藏儀でござりますが年まかりよりましたれど聲のつやもうすくなり定めて御きゝづらふござりませふ 三味線 〽玉田連治 笛 〽末原太助 〽鼓か賀太市 〽太鼓定野林十郎 〽振

付女村茂六 へ同板や眼吉 へ狂言作者山又ぼう慶 へ頭取うりう又別而御斷申上まするハ此兩人の淨るり太夫

へ高宮中太夫

へ西尾春太夫

大切りに至りまして一世一代をかたらせます中太夫ハ盛衰記の松右ヱ門場春太夫ハ盛衰記の笹場を相つとめます各〻狂言千秋万歳樂と引合せ終ると後のほうに謡方のかしら へ萩六之丞聲はり上ヶて謠四海波しづかや國もおさまる時津風枝をならさぬ御代なるかあいにあいおひハ松こそめでたけりかな

見物同音にさほになれ〲の聲につれて座中しぎしてはしがゝりの幕へはいる追付三社の出てくる時分にまん中の棧敷子路すより六人の粹連へ一書來ル

只今此さん敷へ魯の國の早飛脚韋駄や天兵衛より一通到來野子連中の顏淵あの方ニ而此間大ゥ居つゞけ少吐血の氣味ニ而候間急ぎ歸るべしと先生孔子ち申まいりたり大立の御馳走甚近來乃興に入候へどもちよと今晩かへり申候間狂言ハまたの夜御のばし可被下候いそき

以上　　ゆう方

むつゑ

座中がくや不殘ひらき見てすぐに見物へ斷りの口上なりのこしておくも樂しミといふもありまとにざんねんびんしけんじやとふるひ口合まじりにはて太ことん／＼／＼東すでに白し

寳元氣會我　上中下

右之狂言近日後編に御目にかけ申候

雕蟲館玉東刻

列仙傳　大尾

述言
工與胡倚水起館。有一間樓。有方丈室。樓則清歌妙舞
飛魂飛魄。室則玉膚飴唇行雲行雨。壁掲諸家之書畫。
牀存遠近之果餌。有神僊餐餘之烟。有婕妤嘆後之扇。
是境也。竜蛇同窟粋野伴遊之仙府也。勿誤認爲雅俗異
趣。是主人之至禱也

忘草野姥跋

陶華陽書

煙華漫筆序

雖江南大都會未盡倡家遊戲之態於簡篇者有年且喜新造禿郎之屬流行之時佳言（以黑白玄黃衛聲最疊者吝氣亦寡口聲自比雅與不雅舌耶見書記）呼淨之樣止謂諸躬而已矣（嵐三郎市彥十五郎生廼三氏之輩是也五郎）之遺愛存於遺于本家聲不滅而至今時見者生踊躍甘心於此言而澤爾

東方有僊人其名曰久米不敢終術隱跡於風狀爲一妓樓之主九如樓庇之徒也帳中有書得之久米之屋中矣猶得魯論於孔氏壁中不復奇姪哉雖然當世貝多文而不能讀故無益公諸島內乃譯國字以告同士其餘言々盡唐人懷古中（淨役名人新四郎武道功者獨十藏）

一時大當代官島十年長不子之子々之不子混爲一徒不可必泥
唱出口楊是懷古中之句
矣不論冒姓義子大才之烟競橘嘉之八方　嘗聽淨黨之比醫者々
讃五之尸貫野外之千日是亦出帳中語
晉松吉三　未聽娼女之似浮屠者如藝古若松可　余戒曰爲禿郎
之種類　見殺風景哉
小女郎新兵衛子之輩而能買雪花菜莫必養娼家而奏胡瑟詩
曰螟蛉有子蜾蠃負之此謂也

張葛居辰撰

叙説

なにはつにさくや此花と詠したる神かぜかや高津の宮の梅の匂ひのいともかしこくのぼりて見れハのことの葉より四の民富さるハなしおのがさま〳〵いとなむ中にかハらやの煙今もたえす嶋の内むべも賑ハへり道頓堀とハこの頃や人のいひはじめけんかし遥にきく女の物あらふはきのしろきを見て久米ノ仙人のつうをうしなひし地即こゝ也とたしかなる書に見えたり難波堀江にとなりてその流いさきよく賑ハしき地也しにかの仙人墜して目くるめき腰のいたミたえかたし腰ひやうたんをさくれハくだけてなしいかゝせんとたゝ泣になくにこの女宿縁にてや有けんやう〳〵瓢酒をもとめ來て仙にあたふうどんの粉をいとへハはしり來て又あたふ仙夢のさめたるかことしあたりを見れハ美しく粧たる女いくたりとなく出きてヲ、コハワシヤイヤイナといふてされぎまとふたゝはじめの女のミより介抱す幽にきけハスイタヲトコヤスカヌツマあるハムチニセマリシカヅカツノといろ〳〵の物の音仙か耳をつらぬく忽つうりきうせはてゝかの女に問ふ爰ハいかなる佛のミくにそ管絃の聲殊勝に數多のほさつ來迎あることわれらことさの卑仙にハもつたいなしと紅涙木の葉の袖をひたしさなから秋の紅葉の物いふかことし女俵にはらをた

て菩薩〳〵とけしや鬘婢ではごんせぬとなつてゆかんとす仙なく〳〵よびもどしかゝれなんじやわしや中居といふ物でごんすといへば仙人色里とさとり是はならぬと虚空をにらんで上らんとすれど三尺とはゆかずたゞ〳〵地におつることはねなき鳥のごとしいかにしても仕廻つかねかの女を深くたのみやう〳〵手をひかれて家に行て見ればかつて雲くさき香もなくきん出し花の露のにほひのみしてもちろん木のはやうの物きたるもののひとりもなし宮殿らうかく珍膳美味アイ、〳〵の聲庖人のいそかしき菩薩の來迎或は還御ヨウヲイデタヘサバへの聲いやはや繁多めにも飼にもつくされず鳶のみふるひしたるやうに一ト肴やのかよひのかけてある下に疊のひげをむしりてゐたり亭主出あひいかにといへと頬にはつかしく只うつむいてゐるを亭主しばらくくふうして俄にたん尺のやうなる物をこしらへ仙人の新ぞうといふ差紙のてんぢく横町出とそへ書して出せばこれはかはちやよりもめづらしいとて所々の迎門前に市をなし聞傳へし客人の入來に座敷もつまれば隣家をかたらひ猶だん〳〵に繁昌すはては大芝ゐをかまへそこにても見せ夜は內にて勤させそのいそかしき每日大晦日のごとし世界は又ひろくてせまく三年ほどがうちに都鄙遠境殘らず見しまひけるにや少さびしくこれか評判のよひうちにと勤をやめさせさかやきをそらせ秋田屋久米右衛門と名を改む今の秋田これなりかのあきた大福人となり其後

ひとへにかれが影也とて彼女の名をおせんと改め久米右衛門にめあハすおせん故ありてのちに貝塚屋と改め今の貝塚の祖中居の元祖と今以稱せりかのうとんの粉をあたへしハ今の寂稱庵にて絶すそは切にて諸人のおとかひをゆるくすいかゞしたりけん山のいものやうなる杖兩家のうちにあるべきに寂稱か家寶とて今にあり是ハうどんのこのあたひに俄のことなれハやりしと縁起にハあり覺束なし見せたりし芝居今ハかふきといふことを仕覺て七八軒ますノヽ繁昌す以來見せ物しばゐといふハ皆この餘風也是又別して道頓堀のきぼなり仙人のつう力殘りけるにや他に此類出來たれと年中太鼓を打つゝくるハまれ也昔のことをいへハかびくさくまた傳者の誤も少からし唯賑しきハ南廓の粧ひ西北すべて難波の三廓といへとこれに過たる遊地ハなしちかき程の人ハめに見遠き境の人はをのづからきゝもつたへぬらんかし是に屬する所ゝ東に上塩街高津新地南に坂街難波新地西に新屋鋪難波堀江とう也猶あるべくその尊卑まちノヽ也其中央南廓と稱する所にして四季にしほまぬ花松の位にもすきたりもつとも京をもはぢすといふへし誰かゆきてのまざらぬうたハざらぬ

術院　凡軒數崎陽英華に見へたり

大むかしハそつとしたることなりしに彼久米右衛門よりこのかた今數百軒まな板すり鉢の音に晝夜のわかちなく貴もいやしきもこゝに入來ヶる難波の繁昌いふ斗なしあるか中にふるまひ茶屋といふありのち茶屋といふあるよしわれこれを俳にせすされと一かいに錢さへつかへハおもしろいといふ斗にてもあらざるか家造ひろくて鈍なる有せはくてなれたる有きハめてきれめかたしかねてもうけたる興よりハ卽興をノミといふうちこハいことおかしいこと喜怒哀樂こゝにおゐて始るいかにといへハ皆氣違にて皆本性也愚鈍かとおもへハ皆智惠あり何のことぞや酒ゆへかとおもへハ下戸とてもゆだんならす畢竟これハばけ物ハ誰もこはけれハさもあるへし世界無上の藝づくしを見るゆへに又見せつたとへテいはゝ酒のむと刀を拔て追ふ人ありこゝに集る人皆それと思ふて遊ふかよい必たま〳〵人にあることてハないとおしへし人あり尤とやいはんわけなしとやいはんのめやうたへやと出かけて一寸さきハ闇の夜にあそこで拔られた誰ハ心中したげなとするかせぬかてこそあれ皆わか事をいふてなくさむこそおろかなれともいはんか身をあしくはたす人も四ッばひにはふて酒ものまねハ頭であるかぬことしられたり油斷をするかせぬかのさかひにてたのしミもくるしミもそなハりなんかしきう氣をはつてハ慰にハならぬそれをわすれうために來るといふ人の仕廻か見たしあたら光陰とハ誰もしりなから色がた

ますか酒がぬすむか茶屋がゐはすかけふも又あすもゐつゞけ呑つゞけ內ハ野となれ山となれ跡で女郎かだましたのあそこの茶屋ハわるいのといふ人ハまたあふな物來いといふのもそれかや〱こふといふのも役なれハ程よきをこそ此里の語道徹底大粋といふべしなを佯に記すもふすいの上もりと畧す

浴室　即稱娼館　置屋といふ

から風呂をだきて業とする在名ばかりにてせぬあり日をさためていり人をまねく垢搔女茶立女といふを抱置又水茶屋といふもあるか皆此類也數さたまりて今猶連綿たりから風呂の功能宿酒を醒し體をゆるくすくれしくれ行てきゝたるかよし

妓名　名ヲ辨ス

或人の曰嶋原吉原新町を三廓といふ事皆人のしる所也しかれハ太夫天職なとの名或三浦高尾若紫なんどもつたいらしき名も付べきにたかゞふろや女妓女の類まてか様の名を付事片腹いたしわきて金吾小太夫小三郎なといふ男の名よりところもあらしお一お三お七なとこそ似合しき

名にてよからめといふ答ふべきほどの事ならねといはねハ圖にのる人なれハされハかやうの名おほくハ妓家に相傳の名にしてよぶこと也又ハ三廓なとの通り名にもせよこの里の外の家のものゝ名にもせよそれに擬(ナゾラヘ)してよぶこともあるならひ也そのうち男めける名ハむかしふかく契(チギ)りかはせる男の名をすくに付しこともあらんか兵衛式部庄太夫小太夫小三郎等也むかしの官女に小兵衛(左京太夫女) 小左衛門(備中守女) 其外大馬小馬小李等有枕草子紫式部か日記にも見ゆこれらの例(タメシ)ならんか又小竹(チク)小吟小吉等ハ大樣阿の字を付來るにおなしからんか三國の小女郎ハちと小の字にわけもあるかその外名所古跡の名源氏の卷名古哥の艶詞(ヤサコトハ)等ハミなむかし客よりほめて異名のやうに付たるを今ハわけなしに成たるならん茶立女風情とてつとめの情にかゝることなく三廓の太夫も女御更衣のはてにもあらす花といへハよし野月といへハさらしな女郎といへハ三廓に限るやうなれハそれに擬(ギ)して付るに難(ナン)ハあらし內證にてハ童(ヲサナキ)よりのほんの名もあるらんにといへハ大ワらひに成て又一盃(ハイ)のとくになりぬ

白(ハク)刄(ジン)　謂標子　茶立 崎陽英華　垢掻 妓家粧房篇等可併看

白刄の名誠に白刄のことしよくまもれハよくうつかりとすれハその身を害(カイ)するのミならす人に

まで難儀をかくることあてもなき借銭をして人を倒す理り眼前なりよつてしらはの名ありはぐろをつけさるばかりを白はと心得たるハ非也その名を顯にして勤るゆへ是をうつかりとする人にとがありて白刃にとがなしたとへハ人をきる刀にとがハなくて人をころせバその人の罪科のがれがたき道理也隨分ぶんげん相應に道具すきハして錺とめの心得肝要なり又あかゝき茶立ミな風呂屋の下仕也いつの頃よりか泥じてひとつとなる今ハ白刃ハなくてミな風呂女と見えたり歎くべし風俗少つゝよりどころハあれと大やう婆共見へす娘とも見へすてかけとも見えす格別のものにしていづくをいつくとも云かたし袂に灰を入るのも起請誓紙の爪きるの髮のといふも時のひやうし逢ものくのも皆まことたまされまいとするゆへに皆たまされて此方のことハいはすにいひなれし勤のものに誠なしといふハ世上の道具おとし皆このほうのわるいのならん相對死も有ならひ愛染さまや妙見にたつねて見てもしるゝこと男ハ女房持したいと心得し人のいひしならん是非なし

歌妓 并舞子 碁盤人形

抑是ハ磯の前司か娘也といふやうな顏をして出るもの大やう十一二よりして廿はかりまてをい

ふいまた人にま見へざるを詮とす甚賞美してわりなくいへハこれを立身のはじめとす又一種ありさもあらぬさまにて大かいにいへハ寐席をすゝむる有これハ決して容色もよからず藝もまたさら也うつら〳〵と更てさへと云より雲井に見ゆる山ァ、櫻とうたふハよき中也俗に呼て色ありといふ三絃ハすへて盲人におとるゆへハ俗耳をよろこばさんとて撥かす等きハめて多くうたひかたもまた是に准す盲人にまさるへきやうもなく勝たるハ結句すさまじ大かたやかて白双に受領す評曰うつくしうてよく彈くハ梅か香を櫻の花にとやいふべしとぞさもあるべし

絃　簪　琴三絃鼓弓尺八

これハかの里に備りたるものにハあらず大盡か誘引すれハ座におるといふか掟也所謂勾當至當某市城某某彌某政なと也撿挍ハすこし趣意かはれり誠に一ふしハ捨かたきものにて過しこと今のこと人のうへをも身のことをも糸にのせてうたふめづらしき物といふべし宵のくぜつに更行頃三線とうしハさらに琴鼓弓しらべあひたる尺八の音色えもいはすめでたしまだ酒ものめす座もしめりたる夕ァ只ひとり振廻てうしにハあらてねらくききことはり上てうたひ出たるに人なれかほに白人やうのものよからぬ手ひとつふたつひき出たる興あり評曰五月雨の物さひしきに

時鳥の二聲はかり鳴て過る心地とやいふへきやしらす

琴女

目しいたるもよききふり箏席をかたくつるさきやつるさして益なき歟

仲居

婢使也　めしたきとは各別也

年齢不同あり皆おせんか流にして古来はすへて紐のまへだれを着すもつとも容色のものもあれは遊君へのふれりよにて着すと見えたり當時は色合もさたまらす中比取わけ紐に結構をつくす桜山先生か所爲也今は又結句いやらしなともいふか是は大盡ゝよく氣に入また勝手向万事奔走して心をつくすゆへに仲居の号ありおほく色事といひてよからぬことをして親かたを督尻のすはらぬを上品とす道によるつとめかた常にこと也もつともよしといふへしたまかに勤るを埒あかすとさけしむ寒暑をいはす起番といふこと大役也此内に無隅のつとめかた有心せまくては成かたし見るを見まねに色事も色にて實ならすかたちもはでにてえんならすされと風情はにるものもなくいききよし色事をいはゝ安倍の保名の見通しかしのだのくずのはい色に迷ひたるかこ

としといひ傳ふさもあらんかし

女童　併娘ぶん

仲居のまへかたなるものあり又娘ぶんといふあり此うちにて其器量あるべきハ藝をたしなミ手ならひなとす或ハ妓女となり又白刄となる其仕立まち／＼也といへとも大かたまつ豆腐とてこい八百屋へはしれなと舊記のことし中に寒聲をつかふとて鶏よりはやく起出てさむいに障子をし明て三絃をたゝくといふか始也機山か曰定聲でハない四季とく起てこれをつとむるいとけなきものハ聲のてうし揃ハすゆへにかんばつてきかれすこれをおつとませあふやうに情出せハよくなる我らか銀つかふやうにおしますに情出して聲もつかへハはやく藝もあがるにと申されし機山か自讃可ならんかよつてかん聲をつかふといふたん／＼かくかんなんをして姉女郎と白髪になるまてよばれて勤るハむねんとやいはん又はつゝ坊主となるもいぢらし小女の風情許して曰女の夕立にあひて桔梗の帷子ハまゝよ此加賀笠ハぬらさじと取まかなふ手もとにてわけもなくその躰あハれ也と

幇閑

無分別の仲人也と又たいこもちの名目のこと舊記に見えたれハしるさず畢究茶亭かゝハ肝煎にて濟ぬ所をかさ高に取もつ役にて無評のもの也されと名物のひとつにて棄捨する物にハあらずすでに筒井山城數年の功莫大なりとて從五位下に叙すその外名高きも多し尤當所の規模といふべし大やうかたち大盡ににて强欲のものよく酒をのむあり呑ぬあり麁服なる有文才ある有おほくハ一文ふ通にて弁舌いつれも立派なれどたゝ口とく囀ておどりさハぎこハいろ又役者のしかたをす折にふれての興筆につくしがたしわけもなきものといふ人あり機山かならずしべらくもなくてハかなハず堪忍のならぬことも大盡かいへハよくこらへ勇氣あるににたりといへり

提拾奴　白双野郎及藝子等の從者をいふ

大やう新町の傘持にして大役を兼ぬ壯年なる有老たる有いづれも共躰笑止也えてハ歴ゝもあるよしなれど先冬ハ柑子革の足袋を太股迄はきふろしき包をいだく夏ハ團なと手まさくりて供とも見えず手代とも見えず顏うちまもらるよぶ人よりものらと思はるゝことせつきに軍書よむて

ゐる人いごとし尤風呂敷包をつゝミといふ方言也

擔子

此所の名ィ物きはめて下手なり此地の遊君隣家といへとも歩行をゆるさすきはなるやきうくつなるやよつてこれかもうけ也また客を送るにいたりてははい／＼の聲ふけて生ゐひの伽となりちやうちんのぶらつきかげんいさましく見所有晝夜をわかす暑をいとはず寒天またさら也機山先生哀憐の余りぬきて綿入羽織をゆるす其謂にて今も冬は羽織をきてかく者多しおほけなくも寒夜の御衣ともいふへきか機山か仁心也されは冬ばかり是を着す定法也又駕のくさりの家／＼の口傳あり三百度のれは此秘決をゆるすとなんやすき程の事ならんかし

冶郎

これまた當津第一の名産にしてなつむ人多し無理とはいはれすたゞし數種あり戯臺子と稱するもの大やうお職さま役まで也尤名たかき人おほし其余は揚數寄しだいにて年齢六七十又八旬の老翁も額に紫冠をいたゞき二八の風俗をうつす寄妙とやいはむ紫冠なきものを陰兒とやいふ

われ見るにとふやら愁をもようし是を嫌ふこと哥舞妓芝居をたに見す最も誠の野夫といふべし又あまりに好て恐るゝやしらずよつて詳にせず人にとふもうるさし野白の情いつれも可也といふことはたしかにきゝ置ぬ

優人

實役有敵役有親父花車女形まく引馬の跡足道外各ゝ其しな別也しかれ共一生拍子木を首にかけてくらす有よう投られたと誉らるゝ有毎日ころされ毎日蘇生すいやはや面白き渡世といふべししかも酒莚に列す大様大鼓もちのごとしといふわれ又しらず面白きはなしなとありててうほうな物といふ人もあれとしらざるはしらざるとせよとしへらく淺尊を故語に譯す又人形扱といふ有是また甚尊卑ありて一口にはいはれず世にしる所也同しく酒莚に列す

附り取わけ此人ゝの中にけんをたしなむ拳相撲などゝいひて勝負をいどむ人の胸中をさつしはれなる勝負をたゝ一手に決す見通したりとも及ふましきことならんかし上手のは座もやかましからすしておかしこれにならひてする人おほししらぬわれらごときの田舎人は口論かとおどろくばかりさはかし勝負を見て酒のまむにはいとやすきしはさまもありなむされど唐本

のはやるうちハれいのかふきとやらむに一筋なむましきわざにこそ

供唱(シヤウ)(ルリ)　并　阮咸(サミセン)

淨るりのらんしやうハいふにもをよはし竹本を西といひ豐竹を東といふ大樣一向宗の御裏表のごとし兩家を首領として國太夫ぶし多く心中のたて物也半太夫さいもん是につゞくいろ〳〵流ゝかぞへ盡(ツク)しかたし兩家今猶繁榮(ハンクワイ)なれハ音樂全盛の時節といふべし面白き事すく人にをよんでハ飲食(ノミクヒ)を忘れ寒暑をしのぎ終日(ヒネモス)芝居に詰かけ淚片手に世のうき事をわするゝならぬことじやといへハ傍(ソバ)なる人なる事じやといふ是も東西をわかつ仲間と見えたり又三絃(サミセン)ハ鶴澤の何かし此道に長じ大かた此門下たり棧(サンキ)にまねけハ某太夫といへとも酒莚に列す尤ひいきひいきにて西をこのめハにし東をすけハ決て西をかたらせす其逸興(イツケウ)なり色(ミキ)道の潤色(シユン)といふべし

戲場(シバイ)　哥舞妓　淨るり

日本三ヶ津のうち此地を第一とす最(モツトモ)さうもあるべきか由來(ユライ)等舊記に見え又前にも見えあまねく人の知ところなれハ記(シルス)にをよハす見せ物芝居ハいふもさら也哥ぶき淨るりともに近來繁昌(ハンジヤウ)して

藝の代りめ毎に金銀米錢引まく挑灯酒肴に至るまで狭き木戸口に山のことく積かされ太夫えひいきの役者にこれを投して賀し殊更けしからぬハ大樣外題をかきて大のぼり數百本をたつることへハ端五の嘉儀を此所にて不殘うけ込かとあやまたる數町か間に充滿しだし吹貫の結構田舍人の眼をとばし大坂ものゝ足をとゝむへんぼんと風になびき始つた／＼の聲さなからつかミ取もあるやうに思ハる或ハ何某仲間某組と大文字に書て是をやりて互にこれよしかれよしといどミあらそふ誠に繁花いふばかりなく氣味よし中にも他に異なるハ冬霜月めづらしき役者諸方手配すミて顏見せといふこと何方にても此俤ハあるとなれと一口にハいはれす長口上三番さう座付も始りよいよ名ィ人さま／＼そのほかほめ詞に花をかざりよるをひると數のちやうちん進物打ておけしやん／＼ハ誰か初しやらん棧敷も落る斗にどよミけたるも藝はじまり三四更にいたれハ人といつとなく靜りすいた者ばかりわめく聲わけもしれぬ藝まつたく納りたいことをうてハ御評判／＼の聲に人ミまつくろにくすぼりたる顏して出あくる日一日やくにたゝぬもおかしくそれに毎ばん／＼ゆく人もあるよしかう上根にてこそ千年もいきさうなものとおもへハ三十にやつとたらすにしんきよ吐血勘當病にて或ハさまよひ首尾ようて千日にて芝居ちかき所へ貞見せらるゝそせめての本望となまめかしく口おしき

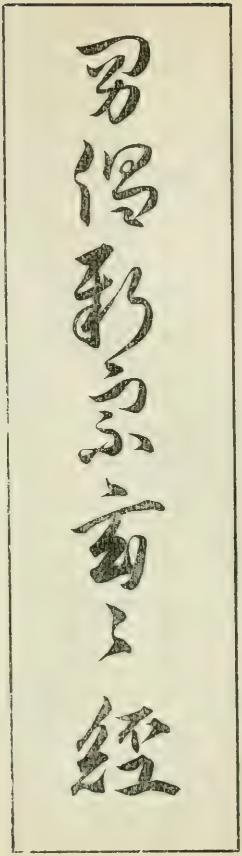
機捩手妻

竹田近江伊藤出羽よりして亀屋豊後默談には此比のものにして手つまといへはむかしより羽州細工といへは江州と第一小兒の悦ぶこと限なしおしなへて是を十錢芝居といふよい程に氣の盡る迄を十錢とはこれが細工の發端にして貴賤群集すさもなき人形ひとつ拵ては人間にまさりたるふりをつけ人は鈍なるものと思はせ手妻に成ては人形ひとつを百人前にもわかち水よりいてゝ少も濡すなど奇妙いふも愚也ミしかき筆にはかゝぬかまされるならんかし毎年紅毛人こゝに來て舌をまくもつとも近江が手柄土地の光輝といふべし是斗は中華にもなき圖なるゆへなるへし招けは細工物を座敷へはこびててれんのなきあかぬけをす子供の藝またあひらしゝ近來専是に成たり前は細工六歩程狂言四歩なりしに今は一向子供の藝斗をも見するよし見物の目肥てまどろしとやおもふ細工のおとろへたりとやいはんいつれにも歎くべししかれども見物の悦びはこの方かまされりといへはこれもひとてたてにて又あいたらはむかしにまさる細工にやならんと頼もし

後序

崎陽の丘はまことに仙境なり戀といへはふるめかしく色といへはいまめかし金比羅じやといへはそのことゝこゝろえ業中さまといへは三才のちこもうなつくかうつりかはる世中春の花の時は容色にほれてよしのゝ里に入なんことをわすれ秌の月の頃は玳瑁のひかりにめてゝおは捨山のうきことをわする夏は鐵眼の豆茶にあつさをわすれて扇をおとし冬は貞見せの蛎雑すいにおやの日をわすれて精進をおとすかくわすれ〳〵もてゆく程にしべしかうちに初夜もすき軒のともし火きえかちに火入のはいもおちくほるころいつも替らぬさゞめ言もきくたひことにほとゝきす初音よりなを嬉しくてそれにはあらぬとりのね

もしらで又ねのとことはにれんしをもるゝ日影さへかすむと見ゆるねふたさも又朝酒のかずつもりけふしもつゐにつゝ井つの井つゝ氣くらす夕くれは誰まつむしのまつこともなくてもつもる思ひ草おもひくらふる不二のねの雪にはいとゝかへるさの跡なつかしき床の海のなこもしつかにうつゝなき里のうれさも難波江のよしあしとなくしるし置ぬしかるを何かしひらき見てえさせよといふ二たび三たび辞しなんも書かましけれは烟花漫筆となつけてあたふさらバそのよしをしりへにのべよといふ今はいな舟のいなむへくもあらす清き渚の玉もひろひかほにもしほくさかくてそ人の望にまかせぬ見る人はそしり見ぬ人はほむることもあらんかも



佛告阿難誹謗男倡宗門者死而墮犲狼中又優婆塞戒經曰男倡をにくむものはながく滯下の地獄に落るとや。此たいげ地獄といへるゝ。八大地獄の外にありて。其嗅氣たゆべくもあらず。おそろしき地獄なんど。爰に空海の跡をたれ給ひし峰をくだりて。櫓太皷の音近き里に。たうときひじりのおゝします。年七十有余歳にして英氣さかん。折に尺八をふけども杖に竹をきらず。行法をなさんとては。日に三たび狂水を咽に手向て。口に新ゝ哥を讀誦して他念なく。一字も學すして。てつへいから不立文字と説給ふ。予此德をしたふ事年あり。そも男倡宗門のたうとき事はどふした拍子なひやうたんぞと問ふ事しば〳〵。

二

ある日から風呂のうちに三日三夜こもりて。ひそかに此教(ヲシヘ)を說(トキ)しめし給ふ。其旨(ヲモムキ)を墨(スミ)して紙に寫し衆生界(シユシヨウカイ)に投(トウ)じて自他平等(ジタビヤウドウ)に法味(ホウミ)をさとし。あいともにそゝりあそばん事を願ふ

男倡宗門の行者

男倡新宗玄々經

鐘西翁著

古人後庭華と稱したるハ此男倡の事にして其いきぢを讃美したるの名也夫若衆道に二品あり劇場童かけ子のたぐひの冶郎といへるものを第一とし地若衆を第二儀とす其冶郎のおいたちを見るに八才にしてはしめて三絃の棹にとりつかせいまだ夜のあけざるに起されて五色の聲を發す又霜の夜の寒彈土用の大ざらへしばらくもゆだんさせず是を種といひてくわゐのやうなあたまして折にハちかき所の小つかひにも出もつはらつとめる若衆の樂屋入りの供について舞臺の格を見習ひとかうするうち衣裳を切り込ミ舞臺へ押出し相應に太夫のかふろ役セリフ太夫さんみ持てゆくぞへアイ引といふを一人前のせりふにして芝居を戻りくれかたから座敷をつとめておそろしき山法師あるひハ在郷の熱鉄坊にも出合ひいげちなきうきめにあふ事也床のうちのとりさばきハもちろん客へのいきぢつよき中にきつすいといふまことの情をこめたりけわひかたハ

女もおよはぬほどに仕立て艶なる事又たぐひなし是則釋尊のむかしあらゝ仙人の若衆となり薪を樵水を汲ミ夜ルの殿をつとめ給ひしにも彷彿此難行苦行を經たる所なれは若衆ハ冶郎にまされるハなく是大乘の衆道也又地の若衆のうちにも官舍寺に小性といへるハいきぢも粧ひもあい劣らぬものありて第二の衆道也さもなくて何の情もなき小童小丁兒のたぐひを腕づくでまじわりに及ふものあり是ハ只其犯す事を好むものにして衆道を愛するにハあらずこのともがらにハ狼に前髮かづらきせてあてがうても一穴だにあらば滿足すべき事也古詩に山礬是弟梅是兄とあるハ山谷の作也これ常の兄弟の事にハあらず山礬ハ七里香といひて今の沉丁花にハあらすして色香ふかき花なり是を梅にならべてかのねんじやと若衆の情のうるわしきにたとへたり古今來唐も和も衆道を愛する人多し周の穆王の菊慈童ハ枕をこへたが慮外じやとあつて請人に預けられしとや若衆ハ折に思ひ切た不行義もかへつて愛すへき所なれはツイしかつてもすむ事をかくせられしハよつほど短氣者穆王も今少皮のとれぬゆへなるへし又衛の靈公ハ彌子瑕といへる若衆を請出しておかれしがなれなしみたるのちに彌子瑕が親の常酩酊河豚にあてられたとの知らせにおどろきことわりなしに靈公の車に乘り親の所へ行きたるを靈公聞て孝心なりといひてとがめず又彌子瑕ある日もゝをくつてあまり風味がよさに一口喰ひたる跡を靈公へさし出し是

くわんせとすゝめたり公はゝゐミて曰おれをたいせつに心へはこそ此うまき物をわけたりと悦ひ二度なから黒う出て濟〆られしにびしが廿七八にもなりし比思ひもよらず婆のうらみいふやうにはるか跡の事をくり出して車の事ももゝの事も不屆慮外千万弓矢八幡かんにんならずと大きにげきりんにてなんなくびしかを追出されたりたのしミたひほどたのしんだ跡にてかうしたさばきさりとハむごいといわふかよつほど手のわるいしうち也彌子瑕も若衆あがりの事なればぐにや〳〵してなんの役にも立ッまじけれどかなし〳〵も香具店でも出してやられねばすまぬ所を靈公一生の仕くじり後世たいこ持の口のはにかゝる事也日の本にハ高尾の文覺法師さもすさましき瀧に荒行をおこしいのりおうせて六代御前といふ若衆を手に入れさま〴〵と世話をやかれたり又論語先進之篇に曰 暮春者春服既成 冠者五六人童人六七人浴レ乎沂風レ乎舞雩詠而歸 とあり此童子とさしたるものハなんぞやいかほどめしつかひがあるとて丁兒を五人六人つれてゆく筈もなし又てら子屋の天神參するやうに門弟の子供をつれてあるくやうな事ハ唐にハはやらぬ是こそ若衆に相違なき證據也彌生の空そうよくはれて若衆つれての野遊ひとハよい趣向を立られたり孔子聖人さへかくのごとくたのしミ給ふ道なれはいわんや凡人におゐておや扨むらさきの朱をうばふといへるも其彩色の事にあらず朱ハ紅裙にて妓也 紫 ハ今いふ野良帽子

也女郎冶郎に一座すれは先其女郎わが逢ふ客をほつて置ィて其若衆へいろどりかけ襟つくろひ尻限かよハしどこともなしにしよげてくる是朱の紫にうばハるゝ也我レ聞昔紙衣和尚と編笠居士と妓呂倡の問答あり編笠居士の曰みをかよわすにも女郎なれはおさだまりの逢たひ見たひを百へんほどかき又よほどなじミたる中では來てくれくさらぬかあいたひヮィャィなどゝちやりごかしにかきててうしにのせる若衆のみハ一筆中啓上り〳〵などゝあとない事をそこ〳〵に三くだり程かきておくれども心底のまされる事同日の論にハあらす夜なか時分に急用が出來ていぬる客をあいかたの女郎のあしらひを見るに心のうちでハ此客のいぬるのを拜んで居るほどうれしひのを半町斗おくつてゆくうちにもめいりたるていにもてなしわかれしなには這出のやぶ入が親方の內へいぬるやうな顏つきして客に心をのこさせて鼻の先へ性根魂をつまミ上けるいやでならぬ床の內ももだくだしたていを見せ客にもらいたひ物があるとわが馬のあふた中居に太皷うつてもろうておいてわたしがかゝさんが久しうきあいがわるいによつて此あいだボハさんといふお客がねんじんを香七に大かた三盃ほどくれてゞあつたけれどがんどうとやらいふねん參でわるいげなによつてこちの內の男衆やおなご衆にわけてやつて仕まふたとあとかたもない事いふて遠ィ所からよい人參の價をとりよせる分別むごしつたなし男倡ハ此あたりの恐ろし

みなくいやミなくほしき物あれはうちつけに　此印籠下んせぬかといふ　客もやりとミなければそれハやられぬといへはアイといふてそれぎりにすこしも念なし往昔織田信長公の小性にもりのおらんといへる小性あり信長公厠へまいり給ふ時此おらん御刀を持てひかへたる間に此刀のきさミざやの數をくりかへしてよミ居たるを公厠の窻よりうかゞひ見て翌日小性共多くあつめて宣ふにハ此きざミさやの數いくつといひ當たるものに此刀をくれんと也小性共思ひ〳〵に共數をいふにおらんひとり何ともこたへず公の曰なんぢ何とて詞を出さすやと問ひ給へはきのふ厠へ御出の時御刀もちし間に御さやのきざみの數とくとよミおきてよく存候へは申上ず候とこたへたりしに信長もかんじ入らせ給ひしとや此たぐひの事皆若衆の情にしてやさしくすなほなる所也起きわかれの折しもあつき比のあけぼのにはすこし踏ぬぎて寐ているを客からうちきせてやつてモウいぬるぞとゆりおこせは　いなんすかといふた斗て又寐入るさま此あたりの事あどなくて若衆の愛とすへき所也心義のたうときハさら也とざまの事にもこゝろよきは

〽つれあるひてもいやミなし

〽紋日を賣りたがらず

〽多葉粉のミて床をひつぱる事なし

〽いやと思ふ時寐る事をすゝめず

〽中居についしやういわず

〽さゝやきはなしせず

〽臺所へ立ッ事をせず

〽喰へばすミやかにいふ

〽床の段に寐まきに着かへず

〽月ごとのさわりなし

先ちよつとした事にも其益ある事然り只虚にして着するものは女郎又不着して實なるものハ野良也なんとありがたひ事であろふすミやかに珠數を切て我會下に伏くせよと編笠居士席をたゝひて申されければ其時紙衣和尙こらへかね居合腰になつてこたへて曰汝鼻の下へあせを流して尤らしういわるゝが皆ふるひぞや〳〵女郎のことばハ月花餘情にあらハし女郎のくせハ色八卦につくしたりこれらの粕をなめてやつて見るのかそんなわる口がなか〳〵こたへるものでハなしおそれ多くも二ヶばしらのおゝん神鶺鴒のひこ〳〵から思ひつきてミとのまくばいをなされなかくぼ　なか高の和合するが道のはじまり汝此君子國に生れ出て女郎をにくむハとり所もな

き以の外の罰あたり也邪なる裏道に心をよせて拍子木ではなかむやうなきつしくな事をこのむハ横にありきて石垣をせゝる蟹にも劣りたりそも女郎の十四五よりつき出して新造となへ未開紅の花にくらべていまだひらけざるくれなゐのつぼミ其色香深きをたのしミ水揚といひて稱美厚し其まじハりをかさねるに及んでハ鶯にもあらす鈴虫にもあらぬいふにいわれぬ聲を出して喜びをあらハす是を俗に文彌といひてありがたがり大八洲の秋津國ひとつ所へよせるたのしミ男倡道の及ふ所にあらず汝今男倡に十ヲの益ある事をいふ予いち〳〵これに答ん耳をさらへて聞へし〽男倡ハつれあるひてもいやミなしとや是ハ汝がりんき深きによりて也其ゆへハ女良をつれあるくとかしこの客そこの男が詞をかけ打まねきなどするが小ばらのたつゆへ也是根性のちいさきゆへぞや又〽紋日を賣りたがらぬがきつううれしひそふながこれも甚吝ィからおこつた事じや〽多葉粉のまぬ事をきついじまんじやが此多葉粉ハ色事の責道具にしてなければ叶ハぬもの也古代ハ吸付たばこといふておさだまりの愛をもちながきゐにしの橋となりて媒艸ともいふ也〽いやと思ふ時寐る事をすゝめぬのハ男倡の勝手づくといふものでにくむべき事也〽中居についせういわず•〽さゝやきばなしせぬのハよいが客のあちらむいた間に中居の手をにぎり又夜更ヶ客しづまつて後そつとぬけて出て隣の屏風へ四ッ這ひにはうて行のもよつほど見

れて此道に大悟すへしと云ゝ

男倡別名

若衆をヒガ

ヒガといふハ大古(タイコ)の言(コトハ)にして男色のまじへりハことかへりて僻(ヒガコト)なりといふ心にてヒガととなへたり

是いまだ日本に目鼻のつかぬ時分の間違ひより出たることは也

中ごろしんちうミがくといふハ

宿屋のいきぢの直(スク)なるをもつてまじわる事を心中をミがくといへるを眞鍮(しんちう)をミかくと文字あやまり來たれり

菊座といへるは

川太郎も及はぬほどに此道執心の人かの所を此花にたとへて稱美せり

ベス

此ベスといへるハ蠻語(バンゴ)にしていやしき端(ハシ)の國よりいひ出たるゆへ文字つまびらかならず此道執心の人再考あるへし

又ヘヘツボヘ午房の切り口などのたぐひ皆つたなきことはにして論するにたらず

奥ニ男倡宗門の名目をあらハす

色子名寄

十木市松	姉川外山	嵐國市
桐野谷嘉吉	荻野千藏	中村百松
十木菊松	玉川庄之介	津川菊太郎
山下茂太郎	坂東菊松	花桐幾太郎
竹中小吉	市山源之介	生嶋金藏
小川吉太郎	拍井富竹	山下龜松
桐野谷秀松	姉川新四郎	嵐条松

關東座屋店

中村松右門	大和川籴道	玉川大三郎

岩井八十七
嵐淺五郎
山下三八
中村三吾
嵐龜竈
坂東才三郎
市川万五郎
中村いろは
姉川大藏
藤川小吉
富山龜松
市山淺之介
淺尾十治郎
姉川ミなと

嵐巻之助
中村又藏
市川團七
榊山小太郎
嵐庵市
中村富三郎
荻野啓藏
市山富松
中村しけ藏
松嶋大吉
嵐龜吉
富山兵太郎
玉川伊せ松

市山花松
大和川龜松
淺尾富五郎
かね子ひな路
嵐五良市
淺尾嘉吉
岩田花崎
松嶋小松
荻野小吉
嵐定五郎
嵐春藏
富山金作
花桐豐松

中村屋店

嵐　常松	十木富三郎	嵐　音吉
櫻山粂太郎	村山金藏	嵐　小辨
竹嶋きん吾	桐野谷さんご	荻野梅之介
桐野谷千代の	市川金彌	嵐　辨之介
三保木市三郎	嵐　津多藏	嵐　八重菊
十木菊次	十木若松	嵐　百太郎
おか本與吉	嵐　菊介	嵐　八重吉
中村小才三	十木金太夫	中山小吉
三保木辨之介	嵐　冨之介	嵐　辨之介
市の川喜太良		

堀江影子

いつ庄吉次郎　みゝ彌　はりくら　花松

京　龜　乙松　庵市　浪介　與市　喜太郎

龜松

千年屋　長五郎　竹三郎　万太郎

丹波屋　彌保太郎　常世

七湯遊里往来[illegible]

夫色道の事ハ正しき神のおしへにして今にいたるまで万里を隔てるへんひ海上はるかに押うつる遠國のはてまでもたつときいやしきによらずいづれこの道のかけたるもなし猶此道ハよく邪正の誠をあらハしつゝしんであぢハへバすなをなるもの是にしかし志を面目にあらハし胸の中を問わずしてさとりよろづにわたつてその人の賢愚得失をあらハしより所によつて其じんたいを捨る故に此度色里袂案内と題号して所ゝの女郎の氣持客かたの遊び土地に順じたる事くわしく書あらハしてあまねくすい大臣のひぢにせんとつゞるものならし

花路色里袂案内

先花のミやこのにぎハしき事いふ斗りなし殊に嶋原の景色大夫ハ大夫の職になをりうちかけの取さばき疉されりのじんじやうしかし時と代と押うつりいにしへハ七拾目にて有りしか今は六拾五匁とやら直段をきけバいやしき様に聞ゆれど大夫にハ替りめなし扨テ天神とよぶ是又大夫よりすこしおとりてゐしやうも次に見へたりもつとも直段附ハ三拾三匁しかしこの内おりにふれてハ大夫落ありヌ天神より大夫にのぼるありなを此つぎに端女郎これ廿四匁是も今ハ十八匁十六匁と二品にわかれたり局女郎といふありこれ一夜金壹歩扨ヌ入込きやくといへバあるひハいなかにてハやはぎの長者といわれそうなはらふくれミやこの水に角をとりにのぼるなぞヌハ京中の大名御用ごふく所の主ジ扨ハようろしき手代なぞなりハずいぶんいやミをはなれ羽織も中むかしの小ミじかきを着つれはなやかならずしてくらゐをつくるこしのものもミかけハおりミに見せかけのこらずねぬけものをこしらへ今ハ金作り拵れり遊びやうも又これに順しずいふんしづかにおもしろし此所ミやこ大一の遊所也

祇園町の狂ひ

此所を始人とよぶこれしろとゝいふにて始人となづけしが中ゝ今のはんじやういふはかりなし此所大坂嶋之内＝同しようす粋＝仕出し茶屋置屋もはな〳〵敷中居もすいぶん粧ひ立まへだれの紐かゝへ帯をしたやうにしり打に引廻しいにしへより大名代の一力といふありしかちかきころその名まへ替りたり客もミなようしくあるひハやしきの留守居なぞ又ハよろしき町人の小むすこ今やうの染出し帯ハはゞひろまだ其上に帯の中すぢを外の色に繼たしすいぶん人に目立やうに長羽織着流しもつぱら役者をうつし遊びハはなはだはなやかなり是に類してぎをん新地これ又間を隔すはるかに落たり女郎ハ同し中に次第あり随分よろしきも有又中通りありあるひハ新造などとふれてすいぶん手足ふつゝかなるも有り　しかし近き比すいどものうハさを聞にかのふつゝかなる新造をようこぶこれいかなれハ本にくとやらいふてした打するものまゝありけいこれ十一二から仕立長哥端哥ハどこへやらとんでしまい近比義大夫の芝居はんじやうに付皆ゝ上るり三味線をならひ覚したいのまん中から出るやうなかんばつたこへであるひハあしかりふしミ西行の五段目の景事　あるくもなんぞと思ふとにらむとうふうなくはゝ上と春大夫が當

りぶし客も又ぎをん町よりハ少シおとりてあるひハ小あきんどのむすこ町方の手代番頭親方の目をしのびひそ〳〵たのしまるゝ事也しかしはんじやう祇園町におとらすはなやゝかなる新地也扨この押つゞきにほたるとよんで表付水茶ミせにしつらひさのミ往來をまつにもあらず又またぬにもあらぬ所ありこの所ハよるをおもとしミづから直キに門口へ出て袖にすがりかたに取付引とめらるゝ猶又客すじハぎをん新地よりはるかにおとりて大じまゆかたにひとへおびなぞかたふりまハしとふやら見かけからつよそふな衆が入込こんたんをやらるゝ事也しかしよるのけしきあんどうにミせさきをてらし家〻の定紋付にてにぎわしき事いふはかりなし扨又橋を北へわたりなわて是也是見せ付あれ共ほたるとちがひ行宜たゞしく女郎もはるかに上品の土地也客もまた土地のものハ折〻にて大坂あるいハ田舎をおもとする事なり其外よろづきをん新地類す

宮川町の品

扨此所の女郎を本中となづけ石かけ町と品よほど替り目あり此所女色よりは男色おゝくしんごん宗の開山よりゆるしとてきうくつな所をたのしミとするも尤なる哉じやうぶつとけだつの仕廻ィハ穴の中へ入ルといふこゝろなるべしこれ又大半知しやく院は方はいくハいしはんじや

う此所に越さす又下ミや川町是又格替り女郎の品も少シ落て相中となつけ直段も定目三匁と極大方貳匁より外はらわず扨又客ハさしてぎやうさんになりわめくといふことなくあるひハ手代子息ふろしきづゝミなぞかたにかけおばの所行やうに門口からひそ〳〵とはいらるゝもおかししかし尾をかくそより跡かくせと大かた鼻のひこ付にてもしれる事ぞかし

七條新地米市のけいき

此所見せ付はれ〳〵敷ミせ先キすだれにてそのうちよりこぞりまつり客のやうにして居らるゝ此所直段壹匁五分と定あり扨客ハ相場がゝりミな〳〵氣持あらくこんたんもそれにじゆんしてよろずはなやかなりあるひハ六条へんよりながミしかさしちらかしたまだ若衆にしたら一はやりはやりそふな客も入こミはなをやらること也扨又七条新地ニ二ノ宮町三ノ宮町といふて二すじ有り是同し所ながらはるかに品位おとりたり女郎も一座といふハぜに極メにて六拾四文也扨客も九条へんのお百姓あるひハ土なんぞはこふしう入込ミつねの人よりハ大方いつかう見へてしよしあら〳〵しくくろあかい顔に歯を白くみがき立しつかいさるゝ面ッ着たやうな顔付でしろき手のごひほうかぶりにして國大夫ぶしのしやくりうたひに定ッたとまりのはな代をねぎり

いろ〳〵と様かわりおもしろし所からしゆんだ遊びも此道の一躰捨べからすあながしこ〳〵

長命南新地

これ七条新地に類して少位あり又内氣にしたて見せ付なわてにじゆんししかし此所も女郎衆ミづからそともニ出て裾つまを引ッはらるゝ事也なを此所に上下ありまる太町此所を上品といふ又車屋町若竹町此へん又おとりて直段ゝ付もおあらつ極にて六拾四文也扨客も様ゝ有ル中ニ大かたがきせる屋の手間取衆すこしからだのすじかいニなつたをむりに引いばし口さミせんあるひわかんばつた國大夫ぶしながぶしのしやくりうたひにてのゝめきたのしむ事也外ニ新池すといふありこれ此所に大かた順す

今出川新地

是長めいじ新地にしよしるいして客方のちがひめありあるひわどなたのなにがしといふ客も入込ばくめの文七なぞといふやうな二ッ名をついてねんちう寐先の心でかの喰ぬましなひ事をしている人多く入込いろ〳〵たのしミあることなり

北ノ新地

これ一番町ゟ七ばん町迄か遊所にてこれ又はるかに上品の土地也見せ付あつて直付も三匁五分しかし此所にも下品といふハ壹匁五分六拾四文あり所〻にて又はるかに落たるハ四拾八文ぞうもありそのじゆうなる事いふはかりなし客も様〻ありといへども大方城中より出来り一ッ騎當前のおてき衆なりなを上七けんといふありこれまた上品にして三匁五分よろづ格よろし客もまたよろしくしんたいを作り大かた糸屋町八町のあいだにてもてるはんじやうの土地也扨又ミふの地蔵堂にありこれおもてへあらハさすしろと本にくを立としてないしやうハミなつの〻五六本づ〻もはへたやうなきば共なりかならずゆだんすべからず此所こそ〳〵と遊ぶゆへふか入りお〻く後手ハかきニごつか〻りなんじうにおよぶ人多しよく〳〵ぎんミしたもふべしなをあまたかやうのかくに替らずとかくたかきにいたりひくきに遊ごさま〳〵の手をつくしのら粋の名をとる事也あなかしこ此書ハ色道をす〻めて色道のいましめともならんかと能あしきの沙汰をつ〻まずあらハす見る人能〻わきまへたもふべし

行合色事なるならぬといふ見分様ノ法

一先行合に女ハ男を見たがる事男に越へたり中らうへの女ハわかおもふ男におり〳〵めを付見ぬかほにて見るこれ下心におもふゆへ也しかれともなふりかゝれハまづ初手ハはづかしきゆへすげなふいふもの也これ氣をこらせバいろ事出來るなり又下品の女能男を見るとさわがしくめつたにものかずをいひその男のそばへよりたがるこれ氣性ひくきゆへ也これ又こゝろ能色事なるなり夜にいたり女ひとり歩行におとこなぶりかけると相手になるでもなく又ならぬでもなく男の行ほうへ行女かならずなぶるべからずこれそこごゝろにものだくミの女也かやうの格いくほども有ッこれをもしらずうか〳〵なぶるとき男にもあらすして浮名立られ人中にて恥をかきなんぎにおよぶ事まゝありよく〳〵つゝしミたもふべし

果部巻三

玩世道人著

閑居放言

不許翻刻
千里必究

棲雲館藏

閑居放言序

蓋案修多羅說。閑爲論議、而調伏外道三分一日。而一分習學外道四書陀典。吾山家學生式亦然。外學尚可爲焉。況於文字學乎。不藉文字。而解章句入般若。猶釋階梯。而登岑樓。無有是處縱讀書百遍。徒費精神遂不能免隔靴搔痒失矣。若夫作伽陀讚歎佛祖之德。著書益後昆。不能揮毫屬文以脩飾。以潤色而可耶。然達文字義。摛藻如意。莫捷徑於學詩也。詩者不啻吟詠山水花月之具。耳目所觸。何物不可得而賦焉。其關涉日用事。

或能模出難寫情景者。初學讀之。則能發寸思駿々然得進詩道。不日而正染指操觚家。自在三昧。而後博學洽識。則階梯忽成。岑樓可登矣哉。予未知命年。屏迹江湖。依隱玩世。隱居放言性好詩賦。禪餘常以斯優遊。卒歲彌日。姑向所刊行于世大東名勝詩集中。劇場。俠客。花子。浮瀨。春駒。戀塚。高瀨舩。妓王寺。江口里。僧正谷。時雨亭。利休宅。芭蕉塚。弓削行宮等諸什。初學阮讀之。則必有欣然發動才思者也。頃者偶作北里歌。書林某頻請以上梓焉。予因探篋笥中。別得舊作一篇。併以使門人大

拙若以國字。若以漢字。委悉注解之。爲一小冊子。自命題曰閑居放言。公之於世。冀爲童蒙知文字之梯漸歟。云爾

明和戊子夏五玩世道人撰

北里歌

首夏十四日。行次吉原、觀其燒亡無餘殘有感。因詳尋聽前日繁華之狀、戲作

北里（漢土妓家ノ所在名）從移負郭（史記蘇秦傳ノ字）村。至今（百有餘年）尚稱新葦原。
四面隔溝崇墉（詩經ノ字。）繞。柳巷花街列娼門。行人冶容
極佳麗。左顧右眄連香袂。（連袂香袂ノ字合シ用ユ）比屋縱橫如棊交。
（棊ヲ圍メル如ク相交ルヲ云。棊ノ字俗ニ作碁ニ）飛甍迢遞似邸第。（諸侯ノ江戸ヤシキ）▲二句ハヅイトミワタスケシキナ云
画棟雕梁欝參差。（長短不齊カラ良）錦障朱簾向晩披。（蘇頲カ詩ニ。帝女ノ樓臺向テ晩ニ披）銀燭爛
燦爽路照。合歡牕裏坐胡姬。（謂歌舞妓ヲ胡ハ沽商之義。姫ハ女ノ之美稱。六ムル姫ニノ而稱胡ト之辭）

胡姬三千齋含態。（二字ハ媚ヲ巧ニメケシキドルキミ）綽約爭媚絕世（世外ニナヒ）姿。

鴉黃（漢ノ代ニハヤリシ。宮女ノ額ノケワイノ名）兼學梅花額。（壽陽公主ノ額ノ粧ノ故事）青蛾（美人ノ眉）巧画（漢土ノ婦人スベテ画レ眉ヲ）遠山眉。（楊貴妃カ眉ノ事）瑇瑁簪挿雲鬟（美人ノ髮）出。珊瑚佩接珠履垂。秋月光映琅玕箔。春花香襲翡翠帷。綺席瓊筵相顧語。彈罷三絃夜半時。通莊猶響二更鼓。（此ノ地ノ風俗常ニ如レ斯ノ）總無人怪月當午。（夜半ノ時候）滅燈徹菌當壚牀。（當壚ノ字。司馬相如カ妻ノ卓文君チメ。壚ニ當ラシムト云ニ出ツ。酉ミセノミセサキニ坐スル躰ノ事チ云ナリ後世通ノ娼婦ノ戶口ニ坐スル狀ヲ云）戶外無人初扃戶。別有小堂對佳賓。各自相迎買笑人。金花美酒銀絲鱠。百味八珍滿盤新。艶舞嬌歌寧辭醉。爲君指買笑人宛轉（蛾眉宛轉ス使君ノ前ナドハ。身ブリチシナヤカニスルヲ云。莊子ニ與レ物宛轉スト云ハ。サキノスルナリニツヒテマワルキ）

ミナリ。今ハ二ノ意チカヌ二字ノ意。
著ス。唐詩譯說。并ニ唐詩結綱ノ第二ニ具ニ記スカ如シ。道人所ノ偏委身。遨遊多少
少年子。子ノ字人ノ字ノ意ニナル一擲千金呉象之カ少年行ノ詩ノ語不說貧。繁華綿連百
餘歲。珠玉爲食桂爲薪。土地ノ繁昌ニノ物ノ價ノ貴ヲ云。戰國策ニ出ツ。錦帆桂薪ノ下却利日與萬
錢費。杜甫カ詩ニ左相カ日興費ス萬錢ヲ丫髻蒼頭亦吐氣。イサミヨロコブ緘書封書百萬煙
花文。少年好ア遊ニノ娼家ニ。日ヘフ耽ルト煙花ニ定知斯地紙價貴。左太仲カ三都ノ賦ノ事長堤肩輿
自東西。三谷川繫扁舟小舟齊。袨服好衣服ナリ還欲十日視
禮記ノ字面攜手徊翔徘徊ノ字ノ意桃李蹊。盧照隣カ詩ニ。三字ノ意。共ニ宿ス娼家桃李ノ蹊。譯說結綱ニ具ニ記但期
四時長夜飲。忘歸蕩子只是レ放蕩子ナリ醉如泥。杯盤狼籍赤壁ノ賦字
無餘瀝。唯有蘭燈照畫壁。窈窕深ク暗キ貌洞房今ハ閨房ヲ云闃無音。
就寢人疑逃禪寂。雲母屛中鴛鴦衾。合歡ノ衾擁來庭際月

影深嫣然。笑ノ貌。嫣然トシテ一笑ス。楚詞ニ。私語 玄宗七夕ニ指シ牛女ノ星ヲ。與ニ貴妃誓ヒ言フ願クハ世世爲ント夫婦。樂天カ長恨歌ニ賦ス此ノ事ヲ曰ク。夜半無シ

人私語スル時 誰知者。和鳴鳳凰相求心。 司馬相如。彈シテ琴ヲ挑ム卓文君ヲ歌ノ中ニ。鳳ヤ兮鳳ヤ兮歸ル

故郷ニ遨遊シ四海ニ求ム其ノ凰ヲ。凰ヤ兮凰ヤ兮從テ我ニ棲メ。中夜ニ相從ン知ン者誰ソ等ノ語アリ。譯說第十卷。幷ニ鉀帆ノ知ン者誰ソノ下。可見 蔑視他方ノ

人間世ヲ。莊子ノ字 不信セ 今ハ知ラズ心ヅカヌキミ 乘浛ノ 桑田變爲ルノ海ト事ニテ。世ノ大變スルチ云。七才詩ニ。回セハ首ヲ桑浛

感慨ノ餘 變スルコトヲ古今ニ。 杜詩ニ玉壘ノ浮雲變ス古今ニ 君ノ 泛ク指ス世上ノ人ヲ 不見。 芒芒タル 廣遠ニシテ不ルノ可

測ル意 宇宙盈虛ノ 易ノ字 理。 吳國倫カ詩ニ。途頗ル悟ル盈虛ノ理 窮ノ 古往今來 杜甫カ詩ノ語 無窮已。 張若

虛カ詩ニ。人生代代無窮已コト 將相ノ 將帥相宰 之門 商賈家。 萬福圓備ノ 千禍倚ル 老子經ニ曰。禍ハ

兮福ノ所倚ル。福ハ兮禍ノ所伏ル。駱賓王カ帝京篇ニ。人倚ハ信ニ難分チ、曇鸞師ノ往生論ノ註ニ。倚伏相乘ス。周易ニ天道虧テ盈ルヲ而益ス謙ニ。仁王經ニ

曰ク盛ナル者ハ必ス衰フ。宋詩ニ人間萬事塞翁カ馬。此等ノ意。善ク思量スル則於テ處スル窮達ニ。當ニ無ル過失。此ノ段一篇ノ之骨目。作者用意ヲ處 一夜海上ヨリ

送颶風ヲ 四面俱ニ至ノ風。南海ノ中最多シ。譯說大風ノ下ニ具ニ記ス。颶ノ字作ルハ颶ニ非ナリ 飛沙拔樹ヲ 杜甫有ニ柟木爲ニ風雨所ル拔ク歎ノ詩

傳ヘ聞ク、葦原失-火ノ夜、。警風吹レ梯ヲ直ニ飄シ去ルト數百歩ノ外ニ、
其ノ飛シレ瓦ヲ拔レ樹ヲ。不レ問ハ而可レシ知。故ニ云ナリ媒-祝-融ニ。火神近-遠俄ニ
驚如ニ白日ノ。烈燄二唐ノ太宗ノ梵經臺ノ詩ノ語。彼ノ詩七言律翻譯名義集ニ載ス。字緇-徒宜ニク玩-讀ム。其ノ尾聯ニ曰。春風也タ解ス嫁ニ狼籍ヲ。
吹キ盡ス當-年ノ道教ノ灰十里ツヒトミワタストコロヲ云衒レ天ヲ紅ナリ。火焔ノマツスグニ立ノボルヲ云。颶風ニ應ス周章蹂躙
爭ヒ前後ヲ。赤脚裸體ニシテ叫-奔-走ス、少-壯老弱各何-散ス、百千樓
榭爲ニ烏有ト一物モ無キヲ云。烏有ノ字子虛ノ賦ニ出焦土ノ阿房宮ノ賦ノ字倉庫石-井-欄、李白カ詩ニ金井欄ノ字アリ
郭裏負郭ノ村ニ、別ニ一郭ヲ構ヘ成ス故ニ云往往猶レシ言ニカ處々ト僅ニ相-殘ル、支離タル杜甫カ詩ニ、支離タリ東北風塵ノ際ト、チリ〳〵
ニナルチ云窮猿犬ニ追ル、猿ノ類ヲ云ナリ。晉書李充カ傳ニ。窮猿投レ林ニ、豈ニ暇レ擇ニ木ヲ籠中ノ鳥。比ニス娼妓ノ身ニ、甚タ切ノ當投レ
林ニ投ノ字ニゲコムキミ棲息カリズマヒノキミチ云一枝ノ安。莊子ニ曰、鷦鷯巢ニ深林ニ。所レ安スル不過ニ一枝ニ。杜甫カ移レ居ヲ詩ニ曰。强テ移ニス
棲息一枝ノ安ヲ。此ノ二句。委曲ニ模-寫シ燒亡ノ後寓居之狀ヲ。次ノ四句。重テ叙ニス其ノ事ヲ寓居他人ノ家ヲ借リテ寄リ宿スルヲ云多-傍-墨-
江口。莊-飾環-堵ヲ環ハ周廻也。方丈ヲ一丈四方ト爲スレ堵。二字ハ室ノ至テ小ヲ云ナリ華ニ甕牖ヲ。窓-圓ニシテ甕ノ口ノ如キヲ云

▲禮記ニ環堵之室。蓬戸甕牖。園ニ坐シテ美人ヲ 想フニ寓居ノ屋後。或ハ有テ隙地栽ニ竹樹ヲ處。下ニ短榻ヲ留メ客ヲ坐シ胡姬ヲ。擧レ杯ヲ納レ涼ヲ等ノ事。不レ

可ラ無レ時ニ有レ時也 當花ニ 翻下用ス花ヲ當ニルノ夫人ニ語ノ意上ヲ 興來テ或ハ應ニ茶ヲ當ル酒ニ 憶フ昨富ヲ

容比レ肩過リ佳辰 土俗紋日ト呼ノ類 朗夕 朗月之夕 酒如河 結構 屋ヲ造ルニ多ク用ルノ字 何疑シ

復ニ舊舘ニ。自有ラ

聖代雨露ノ多シ。 雨露ハ譬ニ清世ノ之恩澤ニ。高適カ詩ニ。聖代即今多シ雨露。暫時分レ手ヲ莫ニ躊躇スルコト 詠ス野史ヲ 太平記 盛衰記

等ハ。本邦之史記ナリ。今ハ指下ス於ニテ俳優者家ニ所レ用ル之書上ヲ。故ニ稱ス野史ト、野トハ者。鄙俚之義 一時中原 中國 罷レ逐レ鹿ヲ。

兵亂ノヤムヲ云。逐レ鹿ヲ何ノ。語勢ヲ用ユ 中原復 鎌倉ノ嚴城 要害堅固ナルノ城 鎖ス群谷ニ 四方ノヤツヽヽ 奕葉ノ 累世

宗臣 漢書ニ蕭何曹參ヲ。爲ス一代ノ宗臣ト 北條氏。持衡握權 執政ノ職ヲ云 盛ナリ家族。賴

君爲レ政ヲ最モ公忠。薙染 薙髮染衣 澄レ心ヲ號ス道崇ト 自稱ス最明寺道崇ト 風餐露宿

艱苦ノ狀ヲ云。伏シ山ニ臥スノ意 野巡ニ國郡ヲ。微服 スガタチヤツス 潛行シテ 目立ヌヨウニシテアリク 觀ル民風ヲ

民之風俗。百卉（卉ハ草木ノ總名）凋殘束毛天。（天ノ字次句ニ應ス）層雲渡口（佐野ノワタリ）欝暗然。四望蕭條行人絕。紛紛（多キ貌）雨雪步難前。路旁唯有一蝸舍。（蝸牛ノ盧ナリ室ノ至テ小ヲ云）茅茨傾側八九椽。嬋娟少女春二八。出戶執箒掃簷邊。脂膚何堪雪片侵。遠延螓首（美人ノ首ヲ云詩經ノ字）顧振襟。履屐傍籬暫徙倚。眄眯見客止微吟。傾笠近報顏戚戚。（愁ル貌）山僧百城事遊歷。（百城遊歷ハ佛家ノ語）麻衣（麻衣草座ハ沙門ノ事）始覺今日寒。向晚投宿無處覓。階下篭前足容身。脫粟苦茗隨乞喫。顰蛾（美人ノ蛾眉）▲二字ハトモニ愁ヲ催ス。輒チ云聽已對徐徐。（急ニツラク言ヒ放サヌ）主人阿姊偶他適。縱令在家欲留君。貧家所存徒四壁。（史記司馬相如傳ニ家徒ニ四壁ノミ立）雪華照席賴

當燈勁風打牖奈掛錫。 僧ノ止リ住スル處。掛ニ錫ヲ壁ニ 君不見。稿木之形死灰心。 莊子ニ形ハ如稿木ノ。心ハ如シ死灰ノ 弱水載羽焉能禁。 大海ノ中有弱水。水ノ力弱シ。不能載スルヿ羽ヲ。不同ナラ世ノ江海ノ水ノ能ク載ルニ巨船ヲ。今ノ意ハ譬ヘ少壯好色ノ人ト與藥愛慾ヲ如キノ枯木ノ倚ルカ寒巖ニ其ノ勢有ルニ不ルヿ同カラ 蕙心蘭質生百媚。 樂天カ詩ニ一笑百媚生ス 於我節操堅如金。莞爾 小ク笑貌 復言否私疑。 私ガ心ニハ。ドウカ心モトナク思フ 春心有時不自持。 謝榛カ詩ノ楚女春心不自持 幽談 人知ラズウチトケハナス 密邇 ヒザトヾチスリヨセテ 眞如碎。 郭奕心酔ノ字ノ意ヲ含ム。心酔トハ心ニ深ク思ヒツクヿ 死灰復然 四字ハ韓安國カ事。兩倚ノ死灰ノ字照應ス 未可知。趣 足バヤニアリクヿ 而入戸寂 ヒツソリ トシチトモセズ 無聲。唯見積雪覆柴荊。盤桓倚杖悄無措。極知艱難報國情。寄語 氣ヲ付テ言ヒキカス 今古群嶽牧。 古ノ列侯。有四岳十二牧 休恣逸樂虐蒼生。

閑居放言　一二

道人著詩海錦帆。初編八巻行于世。今詩中所用熟字故事。錦帆中所載者。每字右肩加黑圈。使人知用字有來歷本據

玩世道人門下　竺天拙識

明和五戊子年五月

無此印者

爲僞刻

京寺町五條上ル町　梅村三郎兵衛
同室町六角下ル町　田原勘兵衛
大坂心齊橋筋順慶町　栢原清右衛門
參州吉田　風月喜兵衛
江戸日本橋通一丁目　須原茂兵衛
同本石町十軒店　前川權兵衛
同所　山崎金兵衛

郎中奇談

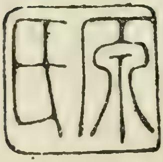
敍

諺曰。有脹子眞情。與鷄子方角。則晦日可見月出之光。

豈唯脹子哉。酒妓孤老愈以情薄矣。於是有郭中奇譚之作。

苟悟其趣者。皆通人也。如未有信其高者。不是責也。明和

己丑冬十月淡海先生題



序

當世男ありけり吾妻の北の曲輪に居つゞけして遊びゐにけり此里はいとなまめいたる傾城すゝけり此男なじみてげりおもふべきうちの事ハいといやになりて有けれハこゝちまどひにけり女郎の着たりける打かけのそばをはなれず酒をのミてゐる此男しのぶ摺の下着をなん着たりけり春日屋の花紫といへるあいかたにかぎりしられずのぼり出してもの日もあげてやりけるおもしろき事もやありけん忍びてもしのばれずたれゆへにみだれにし我なるぞとのくぜつはこゝろばへなり今の人ハかくいちはやき野らうをなんしける此里よのさとにはまさりけるいきはり

つよく情なんふかゝりけりのぼすのこにもあらざりけらしそれをかの野郎男うち物かたらひにかよひ行ていかゞのぼりけんときはやよひの節句雨しつぽりとしてよぎとてもとりもせずねもせで夜をあかし春の物日ハ一日もかゝさずながめくらしついにいとよき大じんとなんなりてげり共男いひけるハ傾城は下さまのものにあらずまづ和哥の道にうとからず月華にこゝろをよせ伊勢源氏のおもかげをうつし香をたのしミ茶の湯をなぐさミなどしてかつてこがね白金も手にふるゝことなくて今ぶきの小判を見ては山ぶきの花色こがねぬしやたれとわずしらさずおれがのにせんといへど人しらざりけり只欲なんふかゝりけ

るたとへ伽羅の佛にはくおきたるやうな心入かたちもまたいつくしき男有ても全盛の君いかでかびんぼうになづミ傳らん大じんハうわ氣なるさわぎをこのまず大よふにありていやしきわざをつゝしミぬれバおのづから其やうだい高くまことに傾城かひとも見へて其位あらんかさハありとも人をこなさずこがねのひかりをつゝみてむかふの心をよくさつしことばをうけてともに其座のけうをなせるをあそび上手とやいはんあほうとや申傳らんとなり

明和六己丑初冬

舩窓笑語

〔藝者二人やそ・とめ〕りやんのめかけたか三かけたか四ッちくてつぽう五うねんぼうのすうホ、、、ホ、、、、〔客〕サア一ッさそ〔やそ〕ちとあげやんしやう〔客〕まづへ、、、、〔とめ〕おやそサン袖が引ッかゝッて有〔太イコ利八〕ヲ、手をだしなさんな〔客〕さし汐がだいぶはやいやうだ〔太〕旦那モウしゐの木屋敷が見へますア、くさい〳〵コリヤたまらぬぞふわ〳〵舟が貳はいまで〔とめ〕きたないと云ひなさんななんのこッたなエ、〔やそ〕アレ見なアノ屋かたにおふさサンが〔とめ〕ヲ、ホンニまひとりハたれだやらこッちらの醫者サンで見へぬ〔やそ〕モットすだれあげな〔とめ〕アリヤおりよサンだ（といふて手をたゝく）〔客〕アノあかいもげい者か〔やそ・とめ〕イ、エ〔客〕顔といしやうとひとつだひぢりめんもきついぐちだ〔太〕モシ旦那夜前すゞ町にたつていたハちよ竹じやござりませぬか〔客〕ナニサアリヤ万字屋の女郎さ〔太〕ヘエ、わたくしハ又四ッ目屋のてうちんだとぞんじましたことしのとうろうハどうでござります御氣に入ましたか〔客〕からくりだけくどかつた（此間しばらくはなしあり）〔やそ〕こちら〔とあ〕でも おとめサンけふの髪ハゆふてもらいなさッたか〔とめ〕アイいそがしくてわたしがゆふた〔やそ〕よくできた〔とめ〕おやそサンお

まへァノきくのかんざしれどふしなさッた〔やそ〕アレれお京サンとはぎでらへいッたときおとした〔とめ〕わたしも此ごろ湯やでおとしたホン＝伽羅のくしに銀のふちとッたのがきてあるが貳兩だとサおまへ買ふ氣れないか〔やそ〕わたしやかゝサンに見せなけりやならぬおまへの此もやうれよくぬッたぞ〔とめ〕ホン＝おみつサンの色のはなし聞なさッたか又おとうサンと中まわれかしたとサ〔やそ〕ソノ色れァノせのひくい男ァ、何とやら權〔とめ〕ヲ、ソレ〳〵權八サンサそれについて大いざが〔太こ〕コレ〳〵こそ〳〵何をはなしなさるその盃づッとこれこふおまれし〔やそ〕コレサじやうだんしなさんなおまへにさすられるひざがあるとせんじゆへやてかにになてさせるれナァ〔客〕コリヤてきた〔太〕コリヤきついおてうしサ旦那モシ一ッおはなし申ませう〔客〕おせんがはなしもふるい〔太〕兩國の油れ〔客〕ソレモきいた〔とめ〕ソンナふるい事はずッとながしさ〔太〕しやれといふはらだ旦那ひぜんの平内左衛門のまく切れ新らしいでれこさりませぬか〔客〕あんまりだやッぱり極彩色の方かよい〔やそ〕錦さんのひやうばんかよい〔客〕アレモ古くかたらふとするからおもくてサ〔とめ〕ソンナラおまへはどふでござります〔太〕コリヤ旦那一チごんもないぞ〔客〕ナニ〳〵おれでも聲があッてふしを上手にけいこするとめッたにまけるとじやない〔やそ〕ソリヤたれでもホ、、、ハ、、、

【客】こんど龜やのすがハらが事きいたかとんだとさ【太】イヱ〳〵【客】露興と色さ【とめ】ソリヤわたやの菊二郎カエ【客】ソレサきついはまりさ新ぞうだしてやるやらまいばん〳〵こない夜ハないそのおくりむかいのいやらしさとうもいへぬ【太】これハけしからぬヱ、きいてさへごうはらた【とめ】きついやきさ【客】利八けふはまだべた〳〵した口合を出さぬナア【太】且那むごいこれが當世でござりますサアおまへがたチトお引（哥右衛門こわいろして）利八是にて一ッけんせうハやア、イ（【とめ】【やそ】おのらがさしづで三味せん引くものかとおもひながら哥）ほうづきほどの血のなミだョ落てせうになるまいか（チエバチエバ〳〵キタサノサノサ）

弄苔巵言

エッザイコラツサイホイ馬道へでる【かご】且那モシ〳〵【客】フ、ウなんだ【かご】三まいで參りましたそこをナちとおたのミ申ます【客】いざれないつもりだに【かご】ヘエヤモあまりさむふござりますナアぼうぐミ【ぼうぐミ】ヲ、サどうぞ三まいぶりおたのミ申ますソレデ壹歩いたゞきました同前でござります【客】三まいぶりとハ三百か【かご】へ、、、且那おどけをおッしやる貳百づゝいたゞきとふござります【客】イヤ〳〵と（いふて四百にきハまり大門口へおろす是ぬかミそ汁のだんなり）【かご】清六とお

たづね下されませいつでもあの辻におります【客】大義〳〵 頭巾ふかくきて門の内を見まはし〳〵入る ヤレ〳〵あゆむよ
りくたびれた【茶や亭半七】コレハ其遊(きゆう)ゟお出あそばせおかごでござりますか【内義とよ】いづる ヲ、
其(き)ゆうゟ此ごろはどうあそばしました【客】風〳〵【内】ソンナラマアおこたつへコレきよう
ら口早くたてやホンニ夜前仕候ゟがおいであそべして【客】フム、ひとりか【内】ハイはじめ
の所から見付て大いざでござりました【客】ソリヤおもしろからふゆふべきたらべよかッたも
の【亭】コリヤ喜介そのくわしあふきやへもッていてお帰りはおかごかよく聞ましてこい【客】
いそがしいナ【内】コレきよかた左介か中万字へおしらせ申しや【客】まて〳〵今夜はチット
【亭】まだこりもなされずに【きよ】てらし盃もちいづる お一ッお上りなされませ【客】このごろ富泉は來
はしまいサ【内】イエ〳〵あなたは深川ではござりませぬか【客】ナニサチットわけありサ【亭】御
しんぞゟのおつのでござりますか【客】ナニサ下谷の藝者にきついはまりサ【亭】わるいこッ
た【内】サアお一ッ【客】ヲ、よいかんだ【きよ】吸物おかへあそべしませ 此所しばしさかつき事有 表に下太のおとゞわら〳〵とし
て【女郎花紫】來る【亭】きもつぶした顔する【女郎】あにさんヨヲしらしてくれなんしたおとよサンも
つまりんせん【亭】タッタ今おいでなされおしらせもうそうとぞんじた所へ【女郎】モウいひな
んすナ錦戸サンが見付なんしんとわきへやり申なんすであらふ ときせるのやきがね【亭】アッ、〳〵【客】ア

ノマアそッばがいつのまに見付おッたやら【女郎】いひなんすか といふてつめる【客】ソリャ風がかわゝッた【内】一ッお上りなされませ【女郎】アイ【亭】お盃おあづかり申ませう【女郎】しばぎつれ巾しや【客】おれハ今夜チト用が有【かむろ】サアお出なんし〳〵【客】南無三めしつぼが取ついた【内】サヤウナラお出あそバしませ【亭】そちらの羽折よこせッレ喜介おはきもの【女郎】内義に何やらさゝやきて暇をいふ【かむろ】袖を引ば〳〵 ぬしや巴やの若イ人によく似ていなんすイッソ性わるだ【客】おれをまわしかたにするさふだ といふて中の町まかりて女郎やのはしごとん〳〵物二て座につく【客】コレハあつくなッた【錦戸】のぞいて モシ共ゆうなおいでなんし【客】よくいッ付たの【にしきど】ナニヲヱ【女郎】わらふ【茶や】にがわらひする【客】一ッぱいはめたナ【女郎】ナアニしばぎが見付んしたハナアレニたづねて見なんし【客】ひとつゝすめぬ【若イ者藤介】茶屋に向ッて お一ッお上ヶなされませ【茶】かんをもッとあつくして上ましなさい【ばゞ】出る ハヽヽ 共ゆうなお久しうござります【客】うなづく【茶】チト上ませう【若】憚ながらおあい【客】こッちへ來る迄内に客があッて盃を下におくとすくに來て又のむこッたッレ半七おさへのだ【茶】わたくしも一日ゑひでござりますモシ花紫ゟさしあげませう【女郎】ナニのミもしなんしんものッンナ盃はいや【客】藤介殿チヨットおあい【若】ヲヽコレしは木どのつがッしやんな【客】てうど〳〵 こゝで一まい【若】ヘヽコレハ【茶】

花紫ゟ一ツございます【女郎】モシヘ ソレヘ上ヶもしんせう【若】（一句宗の佛だんのやうな臺の物に大根をせいがい浪にきり梯梅干のるいあまたつミこ持いづる）チトおなぐさみに【客】半七ツノしやうじあけたらよかろ【茶】おさむうございませう【客】うッとしいホウ月がよくさへた半七はいかいは【茶】此ごろすきといたしませぬホンニ先日かづさやの御亭主が何やらの題で狂哥を一首ヱ、何とやら何としてやらものとやらヱ、、ア、、下の句ハわすれました【客】ソリヤなんの事だハ、、、、（此所さかづきめぐる）【かむろ若ば】（ろうかをはしりいろ）【女郎】ナンタさわがしい【若ば】柴木どのこそぐらッしやるナ【女郎】コレ柴木ャたしなミや【しばぎ】イヱ若葉どのがくらがりでおどさッしやるから【若ば】ヱ、うそいはッしやれ【茶】ツノやうにさわくとおさつどのにつげるぞ【客】三歩（らうさん）になるものがそのやうにでうだんするものか【若】（柴木が首すじなで丶）旦那に水上ヶおたのミ申さないけりやならぬ【しばぎ】ナニばかッつらめ【若】また〱〱口が過てどふもならぬ【新ぞうミちのく】（らうかをちらつく）【客】トフダ久しくあはぬ大ぶせか高くなッたア、羅かんへつれて参ッたときハまだちいさかッたに【ミちのく】こんどハ芝居へつれてあよひなんし【客】つれてゆこ〱【若】モシお茶づけツレヘ上ませう【茶】コレ其御吸物コッチへよせて花紫ゟへすへましや【女郎】あにさんおまへ上リなんせわッちやこゝでたへんすしば木はしだしや（女郎客のぜんにてはしをまじへるコレなじみふかきゆへ喰とき扉をさらすしてしかも如此）【はゞ】出る何もございませぬコレゑび

をむしッて上ヶまさッしやれ【若】茶持いつる【女郎】コレ紫木やわがミや嶋之助さんの所へいてァノわッちが申しんすゥおづつうれどうしなんしたちとよふござりんすか其ゆうゟがお出なんしたからちとあそびにお出なんしといッてきや【柴木】たつ此間膳部取入又さかづき事あり【客】モゥ酒もいやになッた【茶】チト春もでもよびませうか【客】イャ〳〵あれがねつ〳〵した三勝もあいた【茶】又わる口おッしやる【客】モゥかねうッたか【茶】たッた今打ました【若】旦那チトアレヘお出あそバしませ【客】どれ〳〵といふて小用に立かへる其間にふとん敷【客】ねる【茶】わたくしハモゥおいとまおかへりハおはやうござりますか【客】イャいつものしぶんでよい【女郎】あにさんやすミなんしおとよさんへよく心得ましてくれなんし【茶】花紫ゟ旦那がわきへやれとおッしやッてとうもなりませぬチト御いけんなされませトいふて歸るに、きの皮ぎぬらいれおしつけて行【女郎】あの子ャ茶一ッたも【客】ヲレも【女郎】マァぬしに上ヶもうしや【柴木】かへり口上 アノ花紫さんによふおつかご下さります其遊さんのお出なんしたげに御ざりますゥわッちもだいぶよふござりんすからァ後ほど参りんしてお目にかゝりやせうよいおたのしミでござりますテ【女郎】おきていなんすか【紫】イェ【女郎】モシヘマットこッちへよりなんせ【客】ア、大ぶよふたぞ【女郎】きのふいッて上ヶンした事あれでよふござんすか【客】春の事か【女郎】ソゥ【客】がてんだ〳〵か是れなんだ【女郎】コリャ嶋之助ゟ

のやりなんすみさ【客】どれ〳〵よくかくぞ此手ハかりにもほれた【女郎】ほれたかほれなん
し【客】どふもかわいらしい所が有此御うれしくなどの筆のいきほいきついこッた【女郎】
（み引つたくツて口へ入レかむ）【客】ヲ、これハ大事にかけて取ッておかふと思ふたに【柴木】よいきミの【客】ま
たあいつがひいきしおる【女郎】まだそこにいやるか其屏風こッちへ引よせていてねや【客】早
くねるホン＝あきれんすによウ【女郎】コンナけがらわしい物ハ（といふておかんだみふす間へなげる）【客】ア、かわ
いそうにいたかろに【女郎】モット きつくなげよふ物イヤホン＝よく書なんすぞわッちらがよ
うにエ、かゝぬ者もあるに【客】ソリヤ例のミこそが出た【女郎】ぬしの所の庭にわッちがみが大
ぶすてゝ有ルであらふナ【客】イ、エあなた負のハ大事にいたしてはだ身をはなさず守袋に入レ
てござります【女郎】ぬしの守袋は大キくしたであらふ【客】ヲ、錦で長持ほとにしたのがいく
らも有ル【女郎】ソンナラはだ身をはなさぬといひなんすがゑりにかけていなんすかどれ見よ
【客】イヤこゝにハないソレハコフサおれが居間の向ふに守蔵といふが有そこで夜ルもひるも顔
見る心でながめているナント きついじつか【女郎】其蔵を見にいきんすぞへ【客】くるがむつ
かしくハ蔵ともに持タせてよこそ【女郎】ぬし＝なぐさまれるととめどがない【客】ア、守蔵
が見せたいナ【女郎】蔵のついでにいつやらおれが所にからくり人形がある蔵から出してやろ

ふといッてよくだましなんしたの【客】ホンニ出させておかふとおもふてからわすれた【女郎】モウいりんせん【客】ソレハ近ごろおのこりおほい【女郎】よくだましなんしたの【客】まづそんな物さ【女郎】モウきゝんしない（トいふてむなぐらとりかゝる）【客】南無三御きげんがそこねた【女郎】ナニサはらたてァしんしん【客】ナゼ【女郎】ハテ心さし有かたよりのいつわりハたがまことよりうれしかりけりといひやんすからマァうれしいノサ【客】コハ有がたき古哥の御たとへァ、御尤ナ事だ【女郎】又いひなんすか（といふてせなかをつめる〳〵）【客】アイタ、、、寒に入ッて大キに力がつよくなッた【女郎】ぬしも寒に入ッて大ぶ口があがりなんした【客】ハァ上ッたかのおらハ又やッはり鼻の下に有ルと思ふた【女郎】ばかやめて今の物きッともたせてよこしなんせいやといひなんすとつめりんすそへ【客】イヤ【女郎】ソンナラ【客】イタイ〳〵モウ〳〵きッとた〳〵【女郎】イヤ半ぶんわらッていなんす物こんどハこそぐッてやろ【客】コリヤ御めん〳〵よこすよ〳〵イヤさッきの哥ハ何とやらヲ、ソレ〳〵心ざし有かたよりのいつわりハと【女郎】まだなぐさミなんすかモウかんにんが（とむなぐら取ツてふりまわす）【客】サア〳〵持せてよこすといふに今の哥ま一ニどいふて見よウ心ざし有かたよりの【女郎】まだいひなんすか（といふて上へのツかゝりおさへる）【客】コレ手がおれやうにあぶないよ【嶋之助】（ふらき浅黄ちりめんほそ帯にて来る）おむつどの段でござりんすか【客】只今おねむどの

さい中でござりんす【女郎】嶋之助さんお出なんし【客】お風かさッきにのちにこようと有ッたからお出をお待申て如此サ【嶋】ソレハマア【客】さッきにおかしなふミをひらふて大いざサ【女郎】ソレいひなんしたらきゝんしないにへ【客】ゆるしてとらせようおまへには此ごろそッと云ッてきかしやうコレ見なさい此やうにつめられた【嶋】花紫さん氣がよわひわッちならもッときついめに【客】ソリヤアかとうどが出來た【嶋】花紫さんアノむかふの染川さんが何やらわるい事しなんしてやり手衆にはだかにせられてしばられなんしたハナ【女郎】ソリヤほんにかへ【客】アレいつでも人のいふ事をうそだとおもッて【女郎】チトだまりなんせソシテソリヤいつへ【嶋】今のとサ【客】表へはだしでとんで出るとたれでも共通リよいきミだ【女郎】嶋之助さんアノ尤らしい顏見なんせ【客】ソレデモ物の入ッてある長持と間夫のない女郎とハないものだ【嶋】となりやむかふこそしだらくなれわッちらの内のようにかたい内ハ【客】ヲットいふまいソレおまへの鼻の兩わきに格子のあとがついて有【女郎】よくまわる口だ【客】目でなくて仕合サ【嶋】ヲイラが山さんもよくいひなんすぞ今夜どふして見へぬやら【客】コレいじッて見なさい足とこんぜうと鼻のさきと一トッにつめたいさッきに石をなげたがたしかにあいづであらふ【女郎】モウいひなんすなおかミんすうそばッかりいひなんす【嶋】其ゆうさ

んさッきのをれなんだいッてきかせなんし【客】いわふか（トいふて女郎の顔を見る）【女郎】かッてにしなんし【客】女ほうどもが顔御らうじ三味せんにふり袖のさはッたよふにぴんとしてしり目で人をにらミ付ケてアノ髪のぴうとした所あたい千金なり【女郎】まだいひなんすかしつこいがナ（といふてかむ）【客】ヲイタ〳〵コリヤあづきをつけねばならぬヲリャいたくても大事ないがそッちのおはぐろがはげやしないか【女郎】ばからしいわナヨイ〳〵しかたが有鴫之助さん手つだッてくれなんしッレそちらの手を持なんしナ【客】ヲ、、こそぐつたいはなせ〳〵古る〳〵とおがむ〳〵扨ミじゆつないこッたいきつぎに一盃（いっぱい）のもウ此やうに夜をふかして其上もちあそびにされてあすの身がたまらぬ【嶋】モウおやすミなんせわッちもみひとつかいてねよ【女郎】マアエイハナあそびなんせ【客】どふあッてもおかへりかッンナラわざとたちませぬ【嶋】おさらばエ行く【女郎】（小用に立チかへりてたばこすいつけゆする）【客】（半ぶんねたよなこゑして）ム、、、（といふてにやつく）【女郎】コレねなすかおきなんしョヲ、酒くさ【客】ナンダ酒くさい水くさいにはましであらふが【女郎】さッきのやうにいひなんしたから今夜はねさしやしない此足もちッとそッちへやりなんせねなんしたか鴫之助様（さん）の座敷へいてねなんしナ【客】ヲットしたり（といふておき上る）【女郎】（おさへて）サアいて見なんせ〳〵（と足で足をはさんでいひかゝる本くぜつのはじまりりんきからとつよく又むつ言有うれい有りてないつわらツつに時うつり浅の鐘車むねにこたへておきあがり）【女郎】まあちッといなんし【客】コウトコウダによッて

けふは大ぶ用があるむかいハまだか【茶や】まだおはやうござりますが【客】かごハよしか
【茶】ハイさんじました夜前あれから越前やへさんじまして夜通しでござります【女郎】あに
さん一ツふくあがりんせぬしや此ごろ芝居へつれていことといひなんすたましなんすナヘ【客】
ナニうそをいふものだ【女郎】あにさんせうこゝへおとよさんもやりもしなんせ【茶】あれよ
りわたくしがおともいたします【客】のこらすサ【女郎】ぬしやさむかござんしんか【客】さ
むいとも〳〵【女郎】コレ下へきて行なんせ とねまきの上へぎぬいできせる【客】すそたくり上ケてきる【茶】もしおたばこ入
【客】よし〳〵 といふてはしごをおりる クワラ〳〵【客】テモきつい霜だ【茶】今日もおひよりでござりま
す【客】アレハたれだ【客】アレハ巴屋の岩こす①でござります【客】きついとすごし といふて跡を見る【喜
【女郎】かたぼでわらふ【茶】コリヤ其きゆう①のおかへりなさッたぞよ【内】おはやうござりました【喜
介】さかづきもちいづる同じあいさつ【客】あさ酒よかろ【女郎】ゆふべすごしなんしたにモウのミなんすナ【客】
イヤ〳〵かへッて色のわるいはよくないヨットある【茶】おさむいにお一ツ【内】花紫①とうふ
おあがりなされませ【女郎】アイわッちやモウたべんすまい【客】サアモウとれ〳〵 すぐにたつ
【内】わきざしもちて是ハおせわしないさやうなら明ばんおいであそばせ【客】ホンニ柴木にすゝきの
かんざしねだられた一ツほんあつらへてたも といひ〳〵出る ヒヤア大ぜいつけているハおそろしや

〱【若者】アレバ鶴屋のでござります【客】たのんでうら道から出してもらへバよいに【茶】エ、さやうな事ハなりませぬ【客】なるてやく〱【女郎】モシエあすのばんきなんし【客】フウ大門へ出る かごへのりしなにあとを見る【茶若二人】さよなら御きげんよォ【客】かごの内から太義〱【茶】コレかごの衆聲してやらッしやれ【女郎】これから間夫に行【茶】かへろヤレ〱よくのむぞ【内】ゆふべもイッツ松葉屋へ行たがつて【茶】ナニ中三がはにあふものかコリヤ喜助金屋のがかへられたら肴ハ梅ぼしとたこ斗でゐいぞ【内】ソレデモ三度に一度は水ぞうすいでも【茶】わるいくせになッて今さらチヨイ

掃臭夜話

【夜たか】巾〱【客で〆の熊】手ぬぐいほうかむりひより下駄きせろこしにさして なァまァいだァんぶ引〱【よ】熊さんか【客】ヲ、はやく出たナエ、この犬めハいま〱しい ト下太でくへん【よ】ゆふべハどふしなさッた外にゐいのができたか【客】ナニサことよふとおもッたがアノじやんこめがふぐ喰にあいべといひやがッたから内にねたァはなしのよふなこッた【よ】ソリヤおきのどくやはいのあたま【客】なんのこッたイばかッつらな【よ】チヨットへゝりねへ【客】けエりによるべエ【よ】

今夜はお月⊂がよくさへさしやッたおめへのけふの髪ハ高くゆひなさッたノ【客】ヲ、サあいつはへただわィ【よ】ドレ手ぬぐい買なさッたか【客】ヲ、三升ゥが紋がついてあるコリヤ見ろ此下駄もかッたァ【よ】いつものよりや脊が高いよふだ【客】木がゑェツィそのかわりにそくがれんたァ【よ】おらがのもまいばん本所からこゝ迄くるのだからはやくへるぞ【客】イヤ下駄でおもひ出したァノお六めに兵藏めが下駄で首だけほれやがッた【よ】そうだとサ【客】おらもあいつハゑゝぞ【よ】ハアヽ ソリヤ アノだァがよ【客】あごたゝきやァがると鼻ッぱしらちりけへたゝき出すぞ【よ】ソリヤソウト共むしろの上の物取ッてくれねへ【客】何を【よ】土平をハ、、、、【客】くそくらへ【よ】むまくもない物【客】アレアノ北のほうから義太夫うなッてきやがるハだれだァ、宗八めだヮィ宗八やァい〳〵【よ】ナニサあれじやないマット背がひくいはづだ【客】材木の影で見へない。うしやがッたらさきへいッたといッてくれろ【よ】どこへ行なさる【客】清三けづりに【よ】はやくかへりなさい【客】歌いさいかまわずいさらごヲのヲ行きる【あべの宗八】跡より熊やァい〳〵【熊】あばかァいはやくこいなによしているぞいゆでばすのかぎにかゝッたやうに【宗】あすのばんナおときめが所に會が有ルヮィ聞にあいべ【熊】ヲ、新八もさそへ【宗】コリヤ此まとひ見ろ持にくそふだナ【熊】ホンニゆふべナ清助めが角

トの酒屋で何やら立テ引しやがッたそふだワイ【宗】ナンダ立引だコリヤもゝ引が聞イてあきれるワイあいつも此ごろ仕合がわるいかしてげへにさぶそうだナ【熊】サア來たがワリヤ錢があるかイ【宗】イムニヤ今夜はないわい【熊】おらもよ【二人】コリヤ又なんのコッたいま〳〵しい　といふてもとの所へ

同似名字辨

粹也者。推也。推量人情。而不强之耳。聖人謂之恕。其實一也。廼終世可行者。不啻以知煙花之趣言。雖然。能達士妓歌妓龍陽俳優之情。而後擴充之。則於接人之間。思過半矣。夫煙花寨之趣。變態靡常。古之所謂大夫子衾匱何時而來。照提燈即至之語。忽變爲檐夫問諸侯之行李之言。以今世茶紫藤色伊達紋。奪渾身模樣之服。爭媚深紅布褌。却減價桔梗錦紉。歌妓之三絃外僕者。時代合歡枕。木偶劇場。姤十泉兒劇之勢。猶不及婦脊相撲之觀矣。熟察世態電光石火之歎。良有故哉。求推之道。豈不夙夜乎。於是擧一隅以示野人木訥。庶幾先

識風月之趣。終成雅恕之徳。如夫助六椀久之粋。何足取。小心莫感云。

己丑夏五月

史曾徳齋序

早粋の辭

夫粋といふ辭ハ遊里にのミかぎるべからず貴賤尊卑にかゝはらず萬端の事や渉りて其所に臨ミそれ〳〵の粋をつかふ事なるを花街にのミ入込で其徒ばかり一ッはいにするを粋じやとおとしつけたるもおかし春ハ庭前の華に遅日を忘れ短夜のほとゝぎすもあながちに聞んとにもあらず月にむかひ雪にこもりて埋火のもとに居ぐまりて一寸外を見ぬ人にでも風流に心をそむれハ是に極上の粋有と知るべし一槩に心得るハ則すいならぬ證しぞかし聖人の世とよく推うつるといはせ給ふか推の胴骨只人に廣くつきあひて人情をしりこなれたる人を以て粋と云說文ニ日粋ハ不レ雜又粋精ともつゞきてものゝよくいたつたといふ義又推とかくも可又知趣と書てスイと訓も可いつれぬけめなく角なく水の器にしたがふやうなれハ水と書も可なるべし此内にいろ〳〵の流義有て色里に小兒の時から育て時〳〵のはやり詞ハ一番かけにとつております其外人のしらぬ密事までをしりぬいてゐて其中に粋も有野暮も有是らハ必竟耳學文といふものにて粋の階波をへたると云ものにハなく極の所ハやぼにちかし又近曾色里へ入こんでかけあん灯の家名覺へて女郎にも四五人祝義み書てやるほとの近付か出來亡八の息子送迎の男とも念比になる

とはや粋に成た胸算用あらゆる人とちかつきになり付合の顔で芝居へ錢なしにはいり初日の棧敷にちかづき自慢是ハお丁しりとてしろとだましの粋なりしかし是より段ゝ磨上て極上の粋にも成事なれハ一旦ハ此悪穴におつるともゆるすへき歟早く此所を見きりて本の粋のなす所を學ぶへしおなしくハ金銀をつかい席をかさねて學ひたる粋ハ一生此わる穴へはまらす上品の粋となる事なれハ前にいふ所のけい古形を随分目のいかぬ様にすへし風花月雪に身を托る人ハ此趣を知らてハ活ても死てもハさら也さらハ其粋に成様ハと云に遲牛のたとへハいするにてめい〱持て生れた發明の外に早すいの辨有

先すいに成ふと思ハゝ遊所の風俗人の氣風を考ふへし京ハ嶋原川東大坂にてハ新町道頓堀北の新地其外所ゝ方ゝに色町あれとも就中祇園まち道頓堀仕込のすいよろし嶋の内縄手しはの側惣而此邊にて遣ひ覺へしすいハ所ゝのいろさといつかたへ行ても少しづゝの違ひあれ共大槩おし渡り間に合ふ也先自身の生質にかゝハるべからす内まちでちと能男じやと云れすこしおなごにめくゝのうけがよいと素人氣にハサアしてやつたとそれを賴にねばりけを付るハすいにもたたれ有て見ぐるしおなしくハ少おかしみ有て付合おもしろくしさいげなくさらりと見へる方がよしなれとも是を取ちかへて悪口云にならぬやうに身の取廻し肝要なり

扨髪の結やういろ〳〵有其人〻の風に應し好にしたがいよく似合ふを取合せ第一なり月代を延すもふるし毎日髪にてきつは過たるもとふやらそれにくゝられた樣にて見苦し二日めの髮か地向の推の只中也

衣裳ハ當世外いろはやれともつまる所ハ黒かよしその外いろ〳〵物ずくべし紋ハ壹寸五分ゟ二寸迠思ひよりに付へしいかふかハつた紋ハよろしからず嶌るいハあれこれと着るへし小紋ハ白分ごりミの形ならでハ無用也折節ハよき小紋のはやらぬ先を心がけて染さすへし裏いおもての取合見はからひ第一也袖口の江戸括も目にしミたり羽織もいかう長きハ惡しおもハく方短かく五所紋脇指も一尺より上ハ指すべからすお師匠樣のやうにてわるし次に上下の着ふり工夫すへし扇子ハ常の拾本骨十二立がよし壹尺二三寸から上の大扇子貴嶺扇此二品は必〳〵もたぬがよし第一家業渡世の勤を大事にかけるんつうを身分相應に遣ひ顏をよくして茶屋うけよく何處でも人がいやがらす儉約ともなしに萬事を七分めにして置へし家業しまりかたの間に親おや方の機嫌を考少にても暇あらハ毎日〳〵川東江南へ出かけへしから風呂もゆかでハならぬ所なりいろ〳〵の推の集る所故すいの上達も早しおのづから芝居はなしもしろ人の評判とハ違ふてけふハ藤八がふらうけじや來子ハかハいそふに正面むいて狂言する誰か絕句してとちつたにちよつ

とした事も委しうしれ今の客か北の今池しやあの中居がいろ事で髪きられた何屋の誰しやァノけいこか此間清水の南蔵院の大きな貝て二ッ呑だッレァレが役者の誰やらに櫛もろふた女郎じやと針て突た程の事も委へのうつりはやく嶋の内ての嶋のうち也

坐敷ハ遊ひ様いろ／＼有へし余りさハがしからす全躰の所を落付て藝子中居にも是春のさん一ッ呑んせん歟おといどんあいしておくれと人の腹立ぬやうに悪口も云覚へ口合も折を見合せ間だ／＼にハ云もよし

坐頭ハたれでも和尚／＼と一トきハよく會釋てなま覚なるはうた所まだらに付て同音に諷ふべからす随分勝手へ行ぬやうにして宵から戻る迄座敷で遊ひとをすべし

日柄は云かけしだい買ふへしそれも女郎とうなつき合表向ハ身揚りにして内證てかねをやりはねたけ助かる仕様是すいの極下品也又引したいと思ふ女郎に毒吹こんで茶屋の亭主にもかくし親里へ手を廻してちか付になり給銀の日勘定して親にひまもらハす事極との悪事にていろ柄にきるものゝ風上にもおくべからするゑてハ兄と云ものがわるふて大きな壺をかつくものや又さのミ名もしれぬふしをこしおしにしてせりふしかけても親方かこがしこいとけつく表向のひまもらふより金銀たんと出して人に笑ハるゝ事多しすへて女郎の親にちかつきにならぬもの也なる

からハきつとてなけれハあほうらしき事の第一なり
逢方女郎に馴染深くともおき屋の内へ行へからす遊ひにいて酒なと呑を推しや心得違へたる人有しく／＼氣を付てわきまへたまへ節ゝ御見廻しおや方の心底又逢方の心根もいやなるへしかやうの事必／＼すへからす
かね付補詰前帯我してやるハ猶の事逢方ならぬ女郎藝子云かけ次第に引へからすいつれとも深切に世話やくべし
太鼓持もなくてかなハぬもの也是も是非にめしよすべし併腹のちと小寂しい時ハびつくりする様な聲て譯のしれぬ物まねはやり哥こちへ通せぬ落しはなし或ハねち上戸何ぞあつちにもてぬ事の有にまかせのめ共云ぬ酒をふらすへに入しめ知りもせぬだんなへすまぬとやとの亭主つかまへての利屈喧嘩此類ハ用捨有へしちとめいつた様でも腰元にやとハれて來たやうながまし也
拳ハつよきがよし
若衆も絕す呼べしあれこれ付合ふが推也祇園新地坂まちのよせやへ中居壹人つれていて子供さん見せましておくれと云と二階から松はやしのはて口見る様にぐれた／＼下りてくるとぎつはな男が來てした燭臺に火とほしてかい長のゑときてもないやうにお名を申上ます嵐那智八分花

桐小ぬすゐ坂東穴治ゐ淺尾かゆ藏ゐと名を云れるものがひとりつゝじぎして一通りミて仕廻ふてマァ一ッ遍中ます穴治ゐかゆ藏ゐと名苗いれすに名斗云て仕舞と何じややら口のうちで云て一ッ時にじぎしてはいる其外ぶたい子名高い太夫達ハ猶以おやまとハ違ふて別におもしろき所有てつき合のもてる事云はかりなし若衆の氣にハ曾てしらぬ事なれど自然と勇氣つよく少しももたれけなくうつり替りゆく事はやくちと年を重ねてなじんて居ると暫の間に極上の女形あるハ立役いろ事仕又ハおそろしげなる敵やくと皆〳〵一ッ廉の立ものと成て過し咄も一ト入面白くすこしも着するいろなくいつ迄も懇意たへずいさぎよきと此上なしかく屋はいりも折にふれてよし其時にのはミ少しもしまつけなく酒肴餅菓子饅すつほんの類連中座中の好に應しふらに立へし顔見せの間ハかくやのと也

女郎けいこ若衆中居牽頭其外たれにもせよものをくれいと云時いやと云ぬものなり何によらずやるべしやつた跡で恩にきせぬものなり纔の物て人なかて禮をいハし禮の云やうがおそいと腹立る事きつうわるし又たれにもせよ維方からハ隨分遠慮していわぬもの也

扨いろ事に成てハ口先の迯はしりせりふのしこなしいろ〳〵有中ゝ筆帋に盡しかたし是ハめい〳〵のきやうふきやうで少つゝ違有二三度四五度にて大槩の事ハゆくもの也第一送迎僕をよく

こまつけ手に入て少しつゝ心を付てそたて尻がわれても亡八の親方がなつとくする樣にして女郎のなぐさミに成ておもしろがる工夫こんたん此上なし新地宮川町坂町さかまちから其外此邊にすいの寄合ふ所軒をならへて榮有此所へつかり込てゆだんなくはげむべし其内茶屋の坐敷て學文ばなし和哥連俳茶の湯香道亂舞の咄とんと推のせぬ事也そのミよふしつたでもなけれと何かな女郎へいろ取の便りにしりもせぬ太鼓中居をつかまへて昨日の本法寺前の茶の湯に合客か茶碗取落したとおかしがり伏見の小二郎が月次の香會で川中錢□手跡の記錄を取て來た手から咄しきりとハとつとし中でも氣の毒なハちとなろふたやうせん流ねからむでな茶屋の亭主つかまへて絹かづき浪まくらゑりメ醉まきれに燭臺冷し物鉢ひつくり返し坐敷中ハ大水立騷で興をさましそめきに歩行ておやまへ馳走ス弱そふなものをなげて見せるの是もまへ方から云てやれハ百貫百五拾て同しぞめきの樣にして心よふなげられるものゝ有何にもせよ此るいハ無用也神事の日ハ隨分見世にて遊びたしならべる顏に撰やう有へし重箱のたいこハしハらくもたしてなんぞ俄せぬかと云てひまをやるへし何はいろてあろふとおのれも同士にわか一ッで其夜の客何軒へも云譯がたつ也扨俄しもふて大事の客とつとめよい所へハ是非しるものぞ其つとめよいと云客ハ則粋也又自身てニワカする事興によりてあれと大かたハせぬかよしに蠟燭さとう水俄

師どもに唯かけられた時手つがいよく用意さすへしどのやうなわるい儀でも譽て損なしわる口ハ獫花種かたく嗜むへし天神まつりの舟ハ毎年／＼かゝさぬもよし舟顔といふもの名ちかつきのはれぶたい也儀はやしの舟も一とせハ出すべし芝居見物ハ惣けいこ初日をぬいて二日めと見かへし見物にいた折〻かく屋へ遊ひに行のとハ別にすべし棧敷へぐろとのあれこれくるハかへつて素人らしく女郎を連たしハおとなしく行儀に見るへし諸人目を付てはれかましきもの也

逢方ハ勿論げいこ中居やとの嬶がおだてゝ東山祇園の桝屋西照庵いなりの丸庄なとへ行事有儀に云出して茶屋から行時は亭主牽頭供の男とつれへし又前日からの約束で皆先へいて居ると内から別に行時ハ心の逢ふた連中心やすい口入のもの氣立のよい粋て酒が過てもめれんにならぬ人を見立て連れだち行へし扨遊ふ時いつれハあれと所はなれたれハ猶以坐敷付はれ也共となり座敷は大かたいセ講又ハ中間の參會いろ／＼の衆中の寄集り酢のものがどふてものめるちと御盃を御頂戴を仕ませふと常〻心やすい者としても氣が改まつての切口上中てもすいがるやつが罷出候のあなたにしやミのね色が致しますミな様今日ハおさやし被成ませ御ちそうにとなりへかミ長を申付ましたハお定り唄も一手ちがふて扨米ハ下りませぬ姿も大がい七ぶにハなれま

したと申ます曲馬がいかふはねましたよふのりますな二條の人ころしハ眞如堂のはら切を取組で芝居三間ながらいたします菊五郎ハどふでも上手でこさります嶋原のすもふ方堀江のけいきかよこさりますイヤそれ方ハおなことざとうのすもふてんしよがはやるによつて半めくらじやと云て當りましたほんにいかさま珍らしい女かこけるとどこやらが見へるげにごさりますと云へば傍な親父か厚焼の玉子喰〱一ヤモウ何ほ見へてもわしちるよふに成てからハ見たい事ハごさりませぬモァ十年若いと女の時一はん飛入に出ますけれとかんしんのれこさがやく立ませぬとへしてもない事にとよミつくつて大笑扨西國の方へ唐木と植木を積て下りますか何になる事しや存ませぬハァ上から何源西とやら云茶人が石を持なをしにくたかられたとやら申ますと珍らし新向ひすからあたまがはげて銅の山にひとしきおやちが其源西とハおなこの事しやこさりませぬかと悪なやりそれからとし寄のいしやがはてさてやかましい口が過るたまつてこさんせもおかしこちらにハおやぢどしか物すりこ木ハよふへるものてこさりますアノへるのを京大坂で積りますと二間の丸太が一日に何本つゝやら費ます□去御大名のかゝへの算術者か云れたけにこさりますとめつた籔からすりこ木嗤し臍の上てハ飯のお盛向がハから八兵へ様ハどこにごさるやら見へませぬいかさま北山ハきつい大噂でごさりますと大かた極たせりふの多人數是

非覗れしれた事必ゞ口論すべからすさらりと遊て持つていたもの失れぬ様にふけぬうちに茶屋迄はやく戻るへし道の用心大事也茶屋町の外はなれて女と手を引合ふてあるくべからす下河原鳥打前坂町うらの入口かられいかやうな手はなした事もかまれす其外中山石山住吉さかの類ちとはなれた所へ女郎若衆同道多くれ無用の方也願參りじやの何のかのとまいらされならぬしきならねミた參らして行ぬかよし船へ連れて行れ不苦是も隨分怪我なきやう用心肝要也船頭に酒のますへからすふねれつまるものなれれ内より少やかましく賑やかに遊ふへし船れさいき第一なり併一盃きけんて稽古もない水練自漫深い所へゆくべからす川中で茶碗の破踏立ても遊ひの興つきる也肝でやり付ふと思ふても水はかりれいかぬ也

町かたの推れ人付合よく京大坂へも兩月に一二度れ往來して人の風俗をよくのミ込網船鳥さしも困らすに折ふしいて芝居見せものゝ噺も些虚言まじりにおもしろふ云て何によらすはやいか粋の功者也夂是を取ちかへていやミに落る場ありちと斗文宗有ていかミ形りに詩も作り大きな机の上に大硯唐筆から墨の外に古梅園か鳳凰形よめてもよめいでももめんの袂に入た唐本なられいでも石摺二三帖聯壹二枚其外墨架研屏文房にかさり立唐画の掛ものよせ張の衝立折釘に佛子十八の珠數石印もちと彫てあたまの上に隱元燈籠くわん鐘を釣そはれ手打の外くれす饂れど

こが能やくすつほんれ誰が所がやれらかなと喰覺しつほく棚鍋料理で人をよび山水の岩やら人物やらしれぬ所が面白とゐこぜぬものをめつたがきにかきちらし唐紙半切布目の有京漉に龍形抑た卷紙ての文通ないもせぬのにかん積じやとべしてもない事にはらを立すもふ取も名乘を云すに政右衛門吉兵衞と云てなんても知た顏てくろがるれすいにあらすいやす也よく／＼すいをはけミて此場へいたらぬやうに心かけ大事なり

何んてもすいれ云いさかいせす知て居なから喰ふたやうな顏して向ふのやつをはめて引をとらぬを本のすいと云也遊所れべ而作て遊べぬとおもしろからす女郎にも茶屋にもだまされて遊ふかよし又さしたおさへたの盃もかぶらすひとりばミして無禮た女郎一坐のものを打込をよしと心得我ひとりがすい顏にやかましくめつたにすいがるれ世上一通りの半すいにていれゞ上からゐのはしりたると云もいにて中通りのすい也利根過てすゝどく見へるれ殊之外嫌也

一女郎へ文の取やりも半切の□をたんと明て節句の鑓長刀ならべたやうな俗樣れよろしからす上代やら瀧本やら唐やらの類よろし

○はうたの作りやう

何なりとも思ひ付にたよりて人の耳なれぬ戀哥發句を臺にしてはいかい水鏡と云季よせから時よのきを引出して其上へはやる小いやらしいとはを一ッ二ッ入て短く作れハ其儘端うたに成也法師に手を付させて摺物を配り哥ひらきをすへし

○坐敷のさハぎ

所作事ハ吾妻藏右衛門を呼にやれハ大かい何でも出來る也すいぶんあてけなくめつたやたらに稽古すへし哥舞妓ハ身の取廻しに氣を付せりふたしかに見物へ尻むけぬやうに目を明て爰を大事と狂言すへし此内にもいろどる事ハきつうせぬ事也立て中かへりぎハの類ハあまりすいのせぬ事也又人形ハ遊ひ連中云合せ。おも左。是何でも廻つてはたらきよくと悪しくと大かい二三番つかハるれハよし

○すいのせさる事 幷ニとは禁物

廿四日五日に天神参りして表の小山道ニ朝からこしかけて居るの　　それもたゝハ不苦打て置しやんく

黒い侶のつきんてなかしあるくの
おしろいせいたい
匂袋
日傘
三枚重の草履
女郎の引合した茶屋
能の場で羽織をこしに卷脇指のこじりをひんと上て行かいても大事ない疊へいて酒のんてそめく事
おなこの往來を行過して跡ふり返りなかめる事
おなしく行ちかいによしあしの評判してねちひく事
はやる神佛へ日參或ハ見へに精進
夏斷珠數ざんまい
惣してものを直打し銀めを云て人の所持のも（　）を譽る事
初て逢ふた藝子の三弦を遠慮なしに彈く事

おものをめつたにめつらしがる事
但 時により客ぶりにもよるへし
あぢやらにも人を打込様な詞付
むりに酒をのまそとする事
居續　朝ざけ
但 雪の節ハ格別
吸ものが出るとかさへめしと云ハぬもの
となりの客へふすまごしもの云へからす
ちかづきてもない客と坐敷を一ッにして遊ハぬもの
ちかつきでも内からの連れでなけれハ無用
連中の逢かたとじやら〳〵してきミ合をつける事深ざれに人をなふりいやがる事をひつかふ云事
此外あけてかそへがたし荒増かやうの類なり余ハなぞらへしるへし

女郎の云事に極たせりふ有是にはまらぬ心得

○おまへ程なすいが
○ふすいな顔して
○よそへ行とむしやくしやする
○内でおまへ何していじや
○顔見るとものがいハれぬ
○夕ァの客がかハい男が有かと云おつた心の内でおかしかつた
○内でもよつておだてゝじや
○おまへをのいた夢見てしんきてならぬ
○一チ念ハどこへ行かふもしれぬぞへ
○母ごへ大事なかつきんが上たい
○ちとやいともすへいナァ
○おまへの噺かでるとミなわしがひざをつきじやわいナァ
○あまりさい〱おいてな
○おまへの守り本尊ハ何かじや精進する

○その様に酒のミないナア
○内ではよふこふしてねたい
○ぜんたいのミこんていて
○おまへひとりの身かへ
右之外共女郎のくせによつて少ッヽの違あれ共大がい如此心得でだまされぬがよし

▲新町邊の法師

○おのむら　○はるき　○紋市

▲南　邊

○とよか　○きく嶌　○ひろはし
○梅市　○とよ市　○ミね市
○きよ市　○たみ市　○くめ市

▲北　邊

○八重はし　○玉おか　○なお崎
○あやさき　○三わ市　○松市
○さと市　○いさ市　○佐の市
○くめその

右次第　所目

役者のかへ名

吉右衛門	獅子丸(しゝく) お十トキ	花妻	其原(きげん)
三五郎	來子(といし)	四郎三	南雅(なんが)
あやめ	一鳳(いつぽう)	新九郎	一蝶(いつてふ)
為十郎	置山(おきやま)	富十郎	慶子(けいし)
菊五郎	梅幸(ばいかう)	他人	田鶴(たづる)
雛助	珉芝(みんし)	彦四郎	可慶(かけい)
八藏	八甫(はつぽ) 蕊八	豊三郎	東朝(とうてう)

久米太郎	鯉長	紋太郎	里桃
大五郎	一光（淸兵衛）	菊八	和夕
金作	里虹	此兵衛	萬福
八百藏	東知	山十郎	紫浪
松代	渡江	又藏	狐十
文七	由男	大吉	讃多
新七	布雀	助五郎	志山
吉太郎	英子	金妻	睦友
門三郎	狐洞	野しほ	袖歌
三右衛門	紫朝	半三郎	茶谷
久米助	里聲	友右衛門	道樂
滿藏	鬼丸	吉三郎	里環
來助	舍柳	喜代三郎	花曉
國太郎	其答	十藏	虎宥

儀左衛門	鳳虎	京右衛門	如柳
七五郎	舎丸	岩五郎	岩子
團十郎	三升	菊之丞	路考
團藏	市紅	羽左衛門	家橘
崎之助	春水	駒藏	錦考
歌右衛門	嘉七	廣次	十丁
宗重郎	訥子	三八	平久
八百藏	定花	半五郎	杉暁
幸四郎	男女川	藤藏	園枝
傳九郎	舞鶴	音八	和考
七三郎	少長	助五郎	魚樂
松江	李江		

上るり太夫内名　町名を云てもよし

間似合早粋

駒	彌三郎	生駒	藤右衛門
嶋	平右衛門	君	嘉七
春	與兵衛	政	利兵衛
組	作次郎	梶	幸七
綱	嘉助	三津	八兵衛
染	源七	咲	三右衛門
彦	九郎兵衛	此	佐吉
鐘	次郎兵衛	時	五郎兵衛
木々	徳右衛門	百合	庄次郎
八重	平兵衛	住	文藏

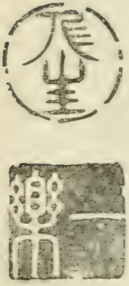
右荒増を書付る也此外せんぼう所ゝのかへとは合詞など
あれ共いやゝに墜れハ是をもらしぬ粋ハ濱の眞砂にて筆
紙につくしかたしといへ共あらまし右に云所ハ初學早粋
の最用也心を練意を用ひて法を方寸の裏に採術を雲外に
飛べし此外に若陰居の弊風妄宅の用捨一二の辞あり追て
校して刊すへし

遊子書之

遊子方言叙

花之美多則多矣不若花街花之美且情桃李雖然美不言不語牡丹海棠雖然艶不笑不歌此花也不唯能言語笑歌其色一過目則奪精蕩魂其香一觸鼻則飛心斷腸加旃霜露不凋風雨不摧取之無禁用之不盡春秋晝夜莫不芳菲奚爲與艸木花同榮枯哉艸木花猶且賞之況於此花乎北州之遊嗚呼樂夫因以序

田舎老人多田爺謹書



目録

發端　附り友の出會。舟の中。堀の様子。土手。大門口。
中の町
夜のけしき
宵の程
更ての体
しのゝめのころ

畢

發端

小春のころ柳ばしで三十四五の男。すこしあたまのはげた。大本多大びたい。八端がけと見へる羽織に。幅の細き嶋の帯むなだかに。細身のわきざし柄まへ少しよごれ。黒羽二重の紋際もちとよごれし小袖。ある着ハ小紋無垢の。片袖ちがひのやうに見へ。いろのさめた緋縮緬のじゆばん。はきにくそふな。幅びろのひく下駄。やゝまおか頭巾かた手に持。鼻紙袋ハなしと見へ。小菊の四ッ折すこし出しかけ。我より外に色男ハなしと。高慢にあたりを。きろ〳〵と見まハして。あてどなしにぶら〳〵と行むかふより。二十才ばかりの人柄よき柔和そふな子息。わきざし立派に黒縮緬の綿入羽織。五ッ紋しろ〳〵と。丹後嶋の小袖。した着ハ御納戸茶縮緬の雨めん。琥珀じまの袴。なかぬき草履をはき。供にかるきの風呂敷づゝみと生花をもたせ扇子かざして來る

【通り者】これ〳〵色男〳〵【むすこ】いやこれハどふでござります此間先生と御噂申ました【通り者】先生ハさへぬハ〳〵おまへどこへ行なさる【むすこ】私ハ本所邊へまいります【通り者】行ねバならぬ事か何しに行ッしやる【むすこ】伯父きい。病氣でおりまして。見舞にさん

じます【通り者】伯父病氣ならべ。ぐつとながしたいわい【むすこ】なぜでござります【通り者】あんまり。つがもない。よい天氣じやによつて。正燈寺とくらわせよふとおもふ【むすこ】なるほど私も正燈寺ぁハ参りたう御ざりますが。行て來て本所へ参られませうか【通り者】行れます〳〵。そして。本所ハ大流に。ながしてもよしさ【むすこ】何にもせよ参りましよ【通り者】そんならぐつと。供を歸しがよかろぉあれが行たとても。紅葉がおもしろくも。なんともないわさ。これよりハ。内へ歸つてゐた方がらくだ。角平なすとんだ通り者かこれ色男はかまを〳〵【供角平】それとも御用がござらべ。参りましよふか【むすこ】いゃ行すともゑい歸つて。いをうにハ。あなたに道で御目にかゝつて御同道中正燈寺へまいるによつて角平をべ歸しますかならず御あんじ被成ますな【供】かへる【通り者】あゝゑい。これで大きにゑい。舩中にてだん〳〵。つもる物がたりがあるおしい色男が。埋木となるによつて。だん〳〵おれが。傳授で。善二坊のやうな色男を。揚卷の助六がやうに。つくり直さにや。ならぬことハ。みんなが乘伊豆屋といふ舟宿だ。毎日おれも乘所だ。こつから。のろぉかみさん猪牙舟。ちよつきり。ぐるづくり。はやく出しとしたいわい【舟宿の女房】はいお出なされませ。猪牙舟ハござりますが。も一艘なんとやら。おつしやるふねが。ござりませぬ【通り者】いやさ猪牙

舟ばかりてよしさ【女房】どつち迄で。こさります【通り者】どことれどふだ。堀さ〲【女房】（かしへいづる船頭ハ今かへりて。やすもふとおもふて舟をかしへ付てゐる）【女房】これ五郎どん太ぎながらも一艘こいで下されよよ これさどふぞ。さしつたか【五郎】どふも仕やせんが。はらが。へり。やした。はらも。へるはづで。ござりやす。松さきへ上下を二どこゐで。堀ゐも二はい。あけて。來やんした【女房】そんなら茶づけ一ぱい。かきこんで。はやく行てください。いそがつしやる【通り者むすこ二人】（舟宿のこせよりもふ舟へできたかと。くわへきせるにていづる）【女房】（きのどくそふなかを）ちと。おまちぃ被成て。くだされませ船頭が。そんな出はらいまして。よう〲只今かへりました船頭が參りますが。大ぶ。はらが。へつたと申て茶漬を。たべて參ります【通り者】そりや。とんだ事ッた【女房】さやうで御座りますけれど。汐時がよう御座りますから舟ハ。たちまちで御ざります【通り者】そんならま一ぷくのこましよ〇（といふ。て待うちに。まへの河岸へおどり子二三人のりたる。やね舟がつき。男三四人あかれバ。通り者ハたはこの。のこやうに。おもいれありて。其ふねから。あがる人ハ。こなしつた顔のやうな。見へをして吻をいひかけられた。こふた顔にてゐる其中に年ごろな。ぢゞいが。默禮して行）

【通り者】どいつもこんなおれがしらないやつだ。あん中にしつた顔なやつハ。たつた二人はッちやない【むすこ】今おまへに。じぎして。いッた。達者そふな。ぢゞいハ。折ふしこゝらで見る人じやが【通り者】あれハおれが久しい。ちかづきだやぼなぢゞいさ。ありや鎌地屋本次郎といふ。ぢゞいだ。跡のにた山。本多の。いきに見へる。やつハ翌助といふやつだ。あいつ

ハおれを。しつた顔して。いつたが。おら。つゐど。あッた事ない。兎角おらを。しつた顔したがる人のあがるを見るにつけても。はやく行たいどふだ○（河岸から）【舩頭】さあおめしなはりやせ○（二人へさあと。いふて舟に乗）【舩頭】舟をおし出ておくんなはりやせ○（女房二人をおく。ふねおしいだす）【女房】御きけんようおめし被成ませ○（舟へ大川へ出る）【舩頭】おたゐらにおめしなはりやせ【通り者】これ色男猪牙舟の乗やうから傳授しましやう猪牙舟といふものハ。あぐらをひッかき。うしろ江ひぢかけの。首うなたれの。たばこ。ぱく／＼とくらはせねば舟がこぎにくゐます舩頭がうれしがるこれ／＼此おかい。むかふがそれ身をする一瓢が内だいやかれこれゆッてゐるうちに。かんじんの相談をわすれた正燈寺へハ。しよせん行れないによ。貴様ほんに正燈寺へ行と。おもつていたか【むすこ】あい／＼正燈寺へハいかさまもふおそふ御座りましよ【通り者】さあ其事ッた。しよせん正燈寺とハ。かりの名。よし原へ。行ふといふかねてたくんだ腹だ。吉原へ行ッても。よからうが【むすこ】あいはやく歸りさへすればよう御座ります【通り者】行からにや。はやいの。おそいのと。いふこつちやない。おれと行といふと。堀ッてもはやく歸られぬ。やぼな。やつらと行ッたと。ちがつて格別おもしろい。其はづだ。吉原中の太鼓持ハもちろん。其外みんな轡の通り者や何かゞ。おれが行といふと來る。此中もきかつしやい來る者に事かゐて。釣瓶そばの。むすこま

で來てしやれる。こりや大ぶ舟がおそいの。やう〳〵首尾の松じやないかの【艪頭】首尾の松の。よつぽと跡に通り過やした【通り者】なるほど。よつぽと來たぁこゝの。此君山ぶしが河岸だ【むすこ】此君山ぶしとの。なんの事ッて御座ります【通り者】これに段〻。こうしやくの。ある事だ。吉原の男ぶりよりも肝胆がかんじんだといふ事がある。此河岸に八十ばかりになる。なで付があるが。これが此君と大きに色事だ。それゆへに此君が客の。ミんな。指無ぶつぱらッて。きれたほどの。こんたんしだそれを。おれがむかふへまわして。たび〳〵色事をしたがおれも。わるくすると。叶ない事がある。それに付ても。あつたら色男が。形や作りが。どふもさへぬ。吉原へはいる形じやないの。とかく吉原の黒仕立がよい。髮がとんだやぼたこどうぞちう五ぶほど。ねをあげて。はけさきを。すつと。ひつこきとしたい。額をこう多くの事ッちやないがちう五六ぶ。ぬきあげて。とふぞ形や何かを。ゐきに。さつしやい。そして。會へちッと。出るやうに。したい【むすこ】あい新交が會の時になりよと。まいりやした【通り者】新が會の時にや。おら行なんだ。すべて此ころの。通り者が會をながす。それでおれがせんども藏前の辨魚に川崎屋の雷同が所でミんなが。ゐたによつて辨魚に。そふ。ゆつた。是からの會をミんなが。流ないはづだ。何をいふも。ミんなが。せにのなひしよゐだ。錢がないといへ

べ。おれが丸角ぁあつらへて。おゐた。花かん袋がある。とんだ。ゐきな。きれだ。小はぜ斗貳分ほどに。當ッてゐる。きれハ。阿蘭陀のむしろをり貴様。見ると。ふるへ付ほどな。きれだ。おれが錢のある時に。あつらへて置た。丸角の亭主が。おれと心やすいによつて。いつでも亭主にあつて。あつらへる亭主も。じよさいハなけれど。いそがしゐによつて。とかく丸角ハ。ながい。されども十日ほどの内にこしらへて。やろうと。ゆッた。其内に皆無錢がなくなつたによつて。三十日ほどに成が。今に取にいかゝ貴さまいつそ。かわないか出來てゐようから【むすこ】そりゃどふぞ。私が買とう御座ります。どふぞおまへつれ立てゐッて。おくん被成ますまいか【通り者】ぁゝつれ立て。いこ〳〵貴様たばこ呑ゐないの【むすこ】ぁいさやうで御座ります。どふもたばこを。呑んハわるいもので御座ります。それで此間ずいぶんたばこ。のみならをうと存ます。たはこ入も。こしらへとう御座りますから。どふぞ。つれ立ッて御出被成て下されませ【通ッ者】たはこ入ハ堀安で見て置た。とんだいやよいさらさがある。それを。こしらへ。さつしやれ。堀安めもおれと一しよに行と。すとんだかけねハ。いゝゐないきせるハ。どふしても住吉屋がゐいによ。とんた能かたがある【むすこ】せんど折太夫に。あいやした。とんだ大そうなきせるを見やした。それに小田原町とやら新場の人とやら來てゐ

やした夫も。とんだ大そうなで御座りやした【通り者】折太夫といふハなんだ【むすこ】義太夫をかたる【通り者】ゥゥ なるほど ィャ おれがものずきハ。父ちがう。なんでも住吉屋をよんでまあ是からハ。なんでもおらが内へ來さつしやい。そつちへ手紙がやりたい事があつても。どふもやりにくい。若ゐ者を。そゝなかすやうで。名にしおふ。おれが事たから。どふもしにくゐ。貴様表とくがあるか【むすこ】あい どふぞ。おまへの字を取てお付被成てくだされませ【通り者】そんなら。おれが番町の番の字を取て番景とつけよ。後にや。おれがやうに。方〻から番景〳〵といふやうになろ。夫につゐて。はなしがある此中も中の町の松屋の見せで。おれが。どんで。きれゐな。形でもちろん。ふとぎせるで。たばこを呑でゐると。そのそばに浄瑠理をかたる東洲が來て。はなしてゐると。さる内の奥座敷の女郎が東洲にあだつゐたおれに。あだつきたい。けれど。おれにハ。おそれて居ておれハ。此くらゐな。うハ氣な。ものだと。いふ事を。しらせたがつて。何が色〳〵な事をして。其うへて東洲に。ぬしの名ハ。なんと。ゆッと。そつときゐて。すると東洲がぬしの名をおしりなんせんか。番町さんと申やすと。いふと。番町さんと。いゝたそふな顔で。つんとして。これに御出なんせへといふて。立てゐッた客が來たそふで。そこで。今夜そこの内へいつて新造かいとして。夜ふけ人しづまつ

て。其女郎が所へ。しのびこみの。くどかすとも。じきに。そふいふ調子だによつて。直に出來る。出來るといふと。しよての。新造に引かへて。三ッぶとんのうへ。ひそかに茶づッたり何かして。腹一ッぱいに女郎ぶちころしのしのゝめ。さつと明わたる時分まで。ゐて歸る。なんときつい色男の筋じやねいか。おらが吉原はみんなそふした事だ。これは埒のあかない舟だぞ。いや〳〵よう〳〵着そふな【船頭】どこへおあがりなさりやす【通り者】ほんにそふだ。け。一川屋には勿論かりおあり。吉野やの。きやつめは。うぬぼれで。いま〳〵し。どこにしよふなそれ〳〵此ごろ逢た。山本は。まだおれを大臣とおもつてゐる舟宿がある【船頭】どこへ。つけますゑ申【通り者】そんなら山本の。さん橋へつけろ【船頭】山本屋〳〵【山本や】はあどなたかお出なさつたそふな。とつさんだし へ出むかう これはおめづらしい。お出て御座ります。おあがり被成ませ ああ こッちらへ付ればよいに【通り者むすこ】いや〳〵こちらでもよし〳〵。とつつ いあがる【山本や】一ぶくまづおあがり被成ませ◯通り者むすこ二人と もにこしをかける【山本や女房】よふお出被成ました【山本や】あなたは番町さんといふおかたた。せんど頼。水道橋まで。めしたお客だ【通り者】これおちつは心やすく。來やんしよ。かみさん。はけさきが。そゝけはせぬか見て下んせ【山本や女房】いゑなんとも御座りません【通り者】手のごひを。ちよと。あつい。ゆで。しぼつて。ください【山本や女房】はい

「通り者」手のごい。おれがやろ。とあさぎの手のごいを出し。ゆでぬれたるを取しぼりて顔をふく、髮きれを大事にふく ぐつと、これで心持がよくなる。ふか。しやらんか。とふもやぼな形だぞ「むすこ」さあ參りましよ。とふたりは門でゆく「通り者」さあ〳〵いそぎましよ〳〵「山本や」「同女房」申明あさおより被成ませ「通り者」さあ〳〵まあ土手へ來たこれ〳〵こちらだよ。こゝの。うちにも功者と。ふ功者がある。こちらを通ると。かくべつ。ちかい。これは土手が大ぶ。さみしいわい。こゝはなの。さきへ。つばきを。つけ。さつしやい〳〵「むすこ」なぜへ「通り者」いやなせでも。つけ。さつしやい。今におもひしる事があるそれ〳〵もふ來たぞ「むすこ」ほんにおかしな。匂で御座ります「通り者」こりや死びとをやく。匂た。じやが。土手で。かげべ。死びとの匂も。ゑゐ。ものじやないか。今夜は大ぶ土手が。永やうだ。と。いふて。しやんと小づまを鳥かぶと。上るりを。功者らしき聲にてかたる まだ。いけんをいゝ殘した事がある。うたを。ならうげなが。同じ事ならうたは。よさつしやい。今やぼな。侍がうたをうたう。河東ぶしを。ならはしやい。おらが内には雅十はじめ段次も筆次郎も。來るもんだから。誰に。ならをうもすきだ。それに河東が。此ごろは聲がかれて。おらが内へ來てねてゐる。それに筆次郎は辨四郎と改名したこれも會の。たくみが。あるから毎日來るいや通り者に。なると此會ばかりも。うるさいものだ。摺物ばかりも。大ぶ。たまつてゐるぞ。そうこう。いふうちに是は。衣

紋坂。やつぱり。こゝハ古風にこゝで。ずいぶん。衣紋を。つくろうがゑい。時にこゝから。しづかにしていかふ。どふも人が見ると。ミんなが来て。あんまり。そう〳〵しくなる。今夜ハしつほりと。手まへと。おれと。たつた。二人で。あそぶ事に。し。よ。といふうちに大門をはいりて。はて こう。さみしくてハ。どふも。ならぬわい。茶屋ハ。どこに。しよふ。あんまり。しつた所が。たくさんだから。どこへ。いかふも。目うつりがする。それにおれハ茶屋を定て行が。きらいだ。そこハ何屋だのうれんを。見ささッしやい【むすこ】小田原屋といたして御座ります【通り者】あゝ又が所かゑゝあるつハ。おれがいッたら嬉しがろさあ〳〵はいりましよ〳〵。と、づつとはいれハ茶屋ハ女房ひとり座敷にゐる かミ様ンどふで。ございす【茶屋女房】あい お出なんし。おあがりなんし【通り者】あがりましよ〳〵。と。づつと。あがり。見せのまん中へ大あぐらにて。すわる 大ぶ今夜ハ。しづかだの【女房】いゑ まだ二階にお客が御座ります【通り者】いつでも。にぎやかで。ゑい事だの。ひさしぶりで。こゝの内へハ来たぞ。といへども。女房ハ何かしらう。わからぬ顔にて【女房】ぶしつけ。ながら。おまへ様ハおミわすれ申しいんして御座りますが。あなたハ。となた様で御座りましたね【通り者】これはどふだこれハ〳〵いかに久敷こないとて。見わすれた顔ハ。ねいハ。しかしそふだあろ。久しぶりだから。御亭主にハ。折ふし途中であうが成ほど内へハ久しぶりだそして亭主ハとつちへで御座るす【女房】今日ハ江戸へ参

りました【通り者】ああ今こゝを出て。いつた人れ。だれだ【女房】あれハ箪次郎さンで御座ります【通り者】あゝ箪か。なぜおれを見て。見ない。顔して。いくしらん。成ほど〳〵ゆふべおらが所へ來るはづで。こないによつて。それで見ない顔したそふな【女房】ゑゝゆふべ。あなたへ參るはづで御座りましたか【通り者】此ころハ河東が來てゐるに。よつて。咄に。こうと。ゆッた。それに。箪がこないによつて。ゆふべハ龍千が來て。誹諧で。夜をあかした〇此間盃すゝりふた酒出て女房がさし圖にて吸物出る 今日も河東が來て。ねてゐッたから。吉原へ行。あゆばないかと。ゆッたれば。ぶしやうなやつ。吉原よりハどふぞ。ねてゐたいと。ゆッて。いッたけ【女房】河東さンハ。ゆふべから。こッちへ。來てゞ御座ります【通り者】河東が。と。きもをつぶしきのどくそふな顔にて はて。それハ。いやな事魂魄じやないか〇女房はあいそをつかして勝手へ立つんとしてかまハぬ 〇臺所にハ男ともが【茶や男】おかミさま。あれは何か。おかしなもので。御座りますぞへ。大がいにあいさつをして。おかへし被成ませぬか【女房】おゝさおれも。そふおもふよ。何にしろ。だんなが。歸ら。しやつたら。ゑゐやうに。さつ。しやろ。まあそれまでハ。かまハずに。おかつ。しやい。もし又。つとめの。請合引なら。かならずさつしやるな。おらハ。二階の客人の方へ行から。平さんと川さんが。御座つたらあのふたりをバ。中いまへ。置て。おれへはやく。しらさつしやゐ。といふて二かいへ。あがる【むすこ】こゝ

の女房は。あまり愛相が。よくないじやゝ。ござりませぬか【通り者】されバ共事ッた。ぜんたい。つきのわるい内だ。何かしつても。しらないよふな。顔してゐるこゝへ今よい女郎が来れバよいに。こふしてゐる内にしやれて。やらうもの。と。見へないろ〳〵いふたりしてたばこ。ぱく〳〵とのミゐる【客平くる】男ふり大きく。人柄よく。合ばんにて黒羽二重のあたらしき小袖黒縮緬五所紋内〳〵と鼠縮緬のあゐぎ。きれゐに。大きな聲にて 御亭主はもふ歸られたか○ 亭所より若イ者かけ出て。かの通り者むすこにもこかまへず。とんで出る。ひやうしに。通り者の足に。わかい者の足がさへる【通り者】ごんざいな。野郎めだ ○ わかい者はごめんな成ませともいわず客人平にむかい【わかい者】御出あそばしました【平】おゝ二階へとをろうか【わかい者】ちつとおまちい被成ませ と。通り者とむすこにむかい おまへなおかたは。中の間へ御出被成て被下ませ【通り者】どこでも吉野木〳〵これ色男。こつちへ。木のめ田楽〳〵 と、しやれをいふ【わかい者】盃もち出客人平のまへに出して 大分おをそう御座りました【平】御亭主はまだか御内しやうは【わかい者】只今二階におります。おまち申ておりました。はやく。さやう申ましよ【平】大分いそがしそふだな【通り者】これ色男ミせの客を見さつしやい。あいらかふられずば。ふらるゝ者は。あるまいじやないかあゝいふものを見て。おいらを。見たら。女郎の心でも。ほれるはづだ。と。高慢をいふてむすこに見へをいふ【女房】二階よりおり見せへいで 大ぶおをそふ御座りました【平】そふで。あッたであろ。今日同役の所で少し祝儀事で呑かけ山と。して。ゐたらバ。亭主の見へられて。あつた。【女房】さやうで御座りましよ。今日のはきふな御用のおみそふで御

座りましたによつて。外の者でハ。間ちがうと申て。自身に持て參りました。それでも。お目にかゝりまして。よふ御座りました。川でハ御出被成ませぬか【平】これも大かた見へやうが。御亭主もゝふ歸られ。そふなものじや。尤これハ虎の門の方へよるといふ事であつた。【女房】はいさやうで御座りますいつでも虎の門へよりますと。永ふ御座ります。せんども。よりまして虎の門の御客でハ此方へお出なんしたのに。歸りませんで。直に品川に參りまして其朝ゆるりと歸りました。しかも。其ばんハ。いそがしいばんで御座りましたのに。歸りませんから。歸りますと。大きに。ふり付て。やりんした【平】んまいな〳〵。そふした。實な女郎に。あいたい。ものじや【女房】山さんがあらほど實なうへに其やうに。なんに被成ます【平】されば其事じや。あゐつも。氣のしれぬやつじや。すんど實な。やうでもあゝ。又何やら。おかしなものじやぃゃ此やうな事。いわずと一ぱい呑ましよ【女房】一ッおあんなんせ といふてはじめる【平】これハきつい小盃な。今日一日。よつてハ。ゐるけれど此やうな小盃でハ。少し。くす。ぐッたい。やうじや。例の大物を〳〵【女房】さやういたしましよふか といふて。女房へ。勝手へ。盃。取に立 すいものたいゝ付る客人。平。大分醉た風情にて扇子ぱち〳〵ならしゐる【通り者】むすこにさゝやきて袂の内より何かとりて これ。かゝさん〳〵。ちよッひら。あいたい〳〵【女房】はいなんで御座ります。取込ましてろくに。おかまいも申ませぬ。【通り者】

かまハずとも吉野葛。これハせ左衛門なれど。久しぶりで来た。しるしとか。なんとか。いふやうなもの。そつちへ。しまつて。翁草【女房】はいこれハと。ばかりにこたゝんとする【通り者】これ〳〵まだ用がある。松葉屋の染之介を。きゝに。やつて下さい【女房】のみこまぬかほ付にてはいといふてしあんしはい染之介さんハ。おわるう御座ります。さつき。むかふの内にお出なんした【通り者】はてどこに。しような。丁子屋にしようか【女房】角町に。しんミせが御座りますが。お出なんして。ごろうじませんか【通り者】角町ハさへまい〳〵むすこにむかひてかの。色事の所へ。いこふか。あゝしんぞふ買でハ。氣がつまるぞ【女房】まあどこぞ御相談被成て。御ろうじませ【通り者】なんにもしろ。挑灯付さしてくんなさい【女房】はいとれぞ。おともしやれ。といふうちミせの客人盃をまつ【平】大物ハどふじや〳〵【女房】あい只今もつて参りますといふて大盃もち。きたる【平】さあ〳〵これじや〳〵。と。ぐつと引うけのむ【通り者】行べし〳〵。と。むすこをつれにハふたり庭へおりる【女房】明あさ。およりなんし【通り者】あいあすも。もし。ふらべ。ぶんながしの。久しぶりで。ゐつゞろうも。しれやせん。諸事ハ。今夜の女郎の腹にある事。と。いゝながら。むすこを少し。さきに。たてゝ行【平】へ。始終を見てゐて女房にむかいても大そふな髪じや。所謂。本多ふうじやの【女房】あいささやうで。御座ります。何かしれぬ事ばつかり。おつしゐんすから。あいさつが。しにくう。御ざりんす【平】いや時に。こよいハ。氣をかへて。見る。つもりじやぞへ【女

房】なせで御座ります【平】いやちと新町邊に。見そめたのがある。これへ今夜ハゐて。ちらと。たまにハ。もたせるも。面白かろうでハ。ないか【女房】なんさ。それハ。およしなんし。私共が大てい。なんぎ。いたす事じや。御座りません。せんども。ちよッと。江戸町まで。お付合で。お出なんしたのさへ。大てい。やかましかつた。事でハ御座りませんあれ／＼そふいふ内。新ぞう衆が。おむかいに。お出なんした。こうで御座ります【平】おれハ。かくれるぞ／＼【新ぞう】申／＼わッちを見てなせにげなんすへ【平】いやにげハ。いたさん。公のおむかいに。出たのじやさあ／＼あがり給へ／＼【新ぞう】あ。も。せハしのう。おざんすハ。といふてころんた様に半分かけておちそふにしてゐておかさんに。おゐらんで。おッしやりんす。ひるほどハ。ゆるりと。おめに。かゝりんして。おうれしう。おざんす。平公ン。お出なんしたそふで。おざんすのに。なぜはやく。およこし申シなんせん。おうらみで。おざんすとロ上いゝしまひなぜ人をよこしなんせんへ【女房】あいさどふで。されッてお出なん事を。そんじておりんすから。まあゆるりと。そふ申て。あぎんしよと。おもふて。おりんした。それにつゐて。おはなしが。御座りんす。さッきね平さんのおッしやりんすにッよ。と。客人の顔を見ていわふとする平ハ最前より酒よほどまハり大けんきとなりうたい聲にて【平】さやうな事ハ船中にてハ。申さぬ事にて候【新ぞう】でも大きな聲だぞよ【平】聲が大きいかなへらた大きなものを。持なが

ら。新ぞう買とハはは〳〵これハ〳〵。さし合じやの〳〵。とやかく。いわふよりハ。はやく。ゆかふでハ。ないか。今宵ハ。名代じやに。よつて。はや〳〵行たい【新ぞう】ぬしや大ぶ氣がなをり。なんしたね【平】いや名代にハ。ふかい。意味のある事じや。はやう。いこう〳〵【女房】お吸物をお吸なんして。お出なんし。御膳のしたくも。いたして。おきんした【平】いや〳〵中〳〵飯所でハない。はやく參りたい。と。いふて。草履を。片ちんばにはき。かけ出しそうにする。拍子に大きな鼻紙袋。おちかゝり。背の紋所も肩さきへ。まハり。挟も帯のとけたを結びながらにてかけ出る【新ぞう】いつでも。いゝ出さッしやると。せわしない　まあ　まちなんし【女房】はやく。おちやうちんを。付ろ　中　おざうりが。ちがいハ。いたしませんか【平】草履どころでハない。はやく行たい。と。とかくかけ出す【新ぞう】まちなんし〳〵。と。いふてひつそい行【わかい者】此挑灯ハ。わるい。と。ミせまで持て來た挑灯を。又おくへ持てゆきそふにする【女房】はら立顔にて　はやく。行ッしやいな

夜のけしき

いつのまに。峯の松風かよひ來て。いづれの緒よりしらべ初けんすががきの。軒をならべてひくふねよ。泊りさだめぬ河竹の。流れても身ハすミた川むかふの人〳〵。尾張屋に人。こんな〳〵。二帖の紙を持て。來さッしやるな。いッけふるい。はやく。來さッしやるな。綠どう

くと。いふハ友よぶ愛らしき禿の聲。わるら狂ふて斗ゐずと。座敷へ。うせあがらないか。すかない。がきどもだぞよ引ハ。やり手なるらん猶もすがゞきの音にうかれて。五ッの町をめぐりいづれ。あやめと見れバ。昔を友とする顔に歌書を讀バ。後の月見に逢そめ見そめと聲高くよむ。箒を立てまじなへバ。疊算に待侘び。來れるみを卷かへせば。送るみを封じこなたより覗バかなたより覗く。白眼あれバ笑うあり。物やおもふと見れハ。さゝやきて悦ぶ。綠の柳腰。紅の下緒いろ〳〵行こふ人そゞろなる中に。けしからぬ聲の按摩はり鮓賣が鯵のすう鮗のすうと呼も。しやれとやいハん義太夫ぶしハ頬を押てかたり。江戸ぶしハ行儀に行二人三人友どち左右へ別れ。さぞや嘸〳〵さぞ今ごろハと諷い。卷舌にて。こッちらへ廻りやれ〳〵と。睦敷ハ。其邊の人かと見ゆ。温飩。蕎麥切。汁子餅。雜煮のあんばい。よき。キの字屋の名も高く。彼鵲の橋ならず。白きを見する名物ハ山屋の軒の水にすむ。ゆかりの月やすがゝきを。まだひく四ッの拍子木も。それかあらぬか駒下駄の。音に色めく。ありさまハ實に夜の錦なりけり

霄の程

大勢つきそい。挑灯三張にてはしごを上ル新ぞう客の後に付【新ぞう】はしごをべ。しつかに。おあがりなんせ【客】よほど酔ている心得ました【新ぞう】こゝはからしうおざんす。人の座敷でおざんす。こッちらへ。お出なんし【客】又せまい所へ入るのか【新ぞう】なに せまい所じやおざんせん。せんどおまへの酔なんした所でおざんす【客】あのおくのか【新ぞう】あいおくのでおざんす。はやくお出なんし と。廊下を行と。方〻の座敷より名をよび誰さん〳〵といふ客うれしそふな顔見ゆる【舟宿】【茶屋】これでまづおめでたふ御座ります。御座敷も定りました【客】全体こよひハ。おれ。ひとりじやによつて。此座敷がよいではないか【舟】【茶】さやうで御座ります 此うちに盃てうし硯ぶた吸ものや。くわしやたはこ盆いづる【女郎やの若ヰ者】旦那一ッ召上られませ【客】さあ〳〵座がメッて面白くないではないかなんと 此ふたでまハそふでハ。ないか【みな〳〵】よふ御座りましよう【客】とかく。おればかりが。いつも呑かぶだ。おこよや。お秀を。呼にやらんか【茶屋】只今参るはづで御ざります【客】今夜ハ後にハ大ぶ賑に成ろうぞ。さッき道で呂州に逢た。これも來よふといふた。それで今夜ハ藤兵衛を呼ん。こゝがおれが粋じや。呂州が來てゐるに藤兵衛に。うたわせるハ。互におもしろくない。よつて呼ん【茶屋】成ほど万事に。あのやうにお心がお付なさる【舟宿】あい 左様さ【茶屋】私ハちよッと。行て。さんじましよ【客】ままそんなら一盃のんで。行やれ今の盃を歸しもせいで。【茶屋】また私ハふせります【客】はて

ねたがよい。しかし。其やうな事で酒ハのめる物でハない。さあ／＼わしも呑ぞ【新ぞう】もしにもふ。それ切で。かならず呑なんすなへ【客】これハつれない。事じや【新ぞう】おるらんで。いゝなんすにハ。かならす上中なといゝなんしたに。よつこ。留中さにや成んせん【客】はて こまッた。ものじや と。いふ内に五六人ざハ／＼と来て。すハりながら口／＼に【新ぞう】御亭さん御出なんし。兄さん。どふなんした【客】これハ／＼うつくしいぞ。これハいかい事。客ハことりに。むこ八人じや。賑で。どふもいへぬ面白う成たさあ／＼君たちと呑給へあどれへさし上やうやら【新ぞう】わッちに、差なんせ と。引うけうまそふにのむ所へ【やりて】来るいや のこなんすの といふて客にむかいて 御出なさいましたか。すッきと御足か御遠く成なんしたの【客】いやこれハ／＼かゝるなどふじや／＼一ッ呑給へ／＼ 茶屋をよびひそ／＼いふ【茶屋】これ申御しうぎが。御ざりましたぞへ【やりて】ははは、お有がたふ御座りんす。私ハまあ行ッて参りましよ【新ぞう】今のお盃。おざんしよ○ 此所へ。茶のこ菓子。重箱のふたへ。あたゝかそふな吸物もより持来る と【客】さあ／＼これほど。御肴が出た。おさへます／＼いやおミよお秀いやあ呂州丈さあ御出／＼なに今の盃ハこふおまハし／＼【かふろ】兄さん。其三ツとせん箱。あちらへ上てくんなんしあれ御亭さん。くるひなんすなあれよびんすおう／＼【そな／＼】旦那ハ、ぶお帰なさつた休ませ申たらよかろう

更の体

女郎さし合名だい廻り部や　【平】あゝ今夜も又。此やうなせまい所へ。とう〳〵入られた。いッその事ねようぞあゝ酔もさめるあぢな心持に成た。と。夜着半ぶん程着て。ねころび。ね入もせずにね入たやつにしてゐる。新ぞう。けちな。三味線にてぽつ〳〵とひく客目のさめた顔【平】うう。こに〳〵三味線をひかずと。こゝへは入てね給へ【新そう】いゝゑこうして置て。おくんなんし又しかられんす【平】其やうな。大きな聲をするからわるい。こそ〳〵と。ちよッと。といふて手を取て引はる【新そう】おがみんすにへ引。と。なきにていふ。しかたなく。手をはなし。しばらく後のたつおもいれ有。すつと立て。はたゞなくなし。かしこまりしあんをして居る【平】これさッきの。どこへか持てるッて。しまッた花がん袋と。羽織を持て來てくれろ【新ぞう】どうなんすへ【平】歸る【新ぞう】今ごろ。つゐど歸りなんせんに。なぜ歸りなんす【平】いやもふ七ッ過でもあろ【新ぞう】いやまだこらほどでへ。おざんせん。今におゐらんで。お出なんす。ぬしの。いゝなんすにへ。必ちよッとでも。ぬしを。いごかせ申なと。いゝなんしたから。いごかせ申事へ。成ゐせんじつとして。ゐなんし【平】今に來るか【新ぞう】たッた今お出なんす。氣を短くせずと。もちゐと。ゐなんし【平】でもあまり。おもしろ。ないぞ今來るか。と。またよとになる【隣座敷】客は田舎座頭。女郎へ新ぞう。たわいなくねてゐる手を打ても。たれも來ず。ひとりごとに。あゝおもしろく。ない事だと。たはこ盆を。いぢりゐて。じッを打て。よほど過るに。さきから。おこすが。とかく。埒があかん。と。いゝ

〳〵（はぢきながら）【座頭】これ〳〵おきなさい〳〵、大事がある〳〵枕もとへ火を。こぼした。おきなさい〳〵【新ぞう】こへなんだへ（ねむたそふなこゑ）【座頭】何にもせ。ちよッと。おきなさい【新ぞう】（おきて）よく〳〵、いびりなんす【座頭】宵から大体おこしたこッちやないもう七ッ半でもあろ【新ぞう】（ひやうしをとりあげながら）もふ夜が明たそふな【座頭】いや〳〵まだ夜れ明ん七ッを打て。半時ほどたに【新ぞう】おまへは見なんせんかいで。おざんす。とふにからりと。明んした【座頭】でも。まだ烏が。なかん【新ぞう】（座頭の。あたまくらわす。まねをして口のうちにて）ゐゝ。すかんといふ【座頭】（付て）何が。すかぬへ【新ぞう】隣座敷い。客人の事ッて。おざんす。いつそ。も。しやれて。どうも。すきんせん

【隣座敷】【通り者】これ新やどこへいッてゐるこれ新〳〵【新ぞう】なんで。おざんす。あんまり。其やうに。大たばにいッて。おくれなんすな【通り者】（あのさッきの。）むすこをおこしてきて。くれろ【新ぞう】今きなんす（むすこねむたそふなこゑにて）【通り者】色男どふだ。とんださへないしやないか。【むすこ】（はづかしそふな顔で）どふも。ねかさないで。何かねむふ御座ります【通り者】そりや。とんだ仕合だ。此しんなんぞ。宵にちよッきり。頬を。つん出したまゝ。やう〳〵今に成ッて來た。もふ吉原も。ふたゝびないわい〳〵【むすこ】又あきッて。お出なさんせかい【通

り者】なぜ【むすこ】わたしや。あさッて。約束いたしましたに【通り者】すとんだ事ッたの。おそろしゐわい〳〵。こゝの内は。とんだ。わるい内だによ〳〵むすこが女郎は部屋持にて、よほど人がらよき女郎にてねむたそふにしんぞうとならびゐて【部屋持としんぞう】すかん。といふてにらめる【通り者】これ新や。茶づらせろ【新ぞう】何けづらせろとかへ【通り者】これさそんなに。しやれずと。はやく。持て來やなのう色男ちやツくり茶づッてるこじやないか【むすこ】あいよう御座りましよ【部屋持】もうお歸りなんすのかへ【むすこ】あい【部屋持】もこうッと。ゐなんせ。まだはやう。おざんす【通り者】もしわたしをバなぜとめなさんせん【部屋持】おまへをバ。ぬしが。とめなんしよから。わたしがとめ申さすと。ようおざんす【新ぞう】なにすかない。ぬしのやうな。ものを。とめ申。もんで。おざんすか。はやく出てゐきなんせ。夜があけんす【通り者】此新はおれをば人間じやないと。おもふそうな【新ぞう】その新が宵からくすかなくて。なりんせん【通り者】それは。そふと奥座敷の女郎衆に。ことづけをしてくれたか【新ぞう】あいそふ。もうしんした。なれバ。ぬしや。そんな。おかたは。しらんと。いゝなんした【通り者】はてにくゝするの。それでも廊下座敷の女郎衆は。よもや。おれを。わすれはせまい【新ぞう】あいこれも。さッきそう申んした。なれバ。おまへの小ように。いきなんすときに。あとから見てゐなんして。そふいゝなんした。どうも。おも

ひ出されないと。いゝなんした【通り者】さすれハ爺(ぢい)に成ッたか。何事もさへぬ〳〵。只ゝ帰りましよ〳〵【新ぞう】はこさてもちゐとお出なんし。おまへが帰りなんすとワッちや死(し)にんす。と。いゝながら廊下へ送り出ル【むすこ】【部屋持】あとへ残り。はなしをしてゐる ほち〳〵【通り者】色男きたないぞへ〳〵【新ぞう】人の事に。かまハすと。早(はや)く階子(はしご)を下(を)りなんし〳〵

しのゝめのころ

【隣(となり)】【平】あゝやゝかましい。宵(よい)からの口きゝが。やう〳〵出て行そふな。さッきからも。くゝりのあく音(おと)で大ぶのぼせた【名代の新ぞう入かハり。馴染の女郎】おしつけ奥座敷(おくざしき)に替(かハり)んすと。此やかましいが。よくなりんす。夫(それ)までが大体(たいてい)のくろうじや。おざんせん【平】はて扨(さて)宵から。あらほど。おれがゆつて聞(きか)せる通り其様(そのやう)に。氣が。よハくッて成ものか。新ぞうを出すほうハとふ成とも。おれがしてやろう。今の座敷のほうの事ばかりじや。それもおれが様子しだいで。どうともしてやろ【女郎】さりとハ。おうれしうおざんす といふていろ〳〵おもしろき事有 おまへのやうな客人がもう一人あると。わたしや大体。ゐるこッちや。おざんせん【平】はて氣(き)の多(おほい)やつのと。つめりて あだな身有【女郎】ほんに。ワッちや此ころハ夜もひるも。ねられんせんが。今宵(こよい)ハ宵の客人が

歸ッてから。おまへの所へ來んしてから。心がとけて。よくねんした。それでも宵におまへの機嫌のわるふおざんした時にハ。いッそ。こわう。おざんした。今度から。どふぞ腹を立て。くんなんすなへ【平】もう腹ハ立ん〳〵おゆるし〳〵。時にもうおれハ歸らふ〳〵【女郎】まあもちッと。ゐなんし【平】いやもう夜ハ明ようそこを。ちよッと明て見てくれな○女郎れんじを明る夜へ明はなれたりきもをつぶし南無三寶さッきから烏がないたろうが。ちつとも。氣がつかなんだ。高い聲にて若い者〳〵はやくはきものを下へやつてくれっ扨も〳〵あの茶屋めが七ッに。むかひをよこせと。いふて置たものを今にむかいを。よこさいで【女郎やの若ゐ者】さきほど。おむかひに參りました【平】扨〳〵これハ。と。帶〆ゝうちにてもからす一ごときにかあ〳〵【女郎】かならず後に晝まつたるいんすにへ【平】いやどふもかへりが。おそいから。がッてんがいかん。さりながらどふぞこよふ【女郎】そんなら。ワッちや中の町まではハ參りんすまい【平】そこ所ではないはゝおそく成ッた〳〵【女郎】かならずお出なんせへ　またからすかあ〳〵　心しらずや明の鐘

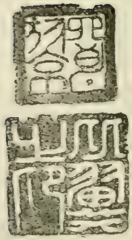
知足之図

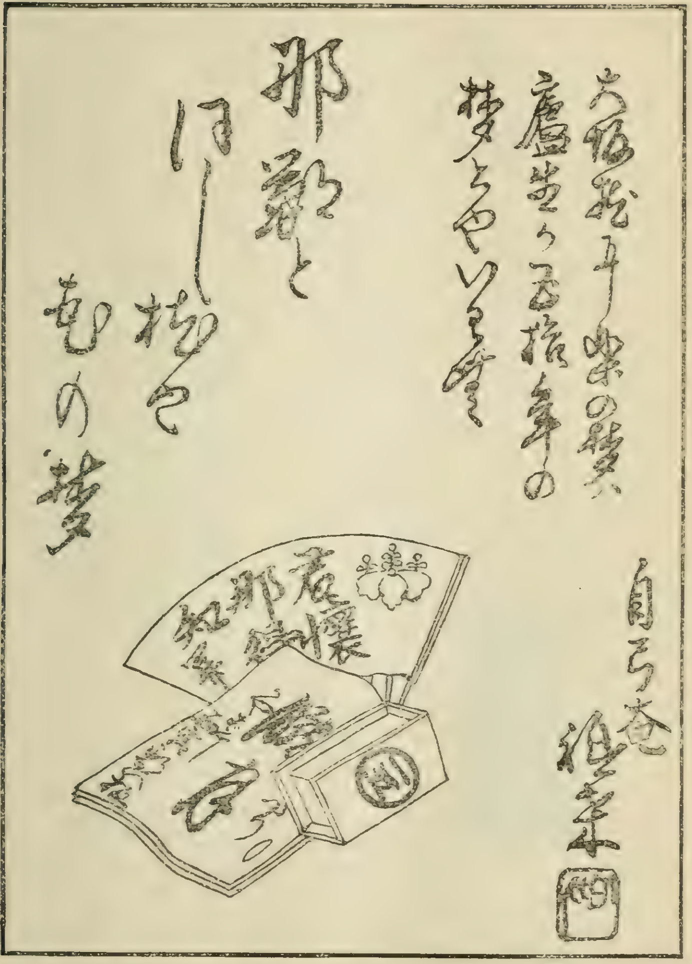
辰巳之園叙

京都辰巳鹿社住江都辰巳有遊樂夫者宇治山是者深川富賀岡之邊遊情婦之鄕也勤悉ゝ書集吉原北國之名有學之辰巳之園題書肆何某任望北國之美君嘽不顧如井之內蛙吉原雀閉雀深川參人述之

明和七庚寅林鐘撰之

櫓閑衛　紫樓





辰巳之圖　二

自序

富賀岡八幡宮ハ。鎌倉鶴ヶ岡を移し奉り。貴賤老若の信く日〻に彌まし四季折〱の賑か。二軒茶屋其外。楊枝見せ葭笛茶屋とうの　美婦ハ紅粉を粧ひ。品形の美きを。見れハ樂ハ外にあらじとおほゆる。さるにより此土地に樂遊民ハ。北國の面白キを知らす。美國。の吉原くらぶれは。九牛か一毛とやいわむ。去なから。餅好酒の醉事を。そねみ。酒好ハ餅の。風味。を惡む。吉原の位あつて靜也ル遊ひお。知らすして。此所の素人らしき。娘風を悦ひ。又此土地の。わつさりとしたる樂を。吉原好ハ知らすと。深川好北國をにくむ吉原客は深川ハ下卑なりと笑いかて

あらそふ時ハ水掛論とやいわむ吉原に晝三あれハ仲丁土橋あり。打附有ハ櫓下佃嶋あり壹分貳人六寸には新地入舩石場三間堂を譬て。爰に樂む。姉女郎あれハ。年廻有。禿有ハ小女子と言あり。花車有ハ。送迎男あり。牽頭持。藝者ト云淺草觀音にくらふれハ。八幡大菩薩を信する。聖天ハ則。永代寺の寺中に有。九郎助稲荷に。仲丁のいなりを譬。松田稲荷ハ。黒江町のいなりをいわん。又朝日如來には。永代寺の本尊を。なそらゑん大雲寺前あれハ永代寺門前有。大門あれハ。大鳥居有。土手あれハ。永代橋有。衣紋坂にハ。櫓下の火の見を譬ん此火の見を見て。衣紋を作る。櫻の代りに。山開といふ有。燈籠の賑

かあれハ。八幡の祭り有。舩宿を呼は。むかふの人を。よふにひとしく。引け四つの静あれハ。四つさきなとト云事有。吉原に。意氣地あれバ。此土地に達引有。丁に振と云事あれは。爰に照すと云事有。照と降との事にや。婦女郎御亭様ゝの替名あれハ。茶屋の女房を。一流に伯母様ゝと呼。其外お針隱居さんなとの。通言あり。爰に略して。末にこと〳〵くあらわす。誠に落れハ同し谷川の水のことく。若衆好も。吉原好も。深川好も。遊ひにかわる事ハあらし。諺に云立臼も二階へ登るの。道理なり。さりなから此所の疵には。晴たる遊里あらされは。北國より禁ずる時は。勤暫休と云。百日餘りの大紋日ありさ

れと。丁より禁するとも。深川客。吉原へはゆかす。井に水なき時ハ。川水の。たすけ有。既に慈童ハ。菊の露に長壽を。たもちしと。聞傳しなれど。此艸帋は深川の。くわしきを書集たれハ。吉原の目を。忍ふ已而。穴堅こゝ

春風は。花のあたりを。除て吹。心つかしや。うつろふと見む。上野飛鳥の花盛り。日暮里の風景。所々賑なる折から如月半の頃茅場丁。藥師如來の參詣。おひたゞしき群集の中に。藝者八丈の羽織に。黒縞の小袖。八丈代り縞の下着八反掛の。立横縞の帶。鼻紙袋小菊三ッ折。丸角やが骨折の。利久形。髮ハ本多にあらず茶洗坊にあらず出す入らずの。男女好と結。雪駄は鼠綾の下り皮。細身の脇指をさして。伊勢やか床机に。腰を懸る【伊勢や女房】志厚さん。きついお見限りて。ござりやす【志厚】此間ハ石燕か花の會に屋鋪に鞠がありやして。散々にわか氣づめてぶら〳〵心。是でハいかんと。親玉隠れのちよんの間と。出かけやした【女房】それハきつい御心勞。今日もおさへかへ【志厚】久しぶりたに。烏渡參ろふかと。思ひやす【女房】おはやう。お歸りなさりやせ（咄しの内に）髮を。大本多に結。飛八丈の。小袖の少しよごれたるに。黒繻子の袖口に。幅せまの帶に小短大小を。落指にさして。山岡頭巾を。横丁にかむり。日和下駄をはき。大キなる顔にて來る【志厚】かみさん見ねヱ凄ひ男だ【女房】まだぬしを知りなんせんか。如雷様とか云て。てヱ〳〵やかましのしや。こざりやせん（裏門の方右）御國楽とみへて。花色小袖に。淺黄裏を付。洗ひはけたる。黄むくの下着。黒紗綾の帶に。郡内縞の袷羽織に。海黄の裏を附。袖頭巾を。ひら〳〵とかむり。尻をぢん〳〵ばしよりにして。き木綿の足

袋に。わら草履をはき大小を門指にさして。もへ黄羅紗の。柄袋を掛ヶて。楊枝屋の娘の美に。氣をとられ。傘の澤山なるに。きやうをさまし。猪牙舩の早きに。おとろき。金魚の數に。あきれ。植木の青〳〵としたるに。目を覺し。揚弓の。カッチリちりりんに。胸をひくつかせからくりの太鼓に。きをぬかれて。大キなる鼻紙袋の。落そふなも知らす。うか〳〵と。來掛り。如雷が顏を見ると。きよろ〳〵顏にて。（袖頭巾を取て）貴公にわ。いつかたへお越なさる【如雷】こりやァめつらしいぬしやァ。獨りか【新五左衛門】イャ下拙も。はつの出府ゆへ。方角もぞんぜす。藥師とやらが。今日ハ賑じやと。福才老のすゝめにまかせ。賑な町を。通りぬけて。漸〳〵尋て。參りました【如雷】そんな事なら。連立て。來よふものを。とふた。此賑事ハ。おそろか【新五左衛門】いやはや。とつぴやうしもねェ。こんだァむし【如雷】主ハ。なんと深江。いくきはなしか【新五左衛門】とこへなりと。行ますべい【如雷】そんならもつと。身重をして來やうものを。ィ、知たやつらに逢たら。づい隱れの。すいにげにしやう。ちつと用もあれと。用事流しの。ちよんの間遊ひと出やう。舩に乘ふか。日本橋へハ遠し。江戸橋の田村屋にしやうか。但し西村のおさよか所で乘ふか。いや〳〵。此間大和やの息子と乘た。渡し場の中村屋にしやう。新さんこつちへ。きなこ餅〳〵【新五左衛門】そつちへ行のかへ（是より如雷新五左衛門を連て）

鑓の渡しの方へ行中村やにて【次郎】船か〳〵【如雷】なんの事た。船か〳〵と他人がましくするな 次郎ついぞ來ぬ客なれ〳〵しくするを上手ものゝなれへなしみ顔に 是ハお見違もふしました。おつやどんお茶を上ねェ【長吉】そんならおれハいつて來よふ。イヤ稲荷堀ハ何番か出たな【次郎】七百廿一とでた【長吉】なむさん。薬師のもかきを喰。此頃ハ七百六百か。いゝわへ【次郎】今日はとこへ行【長吉】九十九里の。旅人のしまいが有【次郎】早くしまふたらめくりをうとふ【長吉】後に〳〵【如雷】あいつハとこの船印じや【次郎】横丁の。西村におりやす【如雷】西村の船頭か。あいつも見わすれたそふな。きつく年寄になつたそふな 女つや茶を持て來る【如雷】イヤ美しくなつた。久しく見ぬが。とんだ茶かまに成おつた。どふだ地色でも出來たか 知らぬ客ゆへ氣味をわるがり勝手へ行は引替女房出る【女房】やう御出遊しました。先御上り遊しませ。次郎とん。船を。はやく拵さつしやい 如雷たはこ呑付る女房火入へ手をあて お火かこざりますかな【如雷】ありやす〳〵【次郎】かみさん。仲丁の龜山への。みかありやせう【女房】今見てやろふ。船をはやく拵な 船頭次郎火縄箱など手に持てくわへきせるにて船場の方へ行【女房】是次郎どん。くわへきせるハあふないよ【次郎】アイ 女房此間に勝手へ行て状箱を尋る如雷手拭を出して顔をふく【如雷】新五左。かならず。つきな事を言まいぞ【新五左衛門】何サ。おれらも。いなかじや。お女郎買たッ今度も。輕井澤であそんだら。峠まで　おくつてなむし。お歸りにやァ。かならすよらしやりませと。くれ〳〵言て。大もてて

有た【如雷】なんの事だ。人が聞。そんな事は御免だ〳〵【次郎】舩が出來やした【女房】勝手より
ふねか出來ました。お出遊しますか【如雷】さあ新さんめヱりやせうイヤかみさん女に。西
宮か所の。長唄を。買にやつて。くんねァ【女房】ハイ。つや新六さんの所へいつて。めりやす
を。買ふてきや【如雷】ふところより錢を出し　はやくかつて來。くれ木川岸〳〵　つやへめり買に行女房先に立て如雷新五左衛門舩へ行【次郎】さ
アめしませ【如雷】舩へ乘る　新さん乘やすそ【新五左衛門】猪牙ハ初而乘ハやうへとりつき〳〵　ア、こりやア。ぶ細工
なもんだ【如雷】ころひでもせまひぞ。獨りでころんでぬれるやつと。出まひぞ【次郎】うそわ
ねヱ。もしおかみさん。舩繩をとつておくんなんせ【女房】先ちつと待な。めりやすがくる　下女つや
めりやすお買いそかしそふかけて來る【女】朧月と。五色丹前を。買て參りやした【如雷】ヲ、きまり。すひめ。重さ
んどうでも。はだしじや〳〵【女房】舩のへ先を持て押出ス　お歸りに。おより遊せ【如雷】アイいつて。め
ヱりやせう【女房】イヤ次郎どん。白木やの清助さんの。みを【次郎】夫〳〵。そつからなけ
て。おくんなんし【女房】そんなら。なけるによ。そりや【次郎】おつと來やした　みをふところへ入舩へよほ
ろと出【次郎】とりから〳〵。やんわりと〳〵。ヱ、べらぼう。跡先。見てこげ【如雷】新ほう
此新川筋の。藏ともを。見やれ。是か皆。酒だによ【新五左衛門】大けなものしや【如雷】是
より又油堀の。孫兵衛か。貸藏か。見せたい【新五左衛門】孫兵衛とれ【如雷】國でも。知つて

居る。親和が事さ。三ッ井孫兵衛と云てハ。手跡ハよし。金ハ澤山あり。孫兵衛さんの事だ（船ハ永代橋の近所へ行）【次郎】もし旦那。お頭巾【如雷】（頭巾取て）新さん頭巾を。とりねェ【新五左衛門】頭巾をなせ取【如雷】爰は。舩改の。番所た。見ねェ。暮方からハ。是に火を燈す。此橋が。永代橋と云のた。橋下から。見へるか。仙臺河岸。こちらの。火の見の下を。這入と。八幡の裏。二軒茶や。櫓下なとへ。行て【新五左衛門】櫓下とやらハ。國元ての噺しにハ。焼たと聞たが【如雷】焼たとて。出來ねェて。なるものか。仲丁も焼たか。立派に建た。櫓下なとハ。前かたハ。隠し窓て。あつたか。惣格子になつて。すとんだもんだ。土橋斗。焼なんたが。又焼たから。焼ぼこりと。やらで又。立派に。出來やう【新五左衛門】此ちよびりと。した所ハ。なんじやへ【如雷】是ハ八右衛門嶌と云。此向か。佃嶋【新五左衛門】こゝにも有か【如雷】イヤ爰ハ獵師斗居る。女郎の有ハ。八幡の向のさ。新地も近し。石場もちかけれと。新地なとハ下卑じやて。のふ舩しう【次郎】イヤ共やうに。きたなくも。こさりやせん。しんちの播磨や。なとハ。よくいたしますよ。子供ハ。揃ふて居るなり。女共も。能いたします。ちと御出なんし【如雷】こいつは。播磨やに。色が有な。もうせんても。かふるな【次郎】つがもねェ。そんな事。するのじや。こさりやせん。旦那どこへ。御出なんす【如雷】されハ。どこかよかろふ。仲

丁にしやうか。土橋にしやうか。河邊の娘が。半四郎を。まねるも。久しもんだ。山本にしやうか。山本ハ腹がちいさいから。尾花やにしやう【次郎】いつそ。龜山へ。御出なんせ【如雷】イヽャ小花や／＼【次郎】稲葉や。おなじみなら。先へお出なんし【如雷】さ新さん。あがんねェ【新五左衛門】早いもんだ。夢のやうに。きた【如雷】そんなら。先へ行ぞ。新さん。こつちへきねェ　（如雷と新五左衛門新道を小花やへ行又猪牙来り川岸へ付）【忠五】龜山／＼。ヱヽふ景氣な。龜山／＼　（やう／＼龜山にて聞付て女來る）【次】忠五どん御苦勞。蝶卿さん。お出なんした【蝶鄕】此間ハ。御世話【女】御影ヶで。おもしろふ。芝居を。見やした【蝶鄕】これハ。御禮で伊丹。諸白　（蝶鄕ハ女と連立て龜山へ行忠五船をしまいて）【忠五】是／＼。次郎そしらぬ。顔をするな【次郎】とふた。忠五久しいの。いゝ事でもあるか【忠五】とんと。いけねェ。ゆふへも。屋形に。能のか有から。いたりや。手ふりあみ笠に。なつた【次郎】おいらも。裾つきの丁子やで。めくりを打て。六七百まけて。夫からおもての。春岡て。こまか有から。廻したら半分斗。まけハかへつた【忠五】そりやァまつよかつた。なんとそつちの吉ハ。どこにいるの【次郎】此間聞ハ。のぶと船を。乘ると聞たかついそ。見掛ねェ【忠五】あいつも。いけねェ。唐茄子だよ【次郎】とうなすだか。茶がまだか。わからねェやろうたよ。客が。まつていやう。後に來やれ【忠五】どのやうな。客じや【次郎】何だか。雨落のき

しやご。見たやうに。しやれのめすよ「忠五」そんなやつも。苦界三年と。附合て勤たが。いゝ「次郎」のちに〳〵　次郎ハ新道お小花處へ行忠五ハ宿をたしまふ　「小花屋娘お中」とふだ。次郎どん。きついものたねェ。前の。お松どんが。居ねェけりや。龜山へ斗。いきなさるな「次郎」こりやァ。めいわく。客衆さへ。來やうと云ハ。いつでも參りやす「お中」うそヲつきねェ　噺しの内に客大勢來り　お中さん。志厚さんの。鳥渡きねェと「お中」横座鋪でか　お中ハ座鋪へ行次郎も勝手の火にまたかつてあたる料理番も客大勢ゆへいそかしそふに　「料理番」八助どん。水を。賴やすぞ。「八助」アイ水汲も。てェ〳〵でハねェ「料理番」おまつどん。硯蓋持て行ねェ。奥へまだ吸物が。でるによ　客四五人來る若イ者料理番　お中さん。お松どん。お客かあるに「女」是ハ。五郎兵衛さん。よう御出なんした「五郎兵衛」けふハ御屋鋪から。御出遊した。隨分麁末の。ないやうに「女」あい〳〵。さあ。こつちへ。御出なんし「五郎兵衛」旦那。お上り遊せ　客へのこらす奥座敷へ行　客ハ風躰ハ。御大名の。勝手用人とも。云かつこふにて。お納戸茶屋。羽二重の。小袖に。淺黄。むくの下着。茶色の帶。立派なる。大小にて。京扇子を。ぱちさせ。髪を合せびんにて。元結を。四角に卷。宗十郎頭巾を持來る。跡につゝいて。貳人來る。是ハ勝手用人の。下役手代と。云なりの男ふりにて。郡内縞の。綿入羽織に。小紋の秩父絹の小袖。獨りハ。太織の羽織に。上田縞の小袖。はるか跡ゟ。棧留の布子に。小伯縞の帶。手に海黄縞の。風呂包を持。勝手に。

居やうと。するを「客」これ〳〵長助。酒でものみやれ「長助」ハイ 徐について行是ハ勝手用人の小使手附中間なるべし 五人なから。座鋪へ行「客」さあ。こんな平に〳〵「四人」ハイ、 此間にたはこぼんなと出る 「客」是〳〵。屋敷ハやしき。爰ハこゝしや。平にし給へ「四人」ハイ 女鉢肴硯ふたまる娘お中てうし持来る 「五郎兵衛」旦那。壹ッ召上られませふ「客」しからハ。初て 一ツ盃のみて次の男へさす 「次の男」傳六殿。お先へ 酒を呑所へ女来り 「女」五郎兵衛さん。お百さんハ。さして居なさり。やせん「五郎兵衛」ア、たれこれハねヱ。美しいのを。揃へてたのみやす「客」是ハ。ざんねんびんしけん。五郎兵衛かお馴染を。見やうと思ふたら「五郎兵衛」又旦那。悪口斗 段梯出る女郎あね来る障子のかけ占小野ニ 「女郎」お中さん「お中」サアきねヱ 女郎四人来りて並ふ客一盃呑て女に渡す 女盃を上座の女郎ニ渡ス女郎盃を横にまけてちつと斗呑て女に渡ス女ハ次の男へ盃を持行次の男呑て小盃になりて三人目へといふて女に渡す女三人目へ持行女郎呑て女に渡す又女三人目の男に盃渡ス 三人目の男呑て女に渡す女二人目の女郎に盃渡ス 女郎呑て五郎兵衛へ盃来る五郎兵衛へさしつめ四人目の新造ニきまる 「客」長助〳〵。どこへなと。いつて樂め〳〵「長助」イヱ御酒戴たで。やうごさります「五郎兵衛」西宮の舩頭と。堂前の。あぶらやへいかんせ「長助」イヱモ「客」いけ〳〵「五郎兵衛」サア〳〵 無理に長介をひつたて舩頭と一ツ所に堂前へやる 「五郎兵衛」賑に藝者を。呼ませう是おまつどんたれぞ頼やす「女」羽織に。しやせうか。男藝者に。しやせうか「五郎兵衛」梅太夫が。よかろふ「お中」おまつどん。梅太夫さんを。聞にやりねヱ「女」アイ 女は梅太夫方に行跡ハ女郎と客引〳〵になり座も少ししらけて居る所へ梅太夫来る 「梅太夫」是ハ。五郎兵衛さん。お久しぶりで「五郎兵衛」間違て。久しうお出會も。致ぬ。

山てのんだ。まゝかな【梅太夫】左様さ。宮本いらいで。こさりますー【客】ちかづのため。さそう【梅太夫】是れ。ありかたふ。ぞんじます【五郎兵衛】なんぞ。面白ひものを。頼やす【梅太夫】風流の。馬士ぶしを。お聞なされましたか【五郎兵衛】よかろふ〱【梅太夫】豊丸さん調子を。合せねェ【豊丸】よし〱 梅太夫鼻たかゝ、せきばらいなどする座頭豊丸、線ニかゝる 【梅太夫】エヘン△うたいわ知らず。儀太夫れ。しらぬわれらか。ふつゝかに。唄れ元よりしら糸の。難波の【お中】五郎兵衛さんへ梅太夫さんに。此間はやる。おいらを狐か。はらませたと云。唄を。あて身ふりを。させなんせ【五郎兵衛】梅さん〱。狐がはらませたに。しなさい【梅太夫】ハイこいつれ。ちとつらいねェ【客】しよもう〱 梅太夫せひなく狐の身ふりをする 【梅太夫】豊丸さん。うたいねェッ、テン〱△おいらを狐が。はらませて。御亭になろとは。わしや。やです。やです〱。やでもです。しんぢつやあでれ。なけれとも。人目はつかしけりや。わしややです。やですと云事れ。いわねェもんです【大勢】ハヽァ【客】是れ一ッ興〱。一ッ盃のみ給へ【梅太夫】これは〱 盃をいたゞくお中酒をつぐ おつと。ござんす〱【お中】梅太夫さんの。久しい。もんだ【梅太夫】いやもう。とんと。酒が。いけやせん。ゆふべも。二見やで。拳酒の。相手をしたりや。聲れ。大ェなしに。なりやした【五郎兵衛】一ッ斗ハ。よかろふ【梅太夫】イエ一ッござります【女】五郎兵衛さん。ち

つとあちらへ。お出なんし【五郎兵衛】なるほど／＼旦那ちと。お休遊せ 客少しあたんのていに見へて ウ、先／＼ お中お松梅太夫口揃て ちとげしなり。ませ 五郎兵衛始客へみな／＼床へ行【女郎】梅太夫さん。つき出しい。子と。一チ座。しなさつたか【梅太夫】イ、エ。一チ座ハいたしやせんが。此間中川で。後から。見掛やした【女郎】すかねエ。子だがねエ【お中】まだなれねエからさ【女郎】いけるのじやねエ【梅太夫】おかんさんの。くさすも。久しいもんだ 大勢口をそろへて ア、らつちもねエ みな／＼床へ行客床にて小聲に【客】此さゝら。さつと捨てさこそふらへはア、プウ 女郎すゝり客そらねいる【女郎】もし／＼【客】ア、きつく醉ふた 女郎たはこのみて客にのみ付て出ス【客】これハ／＼ たはこのむ一チ座の女郎三人なから來 あなたに。御休なんし。おかんさんお休なんし【女郎】アイお休なんし 皆／＼床へ行お動ひやうぶ引まわして まだ。お寒ふこさりやすねエ【客】されハ朝晩ハ。はた寒ひ などゝいひて色／＼おもしろき仕打有

【隣座鋪】【如雷】新ぼう面白イか【新五左衛門】田舍とはちかつたものだ といゝながらやま半紙を出して鼻をかむ【如雷】是／＼。主の紙ハそでねエ。小菊にしねエ。小菊を買ふなら。馬喰丁い上總や。五郎兵衛が所か。いゝ。たはこも。雨に四斤くらいの。國府かいゝによ。匂ひ袋の。やうなものハな。室町い。桐山三丁が。所からとりねエ。又きせる張せるなり。池の端より米澤丁の村田が。所かいゝ。主ハ誹諧もすこ。やらかしたな【新五左衛門】國て。ちつと斗して見たが【如雷】そん

なら宗匠へ。弟子入をしねェ。存義ても。金羅でも。祇徳在轉なりと。湖十なとも。よし。菊堂なりと。氣の有にしねェ。みなおいらか。心安。するからつい。出來るこつた。朱肉や。唐墨の。やうなものハ。古梅園か。所から。通てとつて。やろうろう石を。買なら。四日市より親父橋の。彌五郎が所で。買ねェ。筆も思恭か。流なら。御成小路の。せんちんしと云か。有【新五左衛門】そんな事より。三味線か。ならいたいものた【如雷】そりやァ。なを／＼安ひこつた。儀太夫三味線なら。五八ても。富八でも。豊後なら。文字豊でも。文字久なりと。芳丁の。竹澤園も。よし【新五左衛門】文字清と。やられ。どふしたの【如雷】何文字清か。今では。中村秀松か。女房になつて。子を持て。かみさんかぶだ【新五左衛門】とこに居るの【如雷】川岸の。富田屋と云のが。そだ【新五左衛門】役者が。茶やをするかの【如雷】するの段か高麗藏が内ハ。こうらいやとゆふ。芳丁に西川重三郎と云。人形遣ひ。ぞうしがへやと云て有。其外に中村や。嶋五郎。萬屋新万や。竹伊勢と云ハ。伊勢太夫が内じや。鹿の子餅ハ。又太郎か見世。向の角の八百屋ハ。大谷廣右衛門。いつくらも此類かある（しつたぢまんに色／＼の事咄ス所へ女郎來る）【お長】是おとよさん。ゆふべハねェ【お豊】面白かつた。ねェ【如雷】どこて【お客】梅本でさ【如雷】梅本ハ。ごうせいな。もんだ櫓下なとハ。のこらず。梅本の地だ。根津にも。店

があり。芳町でハ。子供屋也〔お長〕豊國さんの。內だねェ〔如雷〕豊國を。どふして知つて居る〔お長〕いつぞや。拳角力の時。出なさつた。ねェ〔お豊〕それ〳〵。梅の紋を付て〔如雷〕豊國が。拳ときてハ。凄ひもんだ〔新五左衛門〕日が暮じやねェか〔お豊〕また七ッ過で。ござりやせう（障子引たてひやうふ引廻し）お長さん。お休なんし（廊下ぱた〳〵と）〔女〕お長さん〳〵。ちよつと。きねェ〔お長〕何ンたェ（お長ハしこきのなりにて出る）〔女〕志厚様が。きなさつたに〔お長〕見通しにか〔女〕イ、ェ横座鋪で（お長横座鋪へ行如雷は氣を廻し廊下に立聞する）〔お長〕お前ハ。さつき。來なさつたじやねェか〔志厚〕裏の關口に。淸兵衛や。忠公が。居るゆへ。付合に。今迄居た〔お長〕又おいかさんを。呼なさつたか〔志厚〕おいかハ。脇へ出た〔お長〕聞にやるやつさ〔志厚〕歸りそふもねェか〔お長〕武サだから泊りハ。しやせん〔志厚〕そんならまた裏へでも。いつて來よふ〔お長〕何サ。かみさんの部やにでも。寐て居なさりやせ〔志厚〕それも。久しい。もんだ〔お長〕なんでもまつて。居ねェ（お長ハ出て行如雷ハ廊下にふら〳〵して居）〔お長〕なぜそこに。居なさり。やす〔如雷〕酒に。酔たから（寐所へ行すめぬ顔つきにて）唄ふ△かあい男に。逢ふ時ハ。すかぬ。こちらか。しこなしに（又女來りて障子こしに）〔女〕お長さん。あけてもよしか〔お長〕なんたねェ。明ねェ〔女〕セケントコノヲコヒキノ。カ　子ケヲ。トコリキニ。キツタ〔お長〕イキマカニ。シキコ、ウクサカンカガ。モコツテ。ク、ルクカ、ラカ。

ソコレケマカテケト。イキウクテ。ク丶シケ。サウサウイキ【女】そう云。やすよ 女障子引立歸る次第もなく来り【女】お長さん。鳥渡きねェ【お長】なんだの お長ハ出て行如雷てうしの口より酒をのむ【お長】ヲヽ能呼事だ ト云てお長座へ入ル如雷まじめになつてすまし顔にて居るお長心付ていろ〳〵とつとめる【お長】たばこ。のみなさり。やせんか 如雷返事もせずにらみ付て居る【お長】お前の。顔にやァ。何かきつく出來。やしたねェ。是にやァ。和國橋い。實路孝を。付なさりやァいゝ【如雷】そりやァ。色男の。する事だ お長指にて如雷が顔をつきながら【お長】お前ほと。色男なりやァいゝ【如雷】何ンの事た。此ふんばりめハ。いゝかと。おもつて。喰のめすな トいゝながら手を打【お中】あいゝ【如雷】是お中さんとやら。此賣買女。さけて。くんねェ【お中】どうなされます【如雷】あんまり。心いゝとおもつて。何ンのかのと。茶にしやァがる。其上野郎の根づけを。見るやうに。蒲團と。おれ斗置て。廊下斗。そゝりやァがる【お中】お長さん。お前も。どこへ行なさつた【お長】どつこへも行れし。やせんが。隣座敷て。煙草のんた斗さ【如雷】何ンだ。こいつれ。うぬがいゝやうな。事斗。打殺されんな 盃ふたたふり上る【お中】お長さん。お前れあつちへ。いきねェ お長ハ勝手へ行女共来る新五左衛門寝とぼけはだかにて出ル【新五左衛門】どふだ〳〵【如雷】マァきゝねェ。ぬしも知つて。居る通りだ。其上。今も。隣て。煙草のんたの。馬を呑たのと。おれが目をば。こんぺいとうの。附目。太鼓二だと。思ふてふな。人を附にした 指口を揃て 何サ。あの子も。そのやうに。悪敷

する。氣もねェけれど【如雷】何ンたァうぬらまで。上ヶ下ヶを。取な 次郎勝手より聞つけ飛んで來る 【次郎】とふで。ごさります。あの子が。氣にいらざァ。外の子でも。お呼なんし。先。氣直シに。ひとつお上りなんし【如雷】爰の。どぶ酒が。くらわれるものか といゝながら大さらをほふり出す次郎新五左衛門やう〱たきとめければ 【如雷】留るな〱 次郎新五左衛門やう〱とたましてむりにかたにかけて連行 【如雷】ぬし達れ。どこへ連て行。此分じや。男が。たゝねェ【次郎】そんな事いわすと。佃の。ひがしやへても。行ませふ【新五左衛門】いやもう直に歸ろふ。門かやかましひ【如雷】門が。どふするもんだ。喰付れしよまひ【次郎】それでも。主が。氣をつかい。なさりやす【如雷】氣を。つかつても。いゝ。打捨ておけ。煤掃にれ。出る【次郎】まあ。なんでも。お出なんし 漸〱とたまし二人して會塲の方へ行 【若ィ者】どふもいけねェ。客だ【志厚】とんだ賑な。客じや【お中】いゝもふ。いけるのじや。ごさり。やせんサァ二階へ。御出なんし お長お中志厚三人二階へ行 【お長】お中さん揃た。とんちきだねェ【お中】お前が。何ンのかのと云なさるからわたしや。そばで。氣をもみ。やした【志厚】野郎買と。見へる お松來りて 【女】わたしも。芳町の。俵屋にも。居やす。新道の。二文字やにも。三四年居やしたが。あのやうな。若衆買は。見やせん【志厚】ひやうたくれ。ゆふてくの。揃ひた お長お中口を揃へて 【お中お松】志厚さん。お長さん。お休なんし【志厚】もちつと。咄シねェ【お中お松】後にめェり。やせう お中お松勝手へ行お長障子を引立て 【お

長】忠兵衛様ン清兵衛様ンハまだ關口にかヱ【志厚】今日ハおかるとおりゑと。一チ座して。梅太夫で。さへて。居た【お長】お前ハ。誰を呼なんした【志厚】誰を呼ものだ（お長志厚がひざをしたゝかつねりながら）【お長】さあ。いゝねヱ／＼【志厚】ア、いおう／＼【お長】誰を。呼なんした【志厚】爰からいつた。大坂女郎さ【お長】あの子ハ。どこに居るねヱ【志厚】何屋に。居るか【お長】名ハ何と云ねヱ【志厚】お鶴とか云た【お長】何名を。わすれるものた（なとゝいゝて色ゝ面白きしうちこと／＼く有折から廊下ばたと）／＼【客】どうだ。又さしかな／＼【お中】アイ晝から出て。居なさりやす【客】又ッ出ものか【お中】お前ハ又。今までどこに。居なさりやした【客】表櫓に。居やした【お中】表ハ。永楽屋にかヱ【客】何サあのやうな。變化物屋敷へ行ものだ【お中】何。今じや出やしねヱ【客】尾張やで。珍ひものを。呼やした【お中】誰をヱ【客】このごろ名代の。六部女郎さ【お中】おつな子だねヱ。そして。つれ衆ハヱ【客】外の者ハ。土橋の。霸やへ。いつたから。おれ獨りきやした【お中】そんなら誰ぞ呼なんし【客】藝者を。拾人斗。呼んで。くんねヱ【女】とんだ事云なさる。よし／＼。わたしかいゝやうにし。やう【客】おまつどんで。なけりや。ならねヱ（おとつわけいしや呼に行）【客】おいせさんハどうしたねヱ【お中】あの子ハねヱ七さんと色をしてねヱかぶつて。居なさりやす（女お松来る）【女】七兵衛さん。こゝ呼にやりやした。利中さんと。

繁さんと梅太夫さんが。來なさり。やす【客】よし〳〵【梅太夫】豐丸さん。こつちだ〳〵こりや七兵衛さんお出なさりました（利中座敷へ行と獨り角力のまねをする）【利中】すまふとろふ。ならこう【繁太夫】かない〳〵かないません。めく〳〵らに【客】とんだ事たとんだ。茶釜【梅太夫】茶釜〳〵がまがまたりの大臣【繁太夫】大臣〳〵大臣の所へ毛がはへた【利中】はへた〳〵はへたとれ物くさ太郎が娘かへ【大勢】ハヽア【梅太夫】お肴一トツ。出ます所が中村の。仲藏【大勢】よかろう〳〵【梅太夫】△皆樣の。御ひいきにて。一チ郎別當と。たいにんもたる。左衛門祐經【大勢】いよ〳〵【お中】秀鶴さんとれ。おそろしい【客】繁さん一トツ頼やす【利中】私が出ませう△藤兵衛さんがお花さん。〳〵と。云なさつても。お花さんれ。やです〳〵と。云なさります【大勢】きつし〳〵【客】聞か〳〵ヱヘン△こいつれ〳〵。これで。やぼなら。しよう事か。ねヱ【繁太夫】旦那の。又八は。利中さんのより凄ひれヱ【女】もし七兵衛さん。誰ぞお呼なんし【客】今夜れ。さへ一ト通りにしやう【利中】さへ一ト通りの名方。ホヽホヲ【女】呼やすよ【梅太夫】お呼なさるのさ【繁太夫】呼ねヱ〳〵【客】さわぎねヱ〳〵（女ハ女郎呼に行利）（中豐丸繁太夫梅太夫連ぶしにてうとふ）△とうなすほとの血のなみた。落て。かぼちやにやァなりやしよまいキタきた〳〵きたさのさの〳〵。讃岐の金びら（女郎來り障子の外ゟ）【女郎】お中さん【お中】サア〳〵きねヱ〳〵

（女郎来る七兵衛酒を呑てさす）〔女郎〕さつと御上ヶ申や。せう〔客〕まづ〳〵〔利中〕おこうさんにハ。まだ私ハ。間違て〔女郎〕ハイお頼申やす〔利中〕是ハ〳〵〔客〕利中さん。一ッ拳。まいろふ〔利中〕サアめヱり。やせう〔客〕ゴウサイ〔利〕ロマデヱ〔客〕バマ〔利〕ロマとつてヱ〔客〕キウヤア〔利〕トウライとつてヱ〔客〕かなわぬ〳〵（お長小便に行て障り座敷騒なれハそつと出けれハ駒染の七兵衛なり名代の女郎居るゆへに客ハ知らぬふりにて座敷へ行）〔お長〕おゆるしなんし〔お中〕お長さん。のみねヱ（おこう煙管のみ付てお長にやる客盃を持て居けれハ）〔客〕一トツ。あげやうか〔お長〕ハイ〔繁太夫〕お長さん。中川でハ。ひどひ目に。合せ。なさつたねヱ〔梅太夫〕何拳か（お長煙草のみながらひけをなでるまねしながら）〔お長〕何。そうもねヱのさ（お中きせるをふりあげてお長をたゝくまねして）〔お中〕髭なての。きん〳〵か。にくいの〔お長〕イヤいつてめヱりや。しやうあなた。ゆるりと。おこうさん。お中さん。皆様ンこれに（お長へ出へ行）〔利中〕問ひませう〔梅太夫〕とわしやれ〳〵〔利中〕刀ハ〔梅〕政宗〔利〕小袖ハ〔梅〕羽二重〔利〕羽織ハ〔梅〕さつりめん〔利〕男ハ〔梅〕權右衛門〔利〕女ハ〔梅〕權助ハ、アまたた。まけた〔利中〕どふだ。凄ものか〔繁太夫〕變化るで。まいろう〔利〕き給へ。〳〵〔繁〕ばけるハ〳〵〔利〕茶釜ハやくわんと〔利〕息子ハ〔繁〕とつざま〔利〕かぼちやハ〔繁〕とうなす〔利〕娘ハ〔繁〕かゝさん〔利中〕ハ、アおそろ〳〵〔繁太夫〕どふだ〳〵（鐘なる）ゴン〳〵〔客〕明るそふな。歸ふ〳〵（女郎お中口を揃て）まだ〳〵。もちつと。

お出なんし【梅太夫】歸ろ。ひよこ／＼三ぴよこ／＼ 豊九三味線引揚繁太夫利中梅太夫 △六ぴよこ。七ぴよこ。八ぴよこ／＼。九のぴよこ／＼。十ぴよこ／＼。しよんがヱヱ【客】歸ふ／＼ 繁太夫梅太夫利中もとも／＼ まだ。おそくれ。ござりません【客】いや／＼。歸りやせう どや／＼と勝手行お中へ先へ行てせん頭をおこす【船頭】船ハとふに。きて居やす【客】サア／＼そんなら。此間に【おこう お中】此間に【利中繁太夫梅太夫】ハイよう。お召なさりませ 客ハ乗物にのり歸る藝者へのこらず勝手に噺して居る【隣座鋪】客手をうつ【女】ハイ、【客】歸るから。五郎兵衛を、呼てたもれ【女】ハイ五郎兵衛さん／＼【五郎兵衛】ヲイ／＼【女】お歸りなされ。ますと【五郎兵衛】よし／＼。駕籠ハ來て。居るかの【女】アイとふから。待て。居やす【五郎兵衛】サア傳六さん。新介さん。歸りやすぞ 客羽織など着て座敷へ出傳六新介目を摺ながら【客】眠そふな。顔じや【五郎兵衛】お中さん。御酒を持て來て。くれねヱ【客】酒より歸ろふ／＼ 客先に立て行後より女郎不殘送る【女】お腰のものを 銘々駕籠などさしい籠にのる五郎兵衛あとへ歸り【五郎兵衛】是。おまつどん。長助さんが來なさつた。なら靜に。跡からきねヱと。云ておくれ【女】アイ／＼【女郎四人】アイおはゞかり。申やした【お中 お松】よふ御出。遊しませ 客へみな／＼歸るよこ座敷にて志厚も目を覺す もふ夜か明た【お長】けふハ。居ても。よかろふ【志厚】歸らにや。ならねヱ お兵帶しめて志厚に羽織など着せて二人小座下へ出る【お中】お歸り。なんすか【志厚】此間にめヱり。やせう【お中】そんなら。船を云付や。しやう【志厚】船じやァ日立から歩行かよふござりやす【女】お歸りな

んすか（そうりをなおす）【志厚】是ハはゞかり〳〵（志厚出て行けれハお長何か用有けに）【お長】志厚さん〳〵【志厚】何〳〵（志厚立歸るお長及ひこしになりて耳に口を寄て）ナ、【志厚】よし〳〵烏啼カア〳〵烏の聲に。目ハ覺て。殘ハ枕斗なり邯鄲ハ五拾年是ハ一チ日一チ夜の樂もきへて跡なき梦となりにけり

通言

○ばからしひ

○よふあてなさつた

○けしからねェ

○あゝらつちもねェ

○よくいふものだ

○ついぞねェ

上總木綿（せうのなき客を云）

ひやうたくれ（悪敗客を云）

とんちき（右同斷）

○うそわねェ

○とふせふのふ

○ほんにか

○きいてあきれる

○よしか

○御氣の毒蝿のあたま

かぶる（もうせんかぶる事也芝居ゟ出たる言也）

いきな男（男にかきらすすいたと言事）

大吉（小せうわるト云事也）

ゆふでく　田舎者を云

本所の穴蔵　しつふかを云

長竿　悪敷するト云事也

出もの　右同断

ちよゝら　辯口にこあやなす人ヲ云

ちやら　うそつく人になぞらへて云

黒ひ　役者評判記より出たり吉の事也

白ひ　右同断　宿の事也

蟲かいゝ　押のつよい事ヲ云

喰のめす　あやなす事父馬鹿にするヲ云

打捨て置煤掃にハ出る　かまわぬと云事也物の見へぬ時云出を諸事に用る也

右の類。専に。用る外に。唐言と。名付て。五音を以て。云事人の知る所なれど。爰にあらわす

○アカサタナハマヤラワ　此通りへ　カ

○イキシチニヒミヰリイ　此通りへ　キ

○ウクスツヌフムユルウ　此通りへ　ク

○エケセテネヘメヱレヱ　此通りへ　ケ

○オコソトノホモヨロオ　此通りへ　コ

右の如く。カキクケコの。五音の字を付言也。譬ハ。客と云時ハ。キキヤカククヌ。おんなな

どゝはねる時ハ。付字にてはねる也。女ハオコンナとオの字へつく。コの字を。はねる也。清濁ハ。本字に。直に濁也。此外に。し付。き付。などゝ云て。其時に。おうじて。一チ字置に。付る也。知れさる事を。云時。はやく此事を。考べし。又此通し言葉も。ロ付て云時ハ。いかやうにも。はやくいわるゝ也諸人知る所なれとも知らさるものゝ便にと爰にあらわす

○とんだ茶釜の辨

是ハ谷中。笠森に有し。おせんが。美くしきを見て。顔と。顔と。見合。能女とも。誉られず。茶釜にならへて。とんだ。茶釜ト。云出したると也。

○同藥罐と變化る辨

おせん。引のいて後。山下に。水茶や出る。又此美しき女に。譬とんだ。茶釜がやくわんと。變化たと云也。

○獨りてころん啼と云辨

是ハ。丑の顔見世。狂言に。坂田佐十郎。云し事也是を。今専云ハ。女藝者。又茶や舩宿の。女房娘。

女郎の目を忍ひて。ころふと云。通言有。なくと云ハ。泪を出すと。いふ事にや。くわしく。あらわす時ハ。下懸りとなる。由而りやくして。あらましを。記す

夢中散人
寝言先生著

三聖三評
文車之文　全
此書ハみの精出て吉原の情
藝者の情楽道の情を語る
近刻

蒲芋堂住錄

蕩子筌序

夫動天地感鬼神者詩也。淫人心破家業者色也。詩有正與變。則色有眞與僞。是故不好詩如好色者。何用詩解爲哉。吾友茶釜先生頃日以吉原辭解毛唐人之詩。其解也不啻解人頤耳。吉原之善惡。無一不施其解也。嗚呼非是先生之好詩及色。則何以有如此之詳且盡者哉。以是觀之。諺所謂飛茶釜者。卽先生之謂也乎。遂爲之序。

壹貫三年十三刀

陶鐵房撰

蕩子筌枉解

五言絶句

茶釜散人著
門人藥罐子輯

題袁氏別業

遠山といふ女郎に淫り身上蕩となりつゐにこのむところのみちなれバ中の町へ茶やを出すその名をしきに遠山屋といふ別業ハ下やしきの事なれどもちや屋とみるへし

主人不相識　ていしゆにはじめてあふ

偶坐爲林泉　此くるわのふうけいを見女郎かもとめ申たい

莫謾愁酤酒　ちさうをいたしそんのよふにおもひめさるな

嚢中自有錢　こんれ〳〵もつねに此とほりておんじやると右大辯切のはながみぶくろをふつて見せる新五左とみゆるいやみ甚し

夜迯趙縦

女郎の諱名なりむツ半がえりの客を大もんまでおくるほりからあかるきやくとミゆる

趙氏連城璧

和氏が璧ハ天下ぶさうの名玉趙の字にゐんあるをもつてれんじやうといふむかし趙卞和がたまをえて十五城をもつてかえんといふ故事あり今此趙縦がきやくも町やしき十五ケ處を賣てうけいたさんとさうたんきハむるゆへにいふ璧玉ミな牝口の事とするへし言心はこのたまめがおくりていつるとなり

由來天下傳

とふからひやうばんの間かんじん

迯君還舊府

旧府の字をミれハ武左らしくミゆる舟にてかえる

明月滿前川

月中よりきたるがどきかの璧とのが客の目さきへぴら〳〵とついてゆくやうにミゆる月と水とてらしあわせてうつゝになりてわれからがつてんがいかぬ

易水迯別

むかし燕の國の太子丹といふ人秦の始皇に怨ありて荊軻といふ侠をたのミ始皇をころさせにやりしに易水といふところまでおくりて別れをなす今此丹七といふおとこもミうけの相だんきハまり三百兩までねぎりかけてもていしゆ穴をミかけて五百兩一錢もまけハないといふそこで女郎も客もていしゆをうらむることとあたかたきのごとくほうばいの侠をたのミ今青女郎をぬすませにやるうらのほりぎわにて別れをなすその事あい似るをもつてたいとす○此丹七がうでに雌雄の燕をほりものにして二世三世のやくそくをなす人これをしつてちや屋をはじめ燕丹〳〵とい

ふ

此地別燕丹　いのちがけのしごとなり
ねんごろにたのんでやる

壯志髮衝冠　ぜひぬすミおふせてミせましやうもしそんじなばいきてハ御目にかゝるまいと
たちまちかミさかだちあかり三升の紋のつきたる頬かふりをつきぬくいきほいあ
り

昔時人已沒　しゆびよくぬすミおふせ今ふうふとなりてゐるそのゝち此侠大しゆとけんくわが
つもり〳〵てないそんとうちミがおこりて死ぬさためないうきよちや

今日水猶寒　今このふうふがなれのはてあさゆふつけふりもたえ〴〵一家一もんも見かぎりす
こしハかりのしよたうぐをうりぐひにしてゐたりしがもはやうるべきものもなく
たゞあるへきものハ井戸の水ハのミしだいかめへ水ハくミしだいやつはり水ハミつのまゝでゐるといふ事
を今日水猶寒といふけつく妙甚し

贈喬侍御　喬木なにがしとやいえる侠侍あり此侠ふか川へんて名たかき大盡よく磯ぜゝり
の妙をえたり一万両よの金をたちまちにつかひすてけりそのころよしはらあげや
町に二かいを雲格臺とごうして大なるあげやありけり宇頂天へものほるべきいきおいあるとてうんか
くといふとぞ此ていしゆさるものにて當時の客をつらんとて名たかき大じんを二十八人ごくざいしき
にいたしおごりのていをかゝせおきけりかのきやん侍大きんをつかふたれどもおかばしよで名のたか
きをにくミ加へさりしを好事のものあわれんでこの詩をつくるといふ

漢庭榮巧宦

かんていハ吉はらをさしていふ榮巧宦とハあまり大金をつかひたる客にもあらぬものをいつはりておほくかいてあるをいふ

雲閣薄邊功

おか場處て名のたかきハとるにたらぬといふこゝろ

可憐驄馬使

此客白毛馬のふとくたくましきにのりかよひけれハ名とす

白首爲誰雄

さきだつてのなじミの女郎をハとふにうけだしたれバもはやつくすにもおよばぬ事なれともうんかくにいれられぬ事をさんねんにおもひしらかあたまをふつてなほふか川かよひをする

子夜春歌

子夜ハ女郎の誹名なり此女郎の一客何がしとやらいふ人とかくうたがひふかくそこらちうをくひちらしあるくゆへにはるハ人の氣のうきたつものなれバあたしこゝろをうらミてつくるあわれふかし女郎の眞情とミゆ

陌頭楊柳枝

とてのやなぎのえだもそろ〳〵あたミかゝりてくる
わがおもふ人もそろ〳〵わきごゝろか出で來る

已被春風吹

はるのかぜのあたゝかなるにあちらこちらへふきまハさるゝやなきなところにつけてもおもひがますいとゞこゝろのおほいものをいぢのわるいひくてあまたがあつて

妾心正斷絶

かれにつけこれにつけおもひたえなんとはかりしとふてゐるに

君懷那得知

此こゝろもしらずよその色めとくさりあふてゐるもしらずふかきうらみ言外にミゆ〇評に曰まぶがあるか年がちかいかねとうぐかふるいかきをつけべし

南　樓　望

眞先へ客にいざなはれてゆく突出しの女郎とミゆるしからずんばかやうのこゝろづかひはなきはずなり

去國三巴遠

ききやうをさりてより文の便もなくもとよりおやもとハれき〳〵なればしさいはいはれずくろうにおもふてゐる

登樓萬里春

二かいより見わたせば一めんに春げしきミち〳〵てゐる

傷心江上客

屋かた數十そうかゝりてありあるひハうたひあるひハまふをミるにつけてもおやざとがおもひいださるゝ

不是故鄕人

もしやおぼへた人てハないか同町のものなどがきてハゐぬかあの客人ハ見たやうなものじや〇評に曰今二三ケ月こたへおふせるとそろ〳〵まふのなかだちもできるさけのふうミもかくべつになるほうばいの手操も見ならふてわうちやくぎもてる今まで神やほとけのこわかりしもうるきになるそふなる　とぶちころすえてものも上手になるどなたにもこふしてあげますといふやいなや女郎一疋〳〵

汾上驚秋

汾ハ川の名なれどもたゞ水のあるところとミるべし江戸町一丁め中の町左右がわとミゆる

北風吹白雲
萬里渡河汾
心緒逢搖落
秋聲不可聞
蜀道後期
客心爭日月
來往豫期程
秋風不相待

七月中へとうろうどきなれバものうきあきとおもわず十五日の四季施のまゝ
でもすゝしに八月になるともふ小つかはらのかたからあきかぜがふいてくる
幾千万里といふ事もなく此ひやかぜがふいてひと忍ものから
だん/\ときん/\のものゝたけれバならぬしミ/\すかない
いろ/\工めんのわるい時せつ田町のまぶがまたまけ
てかぜの木のはをふきおとすやうにまるはたかになる
蚤蚊があつてもなつがよいあき
かぜのひや/\がわつちやいや
蜀のくにへ天下ぶさうのなんじよ也いろ
/\のかんなんをしのんでゐるにたとふ
ねんあきの女郎をやくそくして一日/\
一月/\とゆびをおりてまつてゐる
やうやく來月何日にはミせ
をひくとあんどしてゐる
あきかぜへつらきものなればほかにやくそくの色あるにたとふせつかくこれまで
かよひおふせ近日つれてゆかんとおもふてゐたになさけなやかの色めと大門をこ
そく/\

先至洛陽城
日本ばしへんへたなをかりてのめ〳〵としてゐる

照鏡看白髪
このさとの法言にとしまをばゞといふ故にしらがをみるといふ

宿昔青雲志
つね〳〵より内しやうのよい留守居の女ぼうになるかまたハかねもちのむすこの女ぼうにならふとおもふてゐたに

蹉跎白髪年
もふねんあきまへになりていかにわッちやよくどふしいとてぼからしいよいきやくハみんなきれる

誰知明鏡裏
此なげきをたれもしるまいとしひさしく此かゞみがしつてゐる

形影自相憐
しだい〳〵にばゞくさふなつてくるミヨバミるほど眉をとるといけぬとをミづからさとるまたしながハふかゞはの相があるとしるべし

同洛陽李少府觀永樂公主入蕃
本町へんのものとそげてかしへゆきしに永らくやのはやり女郎がていしゆとまぶをして内ぎにミたされせつかんのためかしへやらるゝをミて此詩をつくる公主とハかない一ばんの女郎なれバ御姫さまのやうに大じにしたるをたいそふにつくる詩じんのきミやうぢや

邊地鶯花少
へんちといふハ五町のほかなればいやしんじていふかしやてつぽうミせハへんどのゑびすもとうぜんたりはるになつても櫻もうへずうぐひすのさへづるやうなお

もしろきじやうるりながうたもなし

年來未覺新
正月まつのうちさへさらばなはさ
ておきかゝばな一まいもさかず

美人天上落
しかるにこのたびえいらくやより女郎がかしへながさるゝハ
二かいからおつるやうな夢のどしふびんなとぢや

龍塞始應春
りやうさいやつパりへんどのとすなはちかしをさしていふこよひ方ほんの女郎が
きたれバばかななじゝの客がやつぱりまけぬつらしてついてゆくかある女郎がは
どにもなることとてかゝばな一二まいさかせるやつもあるべし

靜夜思
月もさへよもしつかなれバ心つかひもなしとさ
るやしきもの吉はらへはしめて行よせバよいに

牀前看月光
女郎がよひからざしきをあけてよりつかすそこでえてものゝ月かいしやうにうか
んでハうさぎもなゝをはしるとうたひかけるまとのまけおしゝといふべし

疑是地上霜
なにかよひからしぶい目をゝはりて月とにらゝあふてゐれバ月か三ツ
にも四ツにもゝへる庭をゝれハどふやらしもがふりたやうにもゝへる

擧頭望山月
もふなんどきてあらふはやくよがあけてくれゝバよい
がとしやうべんとたばこばかりのんでほつとしてゐる

低頭思故鄕
いつそうちの女ぼうとたのしまふならとんだとで
あらふにたわいもない金三歩うつちやるなさけないとぢや

怨情　きやくをうらむる
じやうをのふ

美人捲珠簾　しゆれんハのふれ
んとミるがよい

深坐顰蛾眉　とこばしらによりかゝりてひごろうつくしい
かほをパふきミそをなめたつらしてゐくさる

但見涙痕湿　そのうへなミだをはら／＼なが
してしごく／＼やしいとゝミへる

不知心恨誰　どの客をうらむるやらしれず○評に曰これまつたく女郎の山で五十両も百両もとらんとちや屋とぐるになつてしかけたところか客もさるものにてそのひけみちのあなをミだしおもひもよらずかねのヿハさておきかへつてきれ多がくるといふやうなヿゝミへたりたゞ一とほりのヿにてまヿのなミだハでぬものなりやゝもすれバなきだすハおほくはむかし犬どうぜんの客にむごくつらくせられしヿをおもひだしなくもありあるひハかさかきなどにふとであひてくやしかりしをおもひだしてなくもありあるひハたばこのこなを目へいれてなくもありこれらミな手くだのなきにてまヿのなきにあらずしかれバ此詩のとほりでおほきに泣へまつたく山がしそんじてのヿゝミへたりあいてもなくひとりなくにてさつすべし古語にほんになくとき地女のこゑあはせかんがふべし

秋浦歌　おくざしきよりうらの田浦をミて
身のうへをなげきたるをつくる

白髪三千丈(ハクハツサンゼンジヤウ) としまをば〻といふの故事(こじ)まへにゝへたりはくはつといふもとしまと いふよりきたる侠者(きやんひと)のうたにおまん尻(しり)のけは大坂(おほさか)までとゞくといふのるいそのながきをたいそふにいふ

縁愁似個長(ウレヘニヨツテカクノゴトクナガシ) 一どねんがあけてあまりしやくきんもおほくせうとなしに又自前(じまへ)に出店(でみせ)してさうをうのたのもしき客でもゝつけやうとおもひのほかぶしあはせこれをおもへバ頭(つむり)のけもぬけるやうにおもはれしらがもはへるやうにおもはるゝ

不知明鏡裏(シラズメイキヤウノウチ) かふきがついてからかゞみへむかへばコハばからしいかほのやつれたとではあるわつちぢやない〳〵

何處得秋霜(イヅレノトコロニカシウサウヲエタル) わつちがつむりへしもがふりハせまいしし〳〵すかない○評に曰このさともとけいはくのよりあいとハ申ながらはやり女郎にはわかいものばゞをばじめさかたをむしりくれるやらなんぞめつらしいものハ申におよばず五文十文がものでも晦〳〵ハかふてやるかぜでもひくと大じにかけて用をきくサアはやらぬがさいごよんでもへんじさへせぬくひものハさておき錢(ぜに)三文かすものにあらずかくのごとく同じくるわにすんでたがいにはなのしたのかせぎをしながらげんきんた手合(あい)ぢやものとほい江戸(えど)からゝずしらぬ客になんのしんじつがあらふぞ金がありやこそなれ申さずとてもずいぶんぬからぬやうにきをつけ給ふべしわるくすると女郎にもわかいものにもはなげ三千丈(じやう)とかへりくちをかけらるゝもしれぬことなりおそるべし

獨坐敬亭山(ヒトリケイテイサンニザス) けいていざんとハ蓬萊(ほうらい)さんのかたちをこしらへ松(まつ)などをうへてそのしたにいけもせぬなま大こんのわきりを無性(むしやう)につゝすこし蛸(たこ)のあしやたまご柿(かき)などの錢(ぜに)のいらぬはかりをつゝもつて出るしかもあたい連城(れんじやう)ふろうふきの大こんにハしかず

衆鳥高飛盡

しうちやうハしんざうかぶろたいこもち等をいふわつ〳〵といふてたかわらひしてミな〳〵なくなる女郎もほかとにかこつけてたつてゆく

孤雲獨去閑

こうんハちや屋なりもとくもをつかむやうな手合ちやといふこゝろたつたひとりのちや屋もおしきせのはなしかすんでかへるいよ〳〵さみしくなる

相看兩不厭

だいのものと客とにらミくらしてゐる

但有敬亭山

だいにかざりし山ばかりでそののちハたれこぬてもなくふられた〇評に曰此客一たい大のしわんばうてしかもミへばうしんさうのひとりもふたりもあげたいこもつれてくれともかねハやらずむしやうに大じんづらしておほたばにでるのち〳〵ハ女郎屋と茶やをふミそふにミへるぢやによつてかくのどくはからうとミへたりまゝ此るいある事也

見京兆韋參軍量移東陽

もと京方きたる女郎たり參軍といふハこの女郎のとこかんじんにていかなるじんばりといへともほこさきをましへがたきといふこゝろでさんぐん〳〵と申けるをつゐにほんの名とはなりぬしかるにさきだつてねんもあきさうをうのものとふうふになつてかんだへんにむつましくくらしけるに女郎かいのなれのはてあさゆふのけふりもたえ〳〵なるにおつとがながのわづらひ一衣をぬぎ小だうぐをうりしろがへやうやくくわいきハしたれども今ハはつべきにもあらずふうふちのなミだをながしてぜひなく又のつとめとでかけてもとの女街をたのミ江戸町一丁め東屋といふところへゆきけりあはれんで賦すといふ

朝水還歸海

すべてのミづハうミへ〳〵とゆくかさたまりのミちなり

流人却到呉　呉とハよし原をさしていふ呉楚の地美人をいだすところなれハかりもちゆ此女郎が身のうへねんがあいて江戸のかたへかえるこそみちなるに又のつとめにうられてゆくハさかさまどなり

相逢問愁苦　この人にぢきにあふて心のうちのかなしさをとふならハ

涙盡日南珠　なミだがたまをつらぬくといふやうなだんでハあるまい○日南郡といふところに鮫人ありなくなミだたまとなるといふ故事あり此語をかりていふ○西行がいはくあのなミた一しづくが六分ヅヽたかいものとありしかれバなミだにもねうちがあるとミへたりたまになるもいつはりとハいふべからず

臨　高　臺　ほりのふなやどの二かいとミへたり爰迄おくりてくる客なれバよほど女郎のためになる客とミへるしかしながいとはあるまい

相送臨高臺　きやくハふねでゆく二かいよりミおくる

川原杳何極　兩國ばしのへんまてミおくれどもそれたさきはつゐにミへぬ

日暮飛鳥還　日のかいくれにハ諸鳥ねぐらへかへるものなりてふどそのごくこの客まいはん〳〵きたりしがこのごろたへてこぬかつてんのゆかぬ事ぢや

行人去不息

一どかへりてよりさきへ〳〵とばかりゆくやうに此はうへはふたゝびこぬよく〳〵あとにてきけばつけのぼせのよし

班婕妤

むかしのなたかきびじんなり此女はつめいのものにてゆくすへ人のねたみそねミをうけてみかどの御ちやうあいもおとろふるとをしりてほか事にかこつけて長信宮といふところへひきこんでゐたとがあることの班太夫といふ女郎も仮病なかまへ客をのこらずきりそのうへおもふおとことさう〳〵ふうふになるたくミをしてひきこんでゐるとても長病の事なればすこしバかりの金でももらはれそふなものといふはかりとなりゆへにせふよにぎしてつくる

怪來妝閣閉

きやうだいへこミがたまりてゐる
ざしきハたてこめておく

朝下不相迎

朝とはかれらがミせへでるを役所といふゆへに一しほ大さうにいはんとて朝といふ二かいより下りきやくを迎ひに中の町へゆくこれもおのづからせぬやうになりぬ

總向春園裡

しゆんえんハにきやかなところをさしていふとなり
ざしきてハげいこたいこからたふつまふつする

花間笑語聲

いまはなをやりしとミへてわかいものがむしやうにいけぬくちあひをいふたいこがむしやうにそやすげいこがこゑも一てふしあけるしやうつかのばゞもきものつぶれるやうなこゑでたび〳〵わらふ〇千鳥が日人のこゝろもしらずおもしろそふにうたひくつさる　此句法

雑詩

この詩分明にみうけのばれたる女郎を賦すとミへたりミるものきくものミなくになりてとりミだしたるていなり

已見寒梅發　去年とうろうじふんよりミうけのさうたんきはまりてつけ少々わたりたまゝでぎんきんがさいかくならずそれ故もふ十二月のするにもなるかんばいがそろ〳〵わらひかけるわれをわゝふかとねたまし

復聞啼鳥聲　つい二月にもなつてしよちやうのさへづるにつきてもいつそすかない

愁心覩春艸　はるのくさハ一しほあを〳〵としてこゝろうきたつものなれどもかえつてなげきの情をおこすとはるのくさにいひよせていへともじつハミうけきはまりたるうへたれバけしやうにもつくらいニもおよばずとかの毛もぬかすにおくコハあきれいんす

㒵向玉階生　床まへへくさがはへてくるもしれぬとうハべハいつてしつハかの玉の門もミへぬやうに毛がはへふさがるもしれぬとうちなげきたるていなり玉階　玉門ミな牡口のとゝしるへし〇志道軒の歌仙にもはへたはへぬとわらふ春艸とありもつて證とすべし

鹿柴　ミなミがしほりばた垣のあるところとミへるかたかわハちや屋なれどもおほく女郎のまぶぐるひをするところなれバ人よんでまぶちや屋といふ

空山不見人　空と山とミなふつゝかなるものゝあつまるところなり女郎とうまいとをしながら金をもらふくめんばかりする手合なれバたとへて空山といふ人をミずとはひけ四ツすぐるとまぶといぬはかりとほるところなり

但聞人語響　なにやらもや〳〵するさてハ我方さきにきてゐるものがあるとミへたり

返景入深林　返景夕日のことなれどもこゝてハ挑灯とミるがよいそりや人が來ると九郎介いなりのやしろのうちへにげて入るどふやらミしりたやうにてうちんのひかりがおふてはいる

復照青苔上　そこでおとこをミせまいとうちかけのすそへかくしうつむいてゐるすそもやうのきんして苔をぬふたるにゑいじあふていよ〳〵めだつとなり青苔分明にいしやうのとなりはくらくてんが詩に青苔衣に似て岩のかたへかゝるもつて證とすべし

竹里館　竹の繪をむしやうにかきたる女郎のざしきなりじつハいやミのさい上ことにすこしちやのゆのはなしのきれはしをきゝかすりてゐる

獨坐幽篁裏　はじめのほどハかぶろも一人つかひけるがいまでハそれさへならずたゞひとりとこばしらによりかゝりてたれもかまひもせぬにたかく出ておる

彈琴復長嘯　琴とあれども箏の事とするべしいけもせぬことをひきたゝくともよもあけじにひのやくそくなければとよくおのれかみのうへのありやうをうたふてゐる

深林人不知　ちくりんをこのむほどあつて一たいしさいのあるつらつきに茶のゆをならふたしるしかあつて御茶はかりひいてゐるゆへかどふやらにがいかんしよくのころ一せつ客がなければとて中ざのうしろのかたへひきこませておくます〳〵たれもしりてがない

明月來相照　一月に一どツゝ滿月のあるがごとくたま〳〵客があるのミでうらのやくそくするものが一人もないおつゝけくらがへでもせすハなるまいいつそ六印と出かけるがよい○評に曰かやうな女郎があつて亭主もほつとこまるものぞかし大こくたなのわきにかざりておく木て

こしらへた肉具をくらはせても〳〵すつきり御りしやうがないにハいけすの嚊婆もとんとこまる

長信艸 はんせふよがしりそいてゐるところの長しんきうなり帝の御ちようあいおとろへて御幸のないゆへになりみちにくさがはへるを不遇のものにたとへて作る題なれどもひつきやうはやらぬ女郎の身もちふさうじにしてゐるをあざけりてつくるとしるべし

長信宮中艸 宮ハ子宮の事あまりぶさうじにしておくゆへにくさといふところの毛がはへてその中へもはへこむやうにみゆる

年年愁處生 一ねん二ねんの事でハない年〳〵ぶ仕合でゐるをいふ愁處は彼ところなり女郎のうれふる處なんぞほかにあらんしつたか

時侵珠履跡 珠ハ玉莖なり履の字この詩の字眼かゝる艸ぶかきところなれバ跣にてゆかれぬといふこゝろて大そふにいひなすまいどハ人のかよひし跡もあれども今は蓬蒿みちを沒すといふどくたえて客のなきをいふ

不使玉階行 そこでふと客があつていきかけて見てもけかしてハえきなき事とりんびやうにかこつけてやめる女郎屋のいきたびんぼう神これなり

少年行 武左の二ばんばへやしきものゝけつきさかりかさりたてたる馬にのりむしやうにそこらうちをのりちらすしかも大門へのりこまんとするいきほひをつくる

遺却珊瑚鞭 玉をかざりあかきふさをつけたるむちをもちながら大門のうちをみるや いなやもふきがさきへいつてうつかりとなつてむちをくらはせる事をわすれてゐる

白馬驕不行

そこで馬もりんきをいなゝいてめつたむしやうにはねる後の者のめいわく

章臺折楊柳

章臺ちや屋の事なり女郎がおほく茶やへでゝゐるそれを見るとやう／＼きがつき馬からおりるとちきにめつたに女郎へだきつく忠太ぐわんらいちかがつへの類

春日路傍情

春の日ハ見世さきでもくるしからぬとわればかりすましてゐる
野夫のやの字ハやしきのやの字かふてふらるゝのらの助と古雅府にあり

送朱大入秦

もと此女郎ひおりめんのうちかけをきる事をこのむと大の俠なりよつて名とすしかるにこの女郎の一客しごくわけのわるいくぜつないひかけちや屋とぐるになつてきれゑをやるそのうへ朱大をふまんとて同町の女郎となじみまいにち／＼そのまへをふんでとほるもふかんにんならずこよひかミきりの刑にゆく先でもなじミの客なれハ容易にきらするものにあらず秦ハ大俠のあつまるところなれバさきの女郎屋をたとへていはゞ秦の國の虎狼のごときものゝところへ行といふこゝろで題とすそこでほうばい女郎のべつしてこんいなるが日ころ斷琴のまじはりとて一めんのことをかしてうちころさせるほどの中なれバとて此詩をつくりおくるとなり

遊人五陵去

今夜朱大がおほぜいきやんどものついてゐるところへおめずおくせずかミきりにゆく

寶劍値千金

即剃刀也このさとかミそりをもつてわけあしき客のかミを斷ときにのぞんでハ千まいのをりかミ道具も同前

分手脱相贈

しゆびよふきりおふせて歸りなんしといふてふところよりとりだしわたすむかし此かミそりでしゆびよく斷しおほへもありとなり

平生一片心 おまいとわつちとこゝろがおなじやうでたてひきてくだたがいにふたごゝろがこざんせないすなはち御まいのこゝろへわつちがこゝろをうちこんでいつしよになつてゆくほどにきをじやうぶにおもつていきなんせといふこゝろその義氣みるべし

春曉

これゐつゞけの客をつくる詩とミゆる

春眠不覺曉 はるのあさハねむりがちなるもの也ことにさけとなにやらがすぎてあることをちや屋ものミこんでむかひをやらず

處々聞啼鳥 ねむつたりさめたりするあいだに諸鳥のさへづるをきゝながらあるひハぐう〳〵あるひハすや〳〵

夜夜風雨聲 ゆふべ大かぜ大あめのふきぶりなんぞのやうにむしやうさわぎにおごりしかとに酒きやうのあまりに花をやりしおぼへもありどふであつたかしらぬが

花落知多少 おほくでなければよいがとまづほかの事にきがつかず紙のことへおもひつくハ當世〳〵

洛陽訪遠拾遺不遇

日本ばし邊の遠藤何がしといふ人のばんたうしよくなり此客しごくのしわんばうにてなんぞみちに少しのものでもおちてあると拾ひとつて用にたてるほどのしまつ人なりければ拾遺と茶屋も女郎もいふつゐに名となる女郎もあまりためにならぬ客なれバひさしく消息もせずにおくしかるにこのごろ大じの客か二人まできれるそのうへ節句まへになつてくるくめんのわるきにしたがひ又そふでもないとゑをやりしにしわいやう

でもつもりたまりがきてつけのぼせになりしとその文封のまゝでかへる

洛陽訪才子　ところといへバにほんばしへんことにぬけめのないおまへさまへひさしくうちたへて文をあげまするもいかゞながらあまり／＼おんなつかしさにとわせましおしよじたらはぬがちのそれがしあしくおんくませ下さるまじくなどゝいふやうな事とミへる

江嶺作流人　近江へつけのぼせになりしとつかひのものいふコハほんにか

聞説梅花早　かねてぬしがいひなんすには火事ハなしむめなどもはやくさいておもしろいところぢやがそなたいくきハないかといひなんした

何如此地春　なんぼ梅などがよくさいて火事がないとて此地のさくらどきのおもしろさにどふしておよびませうとにつけのぼせになりなんしておいとしい事ぢやとうはべハやさしくきこゆれどもとてもそふなる身のうへならもそつととりのこしたがざんねんといふやうな事かしらぬまで

洛陽道　土手八丁なり江戸へまいる道といふ事也

大道直如髪　ほりまですミをうちたるごとくそのけしきどふもいへぬ

春日佳氣多　春ハ東からくるやうでとかくむしやうにおもしろい

五陵貴公子

屋しきのれき〳〵の次男三男たち

雙雙鳴玉珂

借馬かもしらぬがくつばミをならべてのつてくるとにさま〳〵のおもしろきもやうのたづなをかいくりて土手いつはいになつてくるさくらを見たをす手あいかもしらず燈ろうどきならあつはれ西瓜がうれふものを

長安道

江戸へ出るみちといふ事です
なはち大門までのとゝミへる

鳴鞭過酒肆

玉をもつてかざりたるむちをくらはせくるやいなやまづ大もんまへで一盃ひつかけげんきをとゝのへ身ごしらへをする

袨服遊倡門

じゆばんはおほくはひぢりめんにびろうどの半ゑりをかけたる類わきからはいやミなれども自ぶんはあつぱれとおもふてゐるすぐに茶屋へしかける女郎屋へ人をとばす

百萬一時盡

むしやうにありたけさんぼふつかひかけるひつきやうもてぬからの事あまり利口な方とはミへぬ○百萬とは大そふにいはんためなりじつは二三十兩の事とするべし

含情無片言

かやうにむしやうにつかひかけてももてぬからやけがおこりてめつたにはなをやるやらげい子をよぶやらつゐふところがかるくなるサアそふなるといなやたれも屁もひつかけぬ此里の風也そこでじぶんもくやしいけれども一ごんもざんねんらしきとをいはずまとのま

けおしミへしんにふかけたるてあいといふべし○評曰この類やしきもの丶身帶のよいむすこかあるひハまちのはらぶくれのむすこのふとてきごゝろてするげいにてけつしてあとのつゞかぬものなりじつハおもしろくもおかしくもないとならでハいはれぬもの也

關山月

出にくいところをしのんでくる客のたとへバ關山をへてうきなんぎをするがごとしよつて題とす

一雁過連營

きやつ／＼のこゑふんミやうに是擔子夜ふけてハわけてこゑをはりてかけると也
連營ハよし原中の屋臺とミるべしこゝろまちの女郎の身のうへによくある事なり

繁霜覆古城

今のハたしかぬしのかごであらふ茶屋からしらせがきそふなもの
としやうじをひらけバゆきのごき霜が一めんにミち／＼てある

胡笳在何處

しかるにいづくともなく尺八のこゑきこゆるハこれ
必しであらふとおもへバこれも又とほりすぐる

半夜起邊聲

いよ／＼深更におよんで歌の聲がきこゆる又もしやうじをあけてまつてゐれバそれにはあらでてふ／＼のかんざしがとんで來る奥で日なしのこゑがするとわめきながらとほりすぐるかしへまぶにゆくちまはりの悲歌なりへんせいといふハめりやすながうたのほかをすべていふとしるべしミな殺伐の音なれバなり○評曰此客ちや屋がつてんのまぶ客とミへたりしからずんバ女郎にかくのごきこゝろづかひなきはづなり察すべし

送郭司藏

司倉の字をミれバ内の番頭とミゆる生國房州のものなりしがさりがたき事あつて故きやうへかえるをかねていろをしてゐる女郎がない／＼でおくる詩とミゆ全

句をもつて考ふべし

映門淮水綠

ぬしののりなんすほりの水が大門へうつりてあを〳〵と見ゆるこれもわつちがぬしをおもふゆへぢや

留騎主人心

一騎當千のぬけめのないいとしいおまへをよそへやる事ハわつちやいやいつまでもそばにおいて亭主ぢやとおもふて樂ミたい

明月隨良掾

お月さへおもはせぶりの句法月のまいばん〳〵ぬしの舟をてらすやうにわつちがこゝろもつきそふてまいりいんしよ

春潮夜夜深

よる〳〵潮のさしてくるじぶんにハぬしのこゝろもしほのうちへうちこんでおこしておくれなんし○評に曰いれかいなしに代ものかしちやからずつ〳〵と來るぞの恩着海にひとし

答武陵田太守

去ねん此屋臺より江戸近在の名主にうけだされ今御新ざうとよばれしかもなんのふ自由もなくくらしける女郎ありけりもと此女郎の出した新艘のかたへふみおこすそのへんじにこの詩をつくりてやるといふ太守といふハたつとんでいふなり

仗劍行千里

ふだん耳かきをはなさぬ御方にうけだされて御いでなんす御うらやましい事となり

微軀敢一言

わつちがやうなたいのたいものが申もおそれあれとも御いけんを申しんしよ

曾為大梁客　むかし信陵君とやらいひなんす客人ハ身上もよくものをしつてござれども下ミの人になさけかけとかく下から出なんしたゆへけつくもてたと申しんすおまへもとうぶんハかへつて御客もおなじやうな御身のうへぢやずいぶんときをつけ下ミをあがめなさけをかけなんしたがよふありいんす

不負信陵恩　この信陵さんのなされうちをよふまねなんしたがよい今まではでをやめ色事をふつつりとしなんすな茶わん酒もやめなんし買喰もよしなんしわつちがいふ事をきゝなんせんと下ミからもとがもとぢやのいけないちくしやうめのおいないふんばりめと申しんす

孟城坳　田町のうらどほりに坳垤といふて中びくのところにわびしき茅屋をたて名を孟城とあらため誹諧の点などをして世をおくるものありそのむかしなたかき大盡粋もぶすいもさとりきり弟に世をわたしらくいんきよとなりて今ハ女郎かいのしなんを仕るとかんばんを出しけれバ軽薄のわかものどもきてそのでんじゆをえんといふすなはちこの詩をつくりてあたふるといふ

結廬古城下　このよしはらといふけいせい町の下にすまゐするハちといはれある事となり

時登古城上　そのいはれといふハむづかしき切引かあるひハかミきりのとき又ハ女郎のいきぢにより客をとめてかへさぬ等の折たのまれてわけをつけにゆくことあり

古城非疇昔　此くるわきのふけふの事でハなしむかしからの格式御免の法もあれバ中ミいまどきの土手の鷺ぐらいをうたふてたうけんびたいにくじらおびひぢりめんのじゆば

んやあかふんどしの手合のそのふうりうをしるゑ事にあらずまづ水月集惣勘定吉原大全の類をよくじゆくどくしてそのうへの事さ

今人自來往

いまごろのかしらへばかり血のあがりてある錢なしのいちたちおいらがこれバ此くるわがなくなると大そふにいふへろ〳〵客のしるところにあらずしやうしせんばんなる事と客をそしりてじつハくるわの風義やうやくにおとろへ野鄙におちて客も女郎もとらふとれまいにばかりくつたくするゆへに風雅の事ハさておきたがひにぬすびと眼になつてゐるをあざけりてつくると見へたり又女郎屋のものども茶屋のものどもがやゝもすれバ此くるわはおかばしよとちがふてそふした格でハいけぬのそふハさせぬのといひたがるこれ苔の上へふのりをといてミづから腰をいためるといふものなりなぜそれほどの張のつよいよし原ならば太夫格子をたくした御免のあげ屋をなぜつぶしてしまふたひつぱりをサゝなぜたしたいやはやいへばまだいくらもあるとそこしんにふくめていふ詩とミるならバ孟城がこゝろにもかなふべし蕩子夫さつし給へ

鹿柴

此解前にあり

日夕見寒山

日のかいくれにゑもん坂より大門へ入る坂といふより山といふとしるべし又すべて山といふにハミな山しのやうなるものどものあつまるところといふこゝろもあり

便爲獨往客

たゞ一人ほつか〳〵往大粋のものハたいこハかへつてうるさくつれもつれによつてけつく殺風景なるもの也とうらのかたから茶やへゆくとあり

不知松林事

正月枩の内なれども此さゝしさはとふしたものぢやわけてはつはるハ人のこゝろもにぎやかにそわ〳〵しそふなところを客らしきもの一人もないとあきれるていなり

但有麏麚跡

くじかの事なれども犬とミるべしはじめの一句に山といふ文字あるゆへに麏麚といふ詩人の妙なり此こゝろハこのくるわの不景氣を嘆ずる一とほりとミへたり○評に日水月集に數この嘆を發すそのくるわにゐてそれにてくひながらどふした事でさミしくなるときのつかざるハもつともあはれむべし

復　愁

この題ハさきだつて一番蕩をやりて女郎の世話で茶屋にかくまはれて居りしがそれからいろ〳〵詫言をしてやうやくたちかへりもとの番頭となり復間もなくひつぱたいてしやつつらをひんぬくふて復このくるわへきてゐるをつくるとミゆ

萬國尙戎馬

此度のしくじりにも方〳〵のあくしよ〳〵をたづねまはるてうどいくさがあつておつすまくつすするやふにあらふとなり

故園今若何

さぞ宿がよばれていろ〳〵しからるゝであらふ

昔歸相識少

まへどの蕩のわびすんでかへりたときもおれが留主のうちに三四人も蕩がありて懇意もすくなくなりしが

早已戰場多

せうこりもなくもふ大な蕩をやるとハわれながらあつぱれの手者とミゆるとミづからもすこしあきるゝ意あり

絶句

絶節古字通用およそ節句といふものハ女郎のつらいものなれバ題とす

江碧鳥逾白

水面こくみどりになるハ春色のミつるなり白鳥などがわけてしろくミへるとなり

山青花欲然

四方山あを／＼となるとくれないの花がもゆるやうにミゆるとおもしろくいひなすうはべハ景氣一とほりをいへどもこの詩ははなはだ解しがたし實事をもつてはじめてそゝ解を得るといふさる屋臺の女郎とさる山師といろをやりて手くだのあまりこの女郎の一客をおもわくはめて身うけをさせその上へでにげるさうだん口ぐるまにかけてのせんとするそのはかりとミづのそこふかふしてミへがたくからすを鷺といひなすすでに身うけきはまらんとするとき大じんも去ものにて此あなをきゝいだしさきのはかりとについてかへつてはかりとをめぐらしおもひ入のせてその後ミぎのわけあいと／＼くかきゐつめきれ文をおくるにたしかなしやうこのある事なれバ一言もですそこで山師ハまつさをになる女郎ハ花のかんばせ火のとくあかくなつてゐるといふ二句妙

今春看又過

この春も目をしばだゝひてすぎる

何日是歸年

こふしそこなふてハいつかくるわを出でふうふにならふもしれぬ

長干行

堀の舟宿の嗅なりもとハ江戸町一丁目にて名たかき客振しかも張つよくむさと客のとりいる事ならぬものにて有けりこれも得手ものゝ持びやうが起り堀のあてき

と色をやりて年もしゆひよくあき夫ふとなりて今ハかしあるきをするへろ〳〵客でも御きげんの八百
も取つて世をわたる事となりぬ

君家住何處　をりふし客があつて今かへりとミへるどふやら見たやうな御方とおもひうかゞひ
見れバ客もどふかしつたやうな女とたがいに見やるそこで嗅からおまへハ新川で
ハござりませぬか

妾住在横塘　横塘すなはち堀なりわた
くしハこゝにをります

停船暫借問　もふ御かへりか御きげんよふ御いで又ちかい内
に御いでなされませじやがもし御まへハあの

或恐是同郷　これ前方桂兎さまと同町でそれゆへ立引で切
れた棹葉さんでハないかばからしいぬしもぬしさ

詠　史　吉原大全を詠めて
實事を作ると見ゆ

尙有綈袍贈　むかしさる女郎と茶屋とぐるになつて田舍客をむごくひつたくりし事ありある時
かの客來るちや屋から知らせにゆくすなはちかぶろがきて何やら茶屋が耳をねぶ
つてかへるそこで茶やがいふもふし女郎さんがさん〳〵御びやうきでそれゆへ御つれ申てくれいとおつし
やりますじつハこれ〳〵がないと申やうな事とミへますおあいなされバつゐしれるさあ〳〵御いでと夫婦
して引立やる二かいへ上れバ女郎ハ身じまいのとき着るくされ小袖一ツでふるへて居る田舍が見るよりこ

りやはあんたらこつたあんまりでうつたまげもふすせばくちでもうつぱたいてげエにぶつこんでしまい申たかわけさあんべいもさかたりめさい聞べエにと氣をもがく女郎なミだをおしかくしわつちが申事よふきいて御くれなんしおはつかしい事ながら二おやハもと武士で貧苦にせまつてわつちをうりその金でやう〳〵月日をおくりなんしたが朋輩にわるいものがあつて殿様の金を大分つかいこミわつちがとゝさんにいゝかぶせいろ〳〵ぬけても先ハ大勢とゝさんハたゞひとり是非なく腹をきりなんすといふてかゝさんからゑがきいんした百兩やそこらの金でミす〳〵おやにはらをきらせわつちハ着かさつていかに女郎の身なればとて人さまへかほむけがなりあんしやうかそれゆへ兄さんややりてしゆとだんかうして小袖も帶もねどうくまでしちにおき金百兩こしらへてとゝさんをたすけ申しんしたそれゆへに今此なり御はなし申てもほんにもしなんすまいけれどもとはなしかける何が正直一へんの田舎親父あわめしのやうな涙をながしそんなこつたらさちやいくらでもくれますべいまあこれても着てくれめさいと着かへの松さかじまのきものをきせおらがめきゝてハもやうが知れ申さんそつちで茶屋どのとよかんべエやふにだんかうしめさつてこしらひめさいと百兩包をなけだすアフこバ

應憐范叔寒（ハンシユクガカンヲアハレムナルベシ）

范叔ハ女郎の誹名なりつゐたばかられて

不知天下士（テンカノシナルコヲシラズ）

天下に名たかき粋坊も一盃くわせるほどのおほかミなる事をしらず

猶作布衣看（ナヲホイノカンヲナス）

いかに田舎客なれバとてこれ程の女郎がふるわんぼう一ツでふるへて居そふなものと思ふおろかさハ余程の代物とミへる〇評に曰今の世のぬけめなきわる粋でも色にハ日のないならひにておんぼうからうりにきたなまつめと鳥の羽の肉つきのところでこしらへた爪と

此二ツが用にたつてぎんの香はこゝへ入ッて誠のつめとおがまれおゝくの金銀をとられながら先へいたからふほどに見せをひいてゐたかよいなぞといふわろもあれバいなかものなどのだまされるハむりでもないといふべしひつきやう水月集をよまざるあやまりよりとしるべし

田家春望

この田ハ江戸町一丁めのさる女郎あまり取けがつよくそのくせ大酒斗のんで大平樂をいふゆへ客ハのこらずきれていよ／＼やけ酒はかりのむをつくる

出門何所見

うらの田浦はかり見てゐるもきづまりなれハ江戸町の門をでゝ中の町を見やれパ櫻ときにてひとときはにぎ／＼しい

春色滿平蕪

はるげしき水戸尻までミち／＼てゐる

可歎無知己

ほか／＼の女郎ハ客をつれてかへるもあり今迎にてるもありおのれはかりたれもかまひてかない

高陽一酒徒

そこでふら／＼中の町を一へんまハりて内へき又例のやけざけちやわんでいちどに三ばいつゝ

行軍九日思長安故園

行軍とは軍立の事にあらずばくちうちの身の上勝負ハときのうんによるといふこゝろでなづく此女郎もとハ江戸まんなかの者なりしか親父かおもひいれまけてせんかたなくむすめをうる去年九月の節句にはしめて中の町へてゝふとむかい月になりてこよいのけふであつたとおもへハ故郷かなつかしくおもふすなはち題とす

強欲登高去　この日大紋日でせひ中の町へ出ねバならぬ事なりとても見せへハてられすみあかりしても二かいへあがられねバならぬ

無人送酒來　客人かなけれバ茶やからさかなをもつて來るものもなくおのづから酒を二かいへ送ルものもなくそこでぜひなくミあかりとミへるこれについても故きやうがおもひ出さるゝ

遙憐故園菊　去年春からていれをしてそだてし菊も九月はじめから少々さきかけしにおもひもよらぬおやぢがまけて菊となきわかれにわかれしひつきやうなきかゝさんのかたミのきくとおもへバなをかなしい

應傍戰場開　かわいやひさうのしらきくもまけたりかつたり人をはいだりはたかになつたりする中で見る人もないにさくであらふあわれふかし○評に日やう〳〵一ねんになるゆへにいまだ故郷の事をおもふやさしきこゝろあり今年ねんもすべるとはやさとなれてふくかぜにくらいてほうびきもひきますきんごもやります氏よりそたちの一こんおろそかに看過すべからず

見渭水思秦川　渭水ハうらの田浦よりながれて堀へでるつゐに大川へひとつになる秦川ハ深川にて客の居ところとしるべし

渭水東流去　此水ひがし〳〵となかれておまへのところへゆくけなてふとそのごとくわつちもおまへのところへながれこまふとおもふていたに御内のしゆびがわるくおいてもならぬとの御ふちかごろつまりんせんけれどもせふ事かごさんせない

何時到雍州　雍州客の家名とミへるかやうに御しゆびもわるいとの御事ならいつかおまへと夫婦になられやう

憑添兩行涙　せめてハこのなミたを水へたのんで

寄向故園流　おまへのござる庭のせんすいへながれこミたい○評に曰一ツハちや屋への義理

登鸛鵲樓　鳥の名をもつて樓の名とするハ飛あがりの手あいのあつまるところなれはなりすなはち女郎屋なり

白日依山盡　日の西山へかたむき日光のなくなるハ山かへだゝるをもつてなりその日の色にたとへたる金銀もわるい太こや茶やが女郎とくるになつて客をはめて金をなくさせるハこれとおなじ事といふこゝろなり

黄河入海流　黄の字河の字こゝろをつけべし女郎買の金をつかふハたとへハ河の毎日ながれ〳〵て海へいれどもつゐに水かあまつたといふためしかないてふどそのとほりで入れても〳〵跡のミへぬにたとふ

欲窮千里目　こうそやしかけられてハいよ〳〵おごりがついて操を見よふのざしき芝居をさせて見よふあるひハ上がたから竹田をよんでからくりを見せふの京から松傳ぶしの上手をよんできかそふといふやうになる窮の字困窮貧窮と熟字なり後にハかやうになるといふこゝろでいふ詩人の奇妙ちや

更上一層樓　そのうへに又一層のほせて身うけをさせるくめんそふするとしんだいか高いところへあかつたりじやのぼりつめたる二かいのはしごすなはち此句法○評に曰もふ

年が二十わかければ太こと茶屋に若しゆにせられしまいハ大屋へあづけらるゝと知べし

終南望餘雪

終南つくば山とミるべしすへて此くるわこの山の事をしれ〳〵歌などにもつくる事なりあの横ぐもの下こそわしかおやさとなどゝあり

終南陰嶺秀

北むきの方がわけてけんそにミゆる町の方へむかひてあり

積雪浮雲端

こその冬よりふりつもりたる雪が浮雲のはし〳〵にほのかにミゆるかし女郎のしつくいぬつたやうニもあり

林表明霽色

町の北がわの方がかの雪めがうつりて日のかいくれにもはれ〳〵しくおそく日がくれるやうにおもわるゝそれゆへ晝見せがながくてめいわくしかし又夜見せの鈴かおそくなるゆへいれかへのためにはよい

城中増暮寒

吉はら中か春になつてもとかく日のくれがたにはつめたいハひつきやう此山よりおくるさむさとミゆるとなりつめたい女郎といふ事もこの事より始りたるとおぼゆ

羅相作

相とハ家老などのやうなるものなれどもこゝでハ惣一歩中の晝三とミるべし此やたいこの女郎でなければ持れぬといふやうな事也

避賢初罷相

いたつてきよふものでよく客をとるゆへ家内にたてをつく女郎が一人もないそこで女郎どもがそねんで内義へさま〳〵ざんげんして一歩にとつておとす

欒聖且啣盃　それからやけざけをむしやうにひつかける
聖とはまんぐわんじすみだ諸白の類

爲問門前客　わつちが一歩にさがりてから客しゆがみんなきれゝつれ
衆ものこらずきれるであらふよいなりさとふてゐる心あり

今朝幾箇來　けさからたれぞたづねてきたものハあるかちや屋をはじめ二かい中へ客が一人も
あれバよいがそれ見なさいとよそ事のやうにいふ實ハていしゆとちゝくつてゐる
とミへるしからずんバかやうのたい平らくをいふはづがないと此節の評判〳〵

奉送五叔入京兼寄桒母二　五叔とハていしゆの妹なりおばさんといふこゝろ江
戸のまんなかへかたついてゆくを女郎がおくるなり
又さきだつて姉女郎うけだされて今でハ三になる子チもふけむつまじくくらししかも五叔のよめいり
ところと同町なれバこれへもこゝろへおくれなんしの意

陰雲帶殘日　君をおもへバてる日
もミへぬの句法

悵別此何時　おはさんハおめでたい事で御出なさるゝけれども今まではなにやかや御世話にな
りお力にいたし居しにけふよりのちハたれをちからに日をおくらふやらと是まて
が五叔をおくることばなり

欲望黄山道　これより姉女郎への言傳なりおまへかたのつとめてござるときとちがひだん〳〵
世間もふけいきになりよい客衆もなく身の上もつまりんせんからどふぞ黄いろな

ものをぺ山師になつてもひつたくりはやく此くろわを出たいとおもふておりいんすけれとも

無由見所思　すつきりおもふやうな客人かござんしないといふておくれなんし

左掖梨花　中の町より左かわの門のうちとしるへし梨花ハ女郎のがんしよくうすけしやうでほつてりものどふもいへぬなさけなしではないなさけがありのミすいもぶすいもしりぬいてゐるといふやうな中年増中の町へでかける

冷艶全欺雪　そのいろのしろき事ゆきではないからうたへた雪ハこふハいかないしかしろいがよいとてしつくひをむしやうにぬつてハ蔵の戸まへに目はなをつけたやうでわるいこの女郎ハそふではないきめこまかで一たいがしろい

餘香乍入衣　そのうへちかくなるにしたがひゆかしい香がするいしやうにとめたるものとミゆるこれも又にほふがよいとて丁子甘松ばかりいれたかけからに狐臭まじりにくるがあるそふではない

春風且莫定　そよ〳〵かぜがやまずにふいてくれたがよい

吹向玉階飛　ふうわりと風に持れてあのゆきのどきふとも〳〵のへんへよこづけにふきつけられたい○評に曰このせつよだれのでる事牛のごとし牛ハうるさしの和訓このときよりとしられたり

元魯とハ姉女郎の誹名なり山といふハおそろしき女郎といふこゝろてなづくこの女郎の出したる新造が

九日陪元魯山登北城留別

仕合ものてらけたされて行いまゝでせわになつたおいらがのなれバこよいふるまいをして留別の詩をつくるとミへたり句中あね女郎をなぐさむるのこゝろありかんがふべし

綿連湿川迴

わつちがゆく川すじハはてしなくながいおまへとおわかれ申しんすそのかなしさハいつまでも〳〵わすれもやらぬてふど此川のはてしないとおなじやふにおもはるゝとなり

杳渺鴉路深

又陸地をゆけバこれもはるかなところてゆふぐれハからすのとまる林があるゆへかわい〳〵がわつちやいや古樂府にはつつけ場のからす銭もなくしてかを〳〵とすなはち此句中よりきたる千住を經てゆくところとミへる

膨澤興不殘

淵明とやらいふ客じんハ九月九日此くるわで金がないがはらがたつとてやけざけをのミなんしたといふ事があるつとめがつらいとハいふものゝ又きさんじなところでハある

臨風動歸心

今わつちがうけだされてゆくはよいやうなものなれどもことばにきをつけよのあるきなりにこゝろをつけよとさま〳〵のきのつまる事ばつかりいひなんしやうけつく今までゐつけたところがわつちやよいおり〳〵ハ又此方へかへりたくなるであらふし此くるわの風がこひしからふとそれ〳〵にいひなやますあつぱれりはつものとミへるそれゆへはやい御出世

平蕃曲

おかばしよをゑびすにたとふすなはちこの二首刑道がいつて女郎をよし原へひいてゆく事をつくるとミへたり

渺々戍烟孤
茫々塞艸枯
隴頭那用閉
萬里不防胡

其二

絶漠大軍還
平砂獨戍間
空留一片石
萬古在燕山

さすがはんじやうのところなれとも刑道
いつてのちハけふりもたへ〴〵になる
庭などのくさも茫〻とはへ
てあれはてたるやうすなり
ふとけいだうがこまいものでもないと出口へとゝ
ろをつけてこわかりしも今でハそれにおよばぬ
吉はらでハじやまものをとつてのけたこれ
からハこゝろやすいよい〳〵とうつておけ
はじめの一句ハよし原へ女郎が大ぜいゆきてなを〳〵にぎやかになる
といふ氣味をつくる後の三句ハけいだうをくらつたところのさミしさをいふ
絶漠ハ沙場なり竹門砂里場をかゝりて大ぜいの女郎どもを引つ
れてゆくてふど軍があつて大ぜいとりこにしたるやうじや
わき〳〵のばしよハにきやかなれどもけいどう
のいりしところはかりむごくさミしくてゐる
今でハ庭のとびいしばかりかわる事なくすはつて
ゐるとびいしをつたふた美人ハミな〳〵なくなる
ながく此いしがあつてむかしハ青樓のありしところと
哥人誹人などが古跡のやうに大そふにいひなすであらふ

逢俠者　こゝ種類いたつて多し內たくぶつたくりてつくわいかさまとほりものしやれたて師等なりおほゝハ館に人物をほりあるひハ龍蛇をほり女郎の名をほり命の字はなハだしきものハ小便無用御用之外車留等をほる又それ／＼にこのむところによる中山の內證ありそのおりにつけての流言あり又しやれといふて暗言ありその業とするところおほくうでたてを第一とし人にゆづる事をはづ黨を組んでもつはらけんくわをなし他人のうへになんぞ出入の事あれバかへつてこれをしづめおのれにしたがふをよろこびさかふをにくむ名づけてきやんといふ此詩くるわへゆきがけにおやぶんのところへよりおのれがいきどふりをはなしさうだんする事とミへたり

燕趙悲歌士）燕趙俠の出るところ申さずとても御そんじの事なれバ畧す悲歌あてこすりとておのれがいろする女郎へひぞりの事をうたの文句としいたミいるやうにうたひかけるおもふてきたれどもあはずにもどす君をおもへバてる日もミへぬおつきさまさへおもわせぶりどうりでかぼちやかとうなすだらつまちうけんこなどの類なり

相逢劇孟家　浅草へんで名たかきだてしなり此內へくるとミゆるそのさまゆひわたの紋所のほふかむりに紅しぼりにびろうどのはんゑりくろじゆすともふるのくじらおびひよりげたをはきうでに竜のほりものくるやいなやしりひんまくりよこたにぶつかへりながらおやかたきゝないゆふべ新町のおそろが所へいつてしげのをよびだしちよつとあいたいがどふだといふたれバ晝からかのぞふしがいの牛めがうせて一足も出さぬとぬかすからそれもまゝよかねておれにいふたハ牛が事を腹たちなさるなちとわけがあるあとでいんじゆがしれるといふた何にせいやうすを見るがよいと思ふてかへらふとおもふたが先度おやかたもしつてのとほり三枚なけりやならぬときに櫛二枚ぶつころさせた二兩でハすまないおれが身にかゝる大事の金だすなつかんでもかわたゝいても三兩ぐらいの金ができるかれまい今までの二世三世ハミんなうそだほんにつとめのうさはらしによくおれをなぶりこくつたおぼへていやがれ

ぞふしかいの牛をすいぶん大事にかわいがりてどふなりと身をまかせひげだいもくのふちよれるほどほふずりでもしやがれ五丁町たれあつてしらんものもないしつこいぼうずだ一丁めのたうなす二丁めのかぼちや角町のいもりの大どろばうさへうるさがつてつきだしたおほねうぬがすきからおこつた事だはつつけめおぼへてゐやがれといふてもどつたりやみかん小僧をたのんでいろ〱いひわけ三枚こしらへておこしやがつたたび〱のむしんて気がついてぼんでんこくくらわするきだもしれない子イおやかたこんにや見せまへにしかけておつがわるくハおらアもふのりかいやうとおもふ又江戸町の方にもうまい事もありそふだ

寸心言不盡

いろ〱とひあわすとがあるとミへたり

前路日将斜

こりやいけないもふくれるそふだおやかたかへりによりませうといふてかけ出す

○評に曰日のかいくれよりあんどうへ火のつくまでがかんじんのときなりからしさきにてなにやらもや〱するいたつて一大事のとこ〻ゆる内義も婆も若いものも朋輩女郎もたがいに見のがし雀どもがさまよふてくらへてゐます蕩子のうへでなければおちわひなき事なり

江行無題

三人一歩で六印と一ごくそろばんのめいじんども〻宵のほどはあるいてかへりくわんをんへもまいり二十軒てあさぢやをの〻口もむだにはき〱まい茶屋のむすめをたぶりなぐさミて宮澤町のあさ市でなんぞほり出したし又一よさのたのしみも出まいものでもないとでかけたところがかへりがけにおもひの外の風雨ちや屋がかごを申つけましやうといへバ三人たがらかごはきついきらひ舟をせめてもよいといふそこでつぶやきたがる舟で　るゆへに無題といふおもひもよらぬといふ事也

咫尺愁風雨
風雨うれふるにたらず一歩のましをおそるゝ事蛇蝎のごとし

匡盧不可登
匡盧といふハ去和尚の諱名なり此三人かねて坊主が來る事をしつてゐる宵のさうだんに匡盧がちや屋へよつておもひ入あさ酒をのミそのうへちそうになるりやうけんなれどもいよ〳〵風がつよくてハふねでハいかゞとあんずるゆへよらず

秖疑雲霧窟
とほりがけにとミれバ大ぜい太こ女郎しんざうが二階でさわいでゐる

猶有六朝僧
きわめて和尚がゐるそのほか六朝の清言をよくいふごくおぐちひやうひやくこわいろの上手な坊主どもきてゐるであらふよつて見たいものぢや○評に日今の世ハぞくよりかへつてぼうずがしやれをよくいふこわいろもよくいふ古樂府に坊さま〳〵と名ばかり坊さまさかなくひたがる女郎とねる子おろし草がないならばところもをやいてのませろたゞゝありかんがふべし

秋夜寄丘二十二員外
丘〳〵とちや屋も女郎もいふわけある名とミへたり此客さる女郎とほんの客色でのちハこふしといふやうな事と見へたり二十二になる若なりどふぞ二十二の員の外に年をおほくして下さるたと女郎があまへる故つゐに戒名を見るやうな長〳〵しい名とハなりぬ

懷君屬秋夜
宵に外の茶屋から仕舞にきたれども心まちがあるといふてかへす秋の夜ハわけておつとをおもふの情ふかしとにいひあはせた事もあり

散歩咏涼天
そこでいつもちや屋へ出かけて丘さんハ御いでなんすはづじやがなぜ御いでたんせんと大門のかたまでゆきつもどりつする咏するといへバ大そふなれどもそでづ

きん位の事であらふ下の句の山空の二字僞なしにじつをもつてあふをいふ

山空松子落　もふひけもうてバよもや御ハあるまいと内へかへりて庭をながめてゐればなにやら物のおちたるこゑすると石をつたへてミればうへごみのまつの實にてぞありけりおまへをおもふの念がとゞいて月中のかつらの實ハおちハせぬかといふやうな事○待宵ハ石ほどひゞく落葉哉と古發句にあり合かんがふべし

幽人應未眠　松のミの音しれるものにあらずよく〱おつとをおもふの情ふかくなにからなにまでききをつけるとミへたりわつちがこふほどにおもふてよもねられずにゐるさぞおまへもわつちが事をおもふてねられずにござるであらふ○評に曰大のきまりしかしまれにある事にて客も女郎ものちく〱ハ願人ばうずを見るごくまつぱだかになるものなりまづハ珍重といはねバならぬ

聽江笛送陸侍御　此客よほどとられしとミへて女郎がほりまでおくる此ところてわかれをなす田舎侍とミゆる

遠聽江上笛　たれやらあはれなれんぼとやらいふ尺八をふくたゞのときさへあいの山の句法

臨觴一送君　いわんや今わかれのさかづきをするときすかないほんにむねが一はいになる

還愁獨宿夜　おまへのかへりなんしたあとでまいよひとりねするであらふ

更向郡齋聞　そのとき又尺八のこゑをきいたなら今のつらいかなしいより猶百倍わつちやかなしうてどふせうぞどふぞはやくのぼりておくれなんし○評に曰此客よほどめでたい人でおもひいれとられたうへ此たびのわかれ金いかにもでつちりとしたる事とミゆるこれが江戸わるじやれの客ならわかれきわによこぞつほふひつしやりといわすところなれどもしかしこふいふぬくがなければ女郎ハたつものにあらず

聞雁　文のたよりをまつをいふ分明におつとがぶしあわせでぜひなく女房をよしはらへうる事とミへたり全句をもつてかんがふべし

故園眇何處　わがこきやうハいづくのかたやら方がくさへしらず

歸思方悠哉　五年のねんなればさりとハはてしない事じや

淮南秋雨夜　南かぜでいぢわるくふつてくる夫についてもこちの人がどふしてゐるか

高齋聞雁來　つゐに見なれぬ此二かいにまたちかづきもなければとひあわすべきものさへなく雁ハ文のつかひをするとやら此方への文でハないかとあわれふかし○評に曰此くるわの文をもつてあるく雁ハ日本ばしへんまでが百文で雨でもふれば二百文とるそのうへたのミもせぬ事をさま〳〵さへづり酒をねだりてどふもならぬ又茶屋の文もつ雁ハわるくすれば女郎とぐるになり客をはめたかりてゆだんならず雁ハ八百文ハ三文にもならぬ物を持てきてミぎやう書でも持参したつらをするさ

て又鳥類ににやわぬ紙を折〳〵くひたがつてとんとあきれる、ひつじの方がかへつてしやうぢきでよい此女郎ほんの鴈が多もつてくるとおもふその間が眞の人間〳〵

答李澥

客の諱名なり女郎の方から多をやりしにその返事來る無心の多とミゆる

林中觀易罷

書見せのところへちや屋から多をやる林中ハ女郎のおほくあつまる事はやしのごくといふこゝろ易とハ吉凶悔吝の書なれバ多をさしていふぢきに見おわりて大きなつらでゐるをミれバむしんがかなふたとミゆる

溪上對鷗閒

おもてのかたあひるがぐい〳〵いつてあるくをミておちついてゐるサアしてやつたりといふやうなそぶりそこでつかひがなんとかいふたとミへる

楚俗饒詞客

おまへの内へさかい町へんなればこわいろつかひやながうたの名人がおほいときいて居いんす

何人最往還

その中でも何といふのが御出入でありいんすやら今ど御いでなら二三人つれてきておくれなんしもふ一ツかなへバ又なんぞいふてやるとミへたり ○評に曰女郎といふものハいかやうな性のものがうまれてくる事やら金をバ何まいくれなんしとせんべいかなんぞのやうにおほへてゐるげいしやを何人つれてきてくだされとけらいかなんぞのやうにしつてゐる馬鹿をはなれて本氣になつてミれバ何まいとハなんの事何人とハ金いくらが事と肝をひやす事なりどふりでおやぢ〳〵がよしはらを鬼門のやうにおもふてゐるハ御尤〳〵

婕妤怨

此故事まへにミへたりしかれども此詩ハもふねんがあいてやくそくの客もなくおやもともさきだつてしにたへほかによるべきところもなくぜひなく亭主がひきう

けかたづけねバならぬミのうへとミゆるすなはち此女郎ㄘやきもちなり

花枝出建章

朋輩のはやり女郎へちや屋からしらせが來てむかひにいづる花のごとくかざりたてゝ新ざうをひきつれ出てゆく今の身のうへでハかへつてねたましい

鳳管發昭陽

又むかふざしきでハ客がさたとミへて笛太こさミせんでめりやすをうたひかけ何やらにぎ〳〵しい建章昭陽二間のざしきもちをさす

借問承恩者

すかないこの頃の青新ざうめらかまぐれあたりにしやわせがよいとて大そうらしい

雙蛾幾許長

つくりまゆにしつくいぬつてほんにおかしいぞよ客人といへバみな二才野郎でどうりでかぼちやハたうなすだといふやうな事とミへる

題竹林寺

今戸あたりの寺とミゆるわざと名をかへたるもの也大事の一客がきうびやうで死んだるとのしらせに義理もあり恩もあり參詣したるとミゆる

歳月人間促

年ミ月ミもん日〳〵何やかやうきなんぎなるものなり促の字催促の促の字いまゝでハ此客の御かけニて何の苦勞もなかりしにこれよりハせめぬかるゝてあらふ

烟霞此地多

よふちんのくるわからミれバ風色もかくべつ春めきてミへる

殷勤竹林寺

かゝる浮身のうへなれバかさねてまいるもなりがたしとねんごろに佛をたのんでかへる

更得幾回過

又こよふとおもふてもやくそくでもあればもふならぬよく〱浅ましい身の上じやと尤あわれむにたへたり○評に曰このときのなみだ生正味

秋日

あきの日ハさミしきものなれバねからはやらぬ女郎にたとふ

返照入閭巷

夏ハ日あたりふゆハ日かげなきたるいゑ中で一ばんわるきざしき也閭巷ハ廊下を本道としてそのわきといふ事なりゆふ日のさしこむときから夜の見せのながきを苦労におもふ昼ハひるとて着るものにこまる

憂來誰共語

かり着をしやうにもあいてがない朋輩どもゝたれもミむきもせぬ

古道少人行

客があつた事がないからふるくよごれたたゝミへやけ酒もぬすんでのむくせにそこらぢうへこほれてゐる一足もふむとたびがたゝミへくつついてうごかぬほどなりたんぼのへんなればこじきが下駄はかすところなれどもまさかそふもならぬ

秋風動禾黍

やぶれぶすまへあきかぜかおとづれてばたり〱とそふ〱しいばかりじや禾黍ハふすまの繪とするべし

和張僕射塞下曲

張僕射ハ女郎のはい名なりいたつて張のつよい女郎なれバ名とす塞下の曲軍場の事をつくる事實なれどもこゝハたてひきにて客をひつとらまへるを云

月黑雁飛高　闇の夜雨〻よ雪の夜〻みづかひなどするおとこやわかいものなどハふだんの直でハいかぬものなりやらでかなわぬ事あれば一角もはづまねバならぬみづかひハ百ましから事ニよつて一角ぐらいにせねバとぶがごとくの用にたゝぬ高の字妙

單于遠遁逃　單于ハえびすの大しやうこゝではいおわるき客にたとふやミにまぎれて大もんをぬけんとするかねて新ぞうをつけおきたれどもつゐに手にあひかねいま大もんを出なんした

欲將輕騎逐　そこでわかいものみづかひなどをよびておつかけさせる

大雪滿弓刀　田町あたりまていつてとつてかへすつがもない大ゆきで中〱おわれる事じやごさらぬとてもかなわぬ事さよしたがよい〇評に曰これ女郎がからしわいゆへじやおり〱の紙もやらせずおのればかりとりこむゆへ身にしミぬ事とミへる又此客が内しやうて少ミツヽのこゝろつけあると見ゆるとに大ゆきなれバ明日ハどなた〱ハ御出ぢやこよひつかれてハ大事のとき用にたゝぬざつと直段やすくつもりても一兩がものハあるあまり氣をもむ事ハないとうつちやつておくとミへたり

別盧秦卿　客のはい名なり何月何日にハ國へくだるとかねてしれてある客なり

知有前期在　又來年ハ御のぼりなさる事なれどもあふハわかれとかねてハしれどなどいふ句法

難分此夜中

サアそふなれどもはなす事ハわつちやいや

無將故人酒

なんぼおやしきの事でもまたやる事ハならぬひさしいおなしみのわつちが御酒一ツあげにやならぬ

不及石尤風

逆風とて人をおひかへすやうなつよいかぜなら御いでなさる事はなるまいそのかぜにまけるわつちじやないによ

幽州

もとおかばしよから刑道で吉はらのかしへゐてかすかな女郎屋の内につとめてゐる

征戍在桑乾

いくさの事ハしられどもなにやらとつた〱に死はぐれのめにあふて今この桑名屋といふひつぱりへ來てゐる

年々薊水寒

まいねん〱浦のながれの水がこほるを見てゐるはやくもとのおかばしよへ歸りさつさおせ〱でもうたひたい

殷勤驛西路

ねんごろによつく道をバおぼへてゐる

此去向長安

大もんから田町をかゝり江戸へこふゆくといふ事をバしつてゐれどもそれもならぬくやしい事じや

三閭廟

屈原ハ三閭大夫といふ官でありしとかや又此吉原の高尾といひしも大夫にてありし此二人ハ川へ身をなげその名まつせにのこるその事あいにたるをもつて假りて

つくるむかし去大盡この高尾大夫を手に入んとおほくの金銀をつかひかけ日ごにかよひけれども此しきばかりつとめて肌身をけがさずそこで大盡やけをおこして數千兩の黃金をもつて身請し舟にて三又といふところまでつれきたりいろ〳〵寢席をすゝむる大夫も今はつゝむべきにもあられば輕いいやしいものに二世三世の契約いたし候得ばたとへいかやうに身はなるとも君の御心にしたがふ事はならぬとの一言金石のごとくなれば大盡もいま〳〵しくなり切ころし此川へすてしともいひ又大夫がおのれと身をなげたりともいふ憐んで此詩をつくるいさごの中の黃金ふんばりの中の貞女と世の人申あへり廟此ところにあるにあらねども此題さいわいにあるをもつて借用ゆ

沅湘流不盡

此三叉の流のやむときなきがごとく高尾がうらみもつくる期あるべからず

屈子怨何深

かの男に屈服したるこの子のうらみ水のそこふかふして測られざるごとく言語のおよぶところにあらず

日暮秋風起

舟の往來するごとに物すごき風水面におこりわけて日のかいくれにはさみしくおもはるゝ

蕭々楓樹林

そのおとぞつ〳〵とするやうで楓葉がいかい事波間にあらわるゝとなり高尾の楓といふより來るそのうらみやむときなきをいふ

思君恩

はやらぬ女郎のやきもちをつくる君といふは客をさす

小苑鶯歌歇

うらの小ざしきてけい子が來てうたひかける太こがはやす新ざうかぶろはわつ〳〵わらふよくつかふ客のひさしくくるにはていしゆもかゝも下ざしきでいつし

よになつてもてはやす事ありもつとも金の高下によるべし

長門蜨舞多

それより女郎のざしきへくるかつ手からすぐにけいこ太こがおどりながら二かいへあがる客ハ一國一城のあるじのつらしてあとからおされてあがる

眼看春又去

かやうにわぎ〳〵ハにぎやかなるにどふした事で身にハあつからぬ事そまいねん〳〵ことしハしやわせハよいかくる春はよい客がつくかとおもふてゐる

翠輦不曾過

御手車にのせてゐやうをするやうな客ハつゐぞきた事ハない

登柳州蛾山

裏河岸なりやなぎなどをうへてあるところなり蛾眉どもが山師のやうなものと色をやるところなれバ蛾山といふ此女郎間夫にいつてかくてハ身のつまらぬ事をしるをつくる

荒山秋日午

ひる日なかそつとかしへ出かけて見たれバ何やらかやらとりミだしておく

獨上意悠々

二かいへあがりたゞひとり色をまつてゐる是よりゆくすへの事をおもふの情に入るはてしなきつまらぬ事のミをしてさりとハすめぬ身のうへじや

如何望鄕處

たしかにわが旧里ハあの方かとおもひしにどこであつたかしらぬ

西北是融州

それに西北の方ときゝしが故郷ハミへず上野ばかりミへるとはしめて人ごゝろかつきしとおぼへる

秋風引

わが身ひとりの秋にはあらねどゝいふこゝろに同じ

何處秋風至　かぜのおとにもおどろかれぬるの句法

蕭々送雁群　よも深更におよんで風そよ〳〵とふいておほくの雁ないてわたるいよ〳〵ねむられぬていなり

朝來入庭樹　よあけ方からいよ〳〵秋風ゝにしみわたりまんじりともせず起る

孤客最先聞　ゆふべよりの秋かぜはわればかりきいたであろふ○評に曰是ふんミやうに粋といふにくらわされてふられたる客なりかならずうらにも三會にもゆくものにてわるくすると女郎が恥をかくものなり蕩子のうへには御ぞんじのうへなれば略す

鞏路感懷　さる屋しきもの遠のりに行かへりに三谷のほそみちより土手へきたる天水おけがミゆるともふかんにんならぬていをつくる

馬嘶白日暮　一日のりまはされ馬もひもじくなつてむしやうにいばへる日もそろ〳〵山のはへしづむ

劔鳴秋氣來　くれがたにあき風かぞつとするほどふいてくるそふするやいなやどふも〳〵武者ぶるひのするほどどふもならぬこそで家來と馬は大もんからかへす

我心渺無際

しかしながらちや屋に近づきハなしのふ中もかるけれバとつつおいつするきまつた事ハ一ツもない

河上空徘徊

先川岸のやすいがよかろとそこらうちをゆきつもどりつしてゐるさいわい武左の事なれバてつほうの方がどふであろ

古別離

前度一とほりきれたる客の又たちかへりたるなりそれゆへたび〳〵むしん等あつてめいわくなれども今さらひかれぬ義理とハなりぬ

欲別牽郎衣

あさかへりのとき衣をひいてもふしどふもかやうなわけのたゝぬ事かあれバ又十枚おいておくれなんし

郎今到何處

けさかへりなんすにどの道を御いでなんすやら

不恨歸來遲

四五日そこらおそいともわつちやはられたちいんせんほとに

莫向臨邛去

かならずふか川へんをかゝりふとあそびなんしてむだ金をつかひなんすなや

尋隱者不遇

隱者ほかのものにあらず分明に色をする女郎なり約束の間夫が來てたづぬれハかふろがあいさつをしたるをつくるとミゆ

松下問童子

正月枩の内の事なり間夫がかしちや屋へきてもふまつてゐるかといふてあがらんとすれバ

言師採藥去

かふろがいふおいら長命丸とやらをわすれて今とりに
いきなんした師とはふくの師匠のぬりげたでくるの句法

只在此山中

大かた此まぶ茶や
のうちであらふ

雲深不知處

大ぜいの間夫どもなれバどこへ引こまれてゐるも
しらぬざんねんな事ぢやはらたてるていなり

宮中題

さしきもちの女郎身うけがばれはうばい女郎や内し
やうへもめんぼくなくつまらぬ身のうへをつくるとミゆる

輦路生秋艸

今までお手ぐるまでもてはやす客もやくそくがまちがふておの
づからくる事もかなわずざしきもちりあくたがミちている

上林花滿枝

此さとを出たならばまづ一ばんはうへのあすかの花を見よふとおもひしにいたつ
らに月日をおくるもふわれをまたず花ざかりとミな／＼がいふ

憑高何限意

二かいを出るとさへかなわぬやうに見せハもちろん中の
町へ出られぬ仕やわせ一日かぶろをしかつてばかりゐる

無復侍臣知

新ざうやりてわかいものハこゝろの内のやるかたなきを
バしる事にあらずたゞ一とほりのやうにおもふであらふ

勸酒

句意をもつてかんがふるに大店のむすこふとできごゝろでなじミかけ内から金引
ツくりし出しゐつゝけをうつてゐるをいんきよ番頭どもが相だんで茶屋と女郎へ

たのんで一まづかへるやうにしてもらふといふやうな事とミゆる内へかえるがさいご大かた上方への
ぼせるものなり

勸君金屈卮

わつちが大事のさかづきで一ツあげいんしよに
しきよおれが紋のついたをもつてこい

滿酌不須辭

三ばいも四ばいもぬしのきりやうだけのミ
なんしわつちもおもひいれのミいんしよ

花發多風雨

花が見どにさいたとてあてにならぬ急に大かぜ大あめ
でもふるとなくなりいんす人の身のうへもそんなもので

人生足別離

よくつもりてミなんしおまへもわつちも何どきどふいふ事があつて御目にかゝる
事のならぬやうにならふも知りやせないそふだとてミなやくそく事でしやう事が
ござんせないゝ評に曰折ふしかやうなとハあるものにて茶やも女郎も村雨ほどなるほひにほかならぬ
ものなりいやといはれぬとくい先からいふて來る又ハうぬもつくしながら番頭がふんべつらしきつらでた
のむがあれバさすが取業のちや屋女郎も一まづかへさねバならぬ事ありこれも又商ばい〳〵の一端にてめ
いわくながら珍重

秋日湖上

客と舟へ出て感
をおこしつくる

落日五湖遊

日のかいくれに三
又のへんへ來る

烟波處々愁

たゞさへ日くれハ物おもふにゆふけふりミちわたりなみもひとしほあらくしきりに物すごくなる

浮沈千古事

むかし高尾といへる太夫ハよき大じんにうけ出されまづハうかびでたやうなれども義理と情に身を沈め底のもくづとなりしとかやおもひハよその事でない今わが身のうへも行すへいかなるものゝ妻となり又いかなるうきめを見やうもしらぬ

誰與問東流

すぎさりし高尾の事からいま身の上のなげきをのべたれもしるまいたゞ此川の水のミ知るであらふ尤あわれふかし

題慈恩塔

恩と慈愛に身をすてし高尾か石塔いま此寺にありそのほか女郎の石碑おほくありすなはち道哲なり○粋な佛のおほい道哲と古樂府にもあり

漢國山河在

きんじよに山も川もあり

秦陵草樹深

墳墓石塔たちならんであり草木これをかこんでものすごきけしきなり

暮雲千里色

日のくれがたから雲がおこりわけてさびしきていとなる

無處不傷心

かれを見これミるにありしむかしハ花をかざりし名たかき遊くん漢の班婕妤趙飛燕秦の始皇の宮女にもおとらぬ程の美人どもがミな苔むしたる石とハなりしむかしのすがたハ今どこにあるとうちなげきたるていなり

伊州歌

生国伊勢のものなりしが江戸へ来てさらおうにもふけためよい女房をもつてむつまじくくらしけるあるときふとこん性に魔がさいていかさまにかけられ身上大なしになりぜひなく女房を吉はらへうる好事のものこれにかはつてつくるといふ

聞道黄花戍
風のたよりにきけバぜひとりかへす了簡でしかり打をなさるといふさりとハつれないなさけない黄花ハ金の事としるべし

頻年不解兵
おつゝかへしついくさをするやうにまいねん〳〵せうこりもなくきこへぬどふおまよいなされしやら

可憐閨裏月
むかし二人がねやへさへいりし月の

偏照漢家営
今ハばくち場乃のミとりまなこになつてゐるそふ〳〵しい中をてらすであらふ月をあわれむに似て實ハ夫をおもふ情ふかし

其二

打起黄鸎兒
人のこゝろもしらぬぐわんぜなしの新ざうかぶろをいけすのわかいものが相手になつてさわがしてくれぬがよい

莫教枝上啼
ざしき中をくるいまハりあげくのはてハなきくさる

啼時驚妾夢

そのきやつ／＼のこゑに目がさめて

不得到遼西

出る事のならぬ身なればせめてゆめにばかりもいつて見たいとおもふ大事のところをさましてのけた情ない事じや

哥舒歌

女郎の誹名なりむかし哥舒翰といへる名將あり數度のいくさにうちかつ人ミなおそれをなすといへり此女郎もすこぶる手たれものニて閨肝心にはりつよくたて引諸わけなに一ツいひぶんなきものなれバ時乃粹ども名とすといふ

北斗七星高

夜のふけたるをいふて女郎の氣量のたかきにたとふ

哥舒夜帶刀

あるとき此女郎の客しごくわけのわるき切文をおくりてほかの屋臺へゆかんとする茶やも客とぐるになつての事なればしらぬ躰にてすておくいよ／＼もふきづかいなしとおもふて脇の女郎となじむある夜かへりがけにおもひもよらず大門に手づから剃刀をひらめかしひつとらへてその髪をきりその身ハすぐにうちへかへるちや屋をはじめ太こ末社けんくわすぎてのぼうちきりきといけもせぬ理くつをいへどもつゐきられぞんとなりしとかや

至今窺牧馬

それからしてよし原の風義もたちなおり客もむりをいふ事もならず今の今までもわけのわるいきれにハ武左などハ大門をそつと出て馬にものらずゑもん坂をすぎてやう／＼いきたるこゝちして馬にも草でもくわせてかへる事とハなりぬこれひとへに此女郎の勇よりおこるとミな人申あへり

不敢過臨洮

かのむりぎれの客あるひハ無心いわれてにげる客などかへりがけにハ大方の茶屋をのぞきなどする事ハけつしてならぬやうにこわがりしとなり臨洮今までゆきたる町の門きわをいふ

答人

この題人にことふとありてあてどころなきハもと大じやくきんの先生さいそくをうるさくおもひ極月廿九日風雅でなくしやれでなくしやう事なしにちや屋へくるをつくるとミゆる

偶來松樹下

極月廿四日から衾かざりをするところなり

高枕石頭眠

此ところ外夷の土地なれバ金さへつかへバ高枕をかいてにしきの夜具でゐらるゝところなり石頭もつとも妙といふべし江戸にゐてハ石のうへの住居じやによつてしばらく身をのがれんと來るなりしかれども實ハそのつミおもくなるといふものなり

山中無暦日

山の奥かなんぞのやうに節季師走琴三ミさんでばか〱しい月日もしらぬあほふなところじやといはぬまでなり

寒盡不知年

日本中大晦日ハたかいにちまなこになつてひづらをはつて一家親類の差別もなくとつたりやつたりする中で正月になるもかまわずしかも三さがりで上手にしつぽりとなどゝうたひかけ新ざうかむろがどつぱさつぱいやはやきたいなところといふべし○詳に曰大ミそかに客があれバ借金乞のいひわけによいとやらいへハ内しやうハ女郎も客もつらいがうへの計にこのむもうたふもミなやけからとミゆるもちろん女郎屋茶屋ハやはりしやばにかはる事なししかれバ苦ハ樂のたね

らくハ苦の種又虚語にあらず蕩子夫察し給へ

蕩子筌枉解 五絶終

ハリヤサ。コリヤサ。ヨイ〳〵ヤァトセ。ハリヤサ。コリヤサ。サッサ。ヤァトセ。汝等如何なる者そしれし事よし原雀さ先生の蕩子筌去處でちと見やしたよく出來ましたじやが水月集の上中の粋を捨て下粋斗を取て註せられしはサヽどふだ答て曰水月ニ所謂上粋ハ果報もので粋とはいはれぬ又中粋はいやみの飛切身を身でつめるべら坊獨下粋のミ郭中の趣を得妓茶屋乃穴を知る一本の差を以て百が錢を貫くが如し予が言未タ終ざるに打ておけヨイ〳〵日が覺て見れば晝寐の夢てありし好ミ莊子は蝶ミ乃笄と成て郭通ひをし予は自ら雀と化して自問自答したるものなりと筆を採て跋と成と云

茶釜散人

明和七庚寅六月

日本橋通三丁目

京屋吉兵衛

青山　茂

大槻正二

大槻尹一

高木好次

校

昭和七年三月二十五日印刷
昭和七年三月三十日發行

洒落本大系第一卷

非賣品

著作權所有

編纂者 高木好次
編纂者 山本鍊藏
編纂者 渡邊幸

發行者 東京市日本橋區呉服橋二丁目五番地
株式會社 林平書店
代表者 林善七

印刷者 東京市牛込區矢來町三十六番地
本間十三郎

發行所 東京日本橋區呉服橋
振替東京二三七一
株式會社 林平書店

印刷所 清揚社

京傳筆

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02995 1613